

# 五目牛南組遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書  
（歴史時代編）

1992

建設省  
群馬県教育委員会  
群馬県埋蔵文化財調査事業団



## 五目牛南組遺跡発掘調査報告書

歴史時代編 正誤表

頁	位置	誤	正
27	図左下	050	050号遺構
95	グラフ内	『船津年次平家歳時記』	『船津伝次平家財歳時記』
95	グラフ内	燧灯	提灯
96	図上中央	桶埋没土坑	桶埋設土坑
97	上図	5目牛	五目牛
122	標題	図版4	図版1
123	標題	図版5	図版2
124	標題	図版6	図版3
127	土層注記	3 浅間C軽石	3 浅間B軽石

資料	群馬県埋蔵文化財	01-330
	調査事業団保管	
140.1458	平成10年 5月13日	2(7)



# 五目牛南組遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書  
（歴史時代編）

1992

建設省  
群馬県教育委員会  
（助）群馬県埋蔵文化財調査事業団

報告書抄録

フリガナ	ゴメウシミナミグミイセキ
書名	五日牛南組遺跡
副書名	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘報告
シリーズ番号	第139集
編著者名	坂井 隆 山口逸弘 高橋 敏 大橋康二 石井栄一 大澤正巳ほか
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
発行年	西暦 1992年 11月 30日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コ ー ド		北 緯 . . . .	東 経 . . . .	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ゴメウシ ミナミグミ 五日牛南組	サワグン アカボリマチ オオアザゴメウシ 佐波郡赤堀町 大字五日牛	104612		362113	1391233	19840801- 19850731	9,690	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
五日牛南組	居住	近世・近代	礎石建物	72	船載磁器 国産磁器	歴史時代分冊		
			掘立建物	28	国産陶器 土器			
			区画溝・生垣	35	金属器 木器 瓦			
			井戸	10	石製品 ガラス器			
			埋裏	4	合成樹脂器			
			各種土坑	257	寛徳年銘青花鳥飼入			
			道路側溝	6	金象嵌箱口			
					鍍銀キセル			
			生産	近世・近代	竈		4	
			生産	古代	木炭窯		1	鉄滓
墓	古墳後期	円墳	6	赤色顔料				
墓	弥生後期	再葬墓	1					
居住	縄文前期		竪穴住居	4	花積下層式土器	縄文時代分冊		
			埋設土器	2				
			葦石土坑	5				
			各種土坑	26				
			居住	縄文中期			小型竪穴状遺構	1
生産	縄文前期	陥穴	6					

## 序

埼玉県深谷市と本県の前橋市を結ぶ一般国道17号線のバイパスである上武道路は、既に前橋市今井町の国道50号線までの区間が開通・供用されており、通過市町村の産業経済の発展に大きく貢献しています。

上武道路の通過する地域は、本県でも有数の埋蔵文化財が分布しています。このため、道路建設工事に先立って埋蔵文化財の記録を後世に残すための発掘調査が昭和48年度より群馬県教育委員会及び当事業団により行われています。

本書は、昭和59年度から昭和60年度にかけて発掘調査をしました佐波郡赤堀町五日牛南組遺跡の報告書ですが、縄文時代から近世にわたる複合遺跡の遺構・遺物の調査成果が報告されています。中でも近世屋敷跡の遺構等は近世の地域史を理解する上で貴重な資料となります。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、赤堀町教育委員会、地元関係者等から種々、ご指導ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願ひ序とします。

平成4年11月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之





## 例 言

1 本編は、一般国道17号(上武道路)改築工事に伴い事前調査した事業名称「JK19・20五日牛南組遺跡」の発掘調査報告書のうち、近世・近代及び弥生・古墳・古代の遺構・遺物を扱ったものである。

2 **遺跡所在地** 群馬県佐波郡赤堀町大字甲中通り(隣保班南組)

3 **事業主体** 建設省関東地方建設局高崎工事事務所

4 **調査主体** 群馬県埋蔵文化財調査事業団

5 **調査期間** 昭和59年8月1日～60年7月31日

6 **調査組織** **調査** 昭和59年度 小島敦子・坂井 隆・新倉明彦  
昭和60年度 桜場一寿・坂井 隆・山口逸弘

**事務** 白石保三郎・梅沢重昭・井上唯雄・大沢秋良・松本浩一・上原啓巳  
秋池 武・定方隆史・国定 均・笠原秀樹・須田(山本)朋子・  
吉田有光・柳岡良宏・水口九思

**調査作業員** 阿部松三 荒牧 章 板垣てる子 卯野やす子 遠藤キヌ江 遠藤たけ子 大島 博  
太田光雄 岡田 康 小此木ふじ 織間芳雄 川井美代 川田佳子 川端いくの  
川端キヨ子 川和久子 神沢梅子 神沢シモ 神沢利江 木暮吾一 木暮近雄  
栗原増雄 国定 勇 小板橋きみよ 小暮巻太 近藤きよし 近藤 貴 斉藤志津江  
桜井健作 清水享子 須藤あ喜子 須藤よしの 鈴木ヨシエ 鈴木まき江 高橋友子  
高橋まき子 田中高志 田部井ケイ 塚田より 富田祐登 中村みどり 奈良芳子  
新野見茂雄 早川フサ子 原田房子 広瀬正子 古郡恒信 細谷友江 水科瀬太郎  
宮本サトノ 森 宣子 毛呂宮子 黛 幹江 柳沢 清 吉原君子 吉沢美枝子

7 **整理主体** 群馬県埋蔵文化財調査事業団

8 **整理期間** 平成3年4月1日～4年3月31日

9 **整理組織** **整理** 坂井 隆

福島恵理子・藤井輝子・神谷順子 増田政子・徳田澄子・橋爪美頼

**事務** 邊見長雄・松本浩一・佐藤 勉・神保侑史・能登 健・岩丸大作・国定 均・  
須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・船津 茂・松下 登・並木綾子・  
野島のぶ江・今井もと子・角田みづほ・松井美智代

**遺物写真** 佐藤元彦 **保存処理** 関 邦一・小村浩一・渡邊静治

10 本編の編集及び不署名分の執筆は、坂井 隆が行った。

11 発掘調査に際しては、赤堀町教育委員会と地元五日牛地区の方々より多大なご援助をいただいた。また整理作業にあたってご協力いただいたの方々を含め下記に記し感謝の意をしたい。(敬称略)

**地元関係者** 菊池 範 菊池治雄 神沢一夫 神沢敬一 田部井基充 菊池 繁 菊池 巖  
田部井富夫 菊池茂重 田部井喜八郎 中沢賢昌 松村一昭 (順不同)

**整理協力者** 高橋 敏 大橋康二 仲野泰裕 石井栄一 大澤正己 青木繁夫 岡田文男  
本田光子 飯島静男 堀内秀樹 扇浦正義 山村博美 鈴木祐子 大西雅広  
(順不同)

# 目 次

序 例言 目次

## I はじめに

- 1 経過 5
- 2 遺跡の立地環境 6
- 3 凡例 8

## II 近世・近代

- 1 全体図と調査概要 10
- 2 1号屋敷跡の発掘成果 11
- 3 2号屋敷跡の発掘成果 38
- 4 3号屋敷跡の発掘成果 68
- 5 まとめ (1) 遺構と遺物 92
  - A 屋敷地の認定 92 B 屋敷地別の出土遺物種類 92 C 遺構の性格 96(2) 村・家・人物
  - A 村絵図より 97 B 墓碑銘より 100 C 文献より 104(3) 特論 A 近世村五目牛と四農家の素描 高橋 敏 105
  - B 五目牛南組遺跡出土の染付鳥餌入について 大橋康二 109
  - C 建物遺構の建築学的検討 石井栄一 111(4) 分析 A 五目牛南組遺跡陶磁器胎土分析 花岡敏一ほか 115
  - B 五目牛南組遺跡出土材の樹種同定 藤根 久 119

## III 弥生・古墳・古代

- 1 全体図と調査概要 125
- 2 発掘成果 126
- 3 まとめ (1) 遺構と遺物 138
  - (2) 分析 A 五目牛南組遺跡木炭窯出土鉄滓の金属学的調査 大澤正己 139
    - B 鉄製品の表面に付着した繊維類の検閲結果 岡田文男 144
    - C 五目牛南組・五目牛清水田遺跡出土の赤色顔料について 本田光子 145
    - D 五目牛南組遺跡の炭化物およびテフラ 鈴木 茂ほか 149

## IV 資料

- 1 表 (1) 遺構一覧表 156
  - (2) 遺物一覧表
    - A 陶磁器土器 159 B 金属器 166 C 木器 168 D その他 169
  - (3) 遺構出土遺物量一覧表(破片数) 172
  - (4) 種類・器形による遺物索引(陶磁器土器) 174
- 2 写真 (1) 原色 P1, 1 (2) 単色 P1, 17

# I はじめに



# 1 経 過

## (1) 調査に至る経過

一般国道17号の混雑緩和のための大規模バイパスとして計画された上武道路は、埼玉県深谷市を起点として利根川を渡河して群馬県に入り、伊勢崎市東方・前橋市北東方を迂回して前橋市北部に至る全長41.4kmの道路である。

群馬県教育委員会は、昭和45年度に計画路線を中心に幅2kmの区域の埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、昭和48年度には事業主体者の建設省と県教育委員会は、埋蔵文化財の事前調査についての協定書を締結し、以後国道50号との交差点までの発掘調査が昭和63年度まで行われた。

発掘調査は、昭和53年度以降は群馬県埋蔵文化財調査事業団が県教育委員会より引き継ぎ、整理事業と共に実施してきている。

## (2) 調査経過

本遺跡は、上記協定書による19及び20番の遺跡であり、発掘調査は昭和59年8月1日から翌年7月31日までの1年間行われた。

当初は古墳群のみとの想定で、残存していると思われた墳丘の記録から調査は入った。しかし調査を開始した東側台地では、古墳は全て近世・近代の遺構の重複があった。あくまで古墳群の全容を明らかにする目的で「攪乱」を除去するために発掘したものが、結果として近世の1号屋敷跡の遺構群となっていた。

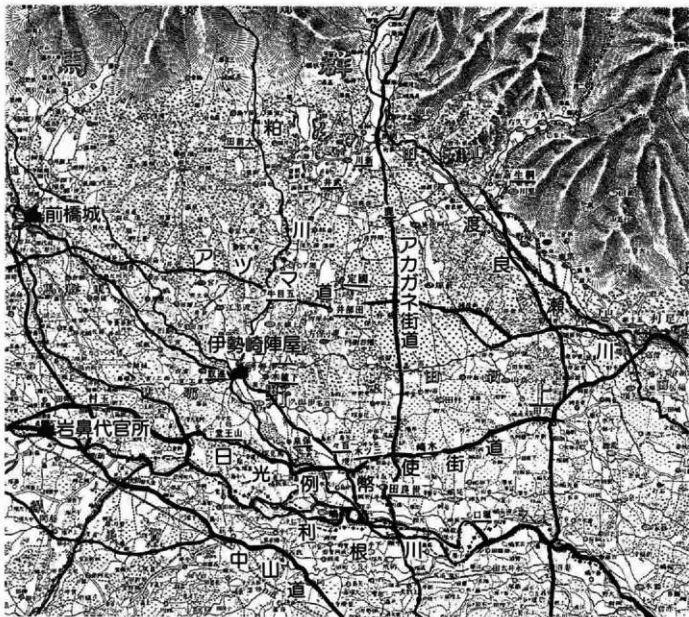
そして12月8・9日には、1・2号屋敷跡の調査成果の説明会を行い、千人強の見学者の関心を呼んだ。

59年度中には、東側台地の調査を終え、60年度は西側台地の調査を実施した。

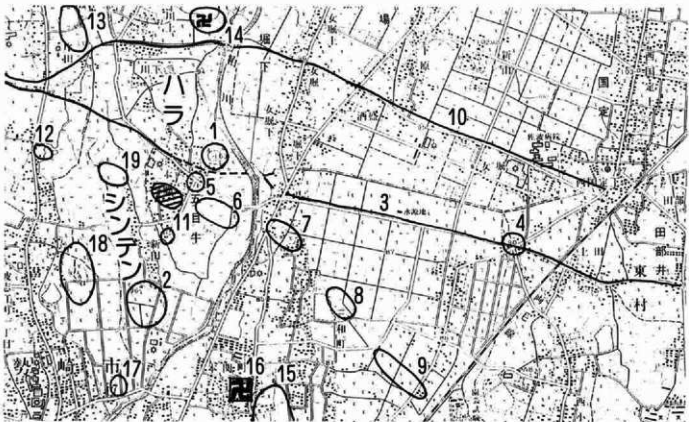


上武道路路線と本遺跡の位置

明治20年精製 一千万分一圖、平凡社「日本歴史地名大系」に加筆



国土地理院 一万五千分一地圖「大册」



## 2 遺跡の立地環境

### (1) 地理的環境

本遺跡は、利根川支流で赤城山頂小沼を源とする粕川中流の右岸に位置する。赤城山南麓の平野部の中にあり、海拔高度87m前後で周囲の低地より1mほど高いハラ台地の一部である。粕川左岸の天間々扇状地の平らな畑作地帯とは異って、低い台地が開析低地で区切られ、その中にいくつか独立丘が散っている。

ハラ台地には、本遺跡の北東400mに独立丘堂山(1)が、旧桂川流路をはさんだシンデン台地の南端には同じく地蔵山(2)がある。両丘は、周辺数キロからの識別できる目立った存在であり、堂山の東麓にはウシシシの名の赤城火山に由来する巨大な岩が横たわっている。なお調査地内はノクボと呼ばれる小さな開析谷を境にして、東側と西側の二つの台地に分けられる。

### (2) 歴史的環境

#### A 近代・近世・中世

五目牛は、明治22(1889)年に開通した両毛鉄道(現 JR 両毛線)の国定駅から西に3.2km、伊勢崎駅から北に3.5km離れている。鉄道開通以前の近世以来の主要交通路であるアカガネ街道(足尾綱山街道)までは東に7km、五街道に次ぐ重要な幹線の日光例幣使街道までは伊勢崎町を経て南に8kmの距離である。

養蚕地帯の一画であり、『上野国郡村誌』によれば明治10(1877)年頃には繭30石、生糸16貫余、太織20疋を産している。これは近隣15町村では、人口比で繭が6位、生糸が4位、太織が2位である。繭は当時伊勢崎に2か所あった製糸場を経て、また生糸・太織は加工されずに直接横浜へ運ばれていた。

近世の支配は旗本領であるが、周辺は伊勢崎藩領・前橋藩領そして岩鼻代官所支配の天領が入りこんでいた。そのような中で、近世後期には俠客たちの活躍する舞台でもあった。左上図の下線集落名は国定忠治関係の資料に見える俠客たちの出身地であり、その中に五目牛は存在している。

上記堂山南麓を通過して西北西から東北東に、中世の幹線道アヅマ道(3)が走っている。ウシシシは、この道に多く残る義経・牛伝説の伝承地でもあるが、2km東の六道の辻(4)には元禄10(1697)年と天明1(1781)年の2基の道標が残っている。(坂井隆「東山道・あづま道を中心とする道路遺構の考古学的特徴」当事業団「研究紀要6」1989)

周辺の近世の遺物・遺構は、波志江六反田遺跡(12当事業団1992)、五目牛町道拡幅工事調査(5町教委報告No32)、五目牛清水田遺跡(6当事業団1992)、上植木光仙房遺跡(7同前1988)、上植木老町田遺跡(8同前1988)、書上本山遺跡(9同前1992)で多少なりとも報告されている。以上のうち上植木光仙房と上植木老町田では、ややまとまって近世の屋敷跡が検出されている。また同村内東隣の五目牛清水田遺跡を含めてそれらはいづれも中世からの連続性がある点が注目される。

文献上は、文和2(1353)年の足利尊氏が赤堀氏にあてた文書中にある「買米石村」が、五目牛のことと考えられている。一方、天仁1(1102)年とされる浅間山の噴火以後に築造された大用水女堀(5)は、北1kmを走っている。ここでは、桂川の流路が変えられている。

#### B 弥生・古墳・古代

周辺の古代集落は、シンデン台地の堀下八幡遺跡(19当事業団1990)と町教委調査の本遺跡南端部(11町教委報告No11)及び五目牛清水田遺跡にあり、また下船中畑遺跡(13町教委報告No22)、恵下遺跡(15伊勢崎町教委1979)そして下船川上(14町教委No12)と上植木(16同町教委1988他)の両虎寺がある。古墳及び集落は、堂山・地蔵山・五目牛清水田・上植木光仙房そして蟹沼東(18町教委1988他)にある。弥生遺物は、五目牛清水田及び間ノ山遺跡(17町教委1982)で出土している。

### 3 凡例

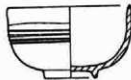
- I 遺跡
- 1 名称は、大字五目牛<sup>ごもぎう</sup>の胸保班名による。字甲中通りは統合された名称で広範囲であり、東隣の五目牛清水田遺跡との識別も不可能なためである。
  - 2 グリッドは、国土座標に併せた10m方眼で、X=39.5、Y=-56.15をA-1点として北西側10mをA-1Gとした。以下Y軸を東に向いA~Z、X軸を南に向い1~14と名付けた。図中の方位は、座標北である。
- II 遺構
- 1 調査時に認定した近世・近代349、弥生・古墳・古代10の遺構は、全て掲載した。
  - 2 調査時の種別呼称は不適切のものを多く含んでいるため、全てを通し番号に変更した。旧名称との照合は、巻末の遺構一覧表に記した。
  - 3 遺構図は、大きさにより縮少率が異なる。いづれもスケールを付け、また全体の中での位置図を付した。
  - 4 近世・近代の報告順序は、1~3各号屋敷跡に大別し、それぞれを概ね区画溝・建物・井戸・桶埋設土坑・その他の土坑の順で掲載した。ただし各屋敷跡でさらに区画が分かれる場合は、それを優先させた。
  - 5 旧地権者による建築廃材投棄坑及び大規模な採土地さらにコンクリート構築物基礎については、調査不可能のため攪乱として下記のトーンを図に示した。
- III 遺物
- 1 弥生時代より新しい遺構から出土した遺物片(磁器1,085 陶器847 土器2,854 金属器289 木器238 瓦2,461 石類400 古墳時代土器類1,595各点)及び遺構外出土のものの中から、陶磁器・土器類(埴輪含む)442 金属器161 木器62 その他(瓦含む)174各点を掲載した。それぞれ1,000台、2,000台、3,000台、4,000台の番号を付してある。
  - 2 出土遺構ごとにまとめて掲載し、縮少率は各図にスケールを付した。
  - 3 磁器については、近代の摺絵及び銅版転写技法による染付等の図柄を実測図では省略した。原色写真を参考されたい。
  - 4 掲載遺物のうち、色調の報告に不可欠のため陶磁器全点と一部の金属器は原色写真を使用し、その他の遺物は単色写真で示した。
  - 5 陶磁器・土器の実測図は、断面図を下図のように区別した。
  - 6 遺構出土遺物量一覧表(破片数)と種類・器形による遺物索引(陶磁器土器)を巻末に付けた。なお各遺物の詳細な情報は、同欄に掲載してある番号順の遺物一覧表に記述した。



攪乱



磁器



陶器



土器



## II 近世・近代



# 1 全体図と調査概要

東側より調査を行ったが、旧地権者の境界に沿うような形で、左図のような3単位ごとに調査手順が移った。

それぞれは、まとまった屋敷構えであるとの想定に基づいて、1～3号の屋敷跡との総称を設けて各遺構をくくって調査を行った。

以下、発掘調査の報告は、それら各屋敷跡ごとに行う。ただし、それらが厳密に単独の屋敷構えとして把握できるかについては、92頁で検討した。

各屋敷跡に属する遺構の数量は、次の通りである。

	1号	2号	3号	計
掘立建物	21	2	5	28
礎石建物	1	4	2	7
畠	3	1	0	4
生垣	1	2	0	3
道路側溝	4	2	0	6
溝	8	8	16	32
井戸	4	2	4	10
各種土坑	107	101	49	257
埋蔵	0	0	4	4
不明集石	0	1	0	1

なお2号屋敷跡と3号屋敷跡の間には、約15mの幅で採土された擾乱地帯があった。

また調査年次は、1・2号が昭和159年度、3号が同60年度になされたものである。

上記各遺構は16世紀から20世紀までの時間差を持つが、確認面は同一である。この間に複数の文化層あるいは地山面は検出されず、覆土も基本的に識別できなかった。

0 1:500 50m

2 1号屋敷跡の発掘成果



2 1号屋敷跡の発掘成果

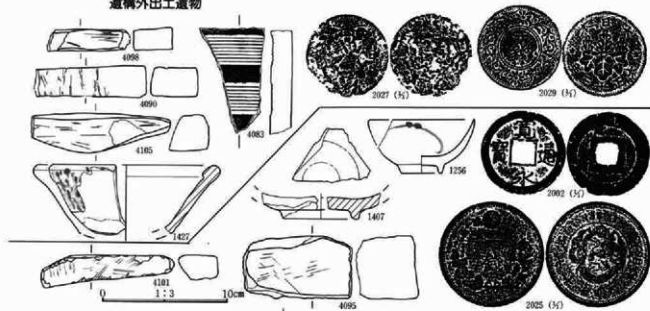
調査範囲の最東端で、R列グリッドから五目牛清水田遺跡の延長の低地まで約60mの長さの範囲である。

ここでは道路側溝と思われる溝が多数検出され、特に057号遺構で西を060～062号遺構で南を区画された一辺40m弱の方形の範囲内で掘立柱建物が多く見られた。

また065・067号遺構の東側では、礎石建物と規則的に並ぶ箱形土坑群が検出された。西側とはかなり状況が異なっているため、両区画を分けて報告する。

下図の遺構外遺物は、上段が西側区画、下段が東側区画からの出土である。これらのうち平瓦(4083)は他の瓦と異って極めて硬質な焼成である。明治17年銘一銭銅貨(2025)は、古墳石室内より出土した。

遺構外出土遺物



### 西側溝

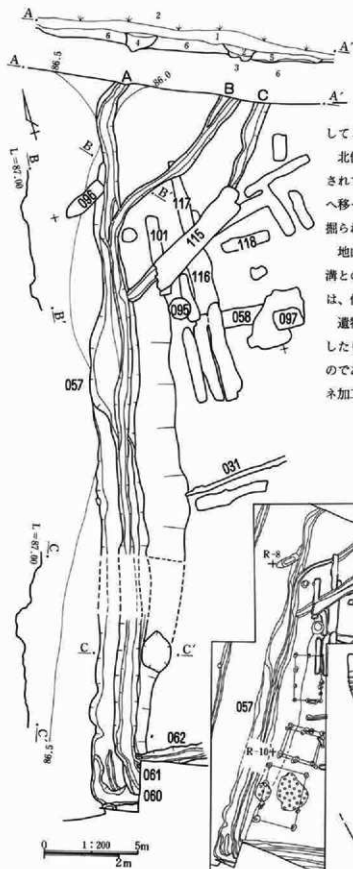
掘立建物群の西を区画するやや東に偏して南北方向に走る溝(057号遺構)。

南端で直角に曲って南側溝(060~062号遺構)につながる。北側は、時期差を示して3本に分かれ、いずれも北東方向に走る。

北側の各分流は、向きを同一にする土坑群に壊されている。C→B→Aの順に掘り返され、Bへ移って115号が、Aへ移って101・117号の土坑が掘られたと思われる。

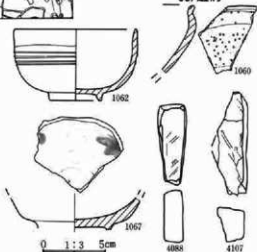
地山は、西側がやや高く、ほぼ平行する067号の溝との間は、小道であったかもしれない。東側では、付属屋掘立建物群が平行して並んでいる。

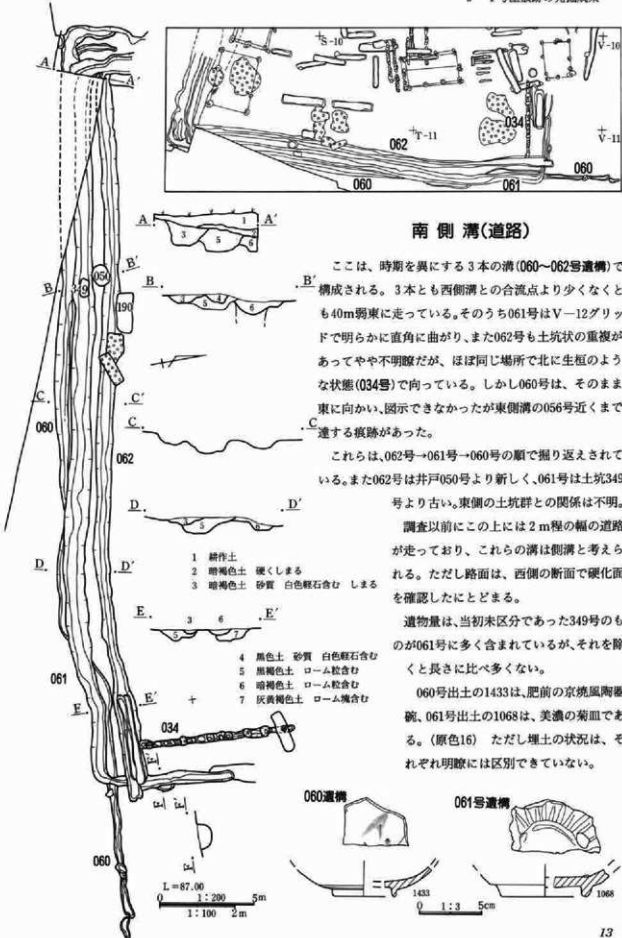
遺物量は、長さ比べれば多くない。報告したものは、瀬戸美濃系の陶器で17・18世紀のものである。(原色14) 4107の砥石には、櫛歯タガネ加工痕が見られた。



- 1 耕作土
- 2 褐色土 砂質 石灰粒・砂礫含む
- 3 褐色土 砂質 しまり弱い
- 4 暗褐色土 砂質 ローム粒含む
- 5 によい黄褐色土 砂質 しまり弱い
- 6 褐色土 砂質 しまり弱い

057遺構





### 南側溝(道路)

ここは、時期を異にする3本の溝(060~062号遺構)で構成される。3本とも西側溝との合流点より少くなくとも40m弱東に走っている。そのうち061号はV-12グリッドで明らかに直角に曲がり、また062号も土坑状の重複があってやや不明瞭だが、ほぼ同じ場所で北に生垣のような状態(034号)で向っている。しかし060号は、そのまま東に向かい、図示できなかったが東側溝の056号近くまで達する痕跡があった。

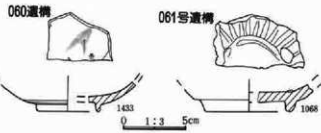
これらは、062号→061号→060号の順で掘り返えされている。また062号は井戸050号より新しく、061号は土坑349

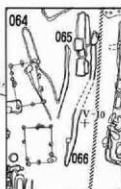
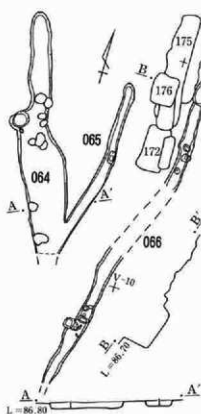
号より古い。東側の土坑群との関係は不明。

調査以前にこの上には2m程の幅の道路が走っており、これらの溝は側溝と考えられる。ただし路面は、西側の断面で硬化面を確認したにとどまる。

遺物量は、当初未区分であった349号のものが061号に多く含まれているが、それを除くと長さには比べ多くない。

060号出土の1433は、肥前の京焼風陶器碗、061号出土の1068は、美濃の菊皿である。(原色16) ただし埋土の状況は、それぞれ明瞭には区別できていない。





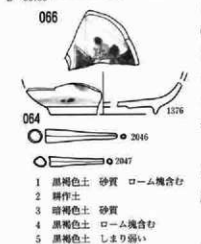
### 中央溝

やや屈曲して北に走る2本の平行した溝065号と066号は小道の側溝と思われる。065号に重なる064号は、浅く性格不明。

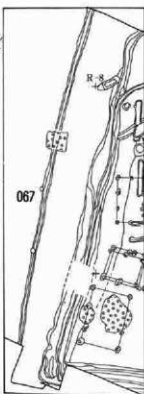
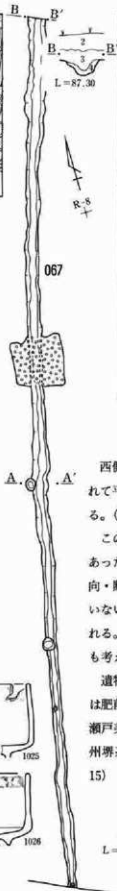
いづれも、掘立建物006・007号と重複。また前者は、土坑群172~176号とも切り合う。064号の北端は短冊形土坑の可能性も考えられる。

遺物量は少ない。066号出土の1376は、19世紀の肥前染付皿。(原色15)

2046と2047は、604号出土のキセル吸口である。



- 1 黒褐色土 砂質 ローム塊含む
- 2 耕作土
- 3 暗褐色土 砂質
- 4 黒褐色土 ローム塊含む
- 5 黒褐色土 しまり弱い

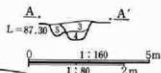
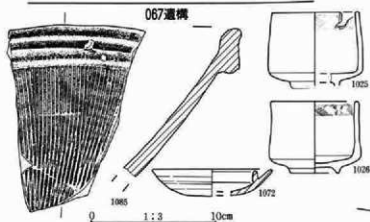


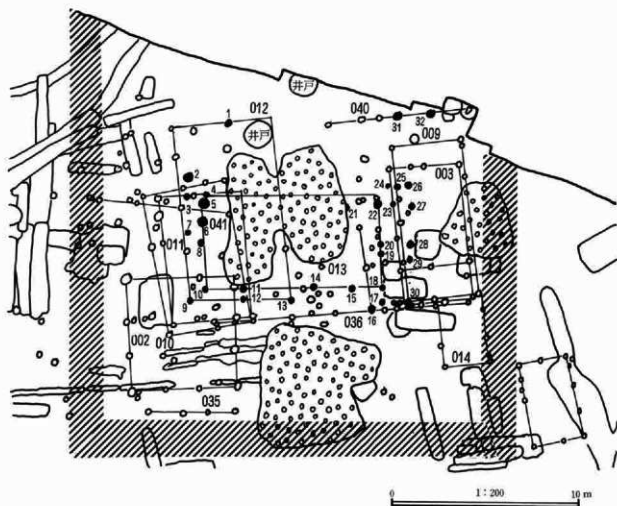
### 西端溝

西側溝057号の西に3m弱離れて平行に南北に走っている。(067号遺構)

この間は、ある時期に小道であったかもしれない。ただし走向・断面形は完全には一致していないため、成立は別箇と思われる。西の2号屋敷跡のものとも考えられる。

遺物量は少ない。1025と1026は肥前青磁染付筒形碗、1072は瀬戸美濃錆軸灯明皿、1085は泉州界系統締摺鉢である。(原色15)





## 主屋掘立建物群

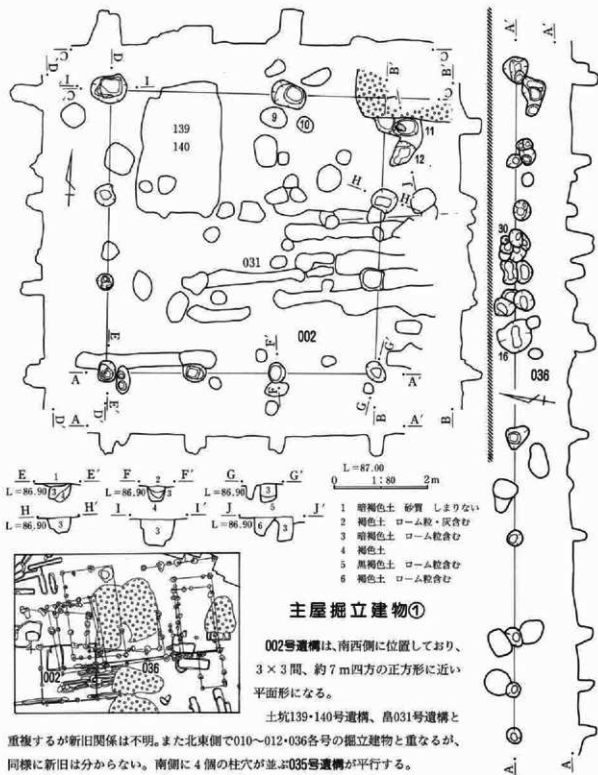
西側区画の中央北側部分で、多数の掘立建物の柱穴が検出された。ここでは、旧地権者の家屋の撤去の際に生じた廃材などを投棄した大きな擾乱坑がいくつか見られた。そのために多数の柱穴の相互の関係は、必ずしも明瞭には把握できなかった。

調査時においては、上図のような建物群の重複を一応検討したが、上記擾乱のため多くは確定的なものとは言い難い。特に南北方向に長い状態のまもりは、そのまま単独の建物と考えるより、東西方向に長い大きな建物の一つの部分とした方が妥当であろう。

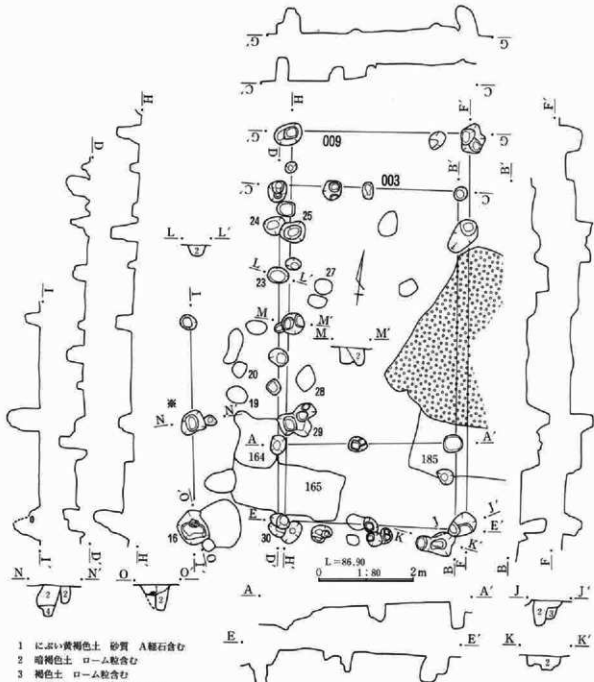
しかし残念ながら、考古学的方法においては、そのように想定される大きな建物をはっきりと指摘することはできなかった。この掘立建物群が、西側区画の中の中心的位置をしめることは、確かであろう。そのため図示したような20×18mほどの範囲を、主屋掘立建物群と呼ぶことにした。以下、調査時点で検討した単位に基づいて報告する。(上図中塗りつぶした柱穴は下記石井氏考察使用及び柱止礎を含むもの)

なお後述のように、この主屋掘立建物群は、径40m以上の円墳354号遺構の南側を壊して建てられている。そしてその墳丘の北側はまだ現存しており、冬季の防風の意味で選地したと思われる。

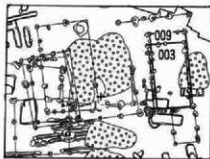
この主屋掘立建物群の建築学的特徴については、111頁の石井栄一氏の検討成果を参照されたい。







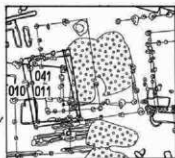
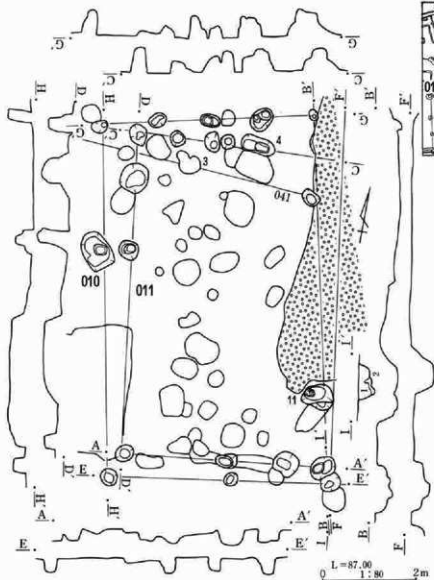
- 1 にぶい黄褐色土 砂質 A柱石含む
- 2 暗褐色土 ローム粒含む
- 3 褐色土 ローム粒含む
- 4 黒褐色土 ローム粒含む 硬い



### 主屋掘立建物②

003・009号遺構は、主屋掘立建物群の東端で検出。  
2×4間、約4.5×9.0mの南北に長い建物の建て替え  
として確認したが、完全には柱穴の配列はそろっていない。  
西側に3個の平行する柱穴がある。

磁石(4087)は、西側の扉印の柱穴より出土。両遺構  
からは、小片少量ながら陶器・近世土器片が出ている。  
土坑164・165号より新しく185号より古い。



1 にぶい黄褐色土 砂質

2 暗褐色土 ローム粒含む

### 主屋掘立建物③

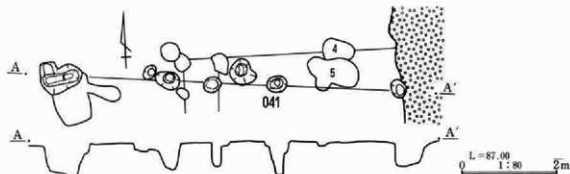
010・011号遺構は、中央部覆乱坑の西側に接した2×3間相当の南北に長い建物の建て替えとして確認した。規模は、東西5m強、南北8m弱が想定されるが、柱穴の検出状況はあまり明確ではない。

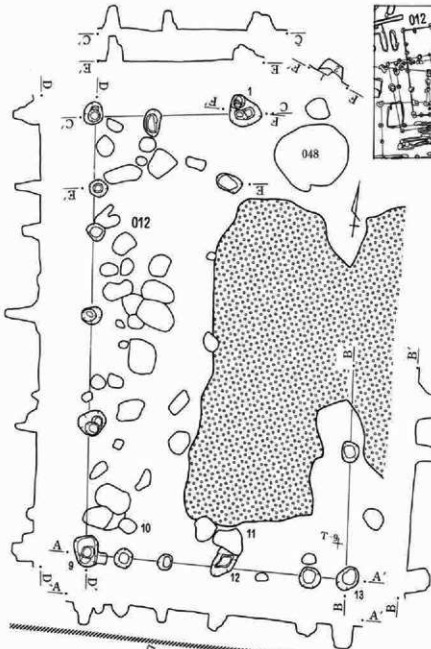
中央部で掘立建物の012号と、北側で同じく041号と、さらに南西側で土坑139・146号と重複するが、関係は不明。

遺物は、全く見られない。

東側の003・009号と同様に東西方向に長い大きな建物の一部と思われる。

041号遺構は、上記010・011号の北側で検出された。東西方向に約2.3m間隔で4個の柱穴が並んでいる。ただし平行または直交する柱穴列は検出されず、また主屋掘立建物群の中でも走向が唯一大きく異っているため、建物として確定することはできない。近世土器小片が出土している。





012号遺構は、中央掘乱坑の西側で確認された。南北9.2m東西5.6mほどで、西辺には6個の柱穴がほぼ一直線に並ぶが北辺と南辺は、必ずしも明瞭ではない。

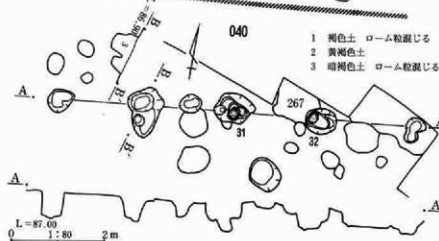
西側で掘立建物010・011号と重なり、北東側で井戸048号と同じ場所になる。いづれも新旧関係は不明。

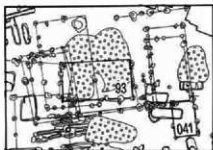
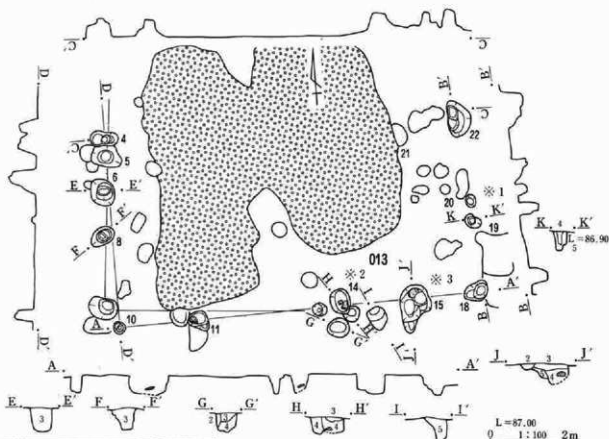
近世土器小片が出土している。

形状的には単独の建物とは考えにくく、東側の建物003・009・040号などといっしょになった大きな建物の一部と思われる。

040号遺構は、北東隅で検出され、東西7.6mの長さに5個の柱穴が並ぶ。そのうち2個には柱止めの円礫が残っていた。

調査範囲外に続いており、土坑267号と重なるが関係不明。陶器磁器小片が1点づつ出土。大きな建物の一部と思われる。





013号遺構は、中央攪乱坑の南側で確認された。東西約9.8mで5個の柱穴、南北は約5mで3個が並ぶが、整合した配置ではなく、また建て替え柱穴の重複も複雑にある。南辺の3個の中からは、柱止め円礫が出てくる。

寛永通宝

013号遺構 2004※1、砥石4092が※2、4093が※3から出土。

014号遺構は南東側で確認され、南北3.8m 2間、東西2.5m 1間の小さな構成である。土坑166号と重なるが関係は不明。

単独の建物とは考えにく

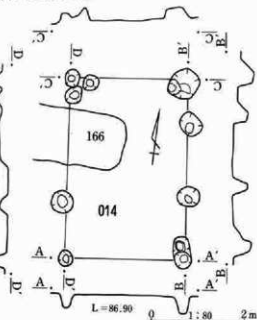
- 1 におい黄褐色土 A軽石含む
- 2 褐色土 粘質
- 3 褐色土 ローム粒含む
- 4 暗褐色土 ローム粒含む
- 5 暗褐色土 しまり良い

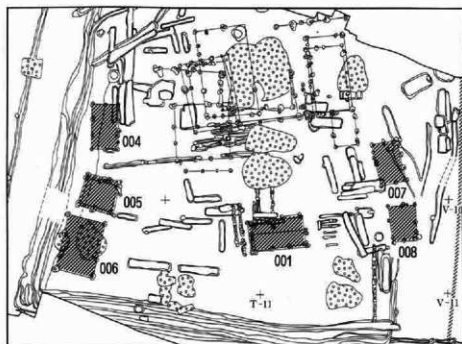


2004 (5)



0 4092 1:3 4093 10cm



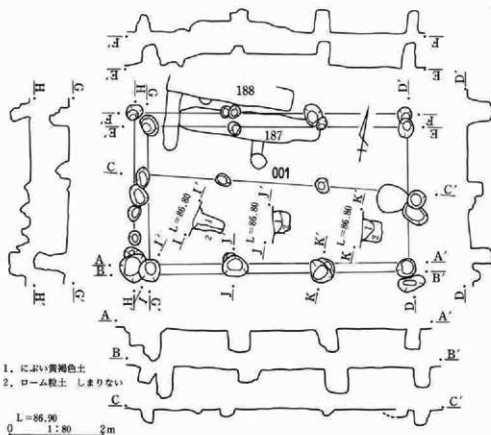


## 付属屋掘立建物群

西側区画の中では、主屋掘立建物群以外に、計6棟の掘立建物が散在して検出された。

左図に示したように西側の溝に沿って3棟、中央に1棟、東側の溝に重って2棟である。

これらは、主屋掘立建物群と比べて、建て替え回数が少なく、それぞれ単独の小規模の建物と思われるため、付属屋と総称する。



1. によい黄褐色土
2. ローム状土 しまりない

L=86.80  
0 1:80 2m

## 001号遺構

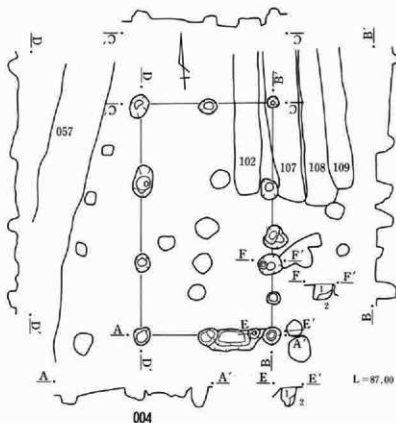
は、主屋掘立建物群の南に約10m離れて検出された。

東西3間5.8m、南北2間3.2mの規模で、1回建て替えがなされ

ている。またいづれかの時期には、総柱であった。

土坑187・188号及び畚030号と重なり、本遺構が古い。遺物は、柱穴中よりは見られなかった。

付属屋の中ではほぼ唯一の東西棟で、規模もやや大きい。



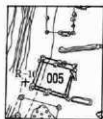
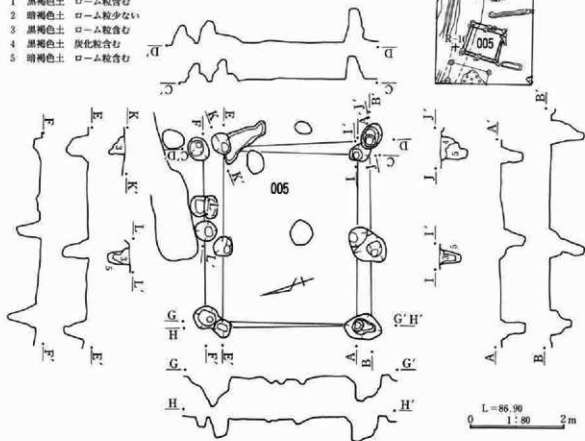
付属屋②

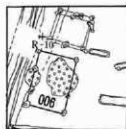
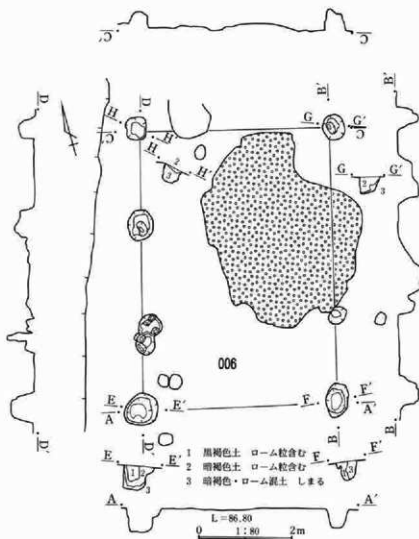
004号遺構は、西側溝057号に接して検出された。

南北3間5.0m、東西2間2.8mの規模で、北東が土坑群に切られる。

その南側に接する005号遺構は、東西2間3.8m、南北1間3.6mで、1回建て替えられている。両者共に規模は小さく、柱穴からの遺物出土はない。

- 1 黒褐色土 ローム粒含む
- 2 暗褐色土 ローム粒少ない
- 3 黒褐色土 ローム粒含む
- 4 黒褐色土 炭化粒含む
- 5 暗褐色土 ローム粒含む





### 付属屋掘立建物群③

006号遺物は、掘立建物005号の南側で検出された。005号とほぼ同じ西側溝の057号の走行に平行した向きになっている。

東西1間4.2m、南北3間6.0mの南北棟で、攪乱坑が重っている。

柱穴からの出土遺物は、見られなかった。

005号との間は、1m強ほどしかなく、同一の建物とは考えられないため、時間差が想定される。

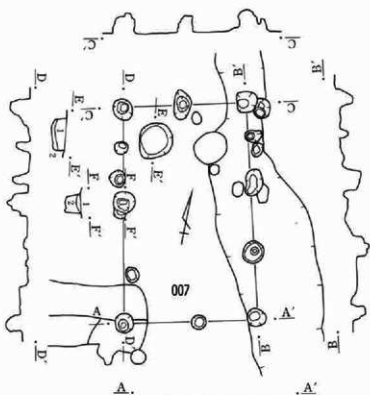
付属屋掘立建物群の全体の配置を見ると、前述のように大きく3か所に分かれる。南北棟で構成される東西両側の複数の建物群と東西棟単独の南中央とである。

このうち主屋掘立建物群に走向が似るのは、中央南と東側であるが、外見上異っている西側も溝の走向にあわせて建てられているため、それだけでは併存関係を考える材料にはならない。

ただ注目されるのは、後述の井戸049号と050号の位置である。両者は共に主屋からは遠く離れた位置であり、049号は東側の掘立建物008号と、050号は西側の掘立建物006号と近い。

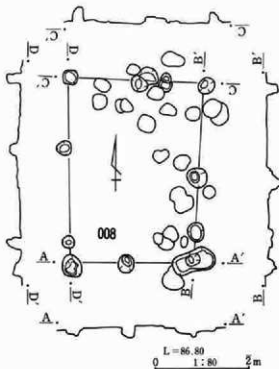
これらの井戸は、主屋に接する井戸047・048号よりは古いため、「付属屋」としてとらえたこれらの建物は「主屋」に先行する建物であった可能性もある。

形状は、南北棟が多いため、納屋的なイメージもあるが、大形の東西棟が作られる以前の居住建物であった可能性は、完全に否定できない。

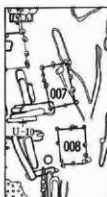


- 1 黒褐色土 ローム粒含む
- 2 暗褐色土 ローム粒含む

L=86.90  
0 1:80 2m



L=86.80  
0 1:80 2m



#### 付属屋掘立建物群④

007号遺構は、東側溝064号と重って確認された。

東西2間2.8m、南北3間4.6mの南北棟だが、西辺の柱穴はやや不均一の配置である。

溝064号との関係は不明だが、南西側の土坑160号よりは古い。

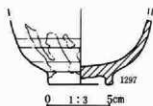
柱穴から遺物出土はない。

008号遺構は、007号の南に約3m弱離れて検出された。東西2間2.8m、南北不定の3.8mの南北棟で、007号とかなり似た感じがある。

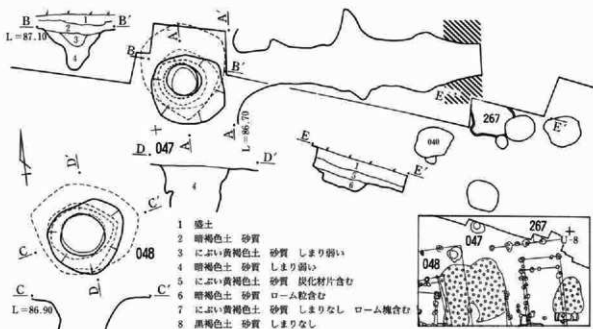
直接の重複ではないが、道路側溝065, 066号の延長方向になっており、同時存在はしていないだろう。また西に1m離れて井戸049号が接している。

北西角の柱穴中より瀬戸美濃船軸碗(1297)が出土した。(原色50) また他に陶器小片2片がある。

008号遺構







## 井戸①

047号遺構は、主屋独立建物群の北側で検出した。確認面より5.2mの掘りこみで、4.5mの深さの湧水面から毎分1.6ℓが調査時に出水した。

出土遺物は、上層から瀬戸美濃系陶胎染付皿(1223, 1224)と土師質土器焙烙(1238)が、中層から瀬戸錆釉摺鉢(1413)・新寛永通宝(2001)・鎌状鉄器(2092)が、下層からスギの水汲桶各部(3001~05)があった。他に陶器と近世土器小片が、約50片見られた。(陶器は原色12)

048号遺構は、井戸047号の南西2mの位置で、主屋独立012号と重なる。

確認面からの掘りこみは約5mで、4.6mの深さより調査時には毎分0.5ℓの湧水があった。埋土の状況は、急激な埋め戻しの様子が感じられた。出土遺物は、上層より美濃大塚灰軸皿(1230)があった。(原色12)

267号遺構は、井戸047号の東5mの位置の土坑で主屋独立040号と重なっている。(関係不明)

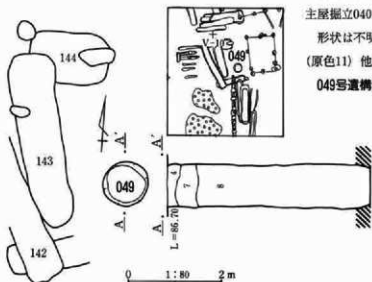
形状は不明で、瀬戸美濃灰軸双耳甕(1178)が出土。(原色11)他に磁器陶器土器小片が出土。

049号遺構は、付属屋独立008号の西に接して発見。

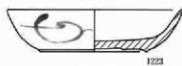
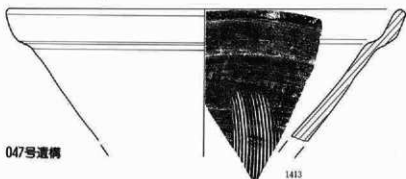
4.2mの深さで、4.1mより調査時に0.5ℓの湧水があった。

断面形状より、使用期間が短かかったことが考えられる。

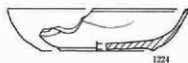
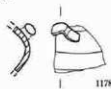
銘不明の鉄銭(2036, 37)とアカマツのツリ具状木器(3008)が出土陶器土器木器の小片もあった。



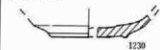
II 近世・近代



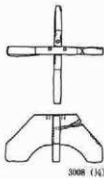
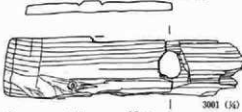
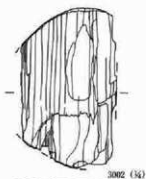
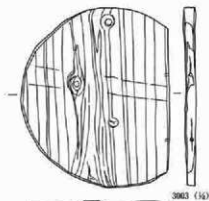
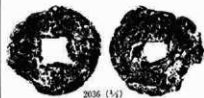
267号遺構



048号遺構

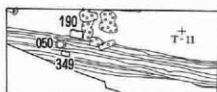


049号遺構



0 1:3 10cm  
1:4 10cm

井戸



- 1 黒色土 砂質 白色軽石含む
- 2 暗褐色土 砂質 白色軽石含む しまる
- 3 黒褐色土 ローム粒含む
- 4 暗褐色土 ローム粒含む
- 5 黒褐色土 白色軽石含む
- 6 黒褐色土 ローム粒含む

050号遺構は、南側溝062号の下  
より検出。5mの深さで、調査時

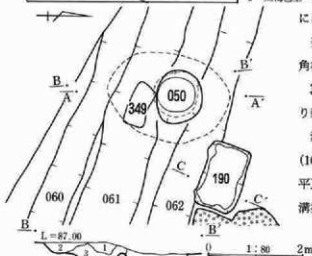
には4.5mより毎分2ℓの湧水。

美濃大冢精軸摺鉢(1237原色12)が上層から、アカマツ  
角材片(3009)と竹(3010)が下層より出土。

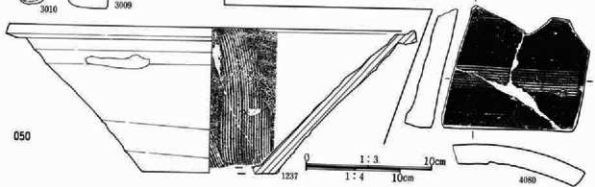
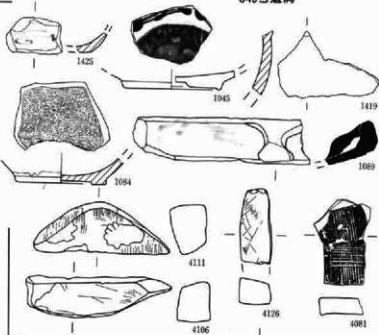
349号遺構は、井戸050号に隣接した小土坑。溝061号よ  
り新しい。

瀬戸美濃磁器型打皿(1045)・産地不明柿軸摺鉢  
(1084)・瀬戸ルス軸火鉢(1419)・瀬戸美濃志野皿(1425)・  
平瓦(4080, 81)、砥石(4106, 11, 26)が一括出土。(原色16)  
溝扱いの小片もここからのもの。

190号遺構は、溝062号と重なる土坑で、1.4×  
0.9mの方形。新旧不明。



349号遺構



### 西側土坑群①

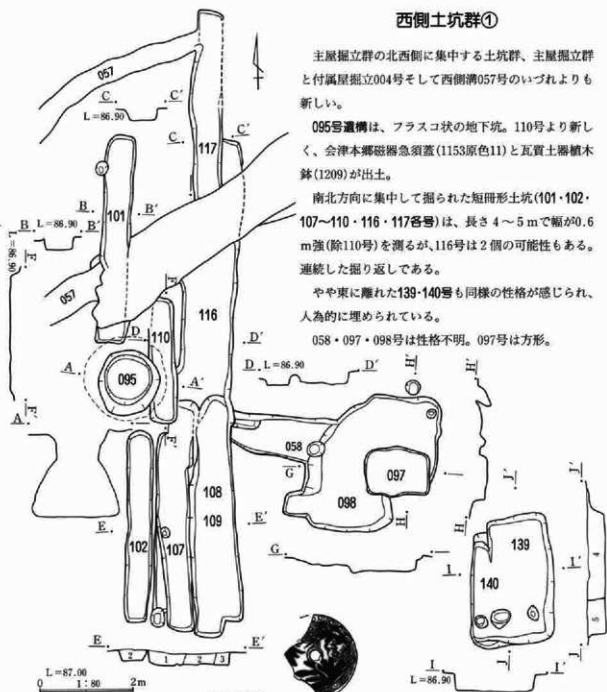
主屋掘立群の北西側に集中する土坑群、主屋掘立群と付属屋掘立004号そして西側溝057号のいづれよりも新しい。

095号遺構は、フラスコ状の地下坑。110号より新しく、会津本郷磁器急須蓋(1153原色11)と瓦質土器植木鉢(1209)が出土。

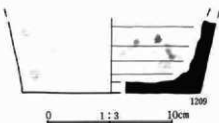
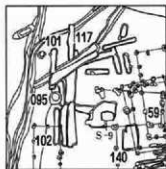
南北方向に集中して掘られた短冊形土坑(101・102・107~110・116・117各号)は、長さ4~5mで幅が0.6m強(除110号)を測るが、116号は2個の可能性もある。連続した掘り返しである。

やや東に離れた139・140号も同様の性格が感じられ、人為的に埋められている。

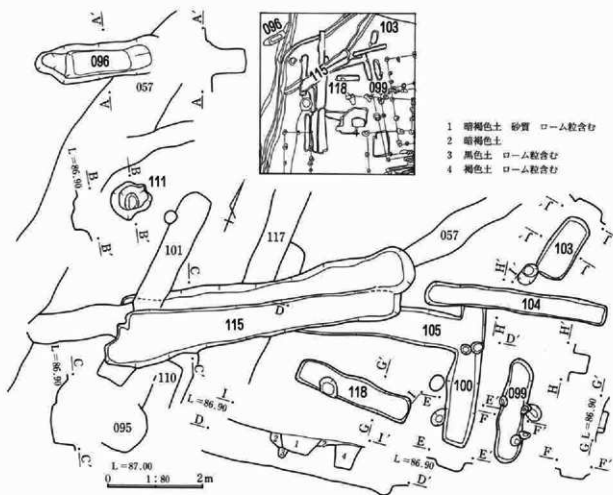
058・097・098号は性格不明。097号は方形。



095号遺構

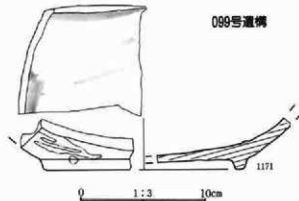


- 1 黒褐色土 砂質 しまりない
- 2 暗褐色土 ローム粒含む
- 3 暗褐色土 砂質 しまり良い
- 4 褐色土 砂質
- 5 褐色土 砂質 ローム塊混在



## 西側土坑群②

主屋掘立建物群の北西に位置する短冊形土坑群。斜めから東西方向に近いもの(096・104・105・115・118各号)と南北方向のもの(099・100・103各号)に分かれる。後者は、①で既述したものと同一方向で掘られている。重複する主屋掘立群関連の柱穴や西側溝057号の各分流より新しい。また斜め方向のものより南北方向のものが新しい。



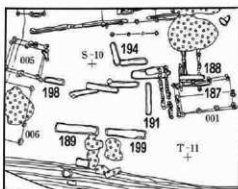
最大の115号は、全長約6mを測るが、これは4回以上の掘り返しの結果である。また096号に見られるように、本来の掘りこみは0.8m近くあった可能性もある。

099号より美濃陶器志野軸鉄絵皿(1171原色11)が出土。これは接合破片が30cmほど離れた南側溝061号から出ており、廃棄後の移動が考えられる。

111号は楕円に近い不定形で性格不明。

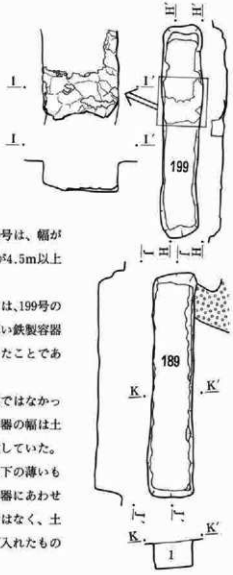
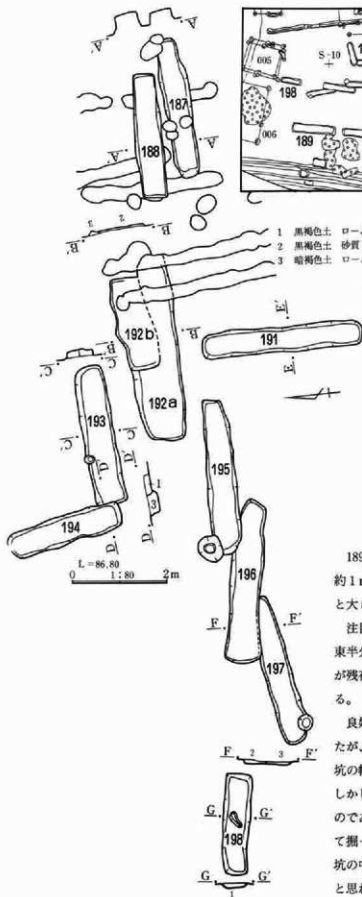
西側土坑群③

付属掘立001号と005・006号の間に並ぶ短冊形土坑群。南北方向のものは191号と194号だけで、他の187～189・192～193・195～199各号は、概ね東西方向に走っている。



重複する高030号より古く、掘立001号より新しい。東西方向の193号は、南北方向の194号より新しい。

- 1 黒褐色土 ローム塊混在
- 2 黒褐色土 砂質 ローム粒含む
- 3 暗褐色土 ローム粒含む



189号と199号は、幅が約1m、長さが4.5m以上と大きい。

注目すべきは、199号の東半分に、薄い鉄製容器が残存していたことである。

良好な状態ではなかったが、この容器の幅は土坑の幅に一致していた。しかし1mm以下の薄いものであり、容器にあわせて掘ったのではなく、土坑の中にまげ入れたものと思われる。

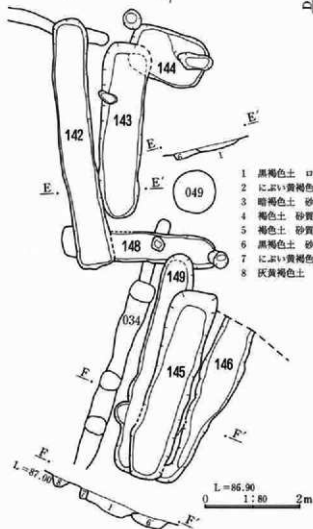
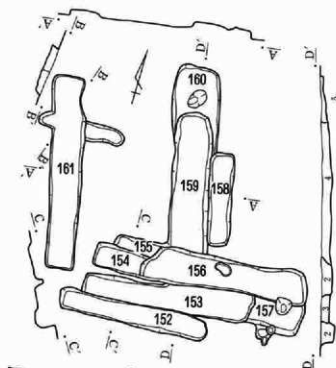
## 西側土坑群④

付属屋掘立建物007号と008号の西側に群集する短冊形土坑群。

南北方向のもの142・143・145・146・149・158～161各号と東西方向のもの148・152～157各号に分かれる。掘立の007号より新しく、畚029号より古い。南側溝から続く生垣状の塼034号及び溝061号との重複関係は不明。東西方向の156号が、南北方向の159号より新しい。また井戸049号が近接している。

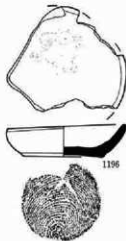
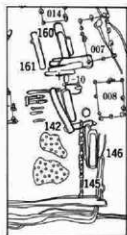
南北方向の161号より、土師質土器の灯明皿(1196)が出土している。

144号は不定形。



- 1 黒褐色土 ローム粒含む
- 2 赤い黄褐色土 砂質
- 3 暗褐色土 砂質
- 4 褐色土 砂質 ローム粒含む
- 5 褐色土 砂質 ローム粒含む
- 6 黒褐色土 砂質 ローム粒含む
- 7 赤い黄褐色土 ローム粒含む
- 8 灰黄褐色土 ローム混在

161号遺構



西側土坑群⑤

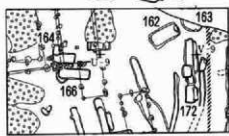
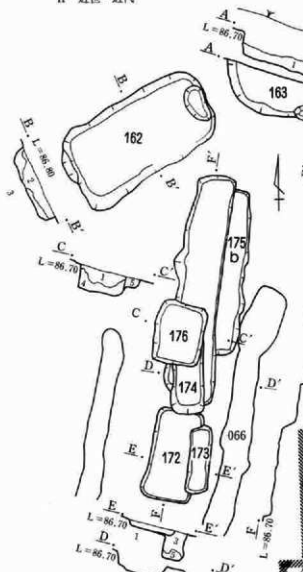
道路側溝の065・066号の間に群集する土坑群。短冊形と箱形を重ねる172~176号と方向の異なる箱形162号、不明の163号に分かれる。175号は2基以上が重複している。

いづれも065・066号の形成する道路と重なるが新旧関係不明。

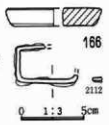
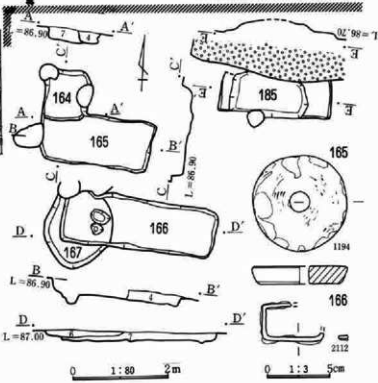
162号の最上層には2次堆積の浅間C軽石が見られた。しかしその下層からは陶器磁器の小片断片が出土している。

主屋掘立群に重複して、東西方向の短冊形土坑群164~167・185号と不定形の186号がある。

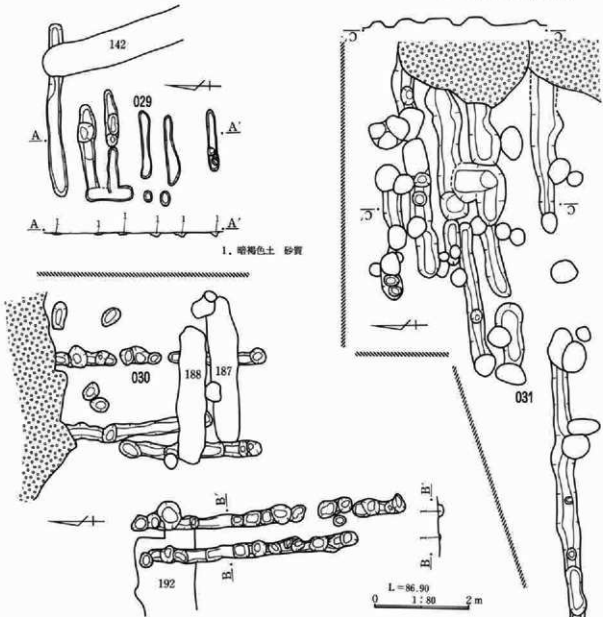
掘立柱穴は、164・165号より新しい。185号は内部にやや深い土坑が重っており、柱穴はそれより新しい。165号から瀬戸美濃陶器灰釉戸車(1194原色11)、166号より口字形金具(2112)が出土。



- 1 暗褐色土 ローム塊混在
- 2 黒褐色土 砂質 二次堆積浅間C軽石を多量に含む
- 3 濃い黄褐色土 ローム粒含む
- 4 黒褐色土 ローム粒含む
- 5 褐色土 ローム塊含む
- 6 褐色土 砂質 ローム粒含む
- 7 暗褐色土 砂質 ローム粒含む







1. 暗褐色土 砂質

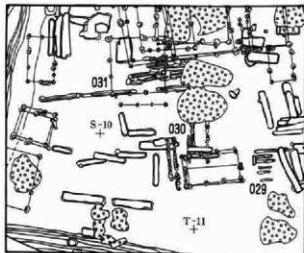
### 畝

西側区画で、3か所の畝のサク跡が検出された。

029号は、東西走向で短冊形土坑より新しい。間隔は、0.4~0.5m。

030号は、南北走向で短冊形土坑より新しい。底は生垣跡のようなピットが並ぶ。最小間隔0.3m。

031号は、東西走向で主屋掘立群と重なる。最長のサクは16m以上続く。最小間隔0.2m。



## 東端溝(道路)

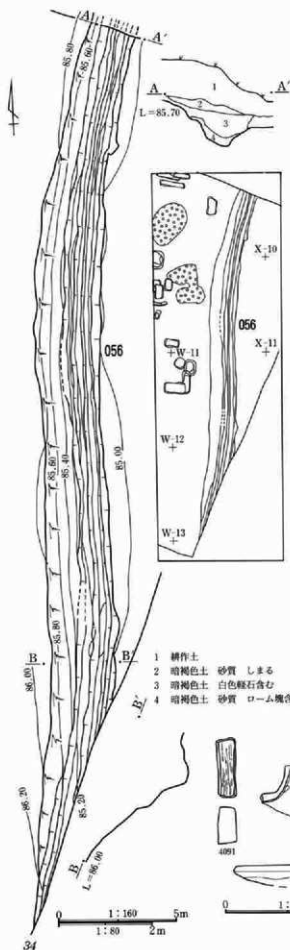
本調査範囲の最東端は、1m以上の比高で下がり五目牛清水田遺跡の低地になる。その台地の低地への法面で検出された溝が、056号遺構である。

この溝のすぐ西側は、調査開始直前でも古い道が残っており、この溝がその東側溝であることは確かである。

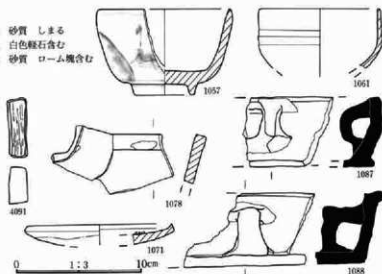
断面形はV字形に近く、底は狭い。あまり顕著な水流痕は見られなかった。

出土遺物は、肥前陶胎染付碗(1057)・瀬戸美濃陶器掛け分け碗(1061)・同胎釉片口(1078)・美濃陶器胎釉灯明皿(1071)(以上原色13)そして瓦質土器焙烙(1087, 88)・櫛歯タガネ痕砥石(4091)などの18世紀代の日常生活具の破片が見られた。

他に小片も多く、磁器13・陶器42・土器58などがあつた。



056号遺跡



## 礎石建物

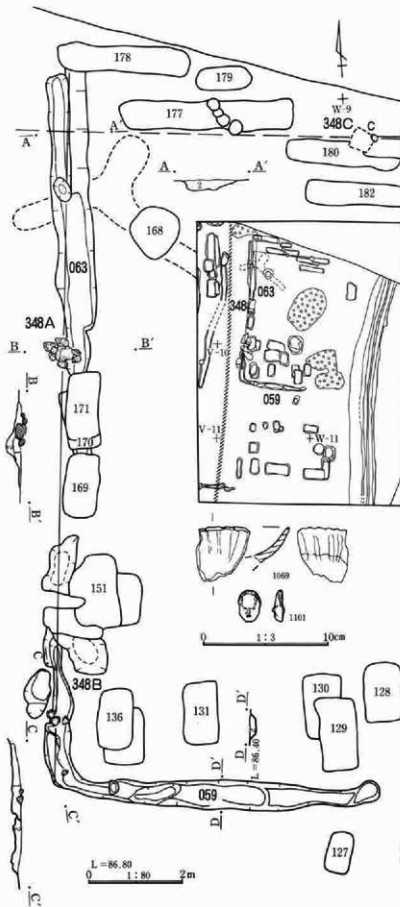
東側区画に浅い2本の溝059号と063号がある。両者は、同一の溝の一部と思われるが南北に約15m走ってから直角に東へ7m曲っている。

これらの溝の埋土上に、約7.6mの間隔で、礎石建物の348号の礎石AとBがある。状態が良いAは、径0.4mほどの中心石を、7個の円礫で押さえる形で組まれている。

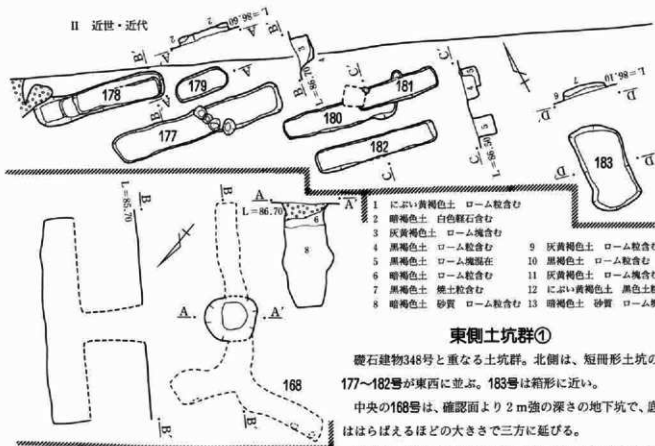
南側の礎石Bは、3個の円礫が残るのみで、中心石は不明。また063号から東へ6.4m離れた土坑181号の埋土上に1個の円礫Cが残っていた。

063号の埋土中から、美濃鉢釉菊皿(1069原色13)と泥人形(1101)が出土し、磁器陶器土器の小片も少量あった。

礎石・溝そして短冊形と箱形の土坑群は、皆走向が揃っている。溝が最初に掘られ、続いて短冊形土坑が埋められた後に礎石が築かれた。箱形土坑は溝より新しいが、礎石との関係は不明。



- 1 濃い黄褐色土 ローム塊含む  
2 暗褐色土 ローム粒含む



東側土坑群①

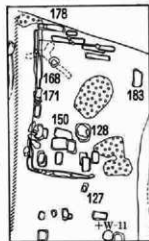
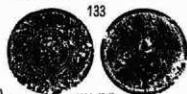
礎石建物348号と重なる土坑群。北側は、短冊形土坑の177~182号が東西に並ぶ。183号は箱形に近い。

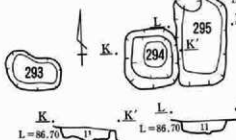
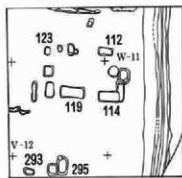
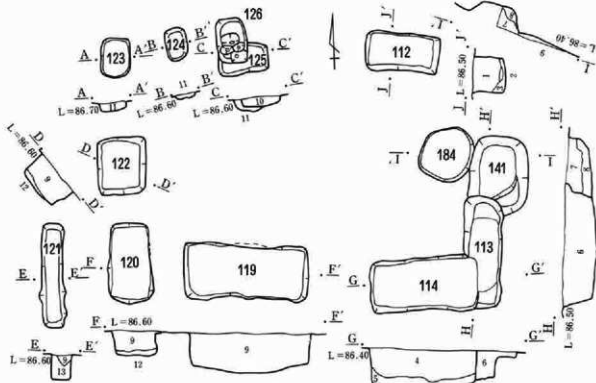
中央の168号は、確認面より2m強の深さの地下坑で、底ははらばえるほどの大きさで三方に延びる。

南側は、箱形土坑の128~132・135・136・169~171号が、南北走向で群集。このうち129・130・132・136・169号の埋土には白色モミガラ層があった。

その他にやや不定形の127・133・134・137・138・150・151号がある。箱形より新しい133号の埋土中より

昭和銘一銭銅貨(2026)出土。





293号遺構



4126

114号遺構



1182

0 1:3 5cm

- 0 1:80 2m
- 1 黒褐色土 砂質 ローム塊含む
  - 2 黒色灰 炭化イネと灰が混在
  - 3 黒褐色土 砂質 ローム塊含む
  - 4 暗褐色土 砂質 ローム・赤褐色土塊含む
  - 5 黒褐色土 砂質
  - 6 褐色土 砂質 ローム・黒色土塊含む
  - 7 黒褐色土 ローム塊・炭化物粒含む
  - 8 褐色土 砂質 しまりない
  - 9 黒褐色土 ローム塊含む
  - 10 灰黄褐色土 砂質 ローム・炭化物粒含む
  - 11 暗褐色土 ローム塊含む
  - 12 黒褐色土 ローム塊・白色モミガラ含む
  - 13 黄褐色土 ローム粒含む

### 東側土坑群②

礎石建物348号の南に群集する土坑群。

道路060号の北にあるのは、箱形112~114・119・120・122・141号を中心としている。120号と122号では白色モミガラが埋土中に見

られた。また112号には炭化米が含まれていた。(分析報告参照)

他に短箱形121号、小箱形の123~126号そして楕円形の184号が散る。東西走向のものが新しい。

道路の南では、不定形の293号と箱形に近い294号と南北走向の295号がある。

114号から産地不明黒軸オロシ皿(1182原色11)が、293号から砂岩砥石(4128)が出土。

箱形土坑は、多くの埋土中に白色モミガラまたは炭化米が見られた。その上層は、急速に埋めた状態である。遺物では、昭和の一銭銅貨より古く黒軸オロシ皿を含む時代となる。

以上より、これらは米もしくはイネワラが埋納されているため、農作物の貯蔵用の穴と考えられ、継続的に明治から昭和に掘られたものと考えられる。

### 3 2号屋敷跡の発掘成果

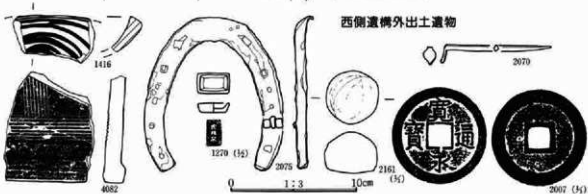
調査範囲の中央で、K列グリッドからR列グリッドまでの約80mの範囲である。

ここは、Q・P列グリッドを南北に走る道路(068・069号遺構)で東西に大きく分かれる。

西側は、礎石建物がいくつも見られ、井戸・桶埋設土坑など屋敷構えの中心的部分と思われる。

東側区画は、溝067号まで約26mの幅で、あまりはっきりした施設は検出できなかった。

西側での遺構外出土遺物は、下記の瀬戸鉄絵馬目皿(1416)・産地不明白磁ミニチュア皿(1270以上原色10)、新寛永通宝(2007)、角釘(2070)、馬蹄鉄(2075)、鉛銃弾(2161)、平瓦(4082)がある。



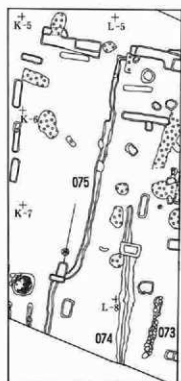
## 西側溝群

西端で検出された一群の溝で、途中で鍵の手状に屈曲する溝075号を中心に、それと平行の生垣073号、また走向が異なる溝074号と道路側溝077・078号がある。

075号は、北側で直角に東に曲っており、土坑233・234号に切られている。074号は約17m弱の検出で、土坑230号に壊されている。

074号から瀬戸美濃船袖香炉(1426原色19)が出土。

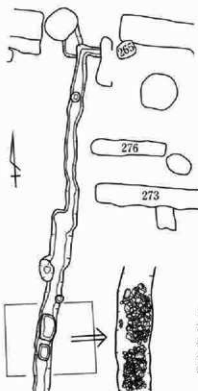
- 1 耕作土
- 2 褐色土 しまりなし
- 3 暗褐色土 砂質 人為的埋土
- 4 褐色土 砂質 白色軽石 ローム粒含む
- 5 によい黄褐色土 砂質



074号遺構



A, A' L = 86.80



075号遺構

A, A'

075

B, L = 86.90

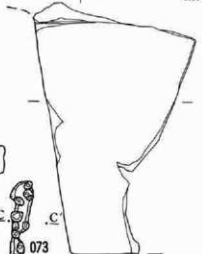
B, L = 86.90

C, L = 86.90

D, L = 86.70



1095



074

073

077

078

1099

1050

2071

1:3

5cm

1:160

5m

1:80

2m



075号遺構出土遺物

肥前染付蕎麦猪口(1050原色19)、瓦質土器釜輪(1095)・同角鉢形容器(1099)そして円筒状銅製品(2071)が散在して出土。(以上前頁)

また中央部では、長さ2mほどの間に二つの掘りこみが掘られて、瓦が一括して投棄してあった。

軒瓦(4036~41)は、連珠三巴唐草文、そして棟瓦(4042~45)と櫛目がある平瓦(4046~48)が

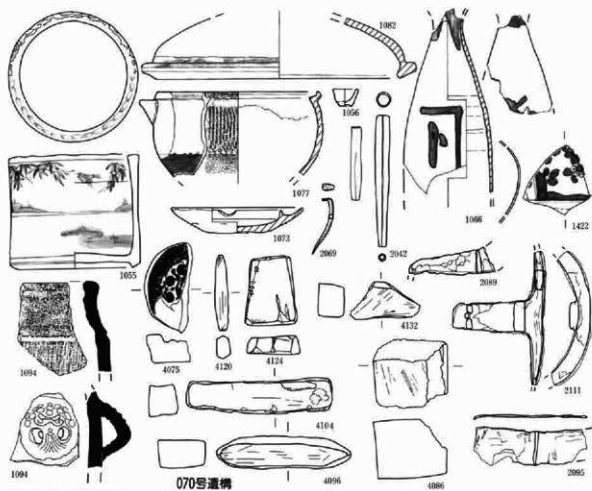
ある。平瓦と思われる小片(4035)には「改」の刻印が見られた。全体としてここに投棄されていた瓦は、85片あった。

なお073号には3片、078号には少量の瓦小片があったが、075号での意識的な投棄状況とは異なる。

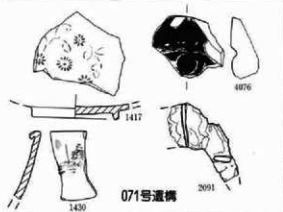




II 近世・近代



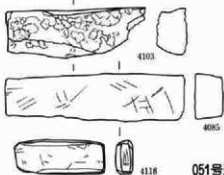
070号遺構



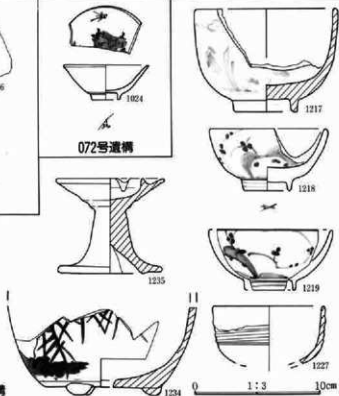
071号遺構



072号遺構

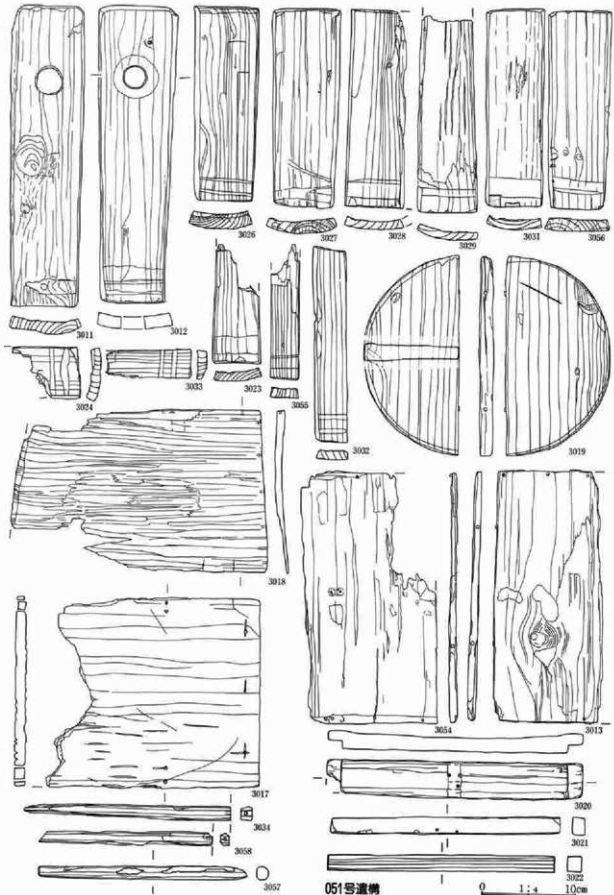


051号遺構

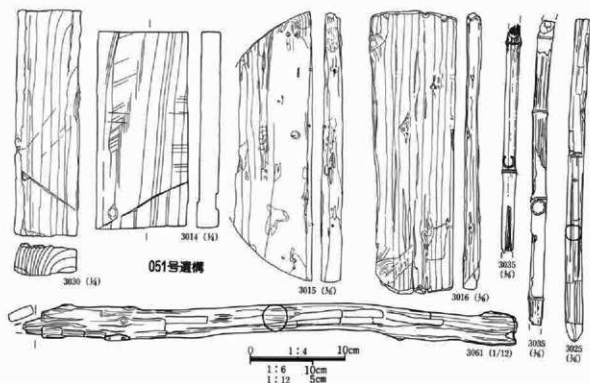


0 1:3 10cm

3 2号屋敷跡の発掘成果



## II 近世・近代



### 北備溝群・井戸①出土遺物

東西方向の溝070号からは、ややまとまって陶磁器片を中心とする出土遺物があった。

碗類は、肥前染付鉢蓋(1047)・同端反碗蓋(1044)・同蓋物蓋(1053)、瀬戸美濃摺絵染付丸碗(1034)・同碗(1035)・同「暗澹團製」銘蓋碗(1037, 43)・同「陶保團製」銘碗(1036)・同色絵丸碗(1033)・同銅版転写染付盃(1030, 31)・肥前系白磁盃(1404)がある。銅版転写染付角鉢(1051)は、会津系と思われる。

皿類は、瀬戸美濃染付型打ち小皿(1048)・同摺絵中皿(1046)が見られる。

磁器は他に東側に近接する溝069号出土と接合する肥前染付火入れ(1055)・京焼系染付瓶(1422)・瀬戸美濃色絵ミニチュア(1056)がある。陶器は、相馬大畑灰釉灯明皿(1073)・産地不明柿釉行平鍋(1077)・同掛け分け蓋(1082)・同「下」銘掛け分け徳利(1066)がある。(1055は原色17、他は原色18)

また瓦質土器火鉢(1094)・軒瓦(4075)、ラウの残るキセル吸口(2042)、銅角釘(2069)、鎌(2089, 95)、T字型金具(2111)、砥石(4086, 4096, 4104, 4120, 4124, 4132)と多彩なものがあった。

以上を含めて小片は陶磁器169片・土器76片・瓦124片などが出土した。

溝071号からは、美濃灰釉摺絵皿(1417)、肥前京焼風鉄絵火入れ(1430以上原色19)、そして樺巴瓦(4076)、鎌(2091)があった。瓦小片は54片ある。

溝072号からは、瀬戸美濃染付盃(1024)が出土。(原色19)

井戸051号では、最上層より瀬戸美濃染付植木鉢(1234)が、中層より肥前染付くらわんか碗(1218, 19)、同陶胎染付碗(1217)、瀬戸美濃掛け分け腰錆碗(1227)、産地不明錆釉脚付灯明皿(1235)が出土した。最下層からは、スギ水汲桶各部(3011, 12, 19, 23, 24, 26~29, 31~33, 55, 56)、同桶(3015, 16)同箱(3013, 18, 54)、竹自然木(3035)など木製品と砥石(4085, 4103, 4118)が見られた。(原色25)

## 道路

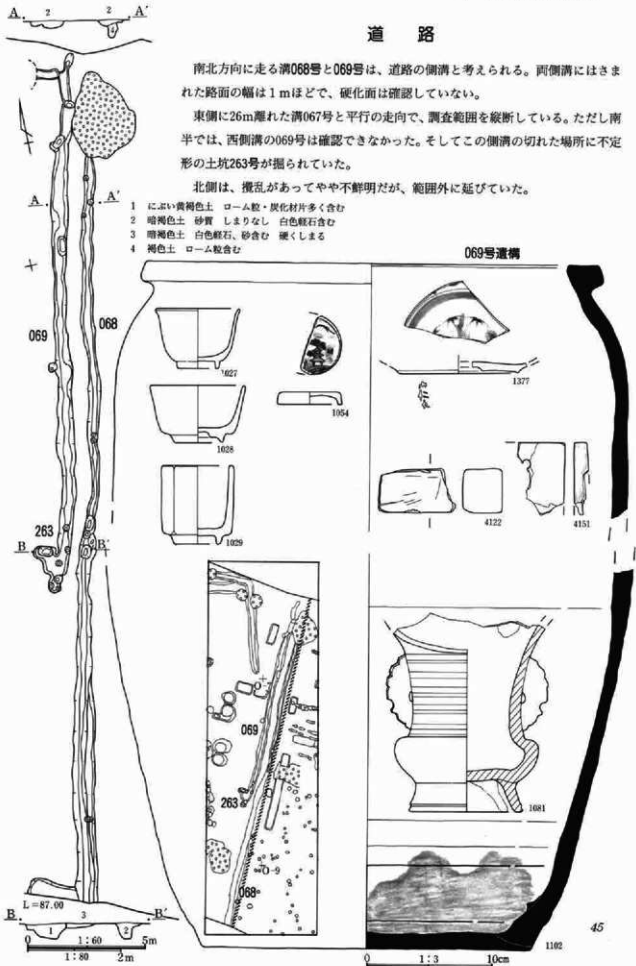
南北方向に走る溝068号と069号は、道路の側溝と考えられる。両側溝にはさまれた路面の幅は1mほどで、硬化面は確認していない。

東側に26m離れた溝067号と平行の走向で、調査範囲を縦断している。ただし南半では、西側溝の069号は確認できなかった。そしてこの側溝の切れた場所に不定形の土坑263号が掘られていた。

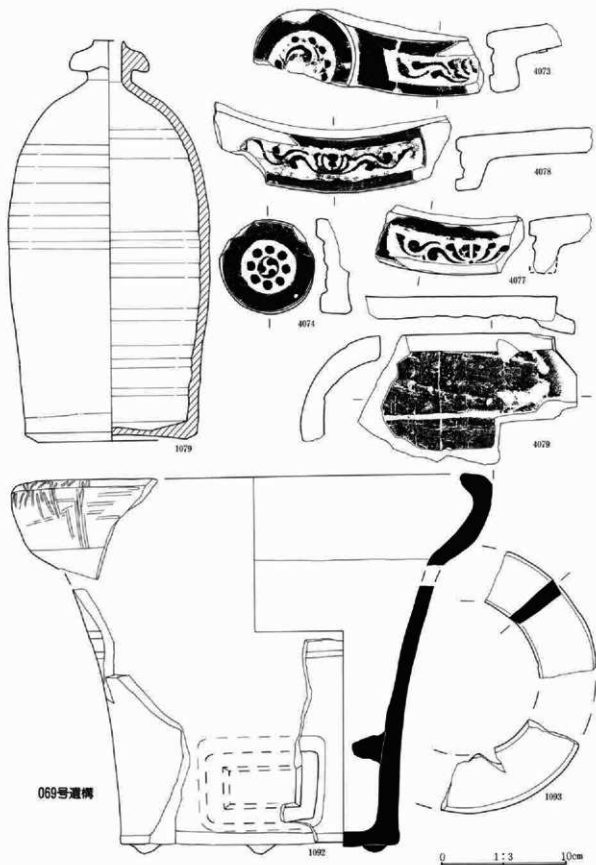
北側は、攪乱があってやや不鮮明だが、範囲外に延びていた。

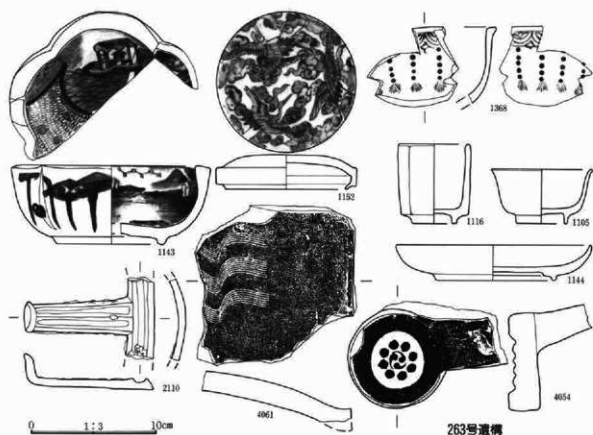
- 1 濃い黄褐色土 ローム粒・炭化材片多く含む
- 2 暗褐色土 砂質 しまりなし 白色軽石含む
- 3 暗褐色土 白色軽石、砂含む 硬くしまる
- 4 褐色土 ローム粒含む

069号遺構



II 近世・近代





道路西側溝(069号)出土遺物

陶磁器は、瀬戸美濃銅版転写染付盃(1027, 28)、産地不明色絵角湯呑み(1029)、瀬戸美濃銅版転写染付小合子蓋(1054)、肥前染付皿(1377)、瀬戸美濃錆軸仏花瓶(1081)、産地不明柿軸徳利(1079)がある。なお西隣の溝070号出土片と接合する肥前染付火入れ(1055, 42頁)も見られた。(原色17)

土器は、瓦質の大甕(1102)、同規伊(1092)、同釜輪(1093)がある。

瓦は、連珠三巴唐草文の軒瓦(4073, 74, 77, 78)、投骨痕の丸瓦(4079)が見られる。他に蛇紋岩製の温石(4151)、変質デイスサイト製砥石(4122)があった。

小片は以上を含めて磁器30・陶器24・土器89・瓦90片が出土。

### 土坑263号出土遺物

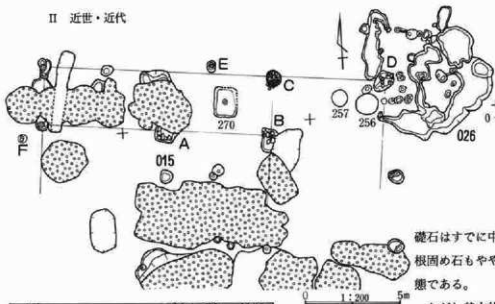
陶磁器は、肥前染付鉢(1368)、同型打鉢(1143)、瀬戸美濃銅版転写染付盃(1105)、同蓋物蓋(1152)、同色絵皿(1144)、産地不明色絵角湯呑み(1116)がある。(原色20) なお1144は、接合破片が、西に4m離れた桶埋設土坑289号より出土しており、また1116は上記1029と揃いのものと思われる。

他に連珠三巴文軒瓦(4054)、平瓦(4061)そしてT字形金具(2110)が出土した。

以上を含めて小片は、磁器17・陶器3・土器2・瓦35片などがあつた。

この土坑に投棄された磁器は、比較的上手なものが多く、意識的な一時の行為によるところが大きいだろう。ただし上記道路側溝などと共通する広範囲の清掃的行為によるものも含まれる。

なお、約20m離れた土坑246号の産地不明灰釉鉢(1181)の接合破片が、本263号及び桶埋設土坑の289号より出土しているのも同様の理由によるのだろう。(原色20)



礎石建物①

西側区画の中央  
0-7や北側で、4個  
の礎石よりなる建  
物015号遺構が確  
認された。

A~Dの4個の  
礎石はすでに中心石を欠いており、  
根固め石もやや動いて残っていた状  
態である。

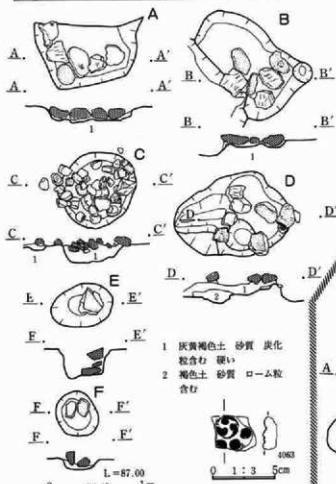
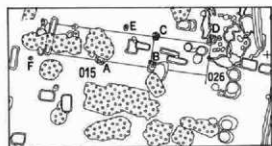
ただし基本的な位置には変化ない  
と思われ、東西間隔約5.5m、南北間隔約3.0mの  
位置関係は、当初のままと考えられた。

西側の延長方向には、いくつかの礎石跡のよう  
な小土坑が見られたが、確定はできない。延長線  
から少しずれた位置に、根固め石の廃棄坑と思わ  
れるEとFの土坑があった。

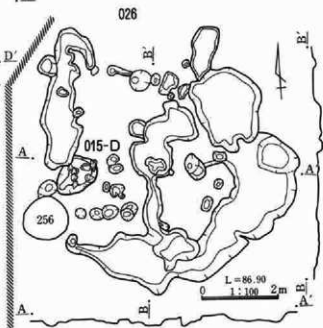
土坑258号は、B礎石より新しい。またABC各  
礎石のほぼ中間に、中央に柱穴を持つ土坑270号が  
あるが、関係は不明。

なおD礎石中には、連珠三巴文軒瓦片(4063)が  
見られた。

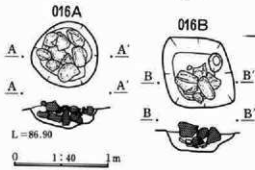
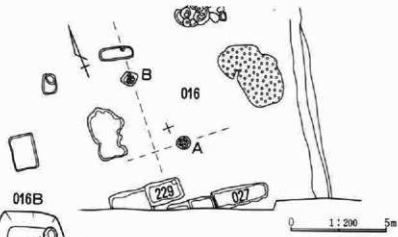
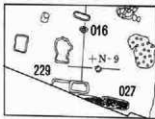
D礎石の東側約7m四方は、不定形な落ちこみ  
(026号遺構)があり、かつ地山ルームが暗紫色に変  
色していた。馬屋跡の可能性も考えられる。



- 1 灰黄褐色土 砂質 炭化  
粒含む 硬い
- 2 褐色土 砂質 ローム粒  
含む

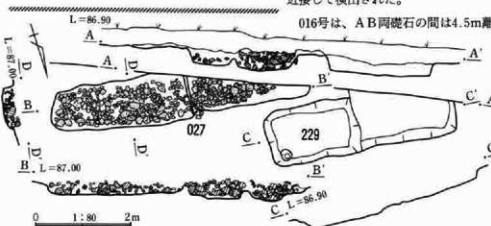






礎石建物②

西側区画南側では、根固め礎石2基よりなる建物の016号遺構と小磑をつめた短冊形礎石の建物027号遺構が、近接して検出された。



016号は、A B両礎石の間は4.5m離れているが、どのような走向の建物かは不明。

027号は、調査範囲で3.0×0.5×0.4mの土坑が縦に二つ並んでおり、そこに陶磁片を含む小

磑が大量に投入されている。

東に開口した土蔵の地盤と考えられる。同方向の土坑229号が、北西に接する。

西側区画南西端にも、陶磁片を含む小磑が多量に入った円形土坑028号がある。2.5×2.2mほどの円形に近い形状で、西側を除く三方の周縁に磑が集中している。ただし密度は、027号に比べるとかなりまばらであり、性格は不明。

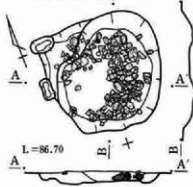
028号の北東に5m離れて、礎石017号がある。中心石は30cmほどの大きさで周囲に根固め石を配する。

単独のため建物の性格・形状は全く分からず、028号との関係も不明。

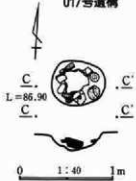
- 1 耕作土
- 2 暗褐色土 砂質 ローム粒含む
- 3 暗褐色土 砂質 しまりなし
- 4 暗褐色土 砂質 炭化粒・灰含む
- 5 褐色土 しまり弱いローム粒含む



028号遺構

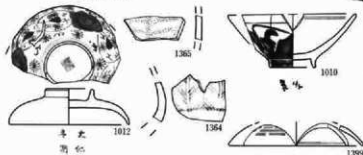


017号遺構



II 近世・近代

027号遺構



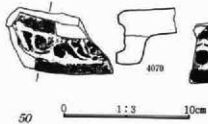
017号遺構



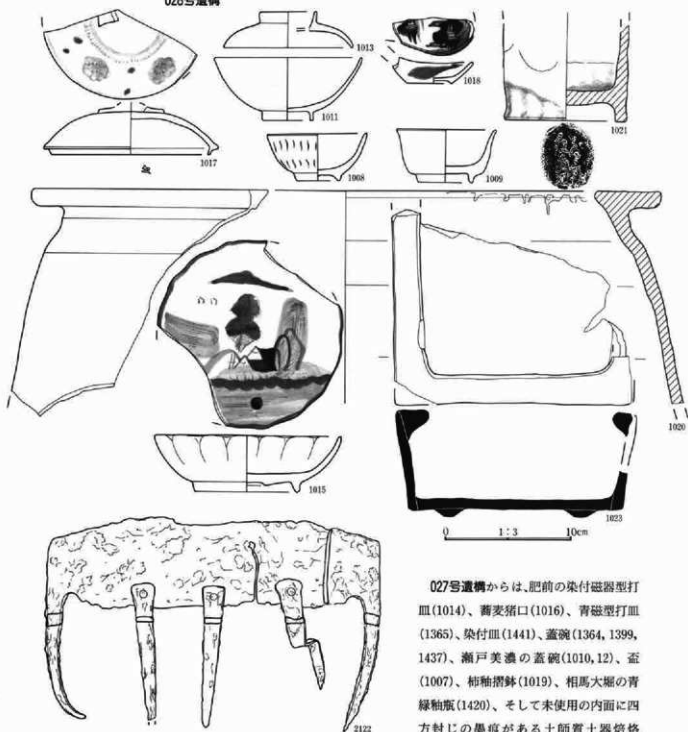
016号遺構



028号遺構



## 028号遺構



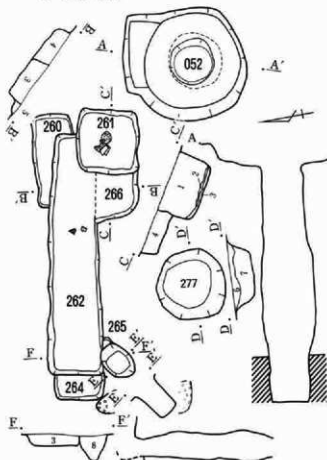
027号遺構からは、肥前の染付磁器型打皿(1014)、蕎麦猪口(1016)、青磁型打皿(1365)、染付皿(1441)、蓋碗(1364, 1399, 1437)、瀬戸美濃の蓋碗(1010, 12)、盃(1007)、柿軸摺鉢(1019)、相馬大塚の青緑釉瓶(1420)、そして未使用の内面に四方封じの墨痕がある土師質土器焙烙

(1022)と五輪塔空風輪(4147)があった。1022は跡投入後、割られて埋納されている。

016号からは、平瓦(4064)、017号からは肥前染付小鉢(1157)、関西系色絵盃(1003)が軒瓦(4065)と共に出土。(027号は原色21、017号は原色50)

028号からは、肥前染付蓋(1017)、散り蓮華(1018)、型打皿(1015)、瀬戸美濃摺絵染付蓋(1013)、銅版転写染付盃(1009)、クロム青磁盃(1008)、会津系摺絵染付碗(1011)、「伊香保焼」銘灰釉花器(1021)、溝075号出土片と同一の常滑大甕(1020)、土師質角鉢(1023)、鉄鎌(2122)そして瓦(4066~72)が出土。(原色23)小片は、027号は陶器47・土器231片と多く、028号は瓦131片が目立つ。

II 近世・近代



井戸②

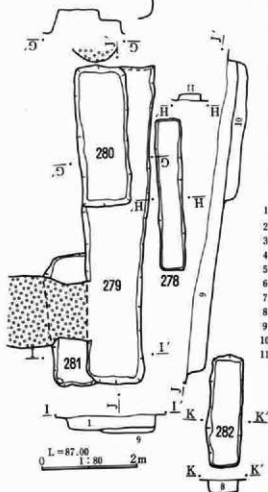
西側区画北西側で検出された井戸052号遺構は、上部に径2.4m、確認面から0.4mの深さの掘りこみ面を伴っている。本体の深さは、同5.6mで、調査時には4.5mの位置より毎分1.8ℓの湧水があった。

この井戸の西には、箱形土坑(261号)と短冊形土坑群(260・262・264・266・278～282各号)と円形土坑(265・277号)が東西方向の走向を中心に重なり合っている。

ほとんど全ての土坑は、短時間で埋め戻されているが、箱形土坑の261号の下層には炭化ネズサが埋納されていた。(分析報告参照)

この部分での短冊形土坑は、最小が260号の2.0m、最大が279号の6.6mであり、かなりばらつきがある。

261号からは、連珠三巴文軒瓦(4055)も出土。280号からは大正12年銘五銭銅貨(2033)と昭和19年銘アルミ貨(2034)が出る。そのため280号とこれより新しい279・281号は現代の遺構であり、走向・形状の似る262・264号も同時期の可能性が考えられる。



- 1 暗褐色土 ローム塊大量に含む
- 2 暗褐色土 粘性強い ネズサ含む
- 3 暗褐色土 ローム粒含む
- 4 にぶい黄褐色土 砂・炭化粒含む
- 5 暗褐色土 砂・ローム粒含む
- 6 にぶい黄褐色土 ローム・砂粒含む
- 7 黒褐色土 白色軽石・ローム粒含む
- 8 黒褐色土 ローム塊含む しまり弱い
- 9 褐色土 砂質 ローム塊多く含む
- 10 暗褐色土 砂質 ローム塊混在
- 11 暗褐色土 ローム・炭化粒含む

261号遺構



280号遺構 0 1 3 5cm



2034 (ㄨ)

2033 (ㄨ)



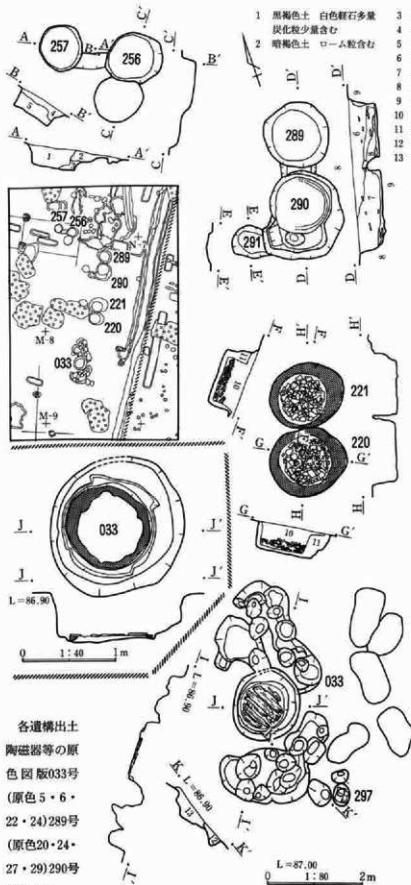
## 井戸052号遺構出土遺物

埋土中層からは、肥前染付小型碗(1225)、相馬・益子系三彩小形土瓶蓋(1233)が出土した。また底からは、木柄包丁(2079)、クリ木栓(3036)、クリ構築部材片(3037~39)、アカマツ角材(3040)、スギ水汲桶(3042, 43)そして頁岩磁石(4114)が見られた。なお4114の小口部には未判読の墨書がある。

小片は、以上を含めて木器40、瓦89片が顕著である。(陶磁器は原色25)

南東側の井戸051号の小片は、木器102、瓦34片であり、052号は瓦の比率が高い。また051号の木器に比べると、木釘の残る箱板やまとまった建築部材、そして竹自然木が含まれていない。

II 近世・近代



桶埋設土坑群

道路の西4mに平行して13mの間に5基、そして礎石建物の015号に重複して東西方向に2基の桶埋設土坑群が検出された。東西方向の256・257号は、間隔60cmで、256号の埋土下層は浅間A軽石の2次堆積層。

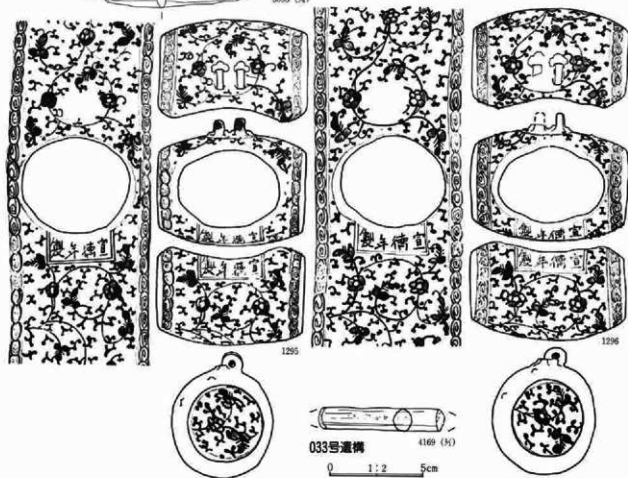
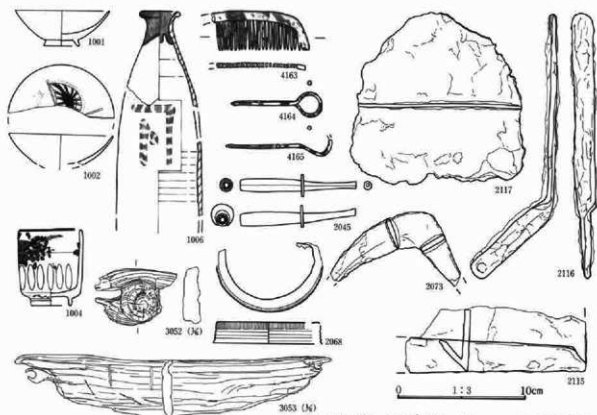
北端の289・290号は、間隔20cmで桶支えの粘土痕跡があり、短時間で埋められる。南西側の浅い土坑291号は、性格不明。

中央の220・221号は、間隔ほぼなく厚く粘土が残る。瓦片が大量に投棄されている。

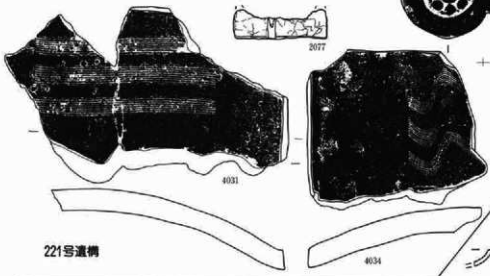
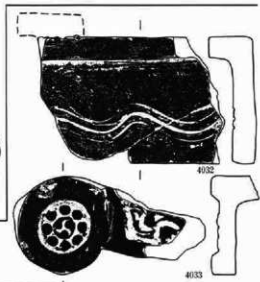
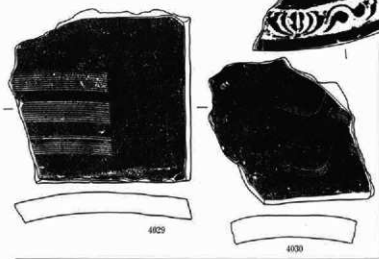
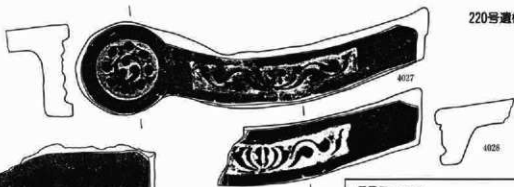
南端の033号は単独だが、周囲に不規則間隔でピットを伴う。桶底板とその下の環状の粘土が残存。南東側の浅い掘りこみの297号は、瓦を投棄した穴。

033号では桶埋設部分より、清青花鳥餌入(1295, 96)、瀬戸美濃色絵壺(1002) 同白磁壺(1001) 産地不明掛分け徳利(1006) セルロイド整髪具(4163~65)、円環付キセル吸口(2045)などがあ

る。桶底板(3052, 53)はスギ材である。

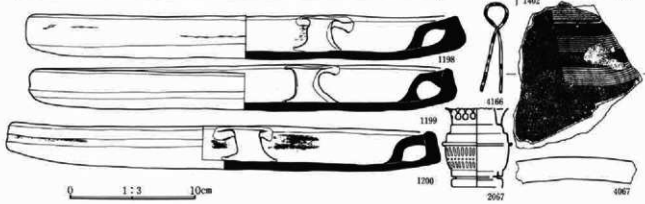


220号遺構



221号遺構

289号遺構



0 1:3 10cm



## 289号遺構

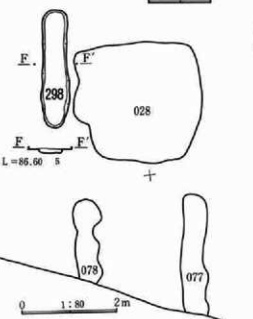
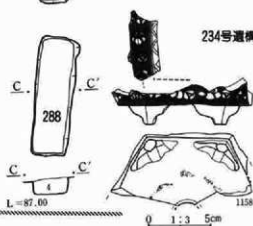
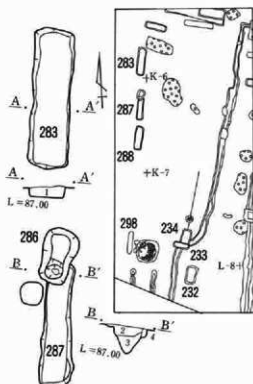


## 290号遺構

左図を含めて瓦小片は、220号が81片、221号が40片あった。後者は火打金(2077)が入る。

289号は、土師質の焙烙3点(1198~1200)が同型。ヘアピン(4166)は033号のものに似る。他に263号の色絵皿(1144)、269号の具須絵皿(1415)、234号の染付植木鉢(1158)と246・263号の灰釉鉢(1181)の接合破片が出土。

290号では、石筆(4170)は033号例に似ている。全体に時間幅が大きい。



### 西端土坑群①

西端溝075号の西側には、道路077-078号の延長方向に沿う状態で、南北に短冊形土坑(283・287・288・298各号)と不定形の286号が並んでいる。

これらのうち287号と288号からは、瓦小片がそれぞれ13片と27片出土した。

また他の3基より10m南に離れ、集石土坑028号に接する298号は、埋土下層よりビニールが見られた現代の掘りこみである。

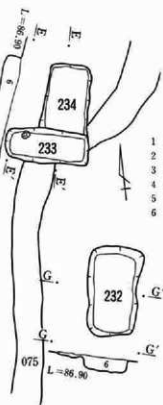
287号より古い286号と東に5m離れた284号の性格は不明。

溝075号の屈曲部周辺では、箱形土坑232~234号が見られる。

このうち233号は、十円硬貨が出土した現代の掘りこみである。234号は、溝より新しい。232号は、性格不明。

234号からは、瀬戸美濃染付磁器植木鉢(1158)が出土。なおこの接合破片は、重複する溝075号と東に30m離れた桶埋設土坑289号から出土している。

284号遺構



- 1 黒褐色土 ローム塊含む
- 2 褐色土 しまりない ビニール含む
- 3 暗褐色土 ローム粒含む
- 4 暗褐色土 ローム塊含む
- 5 暗褐色土 ローム塊・ビニール含む
- 6 褐色土 ローム塊混在

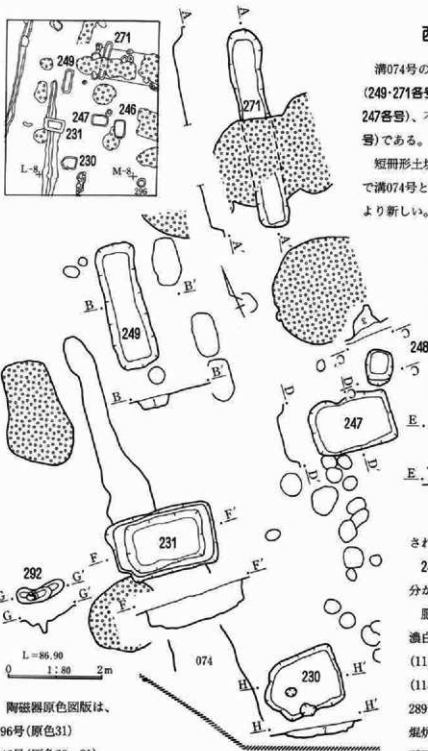
## 西側土坑群②

溝074号の周辺に散らばる短冊形土坑(249・271各号)、箱形土坑(230・231・246・247各号)、不定形土坑(248・292・296各号)である。

短冊形土坑2基は、いずれも南北走向で溝074号と平行。東西走向の231号は溝より新しい。

292と296号は、瓦投棄坑である。296号からは文久永宝と砥石さらに肥前染付碗蓋が共伴。

箱形の231号も瓦が投棄



陶磁器原色図版は、

296号(原色31)

246号(原色20・31)



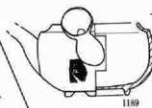
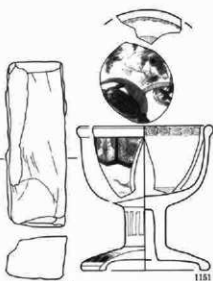
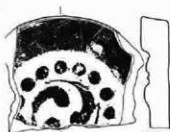
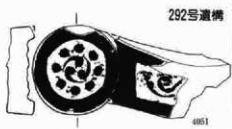
- 1 褐色土 砂質 しまり良い
- 2 褐色土 砂質 ローム粒層在 瓦含む
- 3 褐色土 砂質 ローム塊層在
- 4 褐色土 砂質 しまりやや弱い 遺物多く含む
- 5 暗褐色土 砂質 ローム粒層在
- 6 によい黄褐色土 しまり弱い 石灰粒・瓦片含む
- 7 によい黄褐色土 砂質 しまり良い

され、小片計35片が見られる。

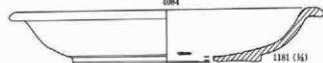
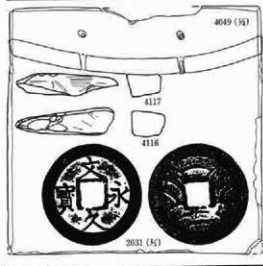
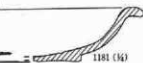
246号は、上層の攪乱に続く部分から大量の投棄遺物出土。

肥前染付盃洗(1151)、瀬戸美濃白磁徳利(1155, 56)、万古急須(1189)、産地不明柿軸摺鉢(1184)、同灰軸鉢(1181 263・289号と接合)、三河高浜土師實焔炉(1212, 13)、棟巴瓦(4052)、砥石(4084)が見られた。以上を含め磁器80・土器211・瓦141片の小片が出土した。

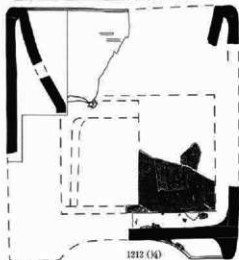
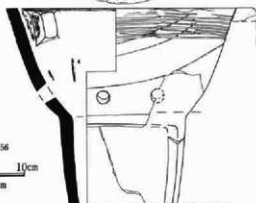
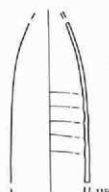
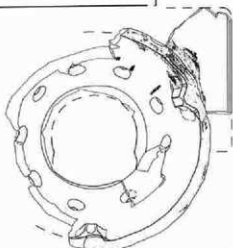
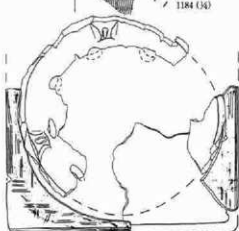
これらの遺物は、この土坑埋没後の投棄である。



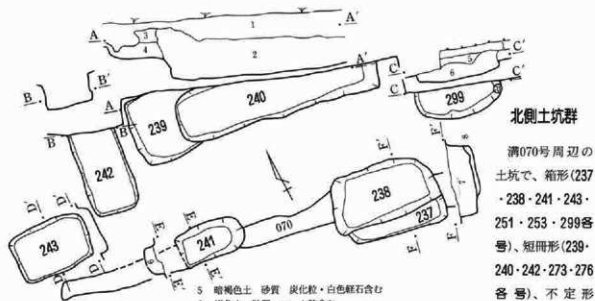
4084



246号遺構



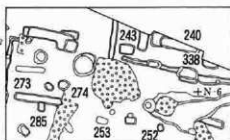
0 1:3 10cm  
1:4 10cm



### 北側土坑群

溝070号周辺の土坑で、箱形(237・238・241・243・251・253・299各号)、短冊形(239・240・242・273・276各号)、不定形

- 1 雑土
- 2 におい黄褐色土 ローム塊 炭化粒含む
- 3 暗褐色土 ローム塊含む
- 4 暗褐色土 炭化粒含む
- 5 暗褐色土 砂質 炭化粒・白色軽石含む
- 6 褐色土 砂質 ローム粒含む
- 7 暗褐色土 砂礫多く含む
- 8 暗褐色土 ローム粒含む
- 9 暗褐色土 ローム粒・白色軽石含む
- 10 におい黄褐色土 砂粒含む



(252・259・272・274・275・285各号)

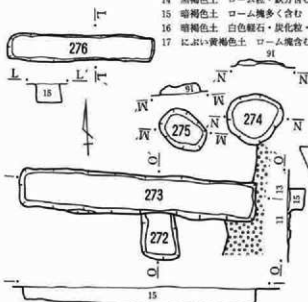
に分かれる。

短冊形240号は、1m以上の深さ。

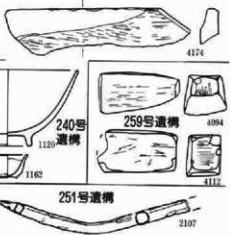
237号より砥石、240号より統制期ゴム印染付碗と色絵ミニチュア、259号より砥石、251号より大釘、252号より銅版転写染付壺と古寛永通宝が出土。252号は、他に瓦小片34片が見られた。(原色29・32)



- 11 暗褐色土 ローム粒含む
- 12 黒褐色土 ローム粒・白色軽石含む
- 13 黒褐色土 ローム・炭化粒含む
- 14 黒褐色土 ローム粒・鉄分含む
- 15 暗褐色土 ローム塊多く含む
- 16 暗褐色土 白色軽石・炭化粒・ビニール含む
- 17 におい黄褐色土 ローム塊含む



### 273号遺構



### 252号遺構



### 北東側土坑群

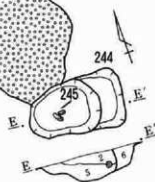
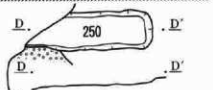
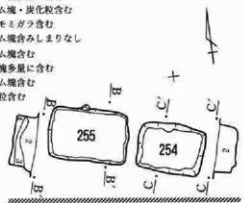
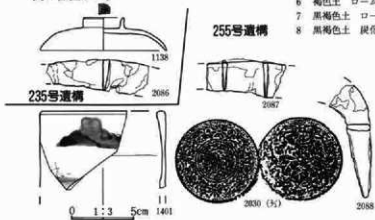
溝070号・071号周辺で礎石建物015号と重なる土坑群で、箱形(254・255・270各号)と短冊形(235・250・236・268・269各号)そして不定形(244・245・258各号)に分かれる。

255号は、埋土中層に白色モミガラが見られ、1号屋敷跡東端のものに類似。

箱形270号は短冊形269号に切られており、中央に柱穴があく。建物015号の礎石群の中央に位置する。



- 1 暗褐色土 ローム粒多量に含む
- 2 黒褐色土 ローム塊・炭化粒含む
- 3 黒褐色土 白色モミガラ含む
- 4 暗褐色土 ローム塊のみしまりなし
- 5 暗褐色土 ローム塊含む
- 6 褐色土 ローム塊多量に含む
- 7 黒褐色土 ローム塊含む
- 8 黒褐色土 炭化粒含む

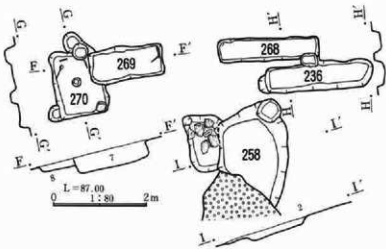


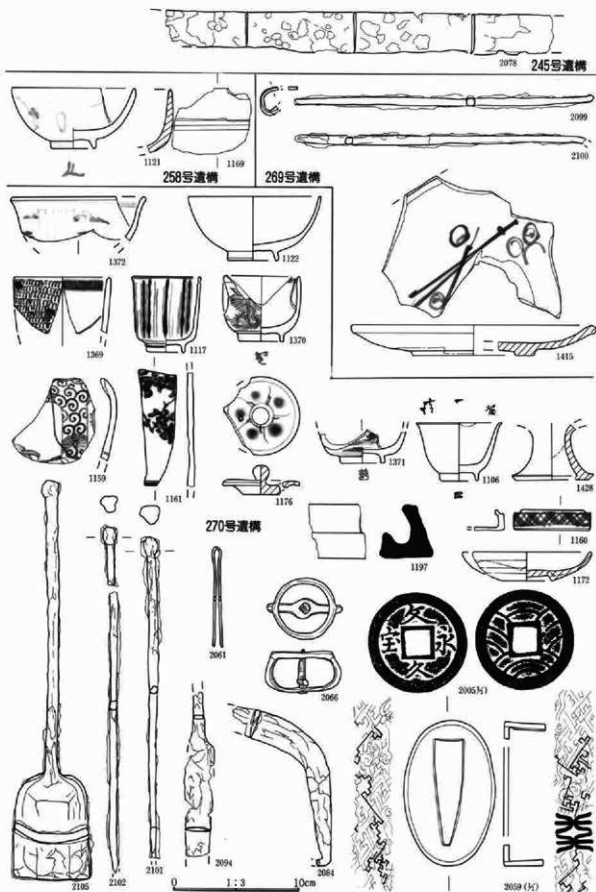
235号より肥前染付陶蓋と鎌片、255号より肥前染付火入れが鎌2片と大正年銘一銭銅貨と共に出土。共に瓦小片を各18と33片含む。

245号の上層より薄い鉄小刀が見られた。258号は建物礎石を切るが、くらわんか碗と掛分け腰請碗出土。269号からは、呉須絵皿(289号と接合)と環状火箸が出る。(原色27・29・32)

270号は、遺物量がかなり多い。陶磁器(原色26)は、肥前湯呑み(1369~71)、同碗(1372 070号と接合)、瀬戸美濃クロム青磁盃(1106)、同摺絵染付碗(1122)、同焼藍染付袋物(1159)、同角合子(1160)、同徳利(1161)同灰釉乗燗(1428)、会津系染付湯呑み(1117)、産地不明天目軸小皿(1172)、相馬益子系三彩蓋(1176)と多彩。

金属器も、金象嵌鞘口(2059)燗台(2066)、ヘアピン(2061)、略字文久永宝など多種である。

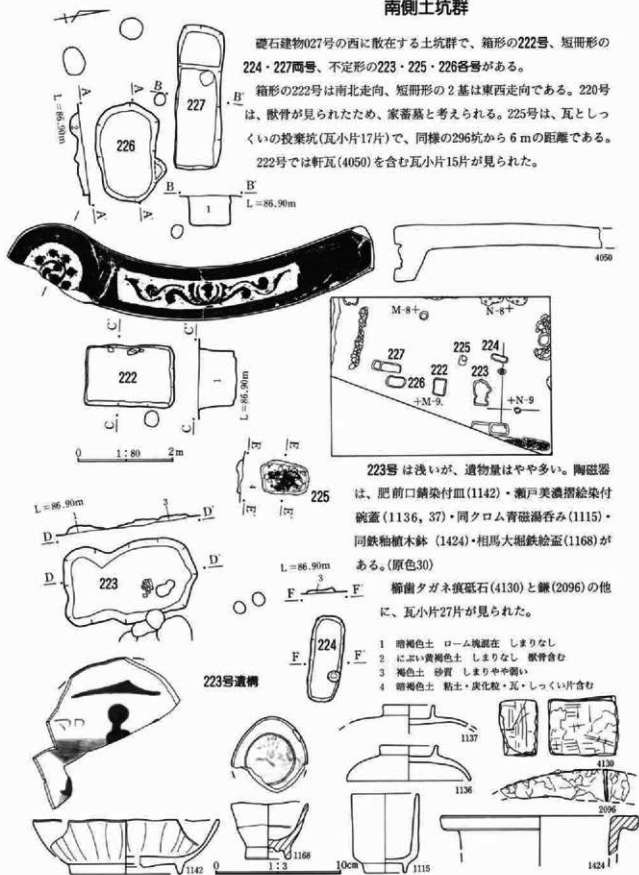




### 南側土坑群

礎石建物027号の西に散在する土坑群で、箱形の222号、短冊形の224・227両号、不定形の223・225・226各号がある。

箱形の222号は南北走向、短冊形の2基は東西走向である。220号は、骸骨が見られたため、家畜墓と考えられる。225号は、瓦とすくいの投棄坑(瓦小片17片)で、同様の296坑から6mの距離である。222号では軒瓦(4050)を含む瓦小片15片が見られた。



223号は浅いが、遺物量はやや多い。陶磁器は、肥前口錆染付皿(1142)・瀬戸美濃摺絵染付碗蓋(1136, 37)・同クロム青磁湯呑み(1115)・同鉄釉植木鉢(1424)・相馬大皿鉄絵蓋(1168)がある。(原色30)

櫛歯クガネ痕磁石(4130)と鎌(2096)の他に、瓦小片27片が見られた。

- 1 暗褐色土 ローム塊混在 しまりなし
- 2 によい黄褐色土 しまりなし 骸骨含む
- 3 褐色土 砂質 しまりやや強い
- 4 暗褐色土 粘土・炭化酸・瓦・すくいの片含む

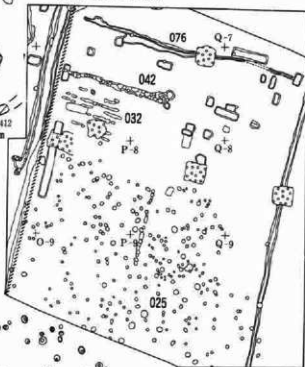




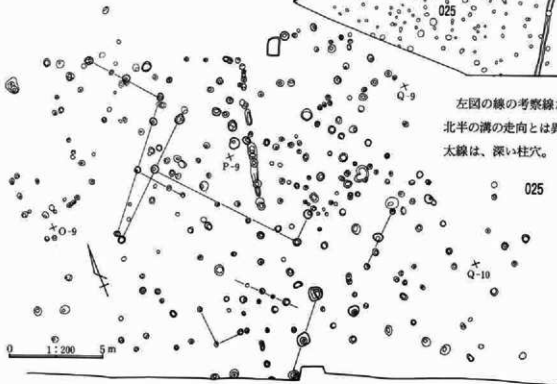
いずれも東西の道路と直交走向である。

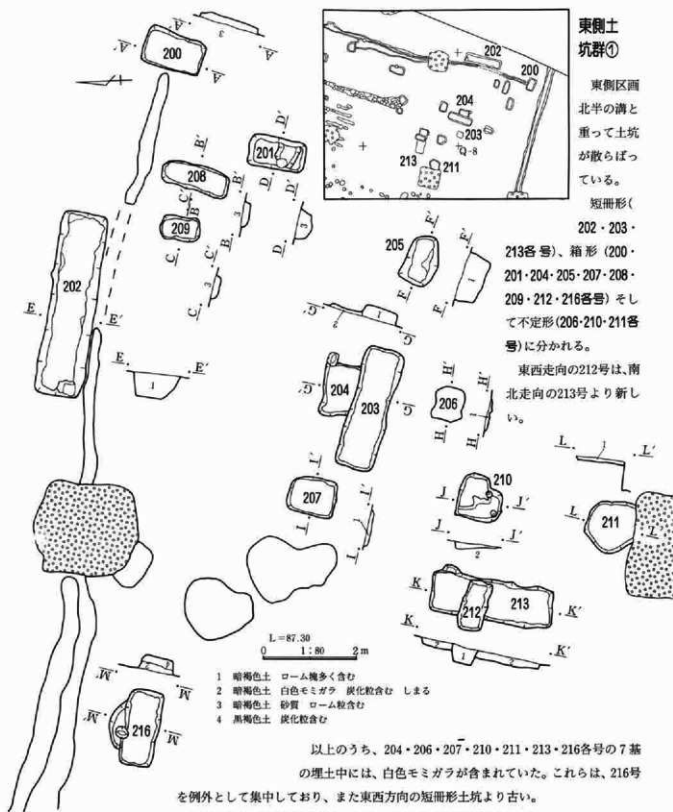
肥前青緑釉皿(1412原色19)は042号出土。

南半には広く柱穴群(025号)が展開している。しかし建物として扱えられるものはなかった。



左図の線の考察線だが、北半の溝の走向とは異なる。太線は、深い柱穴。





東側土坑群①

東側区画北半の溝と重って土坑が散らばっている。

短冊形(

202・203・

213各号)、箱形(200・201・204・205・207・208・209・212・216各号)そして不定形(206・210・211各号)に分かれる。

東西走向の212号は、南北走向の213号より新しい。

- L=87.30  
0 1:80 2m
- 1 暗褐色土 ローム塊多く含む
  - 2 暗褐色土 白色モミガラ 炭化粒含む しまる
  - 3 暗褐色土 砂質 ローム粒含む
  - 4 黒褐色土 炭化粒含む

以上のうち、204・206・207・210・211・213・216各号の7基の埋土中には、白色モミガラが含まれていた。これらは、216号を例外として集中しており、また東西方向の短冊形土坑より古い。

なお203号に近世土器小片1片があった他は、遺物は皆無である。

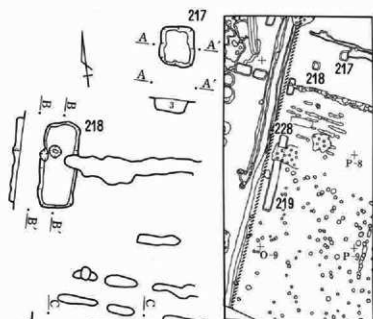
### 東側土坑群②

西側区画との境の道路068・069号に沿って、短冊形土坑218・219・228各号が並んでいる。また218号の北東には、箱形の217号がある。

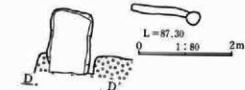
219号は、短冊形土坑の中で最長のもので、全長8.4mを測る。218号は生垣042号より古い。228号は鼎032号と同走向で重なるが、新旧関係は不明。

219号からは、肥前染付皿(1141)・同蓋物(1367)及び鎌(2090)・砥石(4127)が出土。陶磁器(原色29)大きさに比べ小片が微量しか出ていない。

道路の西側の土坑群がかなり大量の遺物を含んでいたのに比べ、対称的な状況である。



- |        |               |
|--------|---------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒・褐色砂質土の互層 |
| 2 暗褐色土 | 白色モミガラ多く含む    |
| 3 暗褐色土 | ローム塊多く含む      |
| 4 暗褐色土 | 炭化粒・白色軽石含む    |
| 5 暗褐色土 | 砂・ローム粒含む しまる  |



### 東側遺構外出土遺物

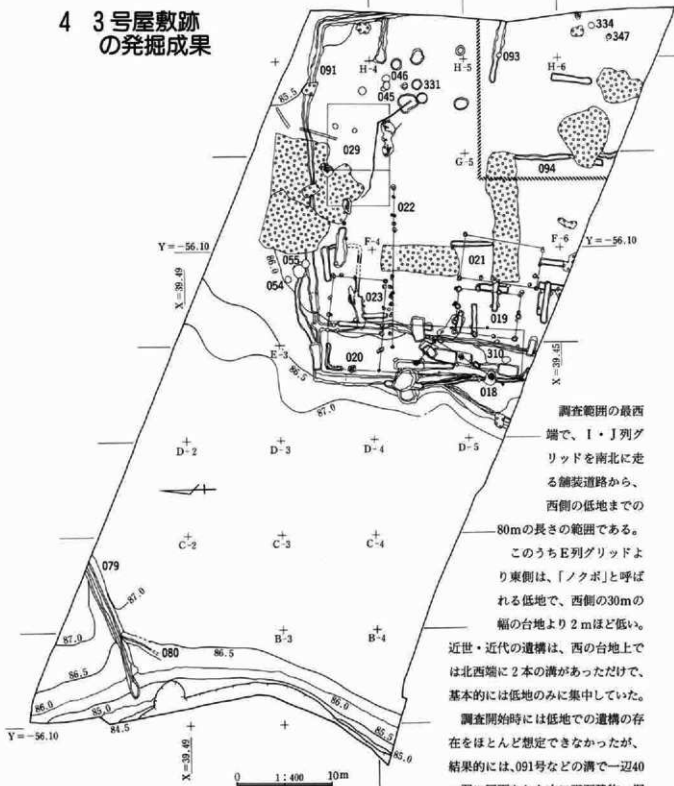
東側区画で遺構外からの遺物は、下図の肥前染付輪花皿(1263)・同碗蓋(1406)及び新寛永通宝(2003)・環状銅製品(2155)がある。(陶磁器原色10)



### 遺構外出土遺物東側



# 4 3号屋敷跡 の発掘成果



調査範囲の最西端で、I・J列グリッドを南北に走る舗装道路から、西側の低地までの80mの長さの範囲である。このうちE列グリッドより東側は、「ノクボ」と呼ばれる低地で、西側の30mの幅の台地より2mほど低い。近世・近代の遺構は、西の台地上では北西端に2本の溝があっただけで、基本的には低地だけに集中していた。調査開始時には低地での遺構の存在をほとんど想定できなかったが、結果的には、091号などの溝で一辺40m弱に区画された中に礎石建物・掘立建物そして井戸など各種の遺構が

まとめて検出された。そのため全体を3号屋敷跡とする。

なお南東隅の二つの溝093号と094号に囲まれた範囲は、旧地権者が異っていたため一応他の部分と分けて報告する。

## 主要溝群

低地北側と西の台地際で多数の溝が検出された。

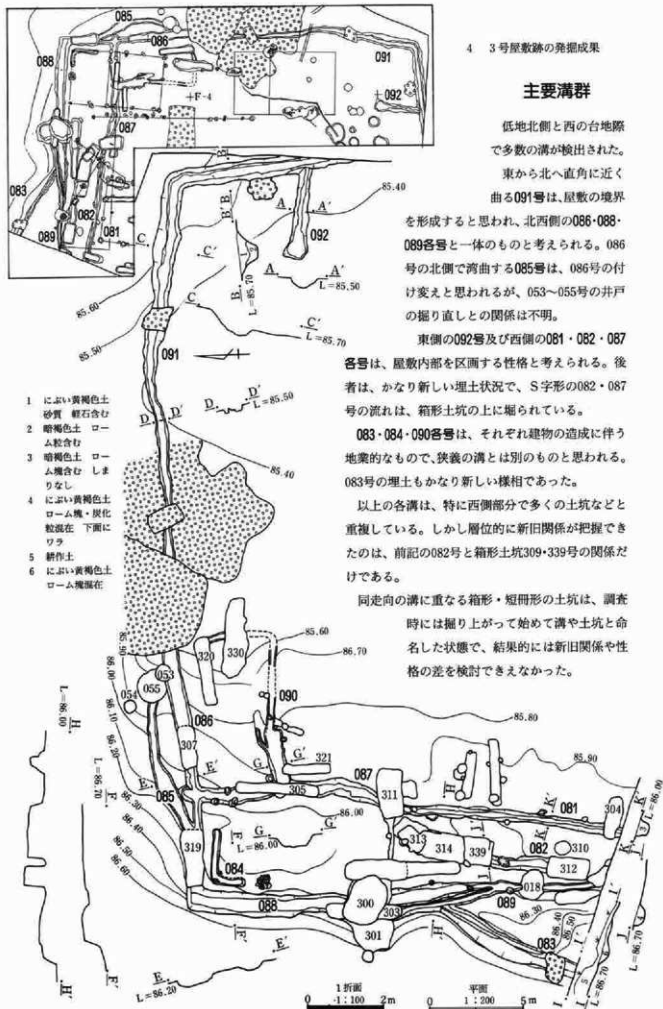
東から北へ直角に近く曲る091号は、屋敷の境界を形成すると思われ、北西側の086・088・089各号と一体のものと考えられる。086号の北側で湾曲する085号は、086号の付け変えと思われるが、053～055号の井戸の掘り直しとの関係は不明。

東側の092号及び西側の081・082・087各号は、屋敷内部を区画する性格と考えられる。後者は、かなり新しい埋土状態で、S字形の082・087号の流れは、箱形土坑の上に塌られている。

083・084・090各号は、それぞれ建物の造成に伴う地業的なもので、狭義の溝とは別のものと思われる。083号の埋土もかなり新しい様相であった。

以上の各溝は、特に西側部分で多くの土坑などと重複している。しかし層位的に新旧関係が把握できたのは、前記の082号と箱形土坑309・339号の関係だけである。

同走向の溝に重なる箱形・短冊形の土坑は、調査時には掘り上がって始めて溝や土坑と命名した状態で、結果的には新旧関係や性格の差を検討できなかった。



II 近世・近代



清出土遺物

081号遺構からは、肥前染付筒形碗(1032)同段重(1362 建物 020・土坑311各号より同一破

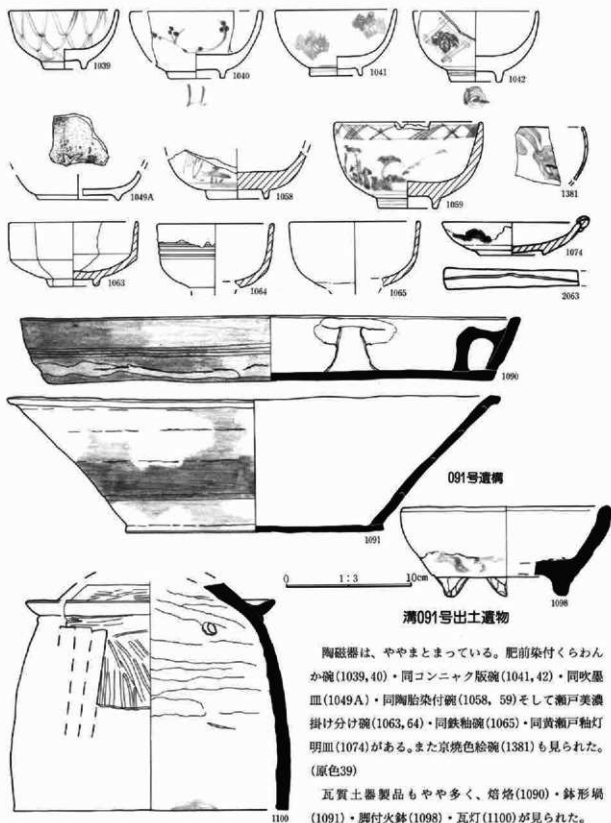
片)・同火入れ(1378 井戸310号・建物018号D礎石出土1389と組)・同青絵盃(1379)・瀬戸美濃鉄軸タンコロ(1075)及びキセル雁首(2054)が出土。

085号からは万古急須(1086)、086号からは瓦質土器壺(1211)が見られる。

087号からは、肥前染付碗(1038, 1360, 61)・同鉢(1052)・瀬戸美濃陶胎染付筒形碗(1380 土坑311号と接合)・同灰軸徳利(1080)・産地不明長石軸蓋(1076)及び古寛永通宝・口字形金具(2113)・砥石(4121)出土。

088号からは、相馬大堀鉄具須絵小皿(1070)そして土師質土器硯炉(1096)・同小鉢(1195)及び小皿型硯(4152)が見られた。089号では、瓦質土器硯炉(1097)がある。

いずれも重複あるいは接近する遺構より接合破片が多い。(以上陶磁器は原色38)

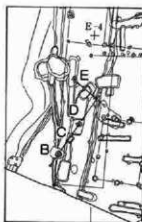
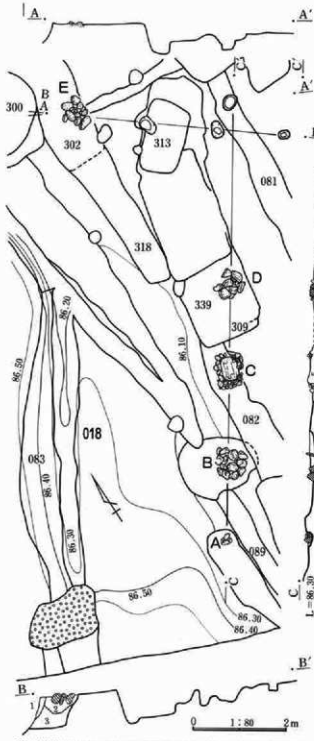


2063は、へら状の銅製品。

以上を含む小片は、磁器19・陶器40・土器160片であり、土器が多い。

陶磁器は、比較的時期差が短かく、屋敷外周区画としての本溝の機能した期間は、あまり長くないようだ。

II 近世・近代



礎石建物①

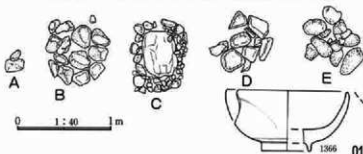
018号遺構は、南西隅で発見。長辺片側にA～D4か所、短辺片側にE1か所の礎石が残存していた。長辺反対側には全く礎石は見られなかったが、台地を削った溝083号が造成痕と思われる。

東に偏した南北の走向で同様例は他になく、溝082・087号の屈曲部がやや近い方向である。

5か所の礎石で中心石が残っていたのはCだけで、他は根固めの礫がまとまっていた。Cの中心石は約50×30cmを測る。またA-D間は中心距離5.4m、Dと礎石痕ビットまで3.6mのため、長辺は1.8mを単位として組まれている。短辺は3.6mよりやや狭い感じである。

重複の溝082号・土坑302・339両号より新しく、土坑300号より古い。

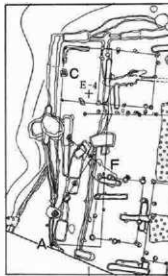
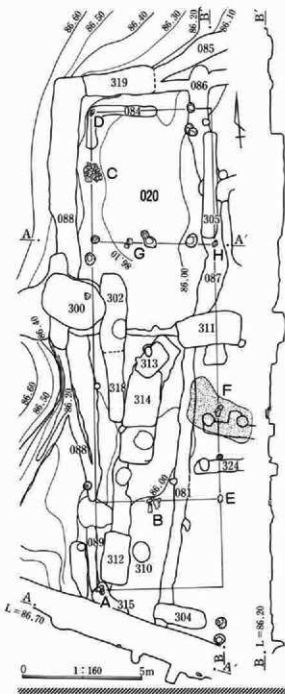
C下部より染付皿(1400)、D下部より同碗(1366)と磁質人形(1005)が出土。また井戸310号の染付火入れ(1389)の接合片がD下部に見られた。小片はやや多いが、基本的には重複土坑などの埋土に含まれていたものが混在した可能性がある。



- 1 黒褐色土 炭化物多く軟質
- 2 褐色土 軽石・ローム粒含む しまる
- 3 暗褐色土 砂・ローム塊含む 軟質
- 4 暗褐色土 軟質
- 5 褐色土 ローム塊混在
- 6 暗褐色土 ローム塊混在・炭化物含む

018号遺構





### 礎石建物②

西辺溝088・089号に平行して接する建物が020号である。

3個以上の根固め石はA～Dの4か所に残っており、他に1・2個の石がE～Hの4か所に見られる。またF周辺の約3×2mの範囲は、灰と糠が集中していた。

これらを単一的に考えると図のような東西約5m南北約20mの異常に長い建物になるため、実際には南北に分かれるのだろう。

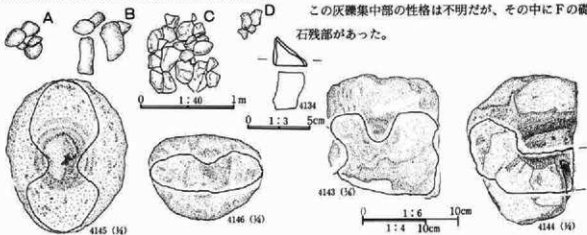
各礎石は前述のように残存状態が極めて悪く、僅かに北側のCがまともな程度である。しかしこれも動いた感じがある。間隔は、BEが2.8m、EFが3.8m、CDが2.6m、GHが3.6mを測る。溝とした084号は、北側部分の地業的な造成痕だろう。

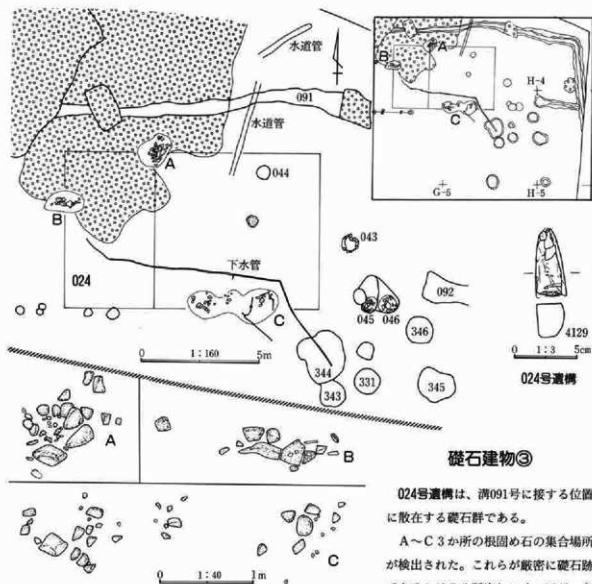
直接の重複は、溝082・087号及び081号と089号また井戸310号と土坑305号は確実で、そのうち081・087両号及び089号は、この建物より古い。

その他に図のような土坑群との重なりが考えられる。

灰糠集中部より、盃状穴がうがられた粗粒安山岩礫(4145, 46)・T字孔同礫(4144)と礎石(4134)が出た。また近くから5面に盃状穴のある同種の礫(4143)が出土。

この灰糠集中部の性格は不明だが、その中にFの礎石残部があった。





### 礎石建物③

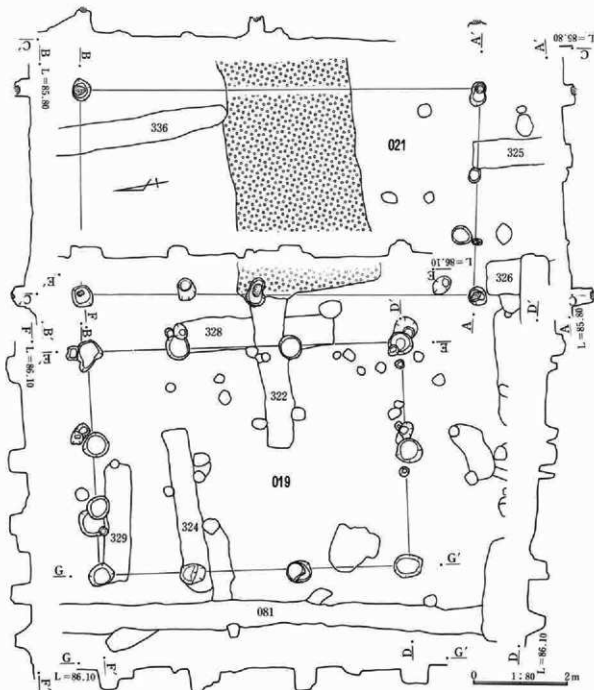
024号遺構は、溝091号に接する位置に散在する礎石群である。

A～C 3か所の根固め石の集合場所が検出された。これらが厳密に礎石跡であるかはやや断定しにくいほど、各

礎の残存状態は不良であった。しかし土師質土器製の下水管列が、Bの近くからCをまわる形で残っていた。さらに北側に044号、東側に043・045・046各号の便所と考えられる埋壺が検出されている。

以上の状況により、この周辺に建物があったことは確かであり、A～Cがそれらの礎石の痕跡である可能性は否定できない。北側溝に近いAは、比較的集中度が高く、径1m以内にまとまっている。その南西のBは1×0.3mとかなりそがれた形である。南東側のCは、3.4×0.8mの間に大きく3か所に分かれて礎が散在している。

砥石(4129)は、下水管の埋土より出土した。

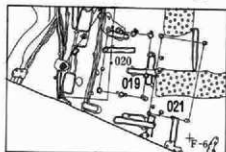


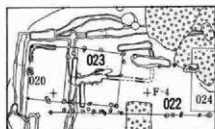
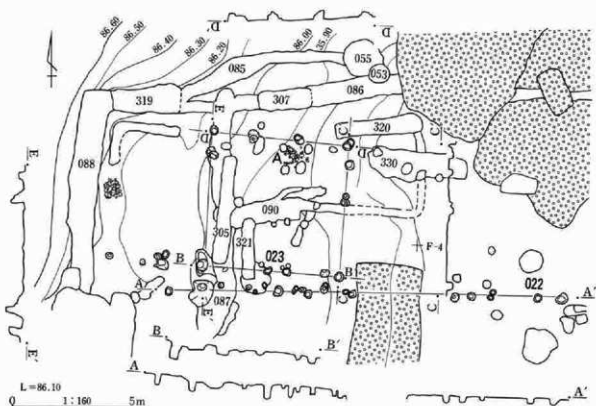
### 掘立建物①

南西側の溝081号の東に並んで019-021両号の掘立建物が確認された。共に南北走向の建物で、019号は南北3間6.4m東西2間2.6mであり、021号は南北2間8.3m、東西1間4.3mを測る。両者は溝と平行のほぼ同一の走向だが、距離は1m程しかないため、同時には存在していなかっただろう。

柱間距離は、019号に比べ021号ははるかに長いが、各柱穴には柱止め礎が入っていた。

短冊形土坑の多くと重複するが、関係不明。また019号は礎石建物020号と重なる。





### 掘立建物②

北西隅近くで検出された022・023号遺構である。

023号は、東西2間もしくは3間で5.6m、南北は1間もしくは2間で5.8mの正方形に近い建物として、とりあえず想定した。しかし西方向にまだ柱穴は存在しているので、西に延びる可能性も残るが、そうなると礎石建物020号の北側と完全に一致してしまう。

022号は、やや走向を異にしながら023号の南を東西に16.4mほど延びた柱穴列である。この部分は建物の南側にあたると思われるが、他辺の柱穴は確定できなかった。

023号の北辺の3間分を除いて、両者の柱穴間隔は不ぞろいである。また023号北辺内側に、径1mの中に礎石跡に似た跡群Aがあるが、関係は不明。

以上のようにかなり不十分な検出状況ではあるが、北側溝086号や井戸053～055号に接する東西走向を思わせる建物群の可能性は高い。



## 井戸・周辺土坑①

北側溝085・086号に重複して3基の井戸053・054・055各号が発見された。

3基は、僅か3.3mの距離の中に北西南東方向に並んで掘られていた。

確認面からの深さは、054号が4.0m他の2基は3.7mで共

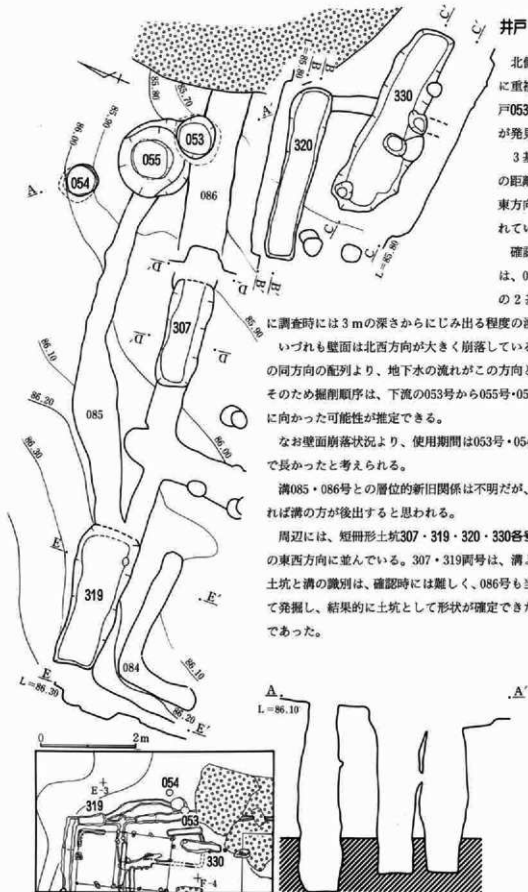
に調査時には3mの深さからにじみ出る程度の湧水があった。

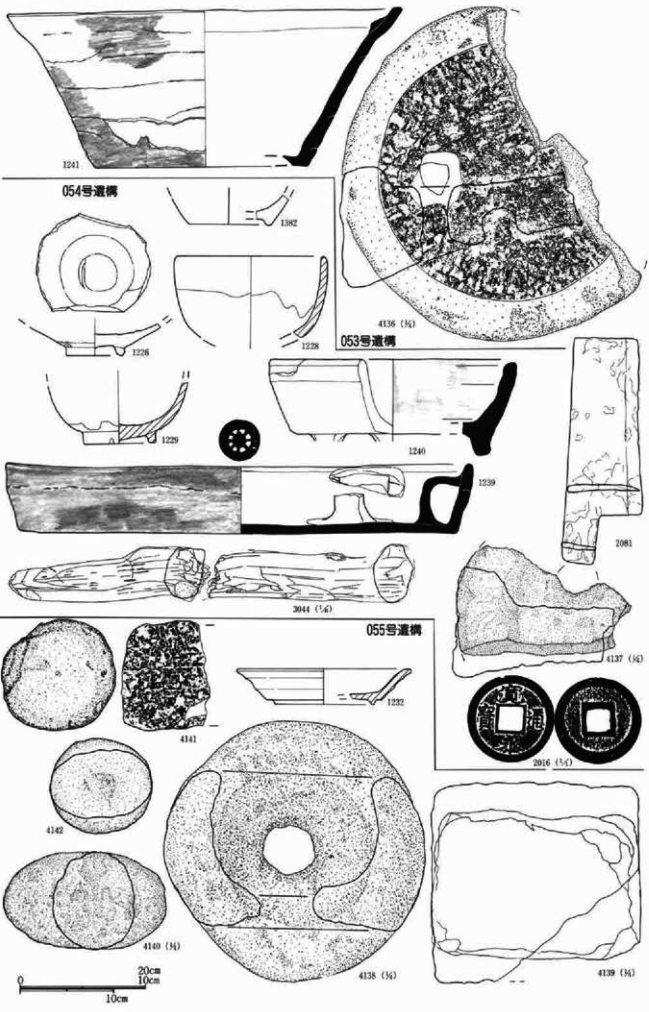
いづれも壁面は北西方向が大きく崩落していることと一直線の同方向の配列より、地下水の流れがこの方向と考えられる。そのため掘削順序は、下流の053号から055号・054号の順で上流に向かった可能性が推定できる。

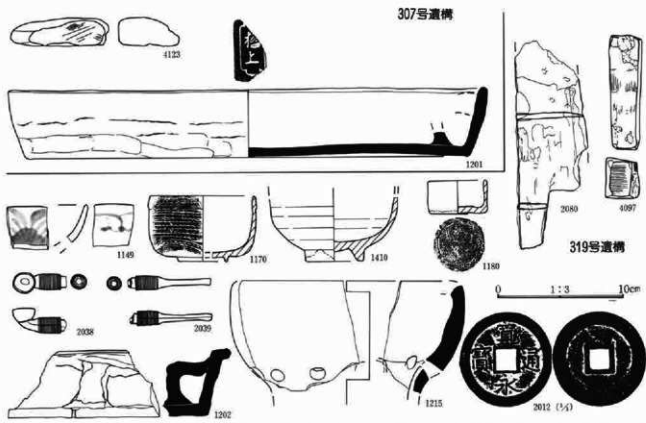
なお壁面崩落状況より、使用期間は053号・054号・055号の順で長かったと考えられる。

溝085・086号との層位的新旧関係は不明だが、位置的に考えれば溝の方が後出すると思われる。

周辺には、短冊形土坑307・319・320・330各号が、溝と平行の東西方向に並んでいる。307・319両号は、溝よりも新しい。土坑と溝の識別は、確認時には難しく、086号も当初は土坑として発掘し、結果的に土坑として形状が確定できたのはこの両号であった。







330号遺構



## 井戸・土坑出土遺物①

053号からは、瓦質土器鉢形碗(1241)と粗粒安山岩石白玉(4136)が出土。

054号からは、埋土中層から新寛永通宝(2016)が出土し、下層からは肥前青磁皿

(1226)・同白磁瓶(1382)・瀬戸美濃掛け分け尾呂茶碗(1228, 29)、瓦質土器脚付火鉢(1240)・同焙烙(1239)そして鉈(2081)・石白上玉片(4137)・ネムノキ杭(3044)が見られた。全体にやや時間差がある感じである。

055号からは、瀬戸美濃灰軸皿(1232)が粗粒安山岩製の不明石製品(4138, 40~42)そして標名ニツ岳経石の五輪塔地輪(4139)があった。

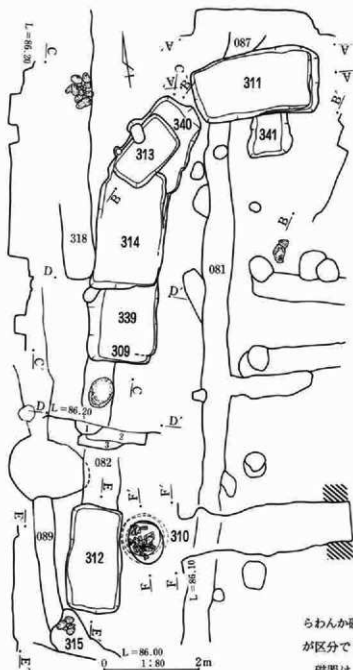
小片は、054号のみに磁器片2片見られ、土器片は053号14片、054号38片であり、木器片は055号が18片、054号が8片である。(以上陶磁器は原色40)

土坑307号からは、瓦質土器「極上」刻印焙烙(1201)と砥石(4123)が出土。319号からはやや多く、肥前染付皿(1149)・瀬戸美濃掛け分け鉈茶碗(1170)・同鉈尾呂茶碗(1410)・同灰釉鳥餌入れ(1180)が陶磁器であり、他に瓦質土器焙烙(1202)・同焜炉(1215)・「文」字新寛永通宝(2012)、キセル(2038, 39)、鉈(2080)、櫛歯タガネ痕砥石(4097)と多種出土した。(陶磁器は原色48)

土坑330号からは、肥前青磁染付筒形碗(1119)、瀬戸美濃陶胎染付皿(1150)・同色絵碗(1431)が出土。(原色49)

小片は、307号では土器片33片、319号で同23片がやや目立つ。

## 井戸・周辺土坑②



南西側の溝081・082両号の間で、井戸310号遺構が検出された。

確認面から3.6mの深さで、調査時には3.3mよりにじみ出る程度の湧水があった。使用停止後、2回に分けて人為的な埋め戻しがなされている。深さ2mまでの上層では安山岩、その下の層では河原石の礫が大量に投入されていた。

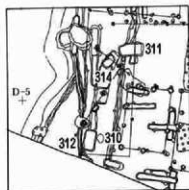
井戸の西隣には、082号の溝に切られる状態で箱形土坑309・311～314・339・340各号が右へ湾曲する列状に並んで見られた。また不定形の土坑315・341号も近接する。以上は、溝081号よりは新しく、礎石建物018・020号より古い。

311号からは肥前染付盃(1375)同仏飯器(1438)・同油壺(1440)と瀬戸美濃青絵盃(1374)・備前錆軸箱徳利(1192)が出土。313・314号からは、肥前染付鉢(1167 溝081・091号出土片と接合)、瀬戸美濃銅版転写壺(1114)とキセル(2040, 41)が出土。(原色47)

井戸310号からは大量の一括遺物があった。厳密には2時期の埋め戻しに分かれるが、記録上上層からの出土は、肥前くらわんか碗(1133, 1222)と同火入れ(1165, 溝081と接合)が区分できただけである。

磁器は、肥前産のみで、くらわんか碗の他に吹墨皿・筒形碗・火入れ・双耳瓶・壺・油壺・猪口がある。また同陶胎染付碗も含まれている。その中で火入れ大(1165)は溝081号、同小(1389)は溝079号・建物018号出土片と接合。陶器は、瀬戸美濃産灯明皿・摺鉢・菊皿・堺産摺鉢、産地不明乗燗がある。摺鉢(1188)と乗燗(1236)は20m北の土坑319号と、摺鉢(1187)は12m北西の土坑301号出土片と接合。土器は、焙烙・焜炉・火鉢・甕がある。(原色4・41・42)

他にスギ・アカマツなどの木製品・砥石・石臼が出土したが、軒瓦(4057)は特異な唐草文である。

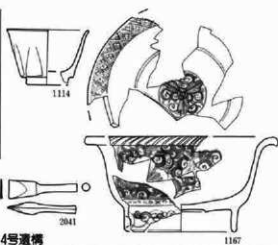


- 1 におい黄褐色土  
ローム塊 炭化  
粒多く含む 下  
面にワラ
- 2 におい黄褐色土  
下面にローム殻  
含む
- 3 におい黄褐色土  
含有物なし





311号遺構

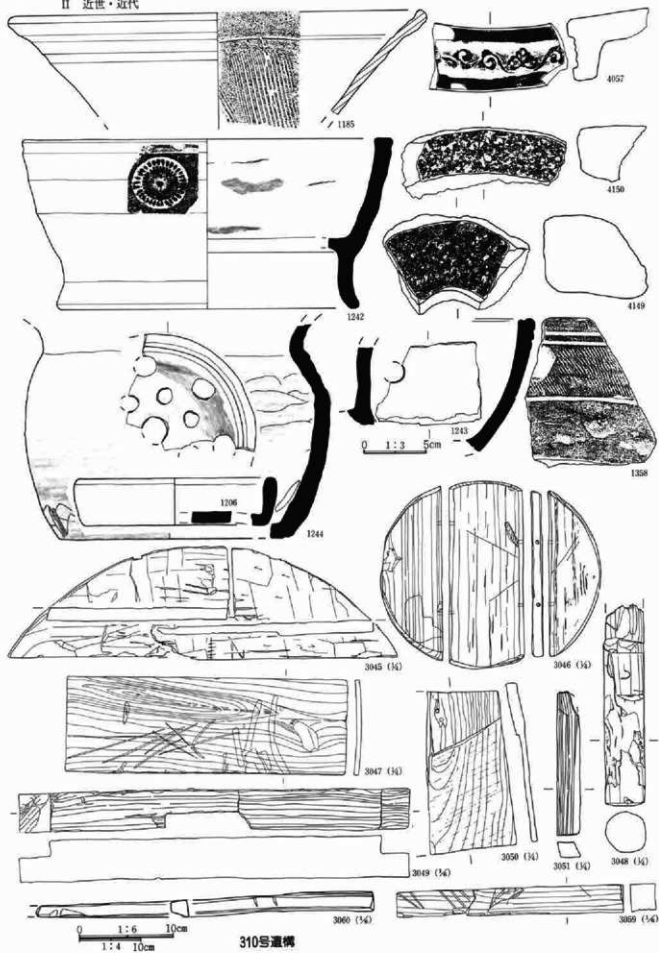


310号遺構

313・314号遺構



II 近世・近代



## 埋壊・桶埋設土坑①

北東側の礎石建物024号の東側で、埋壊043~046号が検出された。045号は046号と隣接し、土坑342号を壊している。

壺本体はいずれも粗製の瓦質土器で、最大径0.6~8m、045・046

号のみ水平に張り出した口縁部残る。(非実測・写真参照)

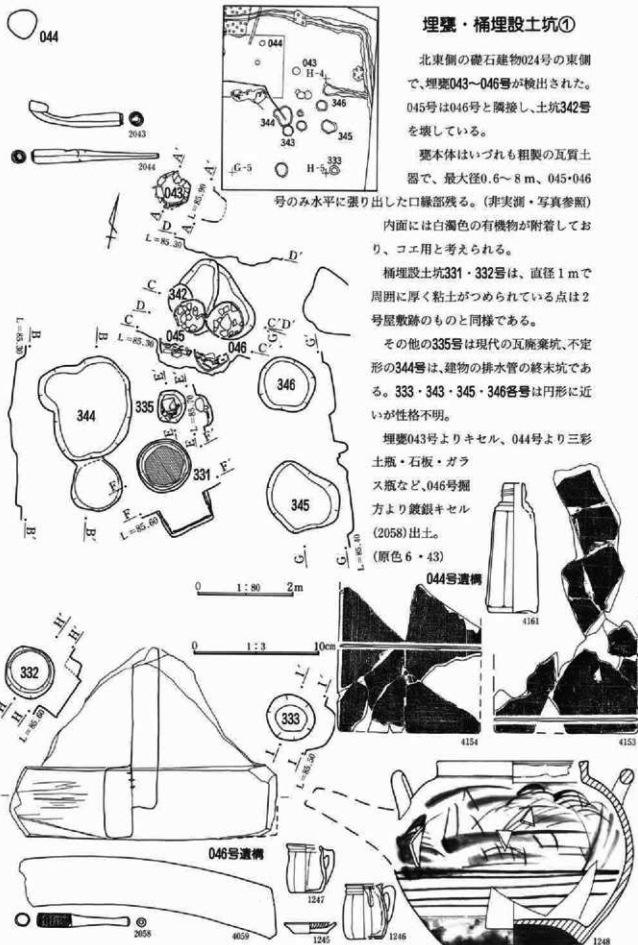
内面には白濁色の有機物が附着しており、コエ用と考えられる。

桶埋設土坑331・332号は、直径1mで周囲に厚く粘土がつめられている点は2号屋敷跡のものと同様である。

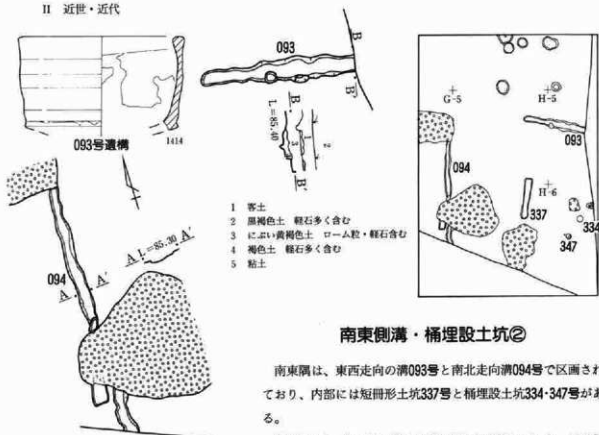
その他の335号は現代の瓦座棄坑、不定形の344号は、建物の排水管の終末坑である。333・343・345・346各号は円形に近いが性格不明。

埋壊043号よりキセル、044号より三彩土瓶・石板・ガラス瓶など、046号掘方より鍍銀キセル(2058)出土。

(原色6・43)



II 近世・近代



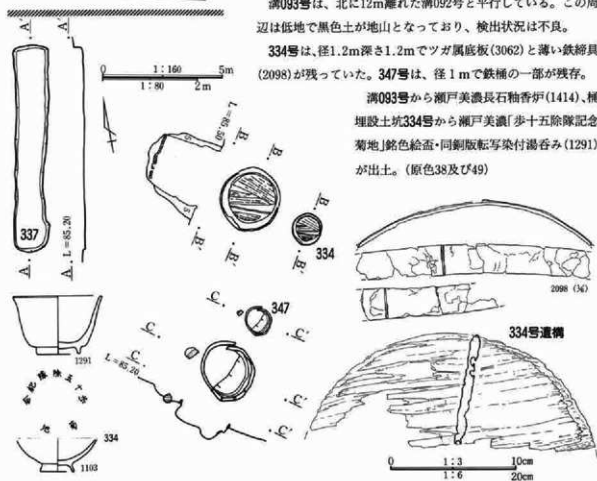
南東側溝・桶埋設土坑②

南東隅は、東西走向の溝093号と南北走向溝094号で区画されており、内部には短冊形土坑337号と桶埋設土坑334・347号がある。

溝093号は、北に12m離れた溝092号と平行している。この周辺は低地で黒色土が地山となっており、検出状況は不良。

334号は、径1.2m深さ1.2mでツガ属底板(3062)と薄い鉄網具(2098)が残っていた。347号は、径1mで鉄桶の一部が残存。

溝093号から瀬戸美濃長石釉香炉(1414)、桶埋設土坑334号から瀬戸美濃「歩十五除隊記念菊地」銚色絵盃・同銅版転写染付湯呑み(1291)が出土。(原色38及び49)



## 西側土坑群①

西側溝088・089号の接点に、不定形土坑300・301間号と短冊形土坑302・303・318各号が、やや北東に離れて同306・321号がある。

各溝より短冊形土坑が新しく、それを300・301号の順で壊している。

また302号は、礎石建物018号より古い。

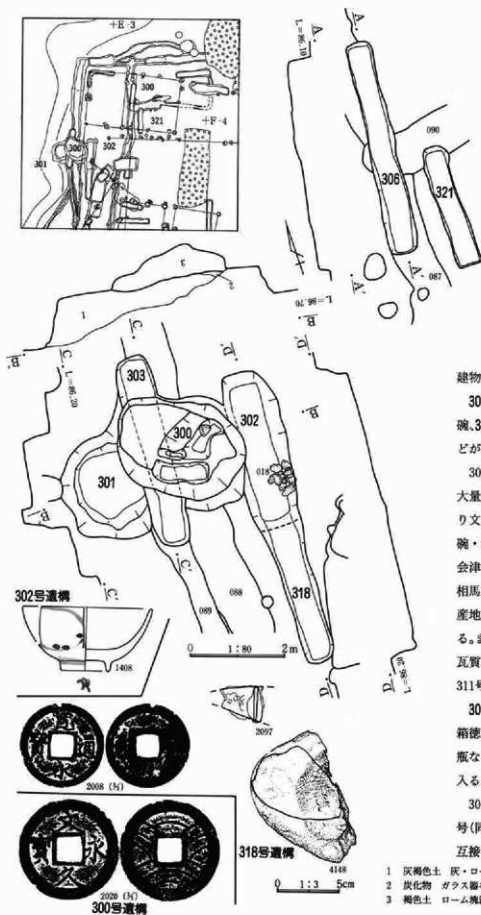
302号より肥前くらわんか碗、318号より新寛永通宝などが出土。(原色47)

300・301号は廃棄物坑で大量の遺物が出土。300号より文久永宝、磁器では肥前碗・瀬戸美濃碗類と洋皿・会津系碗と急須、陶器では相馬大堀灯明皿、万古急須、産地不明行平場・徳利がある。またキセルなどがあり、瓦質土器角鉢(1214)は土坑311号片と接合。

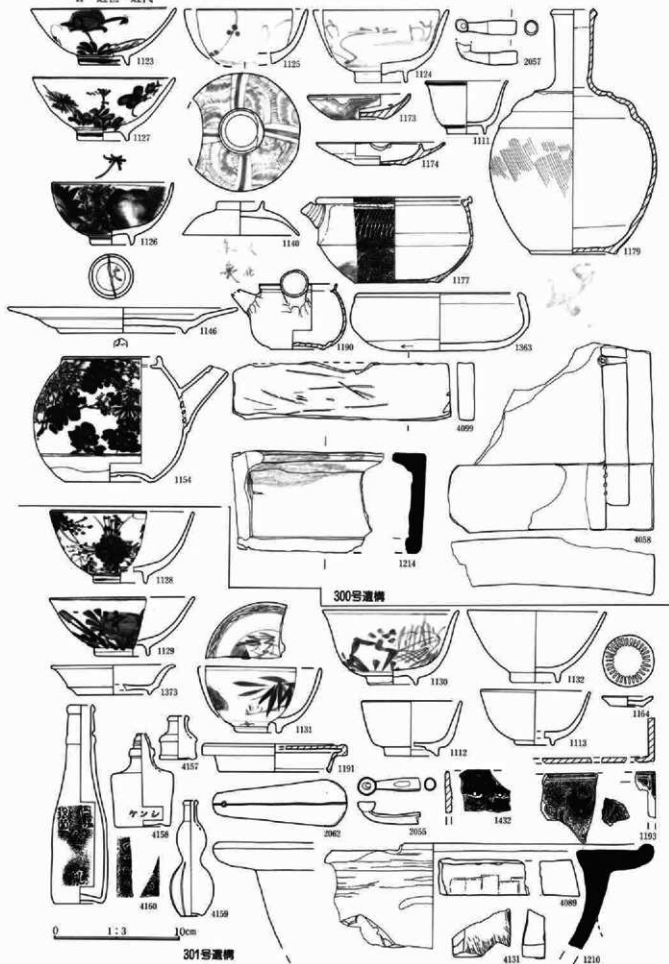
301号も同様だが備前の箱徳利が加わり、また牛乳瓶などのガラス瓶類が相当入る。

300号(原色44・45)と301号(同46・51)の陶磁器は相互接合するものもある。

- 1 灰褐色土 灰・ローム陶器在 しまりなし
- 2 炭化物 ガラス器など遺物多く含む
- 3 褐色土 ローム陶器在し軟かい

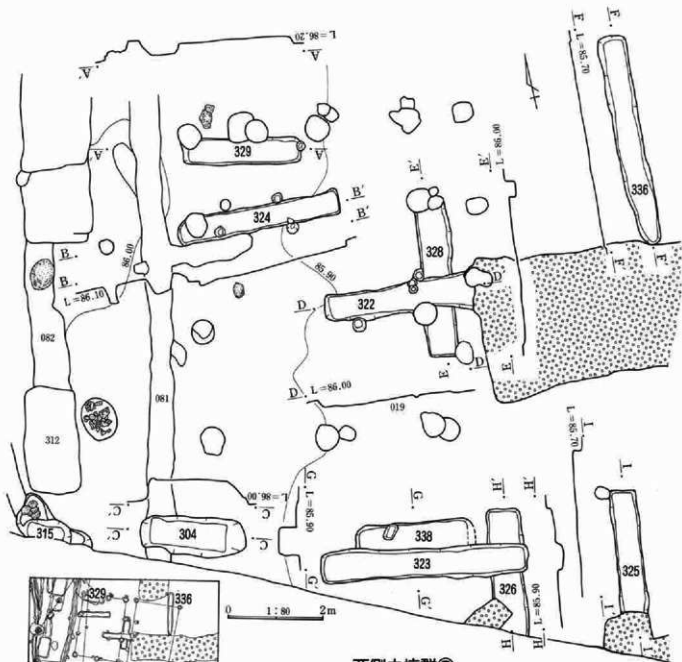


II 近世・近代



300号遺構

301号遺構



## 西側土坑群②

掘立建物019・021号周辺では、短冊形土坑304・322～326・328・329・336・338各号が見られた。

これらは、掘立建物及び溝081号より新しいが、南北・東西各群のどちらが古いかは不明である。

また304坑の西に020号の礎石建物より古い形状不明の土坑315号がある。

304号からは、キセル吸口(2051)が、315号からは肥前染付皿(1148)が出土。小片は、323・326より瓦片などが少量見られた。(原色47)

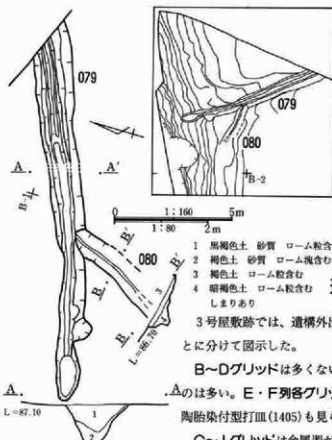
304号遺構



315号遺構



0 1:3 10cm



## 西端溝

最西端の台地際に、2本の溝079・080両号が確認された。

079号は、断面U字形に近く確認面からの深さも1m以上あるしっかりした溝で、西側の低地へ向かう。旧地割線と一致している。

これにT字形に交差する080号は、やや浅い。低地側の延長方向が風倒木により攪乱されている。

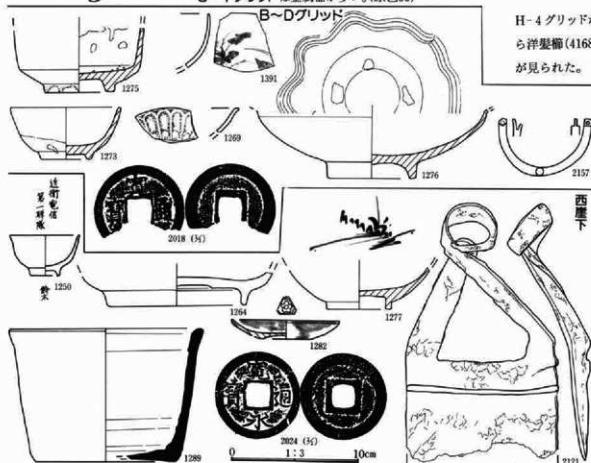
## 遺構外出土遺物

3号屋敷跡では、遺構外出土の遺物がかなり多い。下図以降、出土位置ごとに分けて図示した。

B~Dグリッドは多くないが(原色35)、最西端の低地に投棄されていたものが多い。E・F列各グリッドからは、かなりの量が出ている。ヨーロッパ陶胎染付型打皿(1405)も見られた。(以上原色34)

G~Iグリッドは金属器が多い。(原色35)

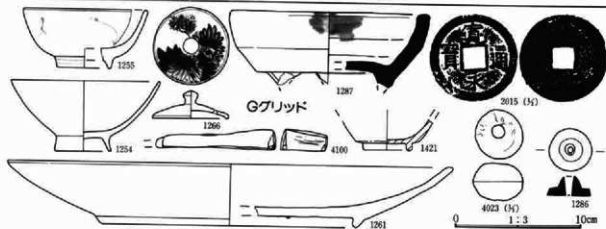
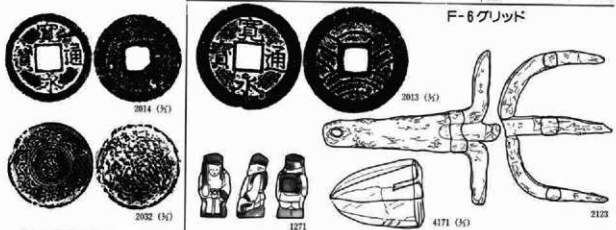
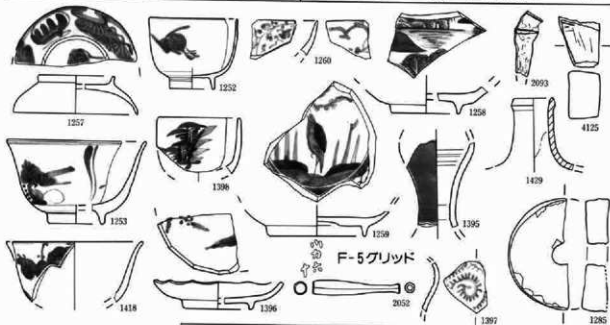
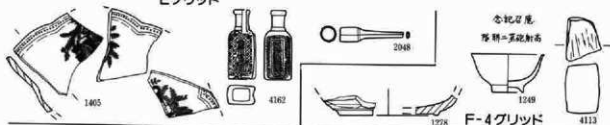
H-4グリッドから洋髪櫛(4168)が見られた。

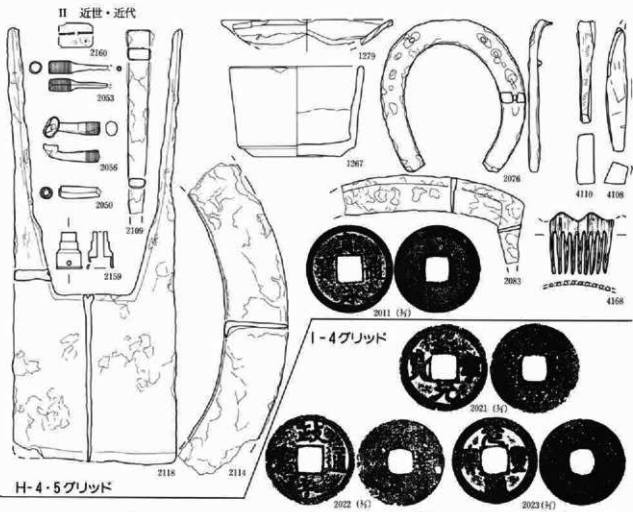


遺構外出土遺物



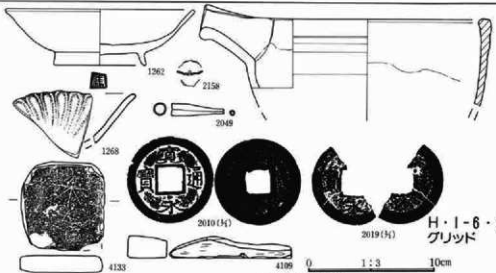
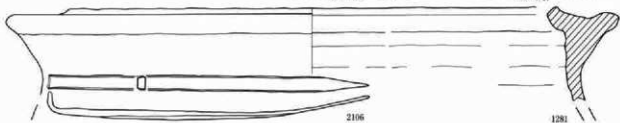
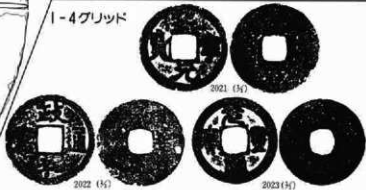
## Eグリッド





H-4・5グリッド

I-4グリッド



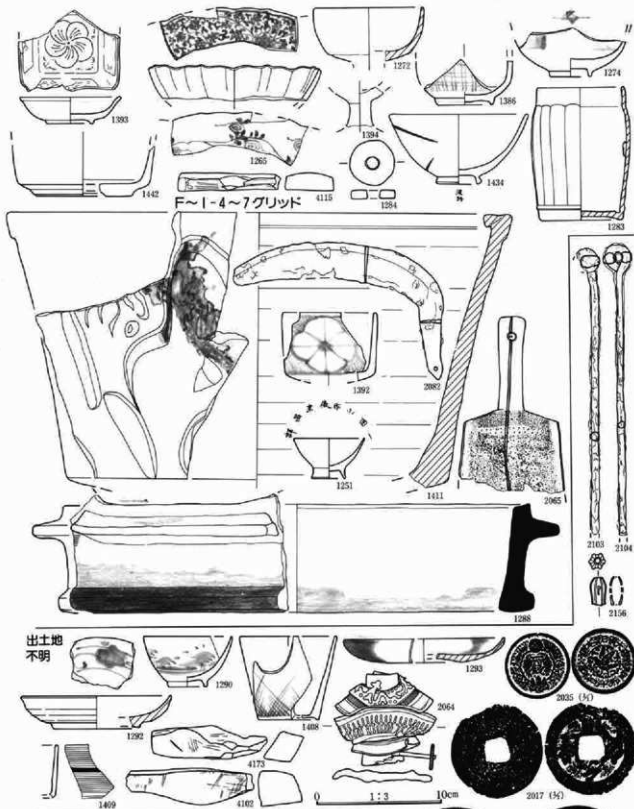
H・I-6・7  
グリッド

上段はH-4, 5  
グリッドで金属器  
が多い。洋型櫛  
(4168)はセルロイ  
ド製。

中段はI-4グ  
リッドで、宋銭3  
枚は一括出土。

下段は旧地権者  
の異なる区画。瓦  
転用磁石(4133)に  
は線刻がある。

遺構外出土遺物



出土地  
不明

上段は、F~I-4~7グリッドの低地の試掘坑より出土した。下段は、出土位置が全く不明のもので、1・2号屋敷跡出土の可能性もあるものである。



遺構外出土遺物

## 5 近世・近代まとめ

## (1) 遺構と遺物

## A 屋敷地の認定

調査範囲内の旧地権者名(敬称略)は右頁図のようであり、屋敷跡とは次の関係になる。

- 1号屋敷跡(1-1・1-2) 田部井基充・菊池宗雄・神沢一夫  
 2号屋敷跡(2-1・2-2) 神沢敬一・菊池 範  
 3号屋敷跡(3) 菊池治雄・中沢哲郎

このうち、菊池宗雄宅地及び中沢哲郎宅地は、遺構・遺物共に少なかったため、検討より除外する。そうすると全体は、東西方向に走る道路(060～062号遺構)の北側に5区画の方形屋敷地が横に並んだものとして理解できる。これらは、道路や溝を境としているが、幅40mほどのものが1-2・2-2・3の3か所、そして1-1は15m、2-1は25m弱と狭い。

地番境と最終建物の位置関係は、次の通りである。(調査範囲内○ 範囲外△)

最終屋敷地	1-1	1-2	2-1	2-2	3
①恒久建物(地番境を越えない)	△	○	○	—	○
②簡易建物(同上)	○	△	○	○	○
③恒久建物(地番境を越える)	—	—	△	○	—
④簡易建物(同上)	—	—	○	○	—

以上の状態を見ると、地番設定がされた明治初年より最も建物の改変が激しかったのが2-2続いて2-1で、反対に変化の少なかったのが1-1・1-2そして3である。ところが1-2と3は地番の分地が激しい。2-1は、本来異った地番のものが合併された状態である。

なお、調査で確認された礎石建物348・015・024・018各号遺構は、それぞれ図の建物の位置に近い。

まとめると最終屋敷地の歴史的变化には、次のようなことが注意される。

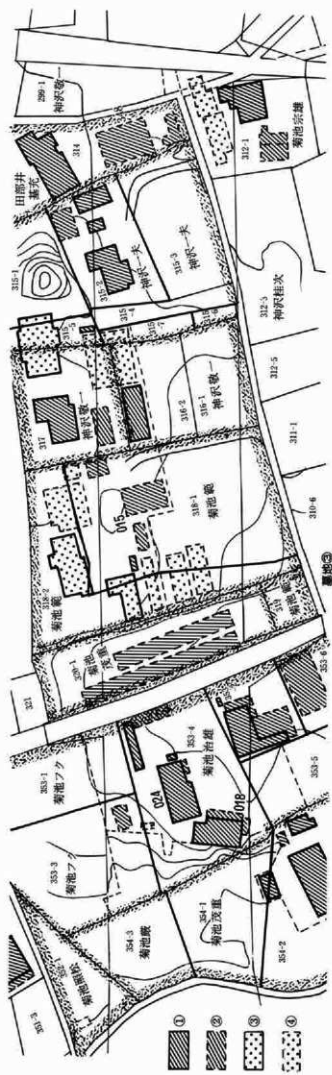
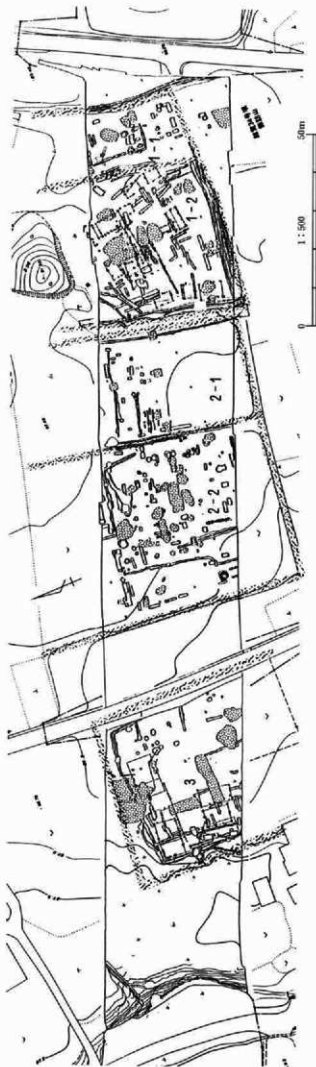
- 1-1 検出建物は新しい。区画溝がない。1-2から分かれた可能性あり。分地せず。  
 1-2 検出建物は古い。区画溝がある。本来1-1と2-1を併せた区画であった可能性。分地影響あり。  
 2-1 区画溝がある。1-2から分かれた可能性があるが、2-2類似走向地番界がある。分地影響なし。  
 2-2 検出建物は新しいものがある可能性がある。区画溝がある。分地影響なし。  
 3 検出建物には新しいものがある可能性がある。区画溝がある。分地影響あり。

## B 屋敷地別の出土遺物種類

今回報告した出土遺物の中で、用途・使用時期・出土位置がある程度想定できるものを次頁の表に示した。(使用時期は廃棄時期より想定したが、銭貨については、宋銭を16世紀、古寛永を17世紀、新寛永を18世紀、寛永鉄四文銭以降を幕末以後に区分した。各遺構ごとの時期区分は井戸を除いて多くは困難である。)

全体としては、16世紀8・17世紀23・18世紀165・19世紀前半122・幕末以後270各点となり、食器・調度具を中心に18世紀以降、遺物として残ったものが比率的に増加している。最終屋敷地ごとは次の通りである。

- 1-1 総量・品目が少ない。17世紀から出現し18世紀に集中している。  
 1-2 総量に比べ品目がやや多い。16世紀から始まり17世紀が比較的多い。幕末以後は少ない。  
 2-1 総量・品目が少ない。18世紀に集中している。  
 2-2 総量・品目が多い。瓦の大部分を含むなど幕末以後が最大だが、18世紀も東側の各屋敷地より多い。

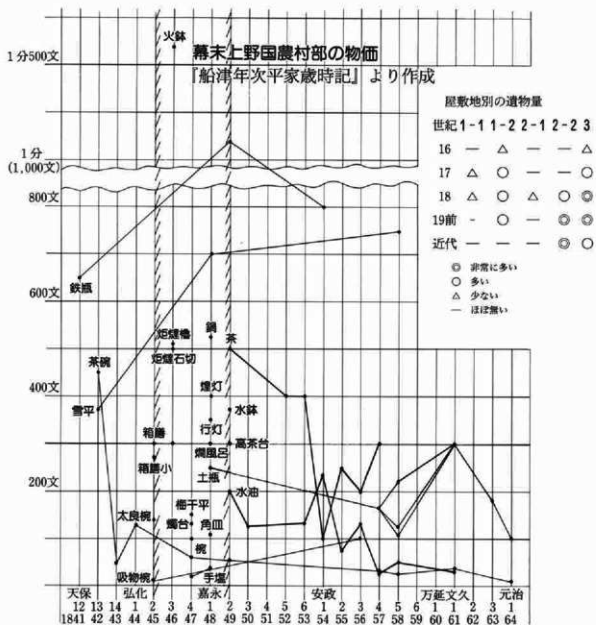


- ①
- ②
- ③
- ④

## II 近世・近代

近世・近代遺物用途別一覧

出土層数地	1 - 1				1 - 2				2 - 1				2 - 2				3				計	
	16 C	17 C	18 C	19 C前	近 代	16 C	17 C	18 C	19 C前	近 代	16 C	17 C	18 C	19 C前	近 代	16 C	17 C	18 C	19 C前	近 代		
<b>食 器</b>																						
飯碗 (磁器)			1							1								3	8	15		
同上 (陶器)		1	2				1	2										2			1	10
番付小碗 (磁器)												2						2	8		1	3
同上 (陶器)								1													1	4
皿 (磁器)									1	1								1	5	4	1	5
同上 (陶器)		1				2	4	1	2			1						1	1	4	2	2
鉢 (磁器・陶器)																		1	4	2	1	2
青灰漬口 (磁器)																		2				1
蓋物 / 段重 (磁器)													1					3	3			1
徳利 (磁器)																				3		3
同上 (陶器)																				3		4
盥 / 盥洗 (磁器)																		2	16			2
盥 (陶器)																				2		2
急須類 (磁器)									1													2
同上 (陶器)																				4		5
瓶 (磁器)																		1	1		1	1
ちり蓮華 (磁器)																				1		1
<b>調理器</b>																						
片口 (陶器)			1																		1	2
行平鍋 (陶器)																				2		1
摺鉢類 (陶器)						1	1		1	1			1					1	1		2	2
鉢 (土器)																				2		1
壺 (陶器・土器)																		1	1		3	1
埴輪 (土器)																					1	1
焙烙 (土器)									2											4		5
銀印 / 茶輪 (土器)																				6		4
包丁																				1		1
石臼																					1	3
<b>調度具 (各種)</b>																						
仏具 / 香炉類																		3	3		1	7
キセル / 火打金									2										3		3	14
油壺 / 紅皿 / 櫛																		1	6		2	2
灯篭類			1					1										1	1	4	4	1
火鉢 / 火箸類												1								5		5
植木鉢 / 花器類										1										6		2
薬壺 / 薬瓶類								1														5
鳥籠入																				2		1
硯 / 石板類																				2		1
人形 / 玩具類																					4	1
水汲桶								1												1		6
<b>建 具</b>																						
戸車								1														2
瓦									3													1
構築部材																				2	3	2
<b>農 具</b>																						
鎌 / 鉋								1							1					9		1
鍬 / 鋤																				3		1
砥石			2			2	2	4										7	3	11		2
<b>その他</b>																						
銭貨		1					4		1				1							6	4	2
小刀 / 鋤金具																				3		9
銃弾 (時期不明)																			(1)			3
合 計	0	3	9	1	2	3	8	16	15	4	0	0	8	2	1	0	1	25	41	194	5	11
品 目 数	0	3	6	1	2	2	4	11	7	4	0	0	5	2	1	0	1	12	16	33	2	10



### 3 総量・品目が多い。16世紀としたものは宋銭が中心。18世紀に頂点がある。19世紀以後やや減る。

まとめると上表のように5区画の屋敷地が併存していたのは18世紀だけとなる。また16世紀からの連続存在は3のみとなる。調査範囲の条件も考慮を要するが、前項を重ねれば1-1の17・18世紀の遺物は1-2からのものと思われる。後述の幕末の絵図の4戸は2-2・3は確実で、残りは1-2・2-1と推定できる。

幕末期の上野農村の物価と購入品の例は、上グラフの資料がある。(高橋 敏「民家の生活文化史」により作成。価格変化の分かるもののみ全体に入れ、弘化2～嘉永2年の間のみ全額を入れた。)変化はあまり適格には知りえにくい。茶碗や土瓶に比べ、茶碗価は天保13年を除いて安く安定している。「雪平」は、鉄瓶・鍋・火鉢などの耐用年数が長いものと同じ程度に高い。

直接の比較は難しいが、行平鍋(「雪平」)と陶器の急須類(「土瓶」を含む)は2-2と3で見られる。この時期の火鉢も前者のみにある。遺物として検出できなかったもの考えると、隣郡勢多郡原之郷村の下下クラスの生活は、3と同程度で、2-2よりは下である。

なお幕末期以降、会津本郷系磁器と相馬大堀系陶器を中心とする南東北産の陶磁器が一定程度見られる。

(文献上の検討は、山形万里子「奥州相馬藩における陶業生産の展開」『日本歴史』468、1987参照)

### C 遺構の性格

**1 建物** 掘立柱建物と礎石建物の2種が見られた。前者は柱止め礎を柱穴内に伴う例が多く、1号屋敷跡主屋013号からは新寛永通宝が埋土中より出土したため、18世紀代には確実に存在していた。後者は、明確な状態では近世段階のものを確認していない。ただ2-2にはかなり大きな瓦葺建物が建っていた。

**2 溝** 屋敷構えを区画するもの、道路の側溝そして生垣と推定できるものがある。前二者は時に同一になることもあり、一般に廃棄物処理の場所にもなっている。1号屋敷跡の057号が17世紀に掘られた可能性がある区画溝の最古の例だが、中世の堀の延長とは考えにくい。

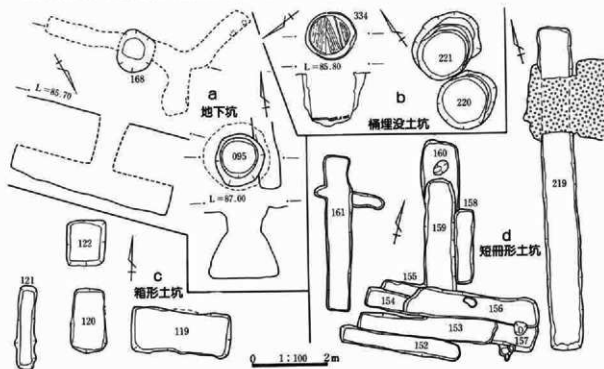
**3 土坑** 瓦1枚を埋めたものも含めて大量の土坑が検出されたが、規格的に掘られたものは、次の4種類がある。

**a 地下坑** 下図2例だけで、168号は旧地権者が掘ったイモ貯蔵穴。095号も重複土坑より新しい。

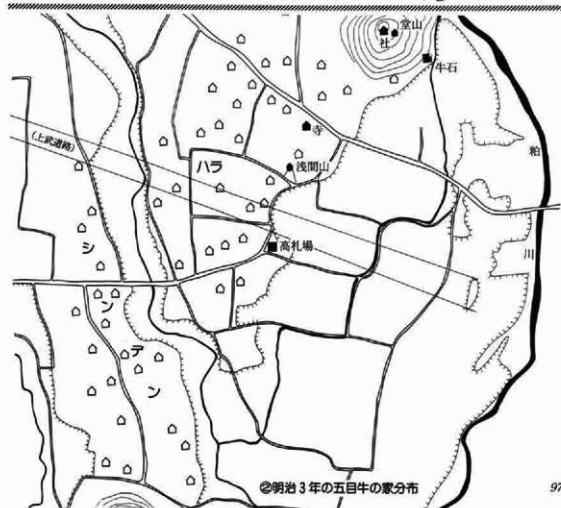
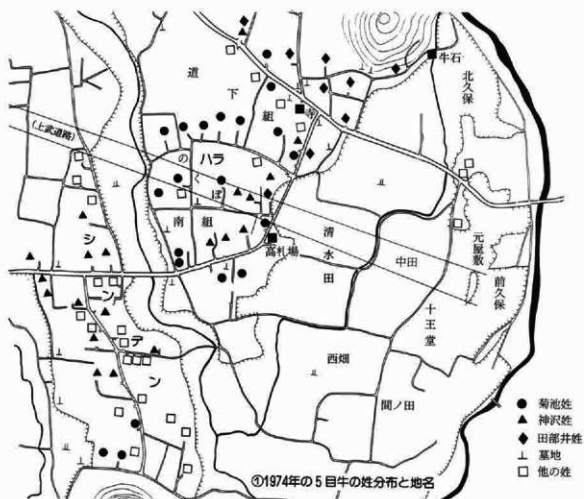
**b 桶埋設土坑** 2号屋敷跡で7基、3号屋敷跡で4基検出。334号に見られるように直径1m高さ1m以上のスギなどの桶を埋め、周囲に厚く粘土がつめられる。2基並ぶ例が多く、他の遺構との明確な重複はない。3号屋敷跡では近接してコエ壘と思われる埋壘があるため、同様の性格と考えられる。2次的な機能として廃棄物処理用に使われている。上限は不明だが、近代のものも多く、昭和初年頃まで使われたと考えられる。

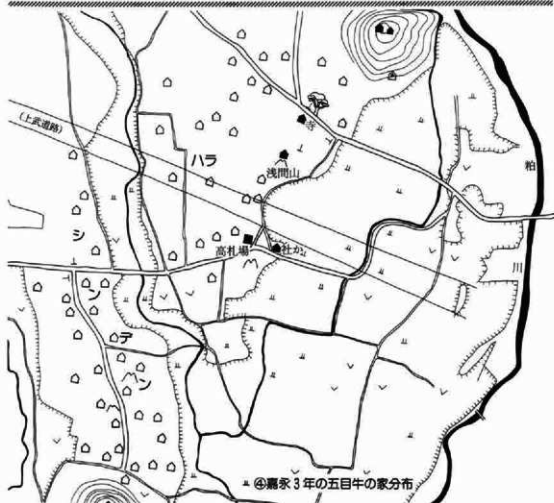
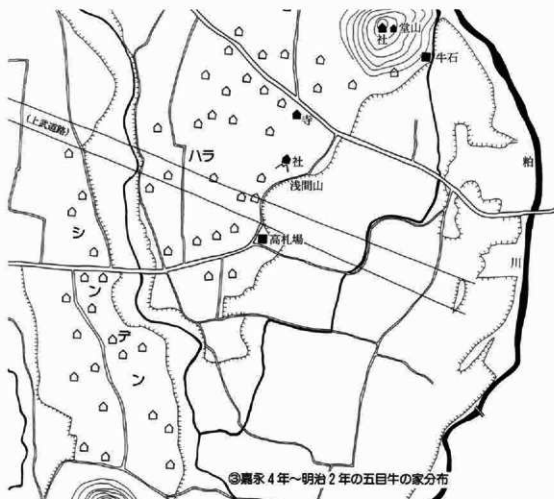
**c 箱形土坑** 直方体形状で、縦横比が1:3程度以下のもの。かなり意識した配列で群集して掘られている。1-1と2-1区画でまとまっている。下図の120・122号では埋土中に白色モミガラが見られ、近くの112号では炭化米を検出した。短時間の埋没であり、区画溝と重複もする。殺物を何らかの事情で入れたものだが、時間的には19世紀代から昭和初年までの幅がある。(121号は短冊形土坑)

**d 短冊形土坑** Cに似るが、縦横比が1:3以上のもの。はなはだしく群集し、規格性はCより乏しく、同じ場所に何回もくり返して掘られる。区画溝より新しい。また礎石建物より古く、掘立柱建物より新しいが、屋敷内の中心的な建物とは重複が少ない。Cと似た性格、時期が考えられるが、遺物はより少ない。











## (2) 村・家・人物

### A 村絵図より

五日牛地区の近世村絵図は4枚が残されている。(高橋 敏氏による) 97頁①は1974年の姓別の家の配置である。②～④はそれぞれ、明治3(1870)年、嘉永4(1851)～明治2(1869)年、嘉永3(1850)年、宝暦9(1759)年の図の家などを、同じ地図に入れこんだものである。

五日牛の主な3姓は、興味深い分布がある。菊池姓はハラ地区の道下組以南にまとまり、僅かにシンダン地区南端に飛んである。神沢姓は、シンダン地区が中心で、ハラ地区は南組にまとまる。田部井姓はハラ地区のみで、それも堂山に近い位置に集中している。

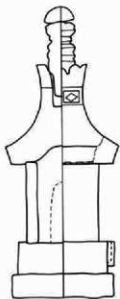
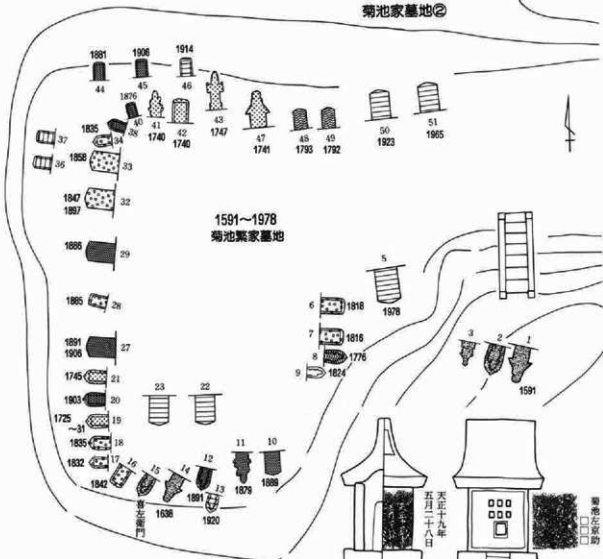
図示した範囲内での戸数の変化は、ハラ地区が30→26→30→30→40で、シンダン地区は27→29→20→20→33である。ハラ地区は、嘉永3年の時点で減っているが、すぐに戻っている。(道下組部分が少ない) シンダン地区は宝暦9年にはすでにハラに近い戸数があるが、幕末・明治初年に大きく減っている。

今回の調査地は、宝暦9年には存在していた高礼場のすぐ北になり、社が上へのった浅間山(古墳)の南になる。ノクボの南北の道は宝暦9年から見られるが、東西方向に走る道は、絵図上では明治3年のものしか記されていない。

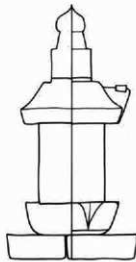
絵図の家と今回の調査地の厳密な対照は難しいが、明治3年のものでは「兼次郎・佐之吉・幸太郎・弥太郎」と西から東へ並んでいるものは間違いなく該当している。(原色3) 宝暦9年の場合も4軒の該当が考えられるが、西から二つ目の家の表現は他よりも簡略して描かれている。



菊池家墓地②



No.14



No.47





## B 墓碑銘より

旧地権者1-2屋敷地の神沢一家と3屋敷地の菊池治雄家は、それぞれの姓の大本家と言われている。各家の墓地の一部を調査した成果は、これまで図示したとおりである。

### 菊池家墓地①

3区画の南約100mにあり、分家の「衣裳屋」家が管理している。各分家ごとのa~iの9部分に分かれる。bが最古の明暦1(1655)年から18世紀代のものが集まっている。cはその延長であり、18世紀後半から19世紀前半のものが多い。dも同じ頃のものを中心で、このb・c・dが一つのまとまりであった感じがある。一方安永8(1779)年に始まるaは、早い時期の分家のものだろう。

明治3年の村絵図に見られる兼次郎の名は、hの中に見られる。全178基(内判読可能123基)で、17世紀3基・18世紀32基・19世紀66基・20世紀22基である。

### 菊池家墓地②

治雄基地の130m南東に、もう一軒の菊池姓大本家と言われる繁家の屋敷内墓地がある。ここには①で3基しか見られなかった17世紀以前の石塔が5基存在している。全51基(判読可能45基)。

最古のものは「菊池左京助」銘の天正19(1591)年の石宮(№1)で、土塁状の高まりの上にある。また宝篋印塔形の屋根をした石宮(№14)には、寛永15(1638)年銘がある。さらに五輪塔形と唐風を併せたような屋根の石宮(№47)には、寛保1(1741)年銘と戒名が見られた。

①と②を同一血縁のものとするなら、17世紀中葉に②から①が分かれ、その後①は大きく発展したように考えられる。16世紀2基・17世紀3基・18世紀10基・19世紀19基・20世紀11基の構成である。

### 菊池家墓地③

範家宅地の南西に接した墓地(93頁図記載)で、13基の石塔で構成される。寛文9(1669)年銘宝塔を最古のものとして17世紀後半が3基、寛政11(1799)年の三面加工標塔が最も新しい。18世紀は計4基。

この墓地は、範家が「預かる」状態で管理しているが、同家の直接の血縁者の墓はない。

### 菊池家墓地④

シンデン地区の南端の地藏山麓で、25基の石塔よりなる。元禄11(1698)年の片面加工標塔を最古のものとし、18世紀代8基・19世紀代6基・20世紀代3基の記年が判読できた。

シンデン菊池家の墓地であり、18世紀中葉には多数の家が存在していたシンデン地区へ菊池家が入った時期を示しているのだろう。

### 菊池家墓地⑤

2-2屋敷地の北300mの位置にある。19世紀代以降のものが中心(60基以上)で、弘化3(1846)年に死亡した菊池千代松の全面加工標塔を含め、同妻とく墓を含め範家の直接の先祖の墓が並ぶ。

### 神沢家墓地⑥(一部は町教委が平成1年度に発掘調査「赤畑町文化財調査報告32」)

1-2屋敷地の北東200mの旧寺跡に面する。計120基以上の墓石が、大きくA(94基)B(18基)C(8基)に分かれるが、ちょうど改葬途中でほとんどが原位置から動いており、分家関係等も把握しにくい。

最大のA部分には、「外来」とされる配列の異なるものも含む。判読可能は62基で、元禄12(1699)年銘自然石宝塔を最古とし、17世紀10基・18世紀47基・19世紀4基が並ぶ。「田部井」姓のものも含んでいる。Bは、享保17(1732)年の丸彫地藏像を含め18世紀5基・19世紀7基が判読可能。Cは明和年間(1764~72)の三面加工標塔と、19世紀6基が読めた。(それ以外にも20世紀代のものがあつたが未調査)

一夫家と敬一家の先祖のものがどれかは判然としないが、全体に17・18世紀代のものが多い。

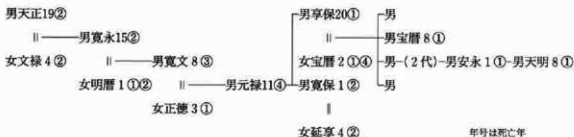
## II 近世・近代

以上の石塔の形態は、宝篋印塔・宝塔・五輪塔類が16・17世紀、丸彫もしくは片面加工像が17・18世紀そして三面加工の標塔が18・19世紀、全面加工標塔が19・20世紀のように大別できる。(写真p.56)

## C 文献より

旧地権者各家の先祖についてのまとまった資料は、次の通りである。

1 菊池治雄家 同家所蔵の家系図及び『赤堀村誌』(1978)によると、次の系譜が考えられる。



死亡年後の数字は、墓地の番号である。これによれば、2代目の妻から墓地①への埋葬が始まり、享保20年に死亡した5代目理右衛門より同墓地での当主の埋葬が始まっている。17世紀に居住が始まり、18世紀に頂点に達する3屋敷地の屋敷跡遺構群の状況は、この当主居住を示しているのだろう。

2 菊池 範家 高橋 敏氏の研究「忠治外伝 菊池登久子とその甥」『国定忠治の時代』(1991 平凡社)によると先祖のとく(原色2)の活動は、次のように略説できる。

文化13(1816)年、北群馬郡有馬村(現渋川市)の小農の娘として生まれた一倉とくは、天保8(1837)年に五目牛の菊池千代松の奉公人となる。そして天保11(1840)年に千代松の妻となるが、5年後に千代松は病死する。この天保11年から千代松の死の弘化3年までの間に、2-2屋敷地へ移り住んでおり、実家は弟に譲る。

千代松は、侠客長岡忠治郎(国定忠治)と懇意であり、その死後とくは忠治郎の「パトロン」として逃亡などの援助に努めて、忠治郎関係の文獻にしばしば登場している。嘉永3(1850)年の忠治郎の処刑に連座して押込刑となるが、その後生家の弟佐之吉を養子とすると共に、金融業を営んでいく。

幕末前後の絹業の大発展の中でとくの経営は成功し、明治3(1870)年には村平均の3倍の土地を所有する。その後も土地の集積は続き、とく死2年前の明治19(1886)年には周辺5か村を含めた12町割の土地を所有した村内第1位の地主となった。明治25(1892)年の第1回総選挙の選挙権を、佐之吉は有していた。

明治9(1876)年の選歴に際しては、書籍を読む読書人として描かれた寿像(原色2)を描かせている。

明治22(1889)年、とくは死亡。翌年とくの旧居は解体されて売られ、現在まで前橋市西大室町の観音寺の庫裡(原色1)として残されてきた。  
忠治基本資料「赤堀誌」記載「一日警婦人介右忠治を連れ来たり。世の室に養す。(中略)半身不遂……お婆の家に送る。」(原風文)

しかし既述の範家預墓地の存在などより、2-2屋敷地には17世紀末から18世紀までの居住のあった可能性は極めて高いと考えられる。ここで検出されたものは、その18世紀代とく時代以後の両者の重なりとして現われているが、全体としては幕末～明治に上野地方の激動の中で急成長したとくの生活を示すものが多いだろう。遺構としては土蔵跡(027号)に、遺物としては清青花鳥御入(1295, 96)にそれは象徴されている。

3 その他 神沢敬一家・神沢一夫家・田部井基充家については、明確な資料は未発見である。既述の明治3年及びその直前の村絵図中の「幸太郎・弥太郎」の名だけである。この2人の名が3家のいづれの家につながるかは、厳密には不明である。ただ屋敷地の構成と姓別分布より考えると、幸太郎が神沢敬一家に弥太郎が同一夫家につながる可能性が考えられる。16世紀後半から18世紀までの勢威状況は、不明である。



### (3) 特 論

#### A 近世村五目牛と四農家の素描

高 橋 敏

##### はじめに

群馬県埋蔵文化財調査事業団は1984年赤堀町五目牛南組遺跡の発掘調査を行った。これにより発掘されたのは近世の4戸の農家であった。従来の考古学の発掘の常識からいえば異例のことであり、近世村落を文献史料によって調査する近世史研究の立場からは興味をそそられるものがあつた。偶々、この発掘農家の中に菊池とく家(規範氏)が含まれていたことから、発掘後、筆者に協力の要請があり、多くの成果を得ることが出来た。この小稿は、近世史研究からの五目牛村と発掘された4戸の農家の素描である。考古学的所見については発掘に立ち会っておらず、すべて事業団の成果報告に依拠したものである。

未だ本格的文献史料調査を行っておらず、一部データによる考古学研究報告に対する補足と理解していただきたい。

##### 一 五目牛村の概況

近世村五目牛を知る文献史料は、旧村五目牛の公的文書として襲蔵されて来た五目牛区有文書である。これは現在赤堀町立歴史民俗資料館と区の公民館に保管されている。

区有文書中から五目牛村の概況を知ることが出来るものは、まずは村明細帳であろう。明和元年(1764)12月の「上野国佐位郡五目牛村明細帳」が存在する。概況を記載した箇所を摘出しておく。

一高式百四拾七石九斗三升六合

上野国佐位郡五目牛村

江戸御屋敷者下谷広徳寺前

平岡四郎兵衛様御知行所

一家数八拾四軒内五拾三軒本百姓

三拾老軒水呑百姓

内拾老軒八家なし

一人数三百三拾六人内男百七拾人

女百六拾六人

内拾貳人奉公人出ル

一馬数 九疋

(中略)

一石盛之義相知レ不申候

村高は247石9斗3升6合、支配は旗本平岡四郎兵衛の知行所、家数は84軒、人口は336人(男170、女166)であったことが判明する。一軒当たり2.95石 一軒当たり家族数4人の平均値が出される。家数84軒中53軒が本百姓、31軒(36%)が水呑百姓、その内11軒(全体の13%)が家なしである。馬に関しても9疋とは所持率が僅か11%ということになる。

村の生産力のあり様をもう少し詳しく知るために、村高の基礎になっている反別を年貢割付状から明らか

## II 近世・近代

にする。五目牛村は田方12町4反5畝20歩、畑方18町8反7畝9歩の課税耕地からなる。前掲の明細帳には、「石盛之義相知レ不申候」とあり、田畑に対しそれぞれのように米に換算されて村高が算出されたかは不明である。しかし、単純に反別総計31町3反2畝29歩で村高247石9斗3升6合を割れば反当たりの平均石盛りが7斗9升であることが計算出来る。田畑比が4対6の畑作優位にしては高い数字である。一般的に上州は自然環境からいって畑作地帯であり、米作の水田を前提にした石高制の価値観から見れば後進地域と見做された。米納年貢を欲する幕藩領主からすれば、限界一杯の石盛りを採用したいところであろう。五目牛村もその例外ではなかったであろうか。

第1表 五目牛村の村落構造(明治3年)

特 反 別	軒
0～1反	13 <sup>※1</sup>
0～2	10
2～3	4
3～4	10 <sup>※2</sup>
4～5	4
5～6	2
6～7	5
7～8	3
8～9	2
9～10	1
10～15	4
15～20	2 <sup>※3</sup>
20～30	2
計	62

明治3年「人別改帳」より作成

※1 幸太郎・弥太郎

※2 兼太郎

※3 佐之吉

明治4年(1871)3月「上野国佐位郡五目牛村当未人別改帳」によれば、家数62軒、人数261人(男127、女134)である。村高、反別は変わっておらず、幕末維新期には家数、人口とも急減したことがわかる。一軒当たり約4.0石、持反別5反、一軒当たり家族人数4.2人の平均値となる。これを村落の荒廃と捉えるよりは、適度な安定と考えてもよい。

次に、個々の農民の持反別を抽出して村落を構造的に分析する必要がある。

2反未満が23軒(37%)と底辺層も多いが広汎な階層分布も認められる。養蚕地帯にあっては、水田地帯と違って4、5反クラスであれば経営の自立は充分可能である。

支配の問題について若干触れておく。関東農村の旗本支配の一般例と同様に、領主平岡四郎兵衛も家政悪化のツケを知行所村々に押しつけている。文化15年(1818)には「御勝手向御賄金」のための「月次勘定帳」が作成され、元利合わせて108両余が計上されている。平岡氏の借金を知行所村々が年貢を担保に負う形式であり、支配の弱体化は否定出来ない。天保5年(1834)に領主の借金をめぐって江戸の金主と出入りに及んでいる。反面このことは、借金を肩代わりする農民の立場を強くすることに連なる。固定忠治をめぐる菊池千代松・とくの夫婦が生まれて来てても当然ともいえるのである。

次に、群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘した当該4戸の農家の分析に入っていかなばならない。

## 二 五目牛村と4軒の農家

### 1. 当該農家の確定

まず当該農家4戸を近世五目牛村において確定しなければならない。村絵図があればその中で4戸を推定できないのか。明治3年(1870)5月27日の村絵図がある。この村絵図には、家型を模した農家が人名とともに書かれており、農家を村落内において地理的に確認できるのである。93頁図及び原色写真3に明らかな

ように、上武国道工事のため移転を余儀なくされ発掘調査された4軒は、この地図では東西に走る直線上の兼次郎、佐之吉、幸太郎、弥太郎に推定できはしまいか。この4戸を世襲の有無、系譜の検証から現在の居住者と結びつけ、実証することがまず手続きとして行われねばならない。つづいて近世村五目牛の当該4戸を近世地方文書によって確認し、実態の把握に向かうべきであろう。

事業団の調査によれば、兼次郎は菊池治雄氏家、佐之吉は菊池範氏家、幸太郎は神沢敏一氏家、弥太郎は神沢一夫氏家と確定された。

## 2. 当該4家の状況

個々の農家の状況を知ることの出来るものに、宗門人別帳がある。これにより、家族構成員、保有反別が明らかになる。区有文書中に「明治四辛未年三月吉日、上野国佐位郡五目牛村当未人別改帳」が存在する。当該4家の個所を列挙する。

一神葬祭 持反別三反八畝拾八歩  
 兼次郎 ㊦  
 廿九才  
 女房 や す  
 廿八才  
 母 と め  
 四十八才  
 妹 こ よ  
 拾貳才  
 同 ひ ろ  
 六才  
 侍 宇 三 吉  
 七才  
 同 忠 作  
 貳才  
 家内七人内男三人  
 女四人

一神葬祭 持反別老町六反老畝廿九歩  
 佐之吉 ㊦  
 四十四才  
 母 と く  
 五拾六才  
 女子 み き  
 拾老才  
 家内三人内男一人  
 女貳人  
 馬老疋

## II 近世・近代

一神葬祭	持反別九畝廿五歩
	幸太郎 ㊦
	三十六才
	母 き よ
	六拾四才
家内式人内男老人	
	女老人
一神葬祭	持反別八畝拾六歩
	弥太郎 ㊦
	拾九才
家内老人男	

農家経営の基盤である持反別の田畑比を明らかにする必要もある。上州は細作地帯であり養蚕・生糸業の盛んな地方である。

明治3年(1870)3月、ちょうど前掲の村絵図と同時に作成された「田畑持高帳」から田畑比が明らかにする。

兼次郎は、畑2反25歩、田1反7畝23歩、合計3反8畝18歩、佐之吉は畑9反7畝24歩、田6反4畝5歩、合計1町6反1畝29歩、幸太郎は畑8畝23歩、田1畝2歩、合計9畝25歩、弥太郎は畑3畝16歩、田5畝歩、合計8畝16歩である。田に比し畑の多いのは決して不利にはならない。養蚕に支えられる農業であるからである。それにしても、佐之吉に比して兼次郎は四分の一以下であり、まして幸太郎、弥太郎は1反未満の保有であり農家経営の自立には苦しい状況にあったと見做さざるを得ない。

村落内部における当該4戸の農家の存在のあり方は第1表「五日牛村の村落構造」を参照してほしい。

後年の明治17年(1884)12月20日の連合戸数等級の改正等級においても、4家の状況は変わっていない。菊池とく(佐之吉の母)は二等を占めて村内第一位に位置し、神沢幸太郎、弥太郎の二人は十等である。

### おわりに

不十分な文献史料調査のため、考古学からの近世村落、農家の発掘調査に対して適切な助言とはならなかったと思う。文献偏重の歴史研究から見えてくる歴史像は当然偏ったものになり、特に民衆生活史においては不毛なる限界の中にあるといっても過言ではないであろう。さまざまな障害があるにせよ、考古学と歴史学の協業は今後とも企図されなければならない。小稿がひとつの一契機になればと念ずる次第である。

なお、発掘した民家、特に菊池とく家(現範氏)の生活文化史からのアプローチについては、拙稿「民衆の生活文化史—赤城型民家の時代と社会—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集 1991年)、時代的社会的背景については『国定忠治の時代』(平凡社選書 1991年)を参考にさせていただきたい。

## B 五目牛南組遺跡出土の染付鳥餌入について

### 大橋 康二

五目牛南組遺跡から出土した鳥餌入(実際は水入れとして使われたものらしい)<sup>註1</sup>は2個あるが、2点共同様の特徴を見せる(図1・2)。型によって上下別々に作ったものを貼り合わせて太鼓形に成形され、その側面に格座間形の穴を開け、2つの環耳が貼付けられている。胴部と側面の正文は花唐草文であり、胴部の縁辺に渦連統文が染付されている。格座間形の口部の下に二重の枠で区画したなかに「宣徳年製」の4文字が書き込まれている。全面に施軸されているため、焼成する際の窯詰めには特別の道具を用いたらしく、胴部に4個の径1mm程の熔着痕がみられる。これは軸調・作行などからみると中国産である。そこで中国製の鳥餌入の例を次にあげて比較検討を加えたい。

1 今知る限りで古い例としては、南シナ海の沈没船から引揚げられた陶磁器中に1点ある(図3)。器形は五目牛南組遺跡のものとは異なり、口径6cmの小壺形であり、胴部に2つの環耳が貼付けられている。胴部に花唐草文、肩部に波海連統文が染付されている。写真では判らないが、説明文に宣徳マークが入っていることが記されている。この沈没船は1643年に沈んだとみられ、崇禎16年(1643)の年号が染付されたものなどが一緒に引揚げられていることから、この染付鳥餌入の年代も崇禎頃と推測される。

2 1と同様に小壺形の鳥餌入が東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点から出土している(図4)。尖底状の小壺であり、「口縁部は無軸」と記述されているので覆焼きしたものともみられる。1の小壺形鳥餌入も写真を見ると口唇部無軸であり、写真ではよく判らないが尖底状に作られているのかもしれない。東大出土例はやはり胴部に2つの環耳が貼付けられている。胴部に具須の線描きで花唐草文が描かれている。葉や花も線描きだけで塗り濃みを施さない装飾法はペンシル・ドローイングと呼ばれているものであり、この独特の唐草文は18世紀～19世紀前半にみられるが、花の部分や細部の描き方は19世紀のものとも異なるので、この餌入の花唐草文は18世紀と考えることができる。しかし、2が出土した49号遺構からは1820年～幕末の国産磁器が出土しており、遺構の主たる年代は1820年～幕末と推定される。

3 2と同様のペンシル・ドローイングタイプの花唐草文を描いた太鼓形の鳥餌入がある(図5)。長軸9cm、短軸5.6cm。図1・2と同様に型作りであり、格座間形に口を切っている。2つの環耳を胴部に貼付け、その環耳を中心にして4個の窯詰め時の道具の熔着痕がみられる。胴部の両端には雷文帯が染付されている。本遺跡出土例との違いは、①窯詰め時の道具の熔着痕の位置が双耳部分を中心していること、②長さが長く、胴部の張りが大きいのなど形状の違い、③双耳の根元に花様の貼付け文がないこと、④軸調、具須の発色が異なること、⑤文様が違うこと、などである。年代は文様が2に近いことなどから18世紀後半～19世紀前半と推測される。これは筆者が上海で入手したものである。

4 五目牛南組遺跡出土品ともっとも近似した太鼓形の鳥餌入である(図6)。長軸7.1cm、短軸5.2cm。側面に格座間形の穴を開け、2つの環耳が貼付けられている。やはり胴部と側面の正文は花唐草文であり、胴部の縁辺に渦連統文が染付されており、格座間形の口部下に「宣徳年製」の4文字が書き込まれている。さらに胴部に4個の道具の熔着痕があるのも同様である。「宣徳」とは中国・明の1426～35年の年号であるが、明末の中国民間窯磁器が古い年号を用いることが多く、その影響を受けた肥前・有田磁器も同様に中国の古い年号を盛んに用いた。本遺跡出土品や4に施された「宣徳年製」の年号銘は作られた年代を示すものではない。これも筆者が上海で入手したが、同治(1862～74)ごろのものとも表示されていた。

5 愛知県陶磁資料館には8点の中国製鳥餌入があり、そのうちの1点が太鼓形である。実見していない

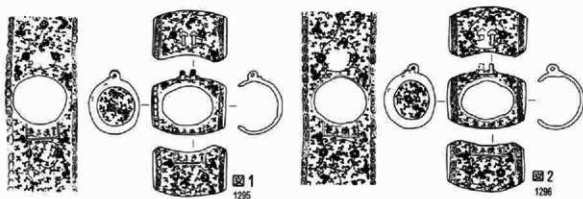
## II 近世・近代

が、図録をみると、色絵で騎馬人物を描いている。

以上が現在知られる中国産鳥餌入の例である。これらのうち4が軸測、作行も含めて本遺跡の鳥餌入ともつとも似通っており、縁辺の渦連紋などの描き方に若干の違いが認められる程度である。

このように環耳を貼付けた磁器の餌入はすでに17世紀にあったが、太鼓形の餌入は18世紀以降の例が知られるだけである。国内遺跡出土の中国製餌入としては、現在2の東大構内遺跡の例と本遺跡の例が知られるだけであるが、2の方が前述のように古い年代とみられる。2が出土した49号遺構は伴出磁器から1820年～幕末の遺構とみられるが、多くの瀬戸・美濃系陶器の鳥餌入が出土している。そのうち1点の底部には「御鳥御用」の墨書がみられる。これらの陶器餌入は小さな桶状の胴部に1つの環耳が貼付けられている。肥前磁器窯では、鳥餌入の出土例は現在までみないが、熊本城跡の調査で白磁の例が瀬戸・美濃の餌入と共に出土している。肥前窯製品の可能性がもっとも高い。形状や環耳が1つである点などからみると瀬戸・美濃陶器の餌入を手本として作った可能性がある。いずれにしても、国内では都市部を中心に近世後半になると飼鳥が盛んに行われるようになるなかで、こうした陶磁器の鳥餌入の需要がだんだんと増えたことが推測される。本遺跡例はそうした状況下で、当時珍しい中国磁器の鳥餌入の出土例として注目される。

- 注 1. 小林克「鳥のえさいれ」について 江戸遺跡研究会会報No.15, 1988  
 2. Colin Sheaf & Richard Kilbun "THE HATCHER PORCELAIN CARGOES", Phaidon Christie's, Oxford, 1988  
 3. 東京大学埋蔵文化財調査室「東京大学本郷構内の遺跡 山下会館・新殿下記念館地点」1990  
 4. 愛知県陶磁資料館「愛知県陶磁資料館所蔵品図録」1988の427頁  
 5. 筆者実見、担当の大田幸博氏に謝意を表す。



0 1:4 5cm

## C 建物遺構の建築学的検討

石井 栄一

### 1. はじめに

本稿は、上武国道建設に伴う赤堀町五日牛地区の発掘調査より検出した遺構を検証するものである。五日牛南組遺跡は、第1章で既述されたように赤堀町の南端で、伊勢崎市に突き出るように位置し、東側を粕川、西を桂川に挟まれた、舌状台地のほぼ中央に位置する。

調査範囲から検出された遺構を精査すると、1号・2号・3号の各屋敷跡が推定できることから、本遺構を検証するにあたり、その3屋敷地別とすることにした。

なお、各屋敷跡から検出された建物遺構は、推定年代が中世から近代までの長期間に亘っているため、その内最も特徴ある遺構を本稿の検証対象としたことを記しておく。

### 2. 1号屋敷跡について

1号屋敷跡は、本調査区中最も東側で、北側には赤堀町35号墳(354号遺構)が位置している。発掘の結果、本屋敷はその古墳の墳丘の南端を一部削平し存在していること、東及び西側にそれぞれ056・057号の溝が、また南側に060～062号の側溝を持つ旧道が確認された。溝に囲まれた範囲内からは、掘立柱の遺構と思われる柱穴や土壇及び井戸跡が多数検出された。その内、掘立柱跡と思われる柱穴は、066号の溝より西側に集中して検出されていることから、当溝を含めて060～062号及び057号の各溝、及び北に35号墳に囲まれた範囲内を屋敷地とする住居跡が推定でき、よって本屋敷地を1号屋敷跡とする。

掘立柱跡は、敷地東より007・008号掘立柱住居跡、西より004～006号の掘立柱住居跡が、いずれも南北に軸線を持ち検出された。また、敷地中央北より013号周辺掘立柱住居跡、対面して南より001号掘立柱住居跡が検出された。柱穴の痕跡から推定すると、2～3回ほどの建て替えが推定できる。その後礎石を持つ住居に変遷し現在に至ったものと思われる。

さて、掘立柱跡をもう少し検証すると、上記住居中最も規模が大きいものに、013号周辺住居跡が想定できる。当遺構の確認された位置は、他に3～4棟の住居跡が推定できる他、東側に003・009号の住居跡も検出されている。いずれの住居跡も一棟とするのは復元考察上も困難であり、別棟であったと見るのが妥当である。113頁に記した復元図は、当遺構中最も検証が明確に行えた013号周辺住居跡の推定図で、1号屋敷跡中最も規模の大きい住居跡である。

規模は桁行き5間(9.58<sup>6</sup>尺)、梁間2間(4.51<sup>6</sup>尺)で南及び西側には土庇、または東側には約5尺間(1.45<sup>6</sup>尺)の下屋の存在が推定できる。柱間寸法を検討すると、西側1間を約7尺とし、中央を12.5尺の1間としている。続いて、6.3尺、5.8尺とする柱間寸法が続くが、西側の7尺間を除き、中央は約6.3尺を1間とする柱間を持っていることがわかった。柱間寸法から見ると、当住居跡は中世から江戸時代初期に使われた寸法が用いられている。また内部の間取りも、床張り部分と土座、土間からなる住居と推定できる。

以上のように、013号周辺住居跡を含むこの位置は、北側から井戸さらに35号古墳に北風から住居を守る役割を持たせた配置を採用している事などからも、当屋敷中最も中心的建物が建つ位置となっている。

また、四周を溝で囲む屋敷配置は、中世期の遺構を十分に窺わせる形式といえよう。

### 3. 2号屋敷跡について

2号屋敷跡は、今調査地のほぼ中央に位置し、調査以前もほぼ同様な敷地範囲内に住居があった。当遺構からは、近世期の礎石を持っていたと思われる建物3棟分と、土蔵の地業と思われる布状の割り栗石敷きの

## II 近世・近代

遺構が一部検出された。

残念ながら、各遺構とも全体を確認できる状況での検出ではなかったが、このうち最も明確に検出した遺構としては、屋敷地跡ほぼ中央に東西に長く点在する4基の礎石跡と思われる。この礎石跡を結ぶとクランク状に柱芯設定が可能となる。各礎石間の寸法は、西より5㍍、北に上って3.5㍍、さらに東に5.8㍍程の距離を持っている。

さて、この柱芯にどのような建物が想定できるかであるが、明治23年に屋敷内にあった赤城型民家が、前橋市西大室町の真言宗観昌寺内に庫裏として移築されていることがわかっている。この庫裏を復元すると、114頁図のような間取りになる。桁行き10間(18.2㍍)、梁行き5間(9.1㍍)で約50坪のかなり大きい建築面積を持っている。この間取りを先の遺構に重ねてみると、西よりの5㍍の礎石間寸法はイタノマとガイドコロの桁行き寸法とほぼ同じ長さとなる。また北に3.5㍍の礎石間寸法は、ガイドコロ梁行き寸法に、さらに東に5.8㍍の寸法は土間桁行き寸法とほぼ同一になることが判明した。このことから、本検出遺構は、観昌寺庫裏(旧菊地とく子家主屋)の座敷境大黒柱及びヘツツイ脇の柱、さらに井戸脇の柱及び同一柱芯状の東側妻壁柱の各礎石と思われ、本遺構が旧菊地とく子家主屋のものであることが推定できる。

また、屋敷跡南側から検出された蔵の礎石跡は、幅45<sup>2</sup>で布状に小砂利が敷きつめられた地業となっている。発掘範囲境にあるため全貌は確認できなかったが、検出状況から南北に長い配置を持ち、その北妻側が検出されたものと思われる。推定であるが、規模は妻側(梁方向)2間(3.64㍍)程と思われる。地業は、一定の幅で小砂利を敷きつめ、上からタコ等により突き固め、その上に切石を並べる布基礎であったと推定できる。

本屋敷跡では、近世から近代の時期の遺物が多数出土している。また、観昌寺庫裏の建築年代を推定すると、江戸時代後期中葉から明治初期の間と見るのが妥当である。さらに、土蔵建設が一般的になるのは明治期以降であることなどからも、遺構上最も完成された時期は江戸時代末期から明治中期までと推定できる。

### 4. 3号屋敷跡について

当屋敷跡は、2号屋敷跡の西側に旧道を挟んで位置している。敷地範囲内南東には「ノクボ」と呼ばれる低湿地帯が入り込んでいるため、建物跡もそれを避けた西から北よりに多数検出されている。各遺構は、掘立柱建物と礎石を持つ建物群がそれぞれ検出されており、「ノクボ」を中心にした長期間継続した屋敷地が想定できる。建物跡は、019～021・023号がいずれも掘立柱建物で、南北に長い建物が想定できる。また、018号は大半が溝や土壌などにより壊され、全体の確認は困難であった。しかし、礎石を持つ建物であったと思われる、礎石位置と思われる位置からは割り栗石の残る地業跡が確認された。ただ、他の建物跡と違い、南東に桁行きの長い建物で、他の屋敷跡とは異なる配置形態を持った貴重な建物跡といえよう。

各遺構は、それぞれ切り合う形で検出されていることから、各時期ともに2～3棟程度の建物が建つ屋敷配置であったものであろう。また存在していた時期であるが、掘立柱、礎石いずれも存在しているが、出土遺物が少なく、寛永通宝と生活用具程度であり、年代を推定する資料は少ない。しかし、総合的に判断するかがり、中世末期あるいは江戸時代初期を上限とするのが、妥当であろう。

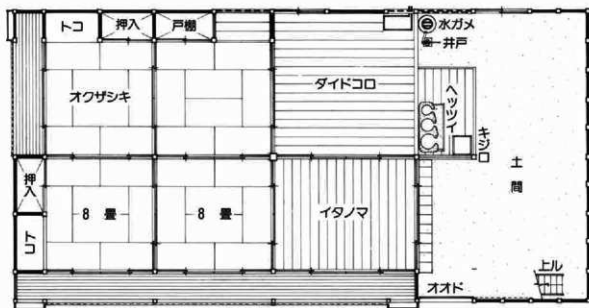
### 5. まとめ

以上1・2・3号の各屋敷跡から検出された建物跡を検討したが、遺構的に見ると、1号屋敷跡から検出された建物遺構が最も古い。しかし、出土遺物を含め年代を検討する資料は少ない。

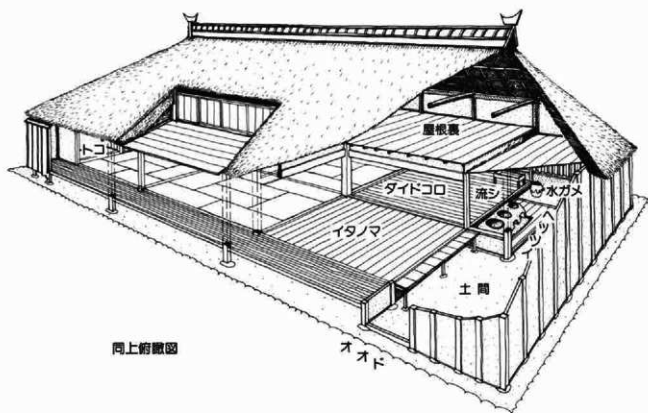
ただ、旧地権者墓地の石造物調査により、永禄12年(1569)の自然石でできた宝塔が残存していることから、少なくとも中世期には屋敷を中心とした建物の存在を検討することは十分に可能であろう。







旧菊池池トク家主屋平面図 (現真言宗観昌寺庫裏)



同上俯视图

## (4) 分 析

## A 五目牛南組遺跡陶磁器胎土分析

花岡純一・大山義一・小沢達樹(群馬県工業試験場)

大西雅広(群馬県埋蔵文化財調査事業団)

## 1. はじめに

試料1は五目牛南組遺跡出土の染付丸碗(91ページ№1274)で、胎土・文様の肉眼観察から県内唯一の磁器窯である前橋藩窯製品と判断され、この試料の製作地同定の傍証を行うことを目的とする。前橋藩窯には勢多郡富士見村の皆沢窯(試料№520~522, 524)と前橋市の高浜窯(試料№915~917, 948, 949)の2カ所が知られており、両者の傾向を把握したうえで南組遺跡出土丸碗と比較する。また、他窯の比較資料として瀬戸窯(王子沢奥西窯)の磁器染付(試料№903, 904)、肥前窯(百間窯)の磁器染付(試料№907~908)と肉眼観察で瀬戸・美濃の陶質染付と判断された試料№906、瀬戸・美濃製品ではないと判断した陶質染付(試料№905)、肉眼観察で中国製品(インドネシア表採)と判断された磁器染付(試料№910~914)を、消費地出土参考試料として現在までに肉眼観察で前橋藩窯製品と判断された月夜野町後田遺跡出土広東型碗(試料№524, 489)を供した。

なお、分析試料はダイヤモンドカッターで切断し、回転磁石で釉薬と切断面の汚れを削り落とした後に水洗し、この状態で工業試験場に分析を依頼した。

## 2. 分析試料

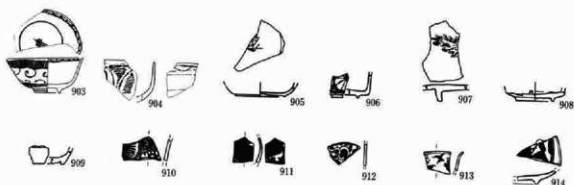
分析試料の推定年代・種別・肉眼観察などの考古学的要目は表1に、供試料の実測図は図1に示した。

表1 分析試料一覧表

試料№	推定年代	種 別	胎土の肉眼観察	備 考
520	19C初頭~中頃	磁器広東型碗	緑青、淡黄色。染付き状態。	皆沢窯表採。
521	19C初頭~中頃	磁器広東型碗	緑青。良く磁化する	皆沢窯表採。
522	19C初頭~中頃	磁器皿	緑青。良く磁化する	皆沢窯表採。
524	19C初頭~中頃	陶磁灰釉碗	やや粗い。黒色粒含む。	皆沢窯表採。
525	19C初頭~中頃	磁器広東型碗	灰白色。磁化不十分。	後田遺跡出土。前橋藩窯製品。
961	19C初~中頃	磁器丸碗	クリーム色を帯びる白色	五目牛南組遺跡出土。前橋藩窯製品。
962	19C初~中頃	磁器広東型碗	やや灰色を帯びる白色	後田遺跡出土。前橋藩窯製品。
963	幕末~明治初	磁器碗反碗	白色で光沢がある。	瀬戸(王子沢奥)窯表採。
964	幕末~明治初	磁器碗反碗	白色で光沢がある。	瀬戸(王子沢奥)窯表採。
965	18C末~19C前半	陶質染付皿	青灰色	二之高千足遺跡出土。瀬戸・美濃製品。
906	18C末~19C前半	陶質染付碗	青灰色	五目牛南組遺跡出土。瀬戸・美濃製品。
967	17C	磁器鉢?	僅かに灰色を帯びる白色	肥前(百間窯)表採。
968	17C	磁器碗?	白色	肥前(百間窯)表採。
969	17C	磁器碗	白色	肥前(百間窯)表採。
910	16~17C前半	磁器皿	白色	中国製品。インドネシア(サムドゥラ・バサイ)表採。
911	17C前半	磁器皿?	白色	中国製品。インドネシア(サムドゥラ・バサイ)表採。
912	18~19C	磁器皿	白色	中国製磁器。インドネシア(バンタン・ラーマ)表採。
913	15~16C	磁器碗反碗	白色	中国製品。インドネシア(サムドゥラ・バサイ)表採。
914	16C末~17C初	磁器皿	白色	中国製磁器製品。インドネシア(ギエン)表採。
915	19C初~中頃	磁器丸碗	僅かに黄色を帯びる白色	高浜窯表採。
916	19C初~中頃	陶磁灰釉碗	灰色	高浜窯表採。
917	19C初~中頃	陶磁嬰か風	にぶい橙	高浜窯表採。素焼き状態
948	19C初~中頃	陶磁灰釉徳利	灰色	高浜窯表採
949	19C初~中頃	茶道具	夾雑物多く含む。	高浜窯表採



## II 近世・近代



### 3. 分析方法及び測定条件

#### 蛍光X線分析

**試料** 供試料を振動ミル粉砕機により $10\mu\text{m}$ 以下に粉砕し、5～10gを油圧プレス機を用いて径4cmの円盤状に成型して使用した。

**分析装置** 理学電機(株) KG-4型

**測定条件**

分光結晶: Fe, Sr, RbにはLiF( $2d=4.028\text{\AA}$ )、Ca, K, Ti, Si, AlにはEDDT( $2d=8.008\text{\AA}$ )、MgにはADP( $2d=10.648\text{\AA}$ )

検出器: LiFを使用したときS.C. EDDT, ADPを使用したときP.C

測定数: 1

計数法: Fe, Ca, K, Ti, Sr, Rbはチャートによる。Si, Al, Mgは定時計数法による。チャートの速さは、 $4^\circ/\text{min}$ とした。

波高分析器: 積分方式

測定線: FeK $\beta$ , CaK $\alpha$ , KK $\alpha$ , TiK $\alpha$ , AlK $\alpha$ , MgK $\alpha$ , SrK $\alpha$ , RbK $\alpha$ の各一次線を使用した。

X線照射面積:  $20\text{mm}\phi$

**測定方法**

検量線法: 6点

標準試料: 群馬県埋蔵文化財調査事業団から依頼を受けた陶磁器(295, 310, 336, 345, 360, 380)を湿式化学分析して標準試料とした。

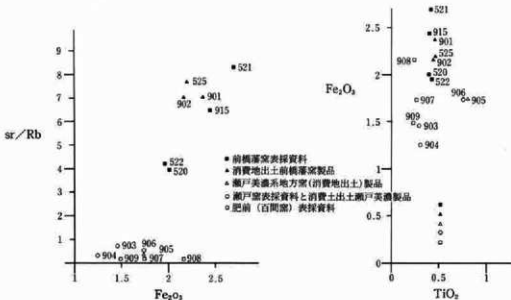
### 4. 結果

蛍光X線分析における分析値は、表2に示したとおりである。この分析値からSr/Rb、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、TiO<sub>2</sub>により特徴が現れており、これらの数値を基に作成したのが図2・3である。前橋藩窯採集の陶磁器・窯道具と消費地出土の前橋藩窯製品と考えられる磁器は、瀬戸や肥前、中国製品などと比してSr/Rb値が非常に高いことがわかる。更に、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>とTiO<sub>2</sub>の値も全体に前橋藩窯製品が高い傾向が見受けられる。また、前橋藩窯には皆沢窯と高浜窯があり、両者は肉眼観察で判別不可能であったが、蛍光X線による9元素の比較でも区分できないことが明らかとなった。したがって、消費地出土資料は「前橋藩窯製品」と呼称するのが適切である。ここでの主目的は、五日牛南組遺跡出土染付丸碗(試料No901)が前橋藩窯領域に入るか否かであることか

ら、瀬戸・肥前・前橋藩窯採集の磁器と消費地出土磁器のみグラフに記入した。この結果、Sr/Rbと $Fe_2O_3$ は、数値にばらつきが認められるものの瀬戸や肥前に比して前橋藩窯製品は高い値を示している(図2)。一方、 $TiO_2$ は、数値が近接しているため明瞭ではないが、前橋藩窯製品は瀬戸、肥前製品より数値が高い傾向が認められる(図3)。これらの結果から、南組遺跡出土資料(試料No901)、後田遺跡出土資料(試料No902,925)は前橋藩窯領域に入ることは明確で、肉眼観察による結果と一致した。

表2 分析値一覧表

試料No	SiO <sub>2</sub> (%)	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	TiO <sub>2</sub> (%)	CaO (%)	MgO (%)	K <sub>2</sub> O (%)	Ca/Ka (%)	Sr/Rb (%)
520	74.2	20.9	2.00	0.40	0.30	0.76	1.42	0.25	4.00
521	71.1	21.8	2.70	0.41	0.30	0.40	2.20	0.16	8.27
522	74.1	19.8	1.96	0.43	0.32	0.64	1.36	0.30	4.13
525	71.2	21.4	2.20	0.46	0.46	0.80	1.65	0.33	7.67
901	72.69	19.68	1.41	2.37	0.46	1.62	0.73	0.45	7.20
902	72.92	18.42	1.31	2.16	0.44	1.33	0.70	0.46	7.20
903	70.04	18.43	0.11	1.46	0.29	5.47	0.41	0.07	0.73
904	71.12	15.88	0.25	1.25	0.30	4.54	0.50	0.11	0.33
905	75.35	16.97	0.54	1.74	0.81	2.21	0.27	0.12	0.38
906	75.73	18.40	0.37	1.74	0.76	2.24	0.40	0.18	0.55
907	71.86	18.37	0.39	1.74	0.26	4.38	0.27	0.06	0.20
908	71.17	19.75	0.49	2.16	0.24	5.00	0.24	0.05	0.19
909	76.22	15.32	0.62	1.49	0.23	3.99	0.26	0.07	0.19
910	76.18	16.98	0.56	1.67	0.26	3.22	0.67	0.21	0.14
911	72.43	19.20	0.57	2.16	0.23	3.26	2.26	0.69	0.19
912	66.69	27.11	0.28	1.81	0.43	1.96	1.42	0.73	0.19
913	75.83	17.02	0.23	1.81	0.22	2.68	1.88	0.70	0.19
914	69.71	21.34	0.39	2.58	0.21	2.82	1.97	0.70	0.34
915	70.39	19.21	0.51	2.44	0.41	3.89	2.66	0.68	6.33
916	66.64	23.62	1.36	3.34	0.66	1.62	1.20	0.74	6.00
917	63.75	26.81	0.94	3.07	0.67	1.19	0.93	0.78	2.40
948	59.93	15.86	1.30	8.72	0.89	1.66	1.24	0.75	3.75
949	66.02	22.61	1.70	5.16	0.76	0.95	0.78	0.81	13.00



## II 近世・近代

前橋藩窯採集試料測定値のうちSr/Rbが高いのは、ストロンチウムの数値が他より多く、ルビジウム値が少ないために生じた結果であった。また、Sr/Rb値にばらつきが認められるが、窯道具の数値が飛び抜けて高いことから、ストロンチウム含有量が多くルビジウム含有量が少ない鉱物又は岩石、粘土を混ぜているのであろうか。また、前橋藩窯製品は、酸化第2鉄と酸化チタンも高い値を示している。磁器の場合、焼成後の素地の白さが問題となるが、素地着色の原因のひとつが鉄とチタンである。実際の発色は複雑で、焼成雰囲気や温度などにも大きく左右されるが、素地の条件としてはあまり良好ではないといえよう。

### 5. 今後の課題

今回は、瀬戸と肥前の資料のみとの比較であるが、今後は近県の磁器窯製品の分析や美濃窯製品の分析を進めてゆく必要がある。更に、今回は分析対象としなかったが、肉眼観察で瀬戸・美濃製品でなく、胎土の質感が前橋藩窯製品に近く、釉調・須領の発色・文様が前橋藩窯製品と異なる製作地不詳の陶質染付(例えば南組遺跡26ページNo.1223, 1224、渋川市中村日焼田遺跡第50図-9など)の存在も考慮する必要がある。

前橋藩窯の陶器についてはデータの提示にとどまったが、県内で焼成された陶器資料の分析作業を現在進行中であり、更に近県資料を追加して前橋藩窯の陶器や県内で生産された陶器の領域を設定できればと考えている。

最後に文末ではあるが、今回の分析にあたり数少ない高浜窯の資料を快く提供して下さい加部二生氏に感謝する。

#### 注

1. 前橋藩窯は文化10年代創業。文政5年民営に移管され天保年間まで続いたとされている。磁器と陶器を併稱する。
2. 皆沢窯製品の分析は昭和63年に行ったものである。分析試料は「皆沢焼物場所出土の資料について」『群馬の考古学』に掲載したもので、試料No.520が第1図-26、同No.521が第1図-21、同No.522が第2図-37である。
3. 本来ならば原跡の資料を用いるべきであるが、今回は都合により消費地出土資料で代用した。この点については機会を改めて窯跡資料を分析する予定である。
4. 中国製品(インドネシア表探)の資料は坂井隆氏の資料で、「マラッカ海峡沿岸都市の外來文化と伝統生活」『社会科学討究-107』に掲載されている。資料No.910は図3-19、同No.911は図3-17、同No.912は図10-95、同No.913は図3-8、同No.914は図7-68である。
5. 後田遺跡出土資料は、試料No.525が報告書の第924図-230、同No.902が第924図-229である。
6. 高浜窯の資料は全休量が非常に少なく、分析には図示しえない細片を使用した。

#### 参考文献

- 大江 正行ほか 『後田遺跡II』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988  
大西 豊広 『皆沢焼物場所出土の資料について』『群馬県埋蔵文化財調査事業団十周年記念論集 群馬の考古学』 1988  
加部 二生 『前橋高浜窯について』『群馬文化』217号 群馬県地域文化研究協議会 1989  
小林 良光ほか 『石原東・中村日焼田遺跡-限遺渋川吾妻線整備工事に伴う発掘調査概要報告-』 群馬県渋川市教育委員会 1991  
坂井 隆 『マラッカ海峡沿岸都市の外來文化と伝統生活-スマトラなどの遺跡表探遺物より-』『社会科学討究』第37巻第1号(107号) 早稲田大学社会科学研究所 1991

## B 五目牛南組遺跡出土材の樹種同定

藤 根 久(ハレオ・ラボ)

### 1. はじめに

五目牛南組遺跡は、佐波郡赤郷町五目牛に所在する。当遺跡は、江戸時代の屋敷跡から9基の井戸が検出され、これら井戸中からは、水汲み上げ用の桶底板や桶側板あるいは構築部材など木製品が数多く出土している。ここでは、これら出土木製品および木炭の樹種同定を行い、木製品と樹種の関係について、若干の考察を試みる。

### 2. 方法と記載

井戸から出土した試料は、群馬県埋蔵文化財調査事業団において、プレパラートの作成が行われた。プレパレートは、製品で加工痕が明瞭なもの(実測試料)と加工痕が明瞭でないもの(非実測試料)とに分類されており、実測試料が166試料、非実測試料が16試料で合計182試料である。これら標本は、光学顕微鏡下で40~400倍の倍率で観察した。樹種の同定は、現生標本との比較により行う。以下に、標本の記載及び同定の根拠を述べる。表1~2にその結果を示す。参考として、材組織の記載中の主な用語については、図1および図2にその概略を示す。なお、同定に使用したプレパレートは、群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管してある。(中略)

### 3. 考 察

井戸から検出された木製品の樹種分類群は、マツ科のモミ属・マツ属およびその内のアカマツ・ツガ属、スギ科のスギ、ヒノキ科のヒノキ属、カバノキ科のハンノキ節、ブナ科のクリ・コナラ属コナラ節・コナラ属クスギ節、マメ科のネムノキ、ミカン科のサンショウ、エゴノキ科のエゴノキ属、クマツヅラ科クサギの14分類群である。また、各遺構別に検出分類群を見ると、051号遺構では出土木製品96点に対し6分類群、310号遺構で17点に対し6分類群などである(表3)。

各分類群の頻度を見ると、最も多く出土するスギ科のスギが81試料、次いでブナ科のクリが42試料、マツ科のアカマツが33試料、ブナ科のコナラ属コナラ節が11試料、マツ科のツガ属が3試料、ブナ科のコナラ属クスギ節が2試料、マメ科のネムノキが2試料、エゴノキ科のエゴノキ属が2試料、そしてマツ科のモミ属、マツ属、ヒノキ属、カバノキ科のハンノキ節、ミカン科のサンショウ、クマツヅラ科のクサギがそれぞれ1試料となっている。製品ごとについて見ると、釣瓶としての桶底板あるいは側板などはスギが多く、ツガ属なども検出されている。また、構築部材や角材あるいは杭は、クリ、アカマツ、スギ、コナラ節、ネムノキ、エゴノキ属を用いている。051号遺構において多く検出される板材は、大半がスギあるいはアカマツが用いられている。

こうしたスギ材やアカマツ材あるいはクリ材の利用は、ある程度周辺植生に付随して起きる現象と考えられる。辻ほか(1986)は、館林地域においては、18世紀初頭以降スギやマツ属の花粉化石が高率に出現することを見だし、これらが植生によってもたらされたものであることを指摘している。この館林地域において検出されたマツ属の花粉は、ここで材組織により同定されたアカマツによりもたらされたものと推定される。地理的に多少離れた当遺跡においても同様の景観があったことが考えられ、周辺に生育する樹木を積極的に利用した状況が伺われる。

II 近世・近代

表 1. 出土木製品とその樹種 (実測試料No 1)

No	報告No	遺構	製品名	樹種	No	報告書	遺構	製品名	樹種
1	3001	047号-1 a	水汲桶取手部	スギ	62		051号-20 a	棒	杉
2	3002	杉 -1 b	桶底板	杉	63		杉 -20 b	杉	杉
3		杉 -1 c	ツルベ本体	杉	64		杉 -20 c	杉	杉
4	3003	杉 -1 d	桶底板	杉	65		杉 -20 d	杉	杉
5	3004	杉 -1 e	桶側板	杉	67	3026	杉	桶側板	スギ
6	3005	杉 -1 f	杉	杉	68	3027	杉	杉	杉
7		杉 -1 g	杉	杉	69	3028	杉	杉	杉
8		杉 -1 h	杉	杉	70	3029	杉	杉	杉
9		杉 -1 i	杉	杉	71		杉 -22 a	板	杉
11		杉 -5	杭	タリ	72		杉 -22 b	杉	アカマツ
12		杉 -6	杉	杉	73		杉 -22 c	杉	スギ
14		杉 -7	杉	杉	74		杉 -22 d	杉	杉
15		杉 -8 a	杉	杉	75	3030	杉	桶側板	杉
16		杉 -8 b	杉	杉	76	3031	杉	杉	杉
17		杉 -9	棒	スギ	77	3032	杉	杉	杉
18		杉 -10 a	杭	タリ	78	3033	杉	杉	杉
20		杉 -11	杉	杉	79	3055	杉	杉	杉
23	3008	049号	ツリ具又は台	アカマツ	80	3056	杉	杉	杉
26		050号-1 b	板	ツガ属	81		杉 -25	棒 杭	タリ
28		杉 -2	桶底板	杉	82		杉 -26 a	棒	杉
29	3009		角材 ?	アカマツ	83		杉 -26 b	削りくず(節)	アカマツ
31	3061	051号	構築部材・丸太	タリ	85		杉 -27(1)	板	スギ
32		杉 -2	構築部材(柱)	杉	86		杉 (2)	杉	杉
33		杉 -3	杉	杉	87		杉 (3)	杉	アカマツ
34		杉 -4	杉	コナラ属	88		杉 (4)	杉	スギ
35		杉 -5	板	スギ	89		杉 (5)	杉	杉
36		杉 -6	棒	コナラ属	90		杉 (6)	杉	アカマツ
37		杉 -7	杭	タリ	91		杉 (7)	杉	スギ
38	3011	杉	水汲桶取手部	スギ	92		杉 (8)	杉	アカマツ
39	3012	杉	杉	杉	93		杉 (9)	杉	スギ
40	3013	杉	板 状	杉	94		杉 (10)	杉	マツ属
41	3054	杉	板 状	杉	95		杉 (11)	杉	アカマツ
42	3014	杉	板 状	杉	96		杉 (12)	杉	杉
43	3015	杉	桶底板	杉	97		杉 (13)	杉	スギ
44	3016	杉	板	杉	98		杉 (14)	杉	アカマツ
45		杉 -11	棒 杭	タリ	99		杉 (15)	杉	スギ
46	3017	杉	板	アカマツ	100		杉 (16)	杉	アカマツ
47		杉 -12 b	箱 体 部	スギ	101		杉 (17)	杉	杉
48	3018	杉	板	杉	102		杉 (18)	杉	スギ
49	3019	杉	桶底板	杉	103		杉 (19)	杉	杉
50	杉	杉	杉	杉	104		杉 (20)	杉	杉
51	3020	杉	構築部材	アカマツ	105		杉 (21)	杉	杉
52	3021	杉	角 材	杉	106		杉 (22)	杉	杉
53	3022	杉	杉	スギ	107		杉 (23)	杉	杉
54		杉 -14 d	棒 状	杉	108		杉 (24)	杉	アカマツ
55		杉 -14 e	杉	杉	109		杉 (25)	杉	スギ
56	3023	杉	桶側板	杉	110		杉 (26)	杉	杉
57	3024	杉	杉	杉	111		杉 (27)	杉	杉
59		杉 -17	角 材	杉	112		杉 (28)	杉	アカマツ
60	3025	杉	棒 状	コナラ属	113		杉 (29)	杉	スギ



表2. 出土木製品とその樹種 (実測試料No.2、参考試料No.1)

No.	報告No.	遺構	製品名	樹種	No.	報告書	遺構	製品名	樹種
114		061号-27D	板	アカマツ	173		064号-4	#	アカマツ
115	#	00	#	スギ	174	#	#-5	#	ネムノキ
116	#	-28	杭材	アカマツ	175	#	#-6	杭	エゴノキ属
117	#	-29a	角材	#	176	#	#-7	杭?	クリ
118	#	-29b	#	#	177	#	#-8	端材	スギ
119	#	-30a	棒	クスギ節	178		055号-1	棒	コナラ節
120	#	-30b	杭	スギ	179	3045	310号	曲物蓋板	スギ
121	#	-31	アテ材	アカマツ	181	3046	#	桶底板	#
122	#	-32	角材	クリ	184	3047	#	板	#
124	#	-34	#	アカマツ	185	3048	#	皮付き丸太	アカマツ
126	#	-36(1)	板?	クリ	186	3049	#	構築部材	#
127	#	-36(2)	板	アカマツ	187	#	#-9	#	スギ
128	#	-36(3)	#	スギ	188	#	#-10	板	アカマツ
129	3034	#	棒材	#	189	3050	310号	厚板	スギ
130	3057	#	幅広板伏棒	#	190	#	#-12	板材片	#
131	3058	#	#	#	191	#	#-13	#	アカマツ
134	3036	052号	柱	クリ	192	#	#-14	板材	ヒノキ属
135	#	-2a	角材	#	193	#	#-15	杭片	コナラ節
136	#	-2b	#	#	194	3051	#	角棒状	クリ
137	3037	#	構築部材片?	#	195	#	#-17	杭片	コナラ節
138	3038	#	#	#	196	3059	#	構築部材	アカマツ
139	3039	#	#	#	199	3060	#	棒状	モミ属
141	#	-5	丸太	#	200	#	#-22	杭	クリ
142	#	-6	アテ材	クリ					
143	#	-7a	棒	#					
147	#	-8	自然木	#					
148	#	-9a	棒	#					
149	#	-9b	#	#	22				スギ
150	#	-9c	#	#	27				クスギ
154	3040	052号	棒状	アカマツ	66				コナラ節
155	3042	#	棒	スギ	84		061号-26	炭化自然木	クリ
157	#	-16	角材	アカマツ	123				#
158	#	-17a	板材	スギ	132-1				スギ
159	#	-17b	#	#	132-2				クスギ節
160	3043	#	底板	#	140				クリ
161	#	-19	アテ材	クリ	164				アカマツ
163	#	20	角材	#	151				ハンノキ属
164	#	-21	アテ材	#	152				サンショウク
165	#	-22	#	#	162				クリ
167	#	-23b	#	#	201	3062	334号		ツガ属
168	#	-24	棒	#	203	3052	033号-4		スギ
170	3044	054号	杭	ネムノキ	206	3053	#-8		#
172	#	-3	棒	エゴノキ属	208				#

表3. 遺構別出土木製品の樹種頻度

樹種	遺構										合計
	047号	049号	050号	051号	052号	054号	055号	310号	334号	不明	
マツ科	モミ属							1			1
#	アカマツ		1	1	22	2	1	5		1	33
#	マツ属				1						1
#	ツガ属			2					1		3
スギ科	スギ	10			55	4	1	6		5	81
ヒノキ科	ヒノキ属							1			1
カバノキ科	ハンノキ属									1	1
ブナ科	クリ	7			10	19	1	2		3	42
#	コナラ属				7					1	11
#	コナラ属				1			1	2		2
ヤマメ科	ネムノキ										2
ミカン科	サンショウク									1	1
エゴノキ科	エゴノキ属						2				2
クマツツク科	クスギ									1	1
合計		17	1	3	96	25	7	1	17	1	182

図版 4. 五目牛南遺跡出土材の顕微鏡写真



10a. ネムノキ (横断面)  
No.170 bar : 0.5mm



10b. 同 (接線断面)  
bar : 0.2mm



10c. 同 (放射断面)  
bar : 0.2mm



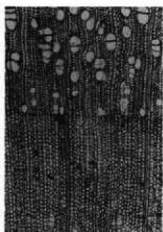
11a. サンショウ (横断面)  
No.152 bar : 0.5mm



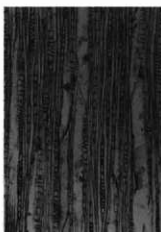
11b. 同 (接線断面)  
bar : 0.2mm



11c. 同 (放射断面)  
bar : 0.2mm



12a. エゴノキ属 (横断面)  
No.172 bar : 0.5mm



12b. 同 (接線断面)  
bar : 0.5mm



12c. 同 (放射断面)  
bar : 0.1mm

図版5. 五日牛南遺跡出土材の顕微鏡写真



13a, クサギ (横断面)  
No27 bar : 0.5mm



13b, 同 (接線断面)  
bar : 0.5mm



13c, 同 (放射断面)  
bar : 0.5mm



5 a, スギ (横断面)  
No67 bar : 0.5mm



5 b, 同 (接線断面)  
bar : 0.2mm



5 c, 同 (放射断面)  
bar : 0.1mm



7 a, ハンノキ筈 (横断面)  
No151 bar : 0.5mm

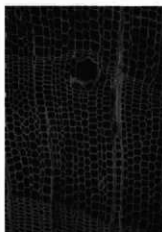


7 b, 同 (接線断面)  
bar : 0.2mm



7 c, 同 (放射断面)  
bar : 0.2mm

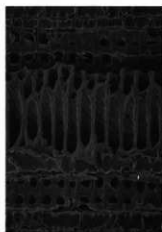
図版6. 五目牛南遺跡出土炭化材の電子顕微鏡写真



14a. アカマツ (横断面)  
炭① bar : 0.1mm



14b. 同 (接線断面)  
bar : 0.1mm



14c. 同 (放射断面)  
bar : 0.5mm



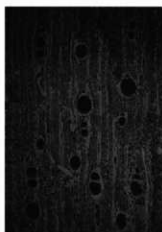
15a. クスギ節 (横断面)  
炭② bar : 0.5mm



15b. 同 (接線断面)  
bar : 0.2mm



15c. 同 (放射断面)  
bar : 0.5mm



16a. カキノキ属 (横断面)  
炭① bar : 0.5mm



16b. 同 (接線断面)  
bar : 0.5mm



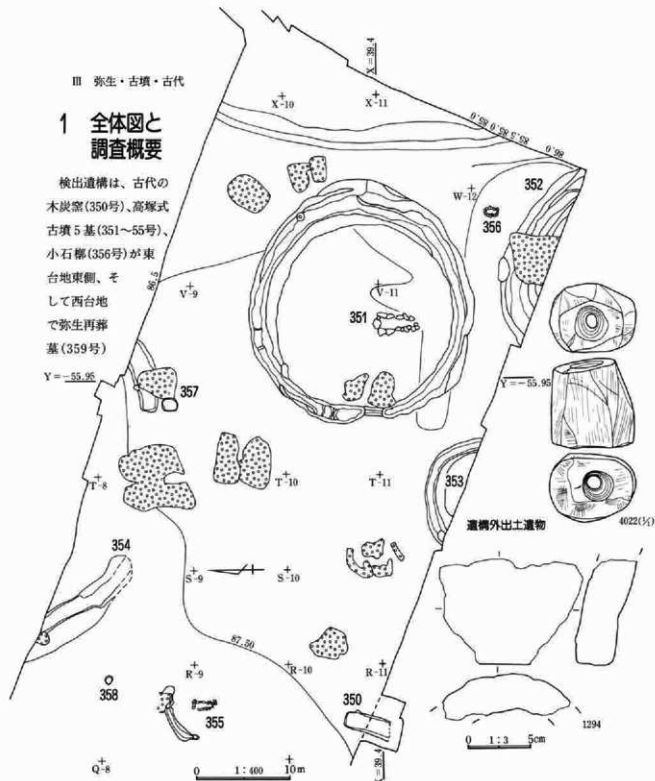
16c. 同 (放射断面)  
bar : 0.5mm

### III 弥生・古墳・古代

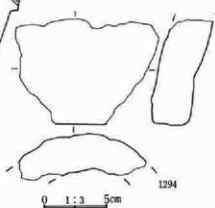
# 1 全体図と調査概要

検出遺構は、古代の木炭窯(350号)、高塚式古墳5基(351~55号)、小石棚(356号)が東台地東側、そして西台地で弥生再葬墓(359号)

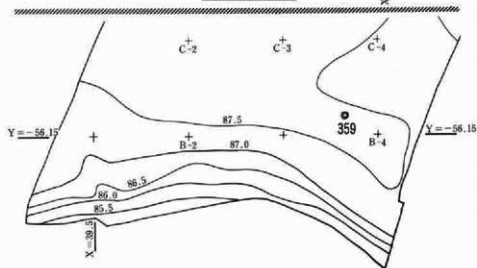
Y = -55.95



遺構外出土遺物 4022(3)



0 1:3 5cm 1294



がある。

以上のように東台地東側に集中する分布であった。

## 遺構外出土遺物

蛇紋岩玉未成品(4022)が弥生再葬墓の北東約10mから、へら調整埴輪状土製品(1294)が東台地の不明場所より出土している。

## 2 発掘成果 木炭窯

東台地中央部近くで検出した350号遺構である。

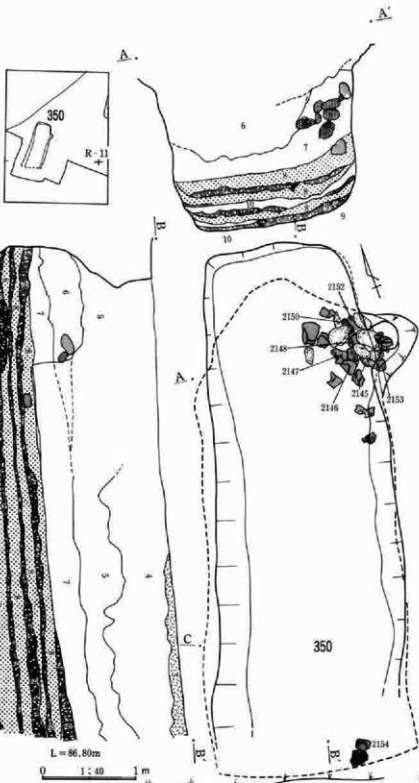
底面1.65m以上、深さ1.6m程度の箱形炉の先端部分と思われる。北端の右側の1.2mの位置には、0.5mほど張出した煙道がある。

底面は水平で、焼土と炭化物の硬化した水平互層が4層0.7mの厚さで堆積していた。煙道には、上から投げこんだ状態で、小兒頭大の河原石と鉄滓が多数検出された。また鉄滓下の炭化物最上層から約30cmの長さのクヌギ材が見られた。(分析報告参照)

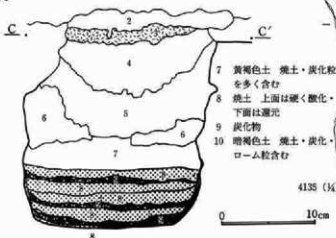
天上部陥没土の60cm上に浅間B軽石層がある。

約30m西の近世遺構群より凝灰岩鋤型片(4135)が出土。

- 1 耕作土
- 2 黒褐色土 砂質
- 3 軽石 浅間C軽石
- 4 黒褐色土 白石軽石含む
- 5 黒褐色土 ローム塊含む
- 6 褐色土

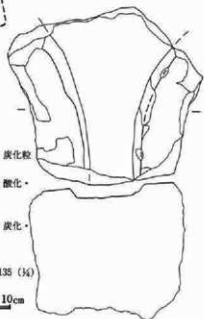


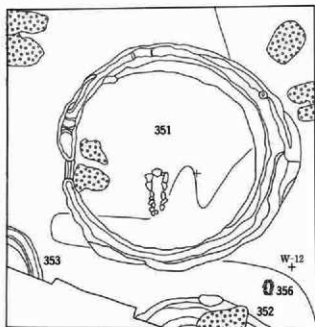
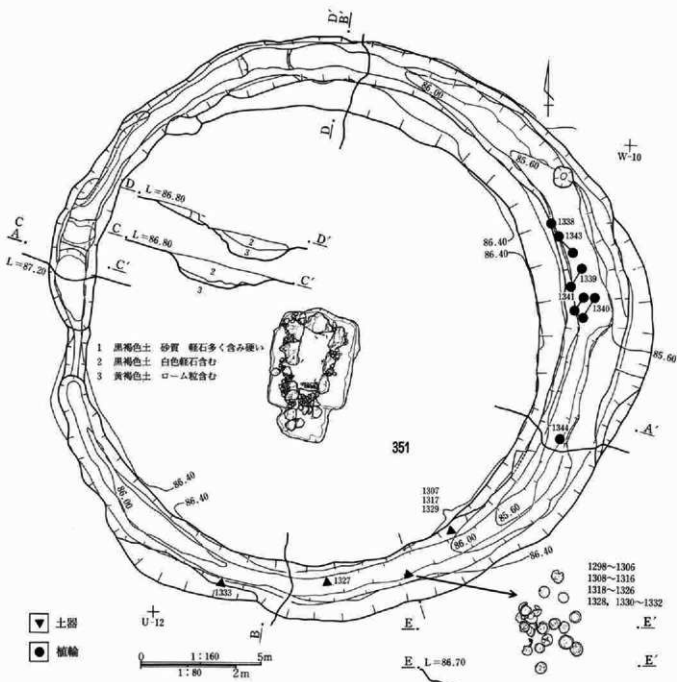
- 火山噴出物
- 焼土
- 炭化層
- 鉄滓
- 石



- 7 黄褐色土 焼土・炭化粒を多く含む
- 8 焼土 上面は硬く緻密・下面は透光
- 9 炭化物
- 10 暗褐色土 焼土・炭化・ローム粒含む

4135 (k)

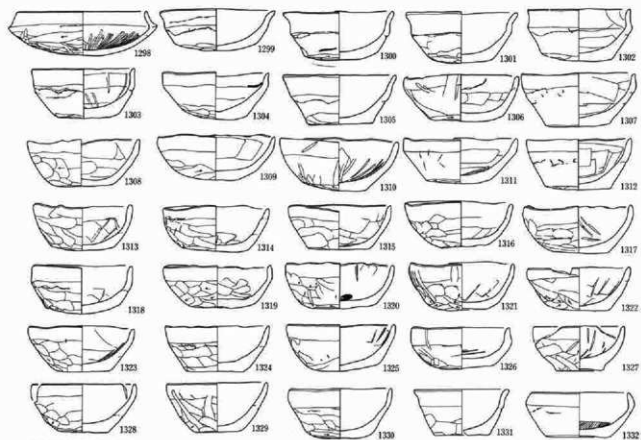




### 上毛古墳総覧記載漏円墳①

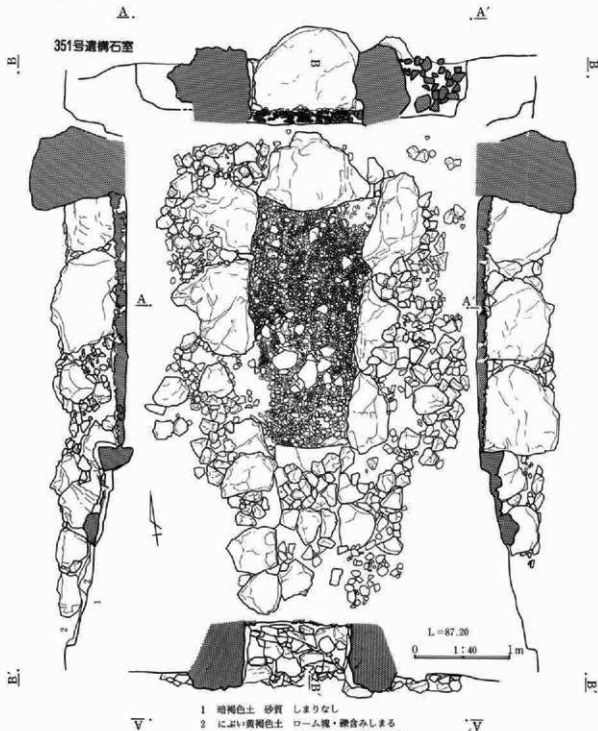
東台地東端近くで検出された351号遺構である。  
 墳丘は全く残っておらず、上面は近世の1号屋敷跡がのっていた。周堀と石室基部のみが残存していた。  
 墳丘は、直径18mほどの円形と推定できる。  
 堀は谷側の東がより広く5mほどの上幅が残っていた。  
 堀内では、いづれも墳丘裾から転落した状態で2か所の遺物集積があった。土師器模倣冨(1298)と35個の同祖製冨(1299~1333)が南東側から、人物(1338)と円筒(1339~44)の埴輪群が北東側から、それぞれまとまって検出された。





351号畑出土遺物





1 暗褐色土 砂質 しまりなし

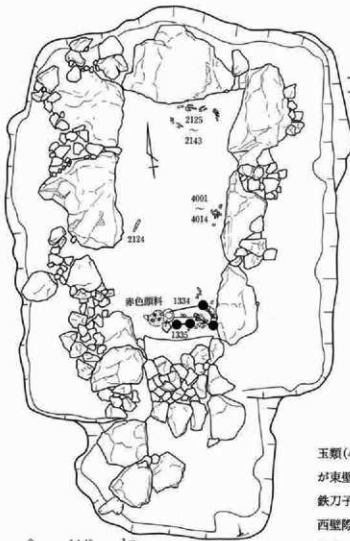
2 におい黄褐色土 ローム塊・鐵含みしまる

**351号 遺構周堀出土遺物(左頁図)**

粗製坯はいつも手づくね成形で、特定の器形への仕上げを意識せずに、粗く削り調整されている。人物埴輪(1338)は断面楕円形で、衣服下位を現した上部の区画は、焼成後赤色塗彩がなされている。

**同遺構石室(上図)**

南側に開口する玄室 $1.2 \times 2.5 \times 0.9\text{m}$ の袖無型の横穴式石室である。羨道は $0.6\text{m}$ の幅で階段状に地上に上っており、 $2\text{m}$ の長さが残存していた。確認は根石だけであり、西壁の最南端の石はすでになくなっていた。砥石(4095)と明治17年銘一銭銅貨(2025)が内部の攪乱層より出土した。底面の小礫層は厚さ $15\text{cm}$ 。



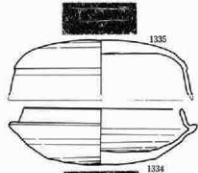
351号石室遺物出土状態



石室内遺物

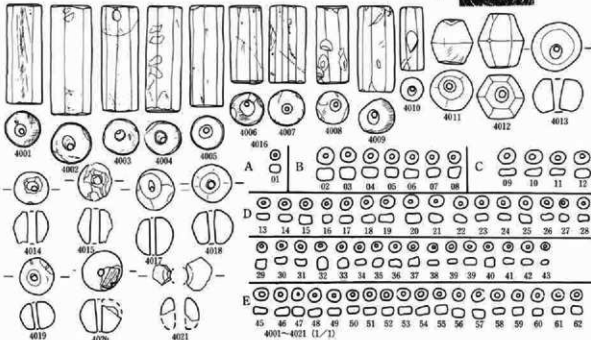
鉄器類  
(2125~43)  
は奥壁側、

玉類(4001~21)  
が東壁際中央、  
鉄刀子(2124)が  
西壁際中央より  
出土。また玄門  
近くで須恵器蓋

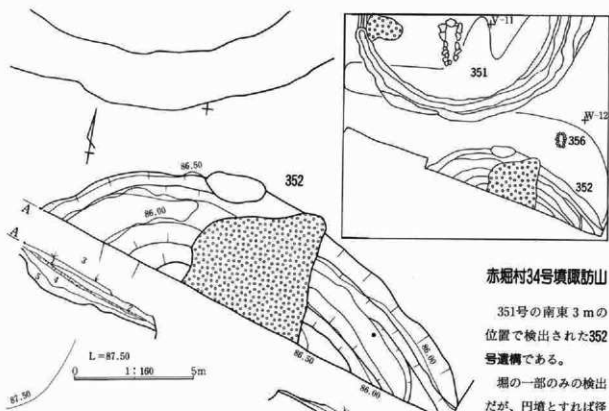


坏(1335, 34)が見られ、その近くには赤色顔料が塗布されていた。

石室全体は3.5×5.5mの箱形掘方中に構築されている。



4001~4021 (1/1)

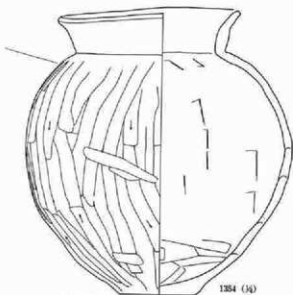


### 赤堀村34号墳塚防山

351号の南東3mの位置で検出された352号遺構である。

堀の一部の検出だが、円墳とすれば径15m程度の墳丘である。

東側の堀底から軽落した状態で土師器甕(1354)が出土している。



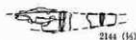
352号遺構

### 竖穴式小石塚

352号堀から3m離れた北東側で検出された356号遺構である。351号までも5mの距離。

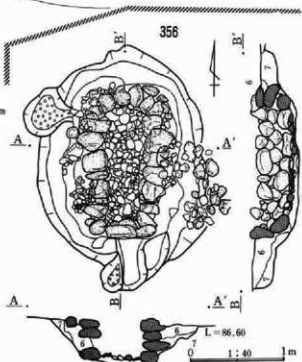
河原石を積んで1.3×0.4mの内径の塚を組んでいる。南北に軸を併せて、確認時には4段の石積が残る。径6mほどの小円墳であろう。

刀子状鉄製品(2144)が出土した。



356号遺構

- 1 耕作土
- 2 褐色土 砂質 しまりない
- 3 軽石 茂間B軽石
- 4 黒褐色土 白色軽石多く含む
- 5 黄褐色土 ローム塊多く含む
- 6 褐色土 ローム粒含む しまりなし
- 7 ぶい黄褐色土 しまり弱い

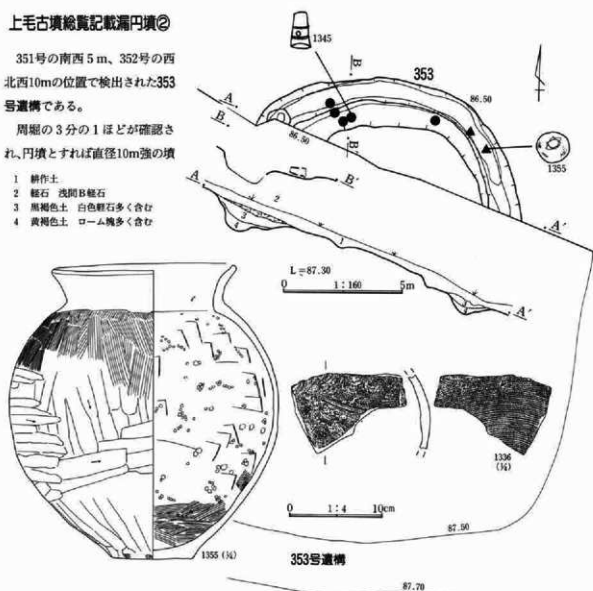


## 上毛古墳繪瓦記載漏円墳②

351号の南西5m、352号の西北西10mの位置で検出された353号遺構である。

周廻の3分の1ほどが確認され、円墳とすれば直径10m強の墳

- 1 耕作土
- 2 軽石 洩間B軽石
- 3 黒褐色土 白色軽石多く含む
- 4 黄褐色土 ローム塊多く含む



353号遺構

丘が考えられる。ただし352号と同様に、調査範囲名にも墳丘の残存は全く見られなかった。また図に見られるように、確認した周廻の走向は、やや屈曲して正円とは言い難い。

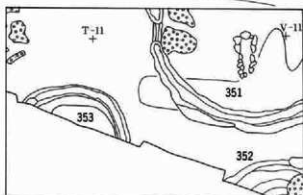
352号と同じく埋土上の最上層には、洩間B軽石の堆積が見られた。

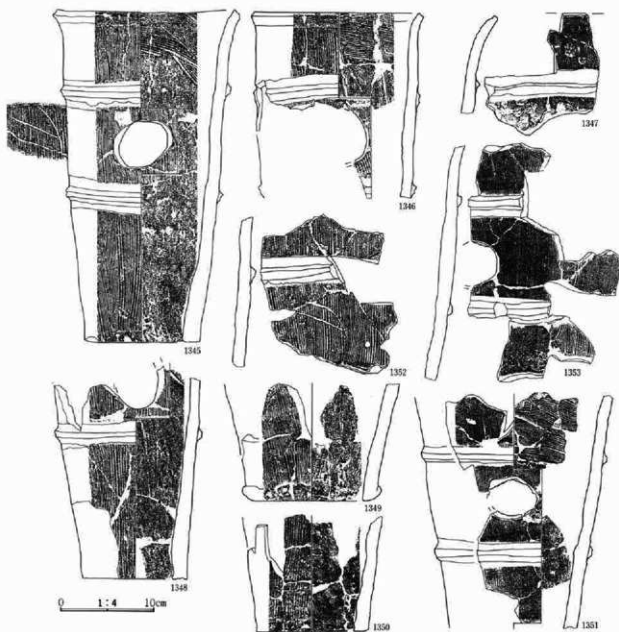
東側の堀底より肩部をコバメ調整した土師器甕(1355)及び須恵器提瓶片(1336)が見られた。

前者は、転落したと思われるがほぼ完存であり、

352号の甕(1354)と異って、内面には内容物の有機物付着斑痕が見られた。

北東側の堀の墳丘裾からは、円筒埴輪(1345～53)が出土している。このうち1345は完存であり、原位置で倒れていたと思われる。





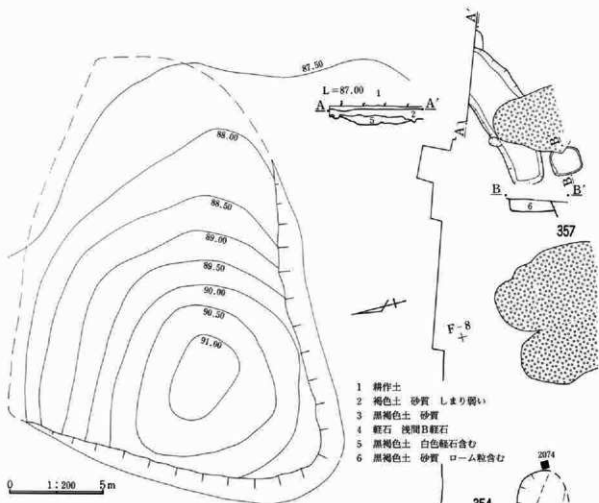
353号遺構出土土埴輪

完存は1345だけであり、頭部片2点(1346, 47)、胴部片3点(1351~53)そして底部片3点(1348~50)を紹介した。頭部の形状は、外反するものと、直立するもの2種がある。また底部も端を外に折り返すものとそうでないものが見られる。突帯断面形は、台形ぎみのものと三角形のものがある。

基本的には、タテハケを基本調整とする高さ35cmほどの2段突帯のものが中心であろう。1345と52には、弓形のヘラ描記号が見られる。

351号の円筒埴輪は、突帯断面三角形のものが多く、×印のヘラ描記号が2点ある点か、本遺構のものと異っている。

小片は、報告したのもも含め、351号が786片、353号が248片、そして352号も145片見られた。他に周辺の056・061・066各号の近世の溝などからも、埴輪小片の出土がある。



### 赤堀村35号墳

東台地北側で確認された354号遺構である。

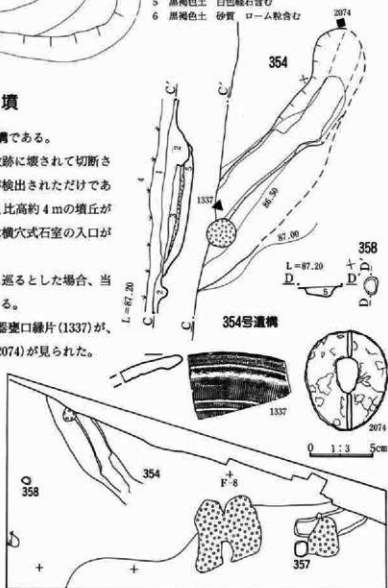
調査範囲内では、近世の1号屋敷跡に壊されて切断された状態で、2か所で周堀の一部が検出されただけである。しかし調査範囲の北側に接して、比高約4mの墳丘が残っており、墳頂の南側の崖面には横穴式石室の入口が草の中に見られる。

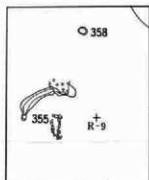
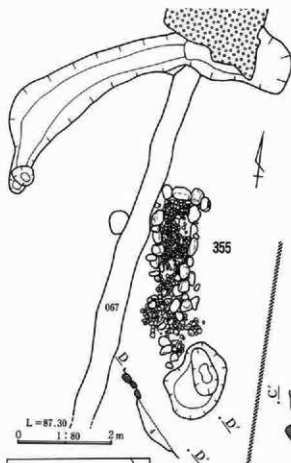
確認した堀が墳頂を中心に円形に巡るとした場合、当初の墳丘は直径35m程度の直径になる。

堀底からやや浮いた状態で、須臾器壺口縁片(1337)が、また重複する近世土坑中より鉄釘(2074)が見られた。

この古墳は、近世初期に墳丘南側が、調査直前に西側が削られている。

堀の西側で不定形土坑358号が、東側で方形土坑357号が見られる。後者からは土師器小片が2片出土した。





- 1 暗褐色土 砂質
- 2 黒色土 白色軽石含む
- 3 暗褐色土 ローム塊含む
- 4 黒褐色土 白色軽石多量に含む

しかし南側は、根石列がかなり乱れており、本来の形状があまり残っていない。その南東側に長径3mほどの不定形の掘りこみがあるが、石室との関係ははっきりしない。

遺物は、小片も極めて少ない。

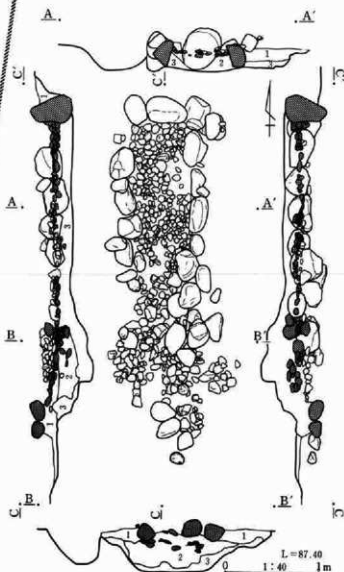
石室は、356号と似た竪穴系のもと考えられる。

### 上毛古墳総覧記載漏円墳③

東側台地の中央近くで、最も西側で検出された古墳355号遺構である。354号の堀から約10m南西の位置である。

墳丘は全く残っておらず、近世の溝067号に切られた状態で、堀の一部と石室の根石列が確認された。堀の走向から考えると、直径8m程度の墳丘規模が想定できる。

石室は、小児頭大の円礫で組まれており、南北に軸をあわせて、0.5×3mほどの内径が測れる。また掘方から20cmの高さに小礫が敷きつめられている。





## 再 葬 墓

西側台地の西端近くの塚線から14mの位置で検出された359号遺構である。

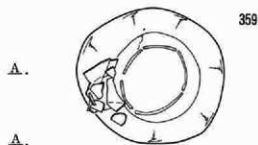
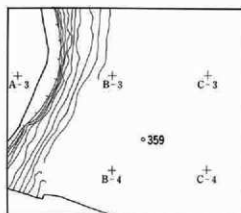
径40×3.5cmの楕円形掘りこみの中から、正位置で甕(1356)そして底部が見られない小形甕(1357)が発見された。後者は、前者の口縁位置の外側で出土しており、前者の蓋として使われたと考えられる。

大ききから2次埋葬の棺としての使用が想定できる。

両者とも内外面にススが付着しているが、本来的な使用によるのか、墓としての転用によるのかは、はっきりしない。ただし、両面ともかなり顕著な痕跡である。

この時期の土器片は、今回の調査では他には全く出土していない。同時期と考えられる遺構も見られない。

唯一関連が考えられるのは、北東10m離れた

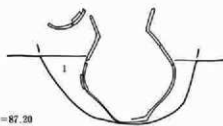


A.

A'

A.

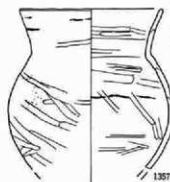
A'



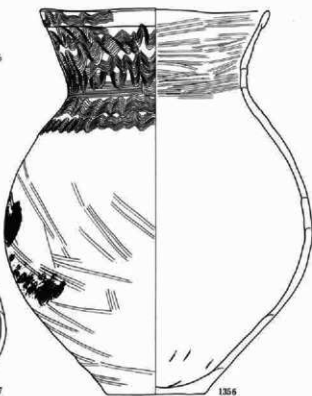
L=87.30  
0 1:10 20cm

1 褐色土 しまる

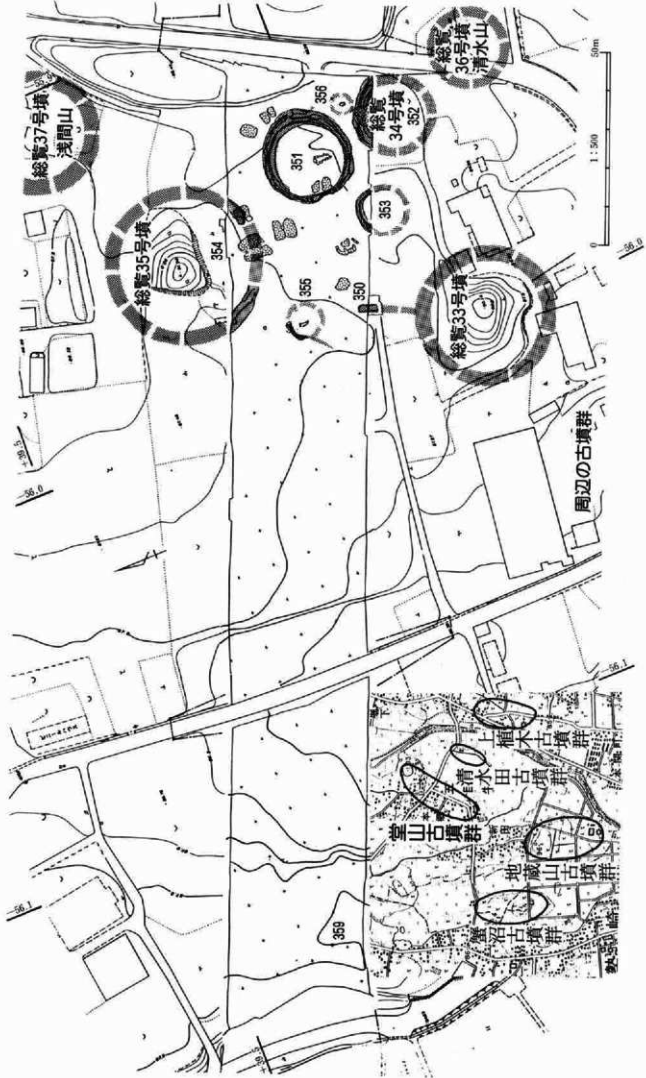
グリッドの遺構外より出土した蛇紋岩玉未成品125頁(4022)だけである。これが同時期のものかは判然としないが、西側台地での弥生～古墳時代相当遺物の出土は、他には存在しない。



359号遺構



0 1:3 10cm



総覧37号墳  
浅間山

総覧35号墳  
354

351

総覧34号墳  
352

353

総覧36号墳  
清水山

総覧33号墳

周辺の古墳群

上植木古墳群

清水田古墳群

堂山古墳群

地蔵山古墳群

藤沼古墳群

50m  
1:500



359

360

361

366

355

350

56.0

56.1

56.2

56.3

56.4

56.5

56.6

56.7

## 3 ま と め

## (1) 遺構と遺物

## A 古代

今回の調査で検出されたのは木炭窯(350号)の一部だけである。しかし煙道に投入されていた鉄滓(次頁分析報告参照)の存在や少し離れて転用されていた鋳型(4135)を考えると、用途は製鉄用の木炭の製造であったことが十分考えられる。周辺のどこかに製鉄炉が存在したことは、確かであろう。(東隣の五目牛清水田遺跡でも鉄滓が出土している。)

遺構のあり方を見ると、遠くても10mも南に延びれば、現在も墳丘が残る赤堀村33号墳の堀の推定線に交わる。そのためこの窯は、この古墳の堀を利用して水平に掘られた全長15mほどの規模と推定することができる。残存木炭のC14年代(分析報告参照)はA D 460±80年であったが、天上崩壊後かなりしてから堆積していた浅間B軽石(1102年降下)の存在と併せて考えれば、33号墳の年代は不明だが、この木炭窯の使用時期は、7、8世紀頃ではないかと推定できる。

## B 古墳時代 (参考 赤堀町教育委員会「地藏山の古墳1, 2」、1977, 78など)

五目牛の古墳の総数は最低でも120基以上が知られるが、今回の調査のものは、最大の地藏山古墳群(シンデン地区約80基、群馬大学・赤堀町教委調査)に次ぐ堂山古墳群(ハラ地区約30基)の一部をなしている。

堂山古墳群は、前頁の図に示したように、堂山及びその南に延びる台地の東縁辺に展開している。

今回の調査のものと同接する古墳の「上毛古墳総覧」(昭和13年)による概要は、次の通りである。

遺構番号	総覧番号	名称	墳形	直径	内部施設	外部施設	出土遺物(「」は総覧記載遺物)
351号遺構	記載漏	——	円墳	18m	横穴	人物円筒埴輪	須恵器・土師器・玉・鉄鏃
352号遺構	34号墳	諏訪山	円墳か	15mか	横穴か	円筒埴輪	土師器・「金環・刀」
353号遺構	記載漏	——	円墳か	10mか	不明	円筒埴輪	土師器・須恵器
354号遺構	35号墳	——	円墳	35mか	横穴	不明	須恵器・鏃・「鉄鏃」
355号遺構	記載漏	——	円墳	8 mか	竪穴系	不明	なし
356号遺構	記載漏	——	円墳か	6 mか	竪穴	不明	鉄刀子
——	33号墳	——	円墳か	30mか	不明	墓石	
——	36号墳	清水山	円墳か	不明	不明	不明	
——	37号墳	浅間山	円墳か	不明	不明	不明	「刀」

以上の中で調査時点で墳丘が残っていたのは、33・35号墳だけである。35号墳の規模が最大だが、近世の絵図にはこの中で浅間山のみが記されている。

351号の石室は羨道が下り勾配を持っており、横穴式石室では古い様相と思われる。石室内に副葬されていた須恵器蓋坏(1334, 35)は6世紀後半と考えられたため、この古墳群は6世紀代に継続して築造されただろう。

## C 弥生時代

(参考 伊勢崎市教育委員会「西太田遺跡」、1982 当事業団「五目牛清水田遺跡」、1992)

再葬墓の身(1356)は、利根川以西に濃く分布する後期の樽式土器の中でも後半に考えられる。また蓋(1357)は、赤城山南麓に一つの中心がある赤井戸式土器として認識できる。周辺の近い時期の遺跡は、1.3km南に間之山遺跡(伊勢崎市波志江町)、3.5km南に喜多町遺跡(同市喜多町)が知られている。

なお東隣の五目牛清水田遺跡からは、遺構に伴わない状態で同時期の土器片が見られ、さらに古墳時代初期の集落も存在している。

## (2) 分 析

### A 五目牛南組遺跡木炭窯出土鉄滓の金属学的調査

大 澤 正 己

#### 概 要

6世紀頃から浅間B経石期(1102年降下)に比定される木炭窯350号遺構から出土した鉄滓3点を調査して次の事が明らかになった。

- 1) 鉄滓は、製鉄炉の炉壁が高温で融解したガラス質滓である。このガラス質滓の表層側には半還元砂鉄粒子が残存しており、製鉄炉の炉壁片と推定される。
- 2) 炭窯は、半地下式の登り窯タイプである。この炭窯の近くで製鉄操作があったと想定されるが、その廃炉壁を炭窯の煙出し部や、焚口袖石として再利用されたと考えられる。製鉄炉炉壁の転用再利用は、列島内の製鉄遺跡で、時折見受けられる現象である。

#### 1. いきさつ

五目牛南組遺跡は、群馬県佐波郡赤堀町大字五目牛字甲中通に所在し、旧石器時代から縄文、古墳、近世、近代と断続する複合遺跡である。このうちの古墳期から浅間B経石期の間で操業された木炭窯より検出された鉄滓の調査を群馬県埋蔵文化財調査事業団より要請された。

なお、今回調査の木炭窯1基からは、ガラス質鉄滓が26点(通気孔側：24点、焚口側2点)出土し、他に燻13点、木炭(長さ35cm)1点が得られている。この木炭窯周辺には、炉壁厚み10cm前後を計る箱形炉の存在が推定されるが、今回の調査ではそれまでの検出はなされていない。

#### 2. 調査方法

##### 2-1. 供試材

今回調査をした3点のガラス質滓の履歴と調査項目をTable. 1に示す。

Table. 1 供試材の履歴と調査項目

符号	試 料	出土位置	出土高さ	計 測 値		調 査 項 目	
				大きさ (cm)	重量 (g)	顕微鏡組織	化学組成
2148	ガラス質滓	通気孔側	底から50cm	22×17×9	1300	○	○
2149	ガラス質滓	通気孔側	底から40cm	26×14×11	1650	○	○
2154	ガラス質滓	焚口側	底から40cm	19×14×12	2100	○	○

##### 2-2. 調査項目

- (1) 肉眼観察 (2) 顕微鏡組織 (3) 化学組成

#### 3. 調査結果と考察

I区中央部南側では、木炭窯の一部が確認された。底幅1.6m、高さ1.8mの断面は半円形の水平な竈状の窯体構造を呈し、煙道部などからは鉄滓が数多く検出された。天井部崩落土の上は約50cmの黒褐色土層をはさんでB経石の純層堆積が見られ、また窯体の走向を延長すると、総覧記載古墳に当たる。この古墳の掘を利用して水平に掘られた製鉄用木炭窯と考えられる。

## 1) 2148 ガラス質滓

(1) 肉眼観察 表皮は褐色を呈し、船状なめらか肌と気泡露出でスポンジ状の個所が存在し、いずれもガラス質である。裏面はスス入り粘土で胎土は比較的精製されている。

(2) 顕微鏡組織 Photo. 1の①～⑨に示す。①の組織が全体の大部分を占める。暗黒色ガラス質スラグで微量の白色粒状の金属鉄が残存する。また、②～⑨は表層側に存在する半還元状の砂鉄粒子である。②③は、砂鉄粒子から金属鉄(Metallic Fe)が抽出されて、その残渣であるウルボスピネル(Ulvöspinel:  $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ )が成長しつつある姿をとどめている。同じく淡褐色木ずれ状のファイヤライト(Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ )は、これも成長肥大化する寸前の姿を呈している。③の白色不定形は金属鉄(Metallic Fe)が、まだ残存する様子を示す。

半還元砂鉄粒子の径から推測すると、製鉄原料となった始発砂鉄の粒径は200～300 $\mu$ を有し、粒子の角ばった形状からみて、摩耗は左程ひどくなく川砂鉄らしい。

(3) 化学組成 Table. 2に示す。該品はガラス質であるので鉄分は少ない。全鉄分(Total Fe)は6.22%に対して、ガラス質成分( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ )は87.60%で大部分がガラス質である。また、顕微鏡組織で認められた様に、表層近くに留まる半還元砂鉄粒子の存在で、砂鉄特有元素の二酸化チタン( $\text{TiO}_2$ )が1.18%と、ガラス質成分では高目で検出された。他の随伴微量元素らは、とりたてて言及する程のものではなかった。

## 2) 2149 ガラス質滓

(1) 肉眼観察 表皮側は灰黒色を呈し、多くの気泡を発して軽石状の肌となる。木炭痕を残す。また、鉄錆はほとんど認められない。裏面は淡赤色の炉壁粘土である。

(2) 顕微鏡組織 Photo. 2の①～③に示す。暗黒色ガラス質スラグに微粒金属鉄と、未還元砂鉄粒子(②)や、半還元砂鉄粒子を留める。また局部的に淡灰色木ずれ状のファイヤライト(Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ )を晶出する。なお黒色球状部は気泡である。

該品も製鉄炉の炉壁で、2148炉壁より熱影響が強く上部に位置したと推定される。

(3) 化学組成 Table. 2に示す。該品が3点の炉壁粘土で最も粘土原料の初期成分を現す。全鉄分(Total

Table. 2 鉄滓の化学組成

試料番号 種別 推定年代	2148 ガラス質滓 6C～12C	2149 ガラス質滓 6C～12C	2154 ガラス質滓 6C～12C
全鉄分 Total Fe	6.22	2.96	5.40
金属鉄 Metallic Fe	0.10	0.11	0.09
酸化第1鉄 FeO	2.06	0.84	1.22
酸化第2鉄 Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	6.46	3.14	7.60
二酸化珪素 SiO <sub>2</sub>	57.26	59.83	58.26
酸化アルミニウム Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	21.11	22.64	17.33
酸化カルシウム CaO	3.85	4.82	6.63
酸化マグネシウム MgO	2.42	2.33	3.43
酸化カリウム K <sub>2</sub> O	0.884	1.12	1.17
酸化ナトリウム Na <sub>2</sub> O	2.08	2.72	2.76
酸化マンガン MnO	0.14	0.65	0.15
二酸化チタン TiO <sub>2</sub>	1.18	0.96	0.82
酸化クロム Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.02	0.07	0.03
硫黄 S	0.005	0.005	0.003
五酸化燐 P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.12	0.12	0.15
炭素 C	0.04	0.03	0.01
バナジウム V	0.03	0.02	0.02
銅 Cu	0.004	0.006	0.004
渣滓成分	87.604	93.46	89.58
渣滓成分/Total Fe	14.084	31.574	16.589
TiO <sub>2</sub> /Total Fe	0.190	0.324	0.152

Fe)は2.96%と少なく、ガラス質成分( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ )は93.46%である。また、二酸化チタン( $\text{TiO}_2$ )は0.96%が含有される。炉壁粘土は耐火度を有しなければならないが、これに影響するのは酸化アルミニウム( $\text{Al}_2\text{O}_3$ )で、多し程耐火度は上昇する。酸化アルミニウム( $\text{Al}_2\text{O}_3$ )は22.64%であった。通常粘土より高目である。

次に製鉄炉の炉材粘土が耐火材料として具備しなければならない性質を述べると次の点である。

- ① 高温で溶融しないこと。
- ② 高温で容易に軟化しないこと。
- ③ 温度の急変に耐えること。
- ④ 高温において形状が変化しないこと。
- ⑤ 溶滓その他の侵食に抵抗性のあること。

⑤の侵食性に対しては、全面的な問題ではない。古代製鉄の場合、製錬過程で煤溶剤を添加しなくて、炉材粘土中に含有される塩基性成分のカルシウム(Ca)、マグネシウム(Mg)を有する程度有していれば、造滓反応が起こることが製鉄反応にとって望ましいと考えられる。2149炉材は製鉄炉材として優れた性状を示したと考えられる。

### 3) 2154 ガラス質滓

① 肉眼観察 表皮は灰褐色を呈し、船状なめらか肌で局部的に気泡を露出する。また、金属鉄の錆化した部分も散在する。裏面の粘土は、前述した2148や2149と共通した外観である。

② 顕微鏡組織 Photo. 2の④～⑧に示す。該材も大部分は暗黒色ガラス質スラグであり、これに局部的に淡灰色木ずれ状のファイヤライト(Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ )を析出したり、半還元砂鉄粒子を留めた状態を残す。⑤⑥は砂鉄粒子からウルボスピネル(Ulvöspinel:  $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ )へ変化を開始する寸前の状態を呈する組織である。これも製鉄炉の炉壁と証明できた。

③ 化学組成 Table. 2に示す。該品は前述した2148と2149の中間的なガラス質滓である。全鉄分(Total Fe)は5.40%、ガラス質成分( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ )は89.58%で、その内の塩基性成分の酸化カルシウム(CaO)6.63%、酸化マグネシウム(MgO)3.43%は多い。二酸化チタン( $\text{TiO}_2$ )は0.82%含有される。3点の炉壁粘土は、同一炉材粘土を使用した結果になった。この炉材粘土は製鉄にとって良好な性状をもったものと推察された。

## 4. まとめ

6世紀代の古墳周溝を利用して構築された登り窯状木炭窯350号遺構から検出された3点の炉壁溶融ガラス質滓を調査して次の点が判明した。

3点の炉壁溶融ガラス質滓は、製鉄炉の炉壁と推定される。溶融ガラス質滓の表面近くには、製鉄原料に由来する半還元砂鉄粒子が懸たく状態で検出された。砂鉄粒子は、やや角ばって摩耗は少なく、川砂鉄か山砂鉄の可能性が高い。粒子直径は、200～300 $\mu$ を計る。

一方、炉壁粘土は、酸化アルミニウムを22.64%含有し、耐火度の優れた性状を有する品位であった。なお、炉壁粘土は、厚みが10cmで、ほぼ平坦面を有するところから、箱形炉が想定される。木炭窯が構築される前に、その周辺で製鉄炉の構築があり、その廃材炉壁が炭窯で再利用されたと推定される。

(I) 2148  
 五目牛南組遺跡  
 (木炭窯通気孔側出土)  
 鉄滓 (ガラス質)  
 (半還元砂鉄粒子)  
 ①②④⑥⑦⑧⑨×100  
 ③⑤ ×400  
 外観写真 1/3

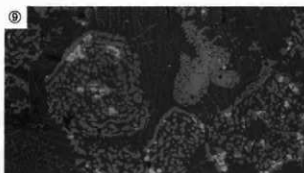
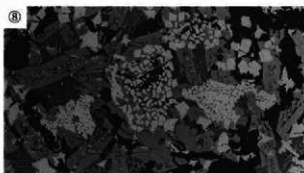
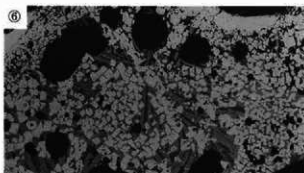
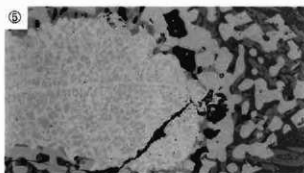
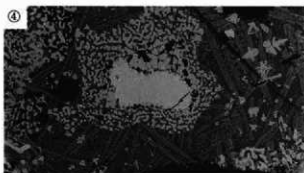
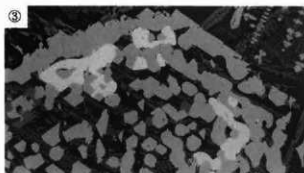
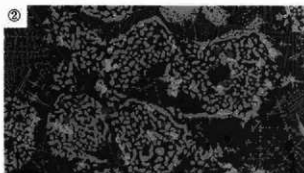
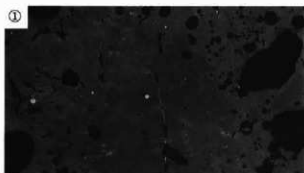
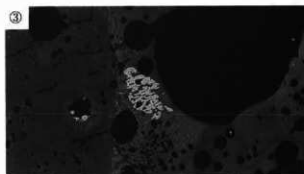
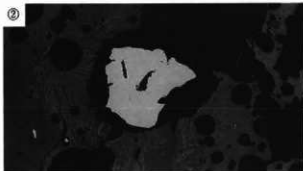
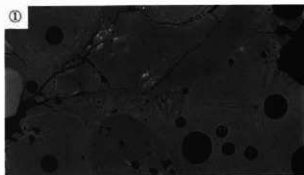


Photo. 1 鉄滓の顕微鏡組織

(2) 2149  
 五日牛南組遺跡  
 (木炭窯通気孔側出土)  
 鉄滓 (ガラス質)  
 (半還元砂鉄粒子)  
 ①②③×100  
 外観写真 1/2



(3) 2154  
 五日牛南組遺跡  
 (木炭窯 焚口側出土)  
 鉄滓 (ガラス質)  
 (半還元砂鉄粒子)  
 ④⑤⑦ ×100  
 ⑥⑧ ×400  
 外観写真 1/2

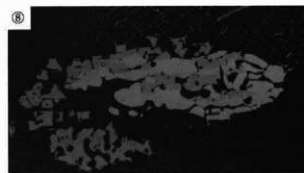
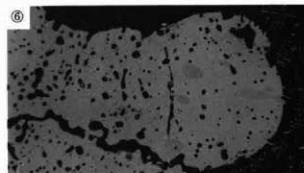
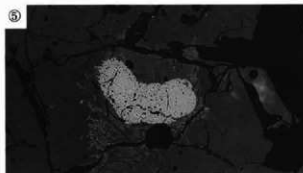


Photo. 2 鉄滓の顕微鏡組織



## B 鉄製品の表面に付着した繊維類の検鏡結果

(財)京都市埋蔵文化財研究所 岡田文男

繊維の付着した鉄製品2点について光学顕微鏡による断面観察を行ったので結果を報告する。

分析の方法は金属表面に残る錆に覆われた繊維を錆ごと採取し、エポキシ樹脂に包埋のち、研磨して薄片に仕上げ透過光による顕微鏡観察を行ったものである(参考文献1)。

### 結 果

**繊維付着刀子状鉄製品(遺物番号2143)(原色写真61~65)**

金属の表面全体に布目が観察できるが、布そのものは錆落しの際にほとんど剥落しており、ごく一部に繊維が残るだけである(原色写真61,62)。布は平織りで、糸は麻糸・綿糸とも右撚りである。顕微鏡下で観察できた繊維断面には髄腔があり(原色写真63~65)、植物性の繊維であることがわかる。繊維断面の大きさは最大長30 $\mu$ m、最大幅15 $\mu$ m程度であり、植物繊維のなかでは断面径が小さい部類に入る(参考文献2)。繊維素材については断面径の比較的大きい麻の類よりも、樹木に由来する可能性が考えられる。

**刀子茎付着繊維(遺物番号2124)(原色写真66~69)**

刀子の茎に付着した繊維は本来茎に巻き付けてあったもので、金属表面に密着し、鉄錆と一体になっている(原色写真66)。繊維は束状で撚りが見られず、布や撚り糸を巻き付けたものではない。繊維を単体で抽出することが困難だったので、錆ごと顕微鏡標本を作製した結果、2143類似の繊維断面を一部に観察できた(原色写真67~69)。繊維は2143ほど鮮明ではないが、形状・大きさから2143同様の植物繊維に由来するものと推定する。

### 参考文献

- (1) 岡田文男(1991)「出土繊維製品の観察」日本文化財科学会第8回大会発表要旨集
- (2) 布目順郎(1988)「絹と布の考古学」雄山閣

## C 五目牛南組、五目牛清水田遺跡出土の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター 本 田 光 子

五目牛南組351号遺構(古墳)および五目牛清水田4区46号住居跡、同5区1号墳出土の赤色物が何であるかを知るために、顕微鏡観察・蛍光X線分析・X線回折・X線マイクロ分析を行った。

試料の一覧と分析結果及び推定される赤色顔料の種類を第1表に示し、若干の考察を試みた。

### 試 料

No.1は土砂に濃赤色の顔料の小塊が多く認められた。No.2はNo.1に比べて土砂の量が多い。No.3は少量ではあるが顔料の小塊が点々と裸に附着している。南組351号遺構出土の3点は出土地点や状態は異なるが、混入している土砂を除くと(No.3は鏝から削り取る)肉眼的にはほぼ同じ明るく濃い赤色である。清水田4,5区の2点は土砂の中に比較的多い顔料の小塊が認められた。No.4はNo.1~3と同じ濃い赤色であるが、No.5はこれらに比べると明るく薄い赤色である。以上の試料を実体顕微鏡で調整(混入土砂・夾雑物の除去)した。この中から針先に付く程度を採りプレバートを作成し、残りを他の分析に供した。

### 顕微鏡観察

光学顕微鏡により透過光・反射光で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類を判断するものである。古代の赤色顔料としてはベンガラ(酸化第二鉄)・朱(硫化水銀)・鉛丹(四酸化鉛)の3種が考えられるが、三者は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状・色調等の違いから検鏡により見極めがつく。今回の試料には、赤色顔料としてはベンガラ粒子が認められ、朱粒子は認められなかった。No.1~3には透過写真(Fig.1)に示すように、いわゆるパイプ状を呈する管状粒子が含まれる。試料の状態から3点は同一の赤色顔料と判断した。No.4は微小なベンガラ粒子のみからなる。No.5はやや大きめの破砕されたベンガラ(鴉鉄鉱?)粒子が含まれるものの、大半はいわゆる土砂の粒子が多く、その表面に微小なベンガラ粒子がまぶされたものから成っている。

### 蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業(株)製蛍光X線分析装置を用い、X線管球;クロム対陰極、印加電圧;40kV、印加電流;20mA、分光結晶;フッ化リチウム、検出器;シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲(2θ);10~65°、走査速度;2θ/分、時定数;0.5秒の条件で測定を行った。赤色顔料の主成分元素としては鉄のみが検出され、水銀は検出されなかった。

### X線回折

赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的として、宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業(株)製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球;クロム対陰極、フィルター;バナジウム、印加電圧;25kV、印加電流;10mA、検出器;シンチレーション計数管、発散および受光側スリット;0.34°、照射野制限マスク(通路幅);4mm、ゴニオメーター走査範囲(2θ);30~66°、走査速度2θ<sup>2</sup>/分、時定数;2秒、フルスケール;400CPSの条件で測定を行った。赤色の由来となる鉱物として赤鉄鉱(Hematite)が同定された。No.3とNo.4は特に強いピークが認められ、No.5はそれらに比べるとやや弱い。(Fig.5)

### X線マイクロ分析

顕微鏡観察・蛍光X線分析・X線回折の分析結果を踏まえて新日鉄TACセンターにX線マイクロ分析を

依頼した。装置は日本電子社製のCMA(コンピューターマイクロアナライザー)である。試料調整や定量分析の位置については光学顕微鏡による検閲結果に基づいて依頼した。

CMA高速定性分析により検出された元素を第2表に示す。主成分元素は鉄と珪素である。この中でナトリウム(Na)・マグネシウム(Mg)・マンガン(Mn)・アルミニウム(Al)・珪素(Si)・カリウム(K)・カルシウム(Ca)・チタン(Ti)・鉄(Fe)についてCMA定量分析を行い、それぞれ酸化物としての定量値を第3表に、電子顕微鏡写真に分析位置を示す。Fig.2～4が両分析により明らかになったことは、酸化第二鉄の含有量がNo.1、4は多く、No.5は極端に少ないこと、関東地方ではチタン(Ti)含有量の多いベンガラが広く分布するといわれている(註1)が、今回も検出されている。今回の定量値は測定点が少ないのであくまでも半定量値であり、他に直接比較できる定量値も少ないので(註2)、今後の検討に待たねばならない。No.5は混入土砂を分析している可能性もあるのだが、逆にベンガラ粒子の絶対量が少ないことがわかる。

### ま と め

以上の結果から五日牛南組351号遺構および五日牛清水田4区46号住居跡、同5区1号墳出土の赤色物は赤色顔料ベンガラである。南組351号遺構出土の3点は同一の赤色顔料で、管状粒子を多量に含み、酸化第二鉄含有量が高いベンガラである。清水田4区46号住居跡出土のベンガラは管状粒子を含まないが、酸化第二鉄含有量が高い。清水田5区1号墳出土のベンガラは酸化第二鉄含有量が少なく、管状粒子も含まない。

一般にベンガラというのは主成分元素が鉄であり、主成分鉱物は赤鉄鉱である赤色顔料を指す。出土赤色顔料の「ベンガラ」の場合は主成分鉱物として赤鉄鉱の他褐鉄鉱(針鉄鉱・鱗鉄鉱等)、非晶質の褐鉄鉱があり、これらの混合物であることも多い。そのためX線回折により赤鉄鉱が同定されない場合も少なくない。色は粒子の大きさと左右されるので一概には言えないが、赤鉄鉱と非晶質の褐鉄鉱が混合している場合、後者の量が多いと赤色が強くなるのではないともいわれている(註3)。一方、主成分の定性分析で鉄が確認され、他に水銀・鉛が検出されなければ、主成分鉱物として赤鉄鉱(Hematite)が同定されなくともベンガラであるという判断もごく一般的になされている。さらに主成分の定量分析を行い、鉄の含有量の多少からベンガラの種類(品位・生産地)を分けることもある(註4)。また、出土ベンガラの粒子に種々の形状があることもわかってきており、本例のようにパイプ状を呈する特異な粒子は産地を示す指標ではないかという指摘もある(註5)。

今回の資料は出土ベンガラの多様性をはっきり示したものであり、あるいはこれが出土遺跡・出土地点の性格を表しているのかもしれない。これらのパターンを識別することが考古学的に有効であれば、古代からの情報の理解が深まるわけである。赤色顔料の分析結果を比較検討できる一定条件つまり実測ポイント(粒子の状態・構成、粒度分布、主成分元素、主成分鉱物の定性・半定量、等)を満たす分析作業を続けること、その結果を何よりも考古学的に集積していく必要があろう。

今回調査の機会を頂きました群馬県埋蔵文化財調査事業団坂井 隆氏、藤巻幸男氏、X線分析の測定をお引受け下さった宮内庁正倉院事務所成瀬正和氏、CMA分析についての細かい注文にご配慮戴きました新日本製鐵㈱八幡製鐵所TACセンター藤田亮輔氏に感謝致します。

### 註

1 矢島徳重・中村忠晴(1975)「古代の朱色顔料と辰砂について」早稲田大学教育学部学術研究24

2 X線マイクロ分析によりベンガラ粒子そのものを分析した定量値はほとんどない。東京国立博物館同館目録古墳遺物(近畿1)1988にはX線マイクロ分析による定量値が公表されているのだが、分析位置が示されていないので不明である。安田博幸氏によりヨウ素法測定

### III 弥生・古墳・古代

法と原子吸光法による多くの定量値が報告されている。(1983)「古代日本の知恵と技術」朝日カルチャーブックス28等 群馬県前橋市舞台遺跡1号墳出土ベンガラについても $Al_2O_3$ :6.94%、 $Fe_2O_3$ :17.82%、 $TiO_2$ :0.67%etcの報告があり、鉄含有量が多いと報告されているが、試料調整や分析法が異なるため直接には比較できない。

- 3 中村忠晴(1961)「群馬県東下井出および清里庚申塚遺跡出土の赤色顔料について」『清里・庚申塚遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 4 安田博幸(1983)「古代日本の知恵と技術」朝日カルチャーブックス28
- 5 永嶋正春(1985)「縄文時代の漆工技術」国立歴史民俗博物館研究報告6

第1表 試料一覧と分析結果

No	試料採取位置	蛍光X線分析	X線回折	顕微鏡観察	赤色顔料種類
1	南組351号遺構石室床			ベンガラ(P)	ベンガラ
2	南組351号遺構石室入口			ベンガラ(P)	ベンガラ
3	南組351号遺構石室入口	鉄	赤鉄鉱	ベンガラ(P)	ベンガラ
4	清水田4区46号住居跡	鉄	赤鉄鉱	ベンガラ	ベンガラ
5	清水田5区1号墳石室擾乱	鉄	赤鉄鉱	ベンガラ	ベンガラ

第2表 CMA高速定性分析結果

No	検出元素	( )内はBlank
1	Al, Si, K, Ca, Fe, (Na, Mn, Te, Th)	
4	Al, Si, S, K, Ca, Fe, Br (Mg, Cl, Ti, Ga)	
5	Na, Mg, Al, Si, K, Ti, V, Mn, Fe, Br, Ag, Th, (Sb, Hg)	

第3表 CMA定量分析値

単位:(%)

No		$Na_2O$	$MgO$	$Al_2O_3$	$SiO_2$	$K_2O$	$CaO$	$TiO_2$	$MnO$	$Fe_2O_3$
1	A	0.026	0.041	0.485	4.81	0.006	1.13	0.006	0.139	77.99
	B	0.572	0.000	0.324	2.95	0.086	0.845	0.045	0.281	53.30
4	A	0.031	0.257	4.93	25.39	0.077	1.81	0.060	0.000	65.05
	B	0.087	0.000	6.55	2.49	0.000	0.026	0.298	0.000	79.53
5	A	6.84	0.044	22.72	60.95	3.124	5.84	0.083	0.016	1.69
	B	0.000	0.000	0.899	1.95	0.000	0.000	0.081	0.413	3.21

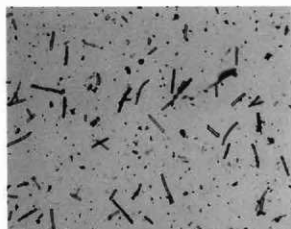


Fig 1 No 1の透過写真(約500倍)

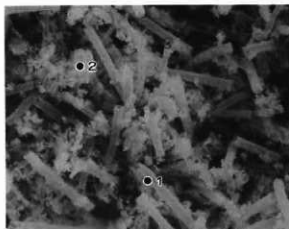


Fig 2 No 2の電子顕微鏡写真(約2000倍)

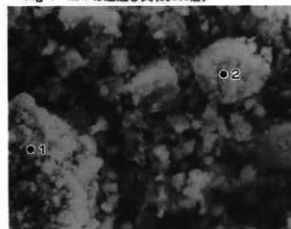


Fig 3 No 4の電子顕微鏡写真(約2000倍)

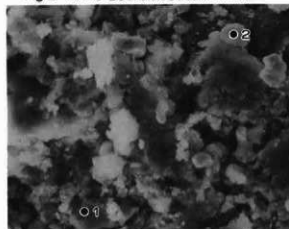


Fig 4 No 5の電子顕微鏡写真(約2000倍)

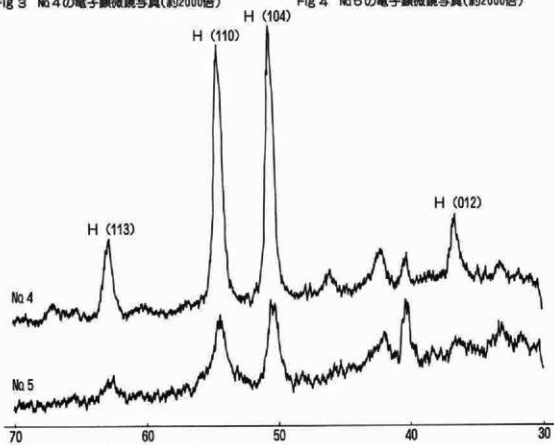


Fig 5 X線回折図 (H: 赤鉄鉱)

回折角 (Crkad 2θdeg) 149

## D 五目牛南組遺跡の炭化物およびテフラ

鈴木 茂・菱田 豊・藤根 久(パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

(中略)

土坑112号遺構および261号遺構から検出された炭化物(草本植物)350号遺構については、植物珪酸体(機動細胞)の検討を行い(担当 鈴木)、土坑162号遺構・256号遺構および木炭窟350号遺構フク土については、テフラの検討を行い(担当 菱田)、木炭窟第1炭化物層の炭化物(材)については、樹種の同定を行った(担当 藤根)。また、木炭窟から出土した炭化材については、学習院大学年代測定室の木越邦彦氏に<sup>14</sup>C年代測定をお願いした。

### 2. 各論

#### a. 炭化物(草本植物)の植物珪酸体

##### (1). 試料と方法

261号遺構および112号遺構において埋積土とともに採取された炭化物(草本植物)は、実体鏡による観察からイネ科植物である可能性が高い。(中略)

採取された植物遺体について、現生イネ科植物の標準作製と同様の方法を用いて植物珪酸体(ここでは機動細胞珪酸体)の有無を調べた。すなわち埋積土中より植物遺体を取りだし、付着している土壌を水の吹き付けや超音波洗浄などで取り除き、乾燥させる。次に乾燥した試料を管瓶にとり電気炉を用いて灰化する。灰化する行程は藤原(1976)にほぼしたがって行った。その行程ははじめ毎分5°Cの割合で温度を上げ、100°Cにおいて15分ほどその温度を保ち、その後毎分2°Cの割合で550°Cまで温度を上げ、5時間その温度を保持して、試料の灰化を行った。灰化した試料についてグリセリンによりプレパラートを作製し、生物顕微鏡下で観察した(600倍)。

##### (2). 結果および考察

観察の結果、多数の機動細胞珪酸体が認められ、以下にそれらの記載を示す。

①261号遺構：断面形態(図版1-3)はイチョウの葉形をしており、縦長は平均40.42 $\mu$ m(最大48.45 $\mu$ m、最小35.70 $\mu$ m)、横長の平均が35.96 $\mu$ m(最大40.80 $\mu$ m、最小30.60 $\mu$ m)である。側面形態(図版1-4)は波形を持つ(表面および裏面側)長方形を呈し、側長の平均は40.16 $\mu$ mであるが、最大(61.20 $\mu$ m)と最小(22.95 $\mu$ m)の差が大きいのが認められる。側面には1ないし2本の稜線がみられる。表面形態(図版1-5)は細長い長方形を呈し、側面にみられる稜線部分でくさび形に突出している。裏面形態(図版1-6, 7)は側面側に波形を持つ長方形をしており、稜線の数は3~8で、その間隔は狭いもので5.10 $\mu$ m、広いもので12.75 $\mu$ mである。

以上のような形態を有する機動細胞珪酸体は杉山・藤原(1986)によるタケ亜科植物のグループのAタイプに属し、その中ではメダケ属のネザサ節と同様であると考えられる。また現生のアズマネザサ(ネザサ節)について上記と同様の形態的特徴が観察され、これらのことからネザサ節型の機動細胞珪酸体と同定した。

(中略)

②112号遺構：断面形態(図版2-10)はイチョウの葉形をしており、側面部分に突起が、表面部分にくぼみがあり、また裏面部分に存在する亀甲状文様が一部みられる。縦長は平均42.84 $\mu$ m(最大66.30 $\mu$ m、最小35.70 $\mu$ m)、横長の平均が38.89 $\mu$ m(最大45.90 $\mu$ m、最小25.50 $\mu$ m)である。側面形態(図版2-11)は縦に長い、あるいは横に長い長方形を呈し、側長は平均28.18 $\mu$ m(最大40.80 $\mu$ m、最小17.85 $\mu$ m)で、側面には1本の稜線がみ

られ、側面部分に突起として観察される。表面形態(図版2-12)は細長い長方形を呈し、側面にみられる稜線部分でくさび形に突出している。裏面形態(図版2-13)は横あるいは縦に長い長方形をしており、一面に小さな亀甲状文様がみられる。

以上のような形態を有する機動細胞珪酸体については藤原(1976)や杉山(1989)に示されているイネの形態と同様と考えられた。またイネ(コシヒカリ)の現生標本について、同様の形態的特徴が観察されたので112号遺構より得られた植物遺体についてはイネと判断した。

## b. 土坑および木炭窯中のテフラ

### (1). 分析方法

テフラの検討を行った試料は、①350号遺構(3層軽石)、②256号遺構(5層)、③162号遺構(1層軽石)の3試料である。

各試料について、流水による湿式ふるい分けをし、4φ(0.063mm)以上の粒子を超音波洗浄をした後、実体顕微鏡により観察して軽石や遊離結晶などについて記載を行う。次に、それらの試料の中から軽石のみを取り出して、乳鉢で粉碎し、重鉱物組成を調べる。軽石ガラスと斜方輝石について温度変化型屈折率測定装置(RIMS-86)を用い、横山ほか(1986)、横山・山下(1986)の方法に従って測定し、屈折率の範囲(レンジ:range)、平均値(mean)、最頻値(mode)を示す。

### (2). テフラの記載

#### ①350号遺構(木炭窯 埋土3層軽石)

灰黄色(2.5Y 7/2)から淡黄色(2.5Y 7/3)を呈する軽石で、暗黄色(2.5Y 5/2)のものや、やや褐色がかってガラス状の光沢と透明感がある軽石も少量含まれる。軽石の粒径は1.0mm程度のものが多く、最大粒径は2.0mmであり、気泡形態は円形～楕円形である。最大粒径1.0mm程度の黒から黒灰色のスコリアが少量含まれる。遊離結晶の最大粒径は0.5mmで、斜長石・斜方輝石・単斜輝石・磁鉄鉱などがみられる。また、黒灰色を呈し、最大粒径は1.0mmで、やや緻密、ガラス質で斜長石や輝石類の斑晶を含む安山岩質の岩片がみられる。軽石中の重鉱物は斜方輝石・単斜輝石が多く含まれ、磁鉄鉱がみられる。鉱物の屈折率のレンジは軽石ガラス、Gl(n):1.5239-1.5297で、斜方輝石、Opx(y):1.7070-1.7099である。

#### ②256号遺構(土坑 埋土5層)

灰白色(2.5Y 8/1)を呈する軽石で、粒径は1～1.5mmのものが多く、最大粒径は2.5mmである。軽石は円形～楕円形の気泡が集合した形態をしたものが多く、泡が繊維状に伸びた形態を示すものもみられる。灰白色の軽石が主体であるが、灰黄色(2.5Y 6/2)を呈し、灰白色のものより発泡がやや悪い軽石が少量含まれる。遊離結晶の最大粒径は1.0mmで、斜長石・斜方輝石・単斜輝石・磁鉄鉱などが含まれる。粒径0.5mm程度の黒灰色の安山岩質の岩片がごく少量含まれる。また、円磨されたチャートの礫など、テフラ起源以外の物質も少量含まれる。分析結果からは、軽石中の重鉱物は斜方輝石、単斜輝石が多く、磁鉄鉱がみられる。鉱物の屈折率のレンジは軽石ガラス、Gl(n):1.5073-1.5106で、斜方輝石、Opx(y):1.7085-1.7135である。

#### ③162号遺構(土坑 埋土1層軽石)

灰黄色(2.5Y 6/2)から淡黄色(2.5Y 7/3)を呈し、やや風化して軟質の軽石であり、含まれる量は全体的に少ない。軽石の粒径は1.0mm程度のものが多く、最大粒径は1.7mmである。気泡形態は円形～楕円形である。ごく少量であるが、最大粒径1.0mmの黒灰色のスコリア・灰白色の軽石が含まれる。遊離結晶の最大粒径は1.5mmで、斜長石・斜方輝石・単斜輝石・磁鉄鉱などが含まれ、斜長石が特に多くみられる。また、軽石と同程

### III 弥生・古墳・古代

度の大きさの土壌の凝集した硬質な粒子が比較的多く含まれる。円磨されたチャート礫や風化粒子のようなテフラ起源以外のものが比較的多くみられる。軽石中の重鉱物は斜方輝石・単斜輝石が主体で、磁鉄鉱が含まれる。鉱物の屈折率のレンジは軽石ガラス、Gl(n):1.5160-1.5205で、斜方輝石、Opx( $\gamma$ ):1.7069-1.7109である。(中略)

#### (3). テフラの対比

(中略)

試料①は軽石の色調は灰黄色～淡黄色からなり、黒から黒灰色のスコリアや安山岩質の岩片が少量ではあるが含まれ、軽石ガラスの屈折率のレンジが従来のAs-Bの測定値(1.524-1.532)とほぼ一致すること、検出されるテフラ層の層相が安定していることから、As-Bに同定・対比される。

試料②は軽石の色調は灰黄色の軽石を多少混じるが、多くが灰白色からなり、軽石ガラスの屈折率のレンジが従来As-Aの測定値(1.507-1.512)にほぼ一致することから、多くがAs-Aに同定される。ただし、テフラ以外の礫や風化粒子が比較的多く見られることから、二次的に堆積した可能性が高く、層的には対比出来ない。

試料③は軽石の色調は灰黄色～淡黄色からなり、軽石ガラスの屈折率のレンジはAs-Cの従来値(1.514-1.520)に一致していることから、As-Cに同定される。ただし、テフラ以外の礫や風化粒子が比較的多く見られることから、二次的に堆積した可能性が高く、層的には対比出来ない。

### C. 炭化材の密理

#### (1). 方法

樹種同定を行った炭化材は、350号遺構(木炭窯)第1炭化物層中の炭化材である。これら炭化材のうち形状が大きく、保存状態の良い試料を選び(約30試料)、実体顕微鏡を用いて観察および材の組織分類を行った。この結果、コナラ属の材組織の特徴を示すもの(大多数)、針葉樹の特徴を示すもの(1点)、道管配列が散孔性のもの(散孔材1点)に分類されることが判明した。これら3分類群の典型標本は、片刃カミソリなどを用いて横断面(木口と同義)、接線断面(板目と同義)および放射断面(柀目と同義)の3断面を作成し、直径1cmの真鍮製の試料台に固定、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡で観察した。樹種の同定は、現生標本との比較により行った。

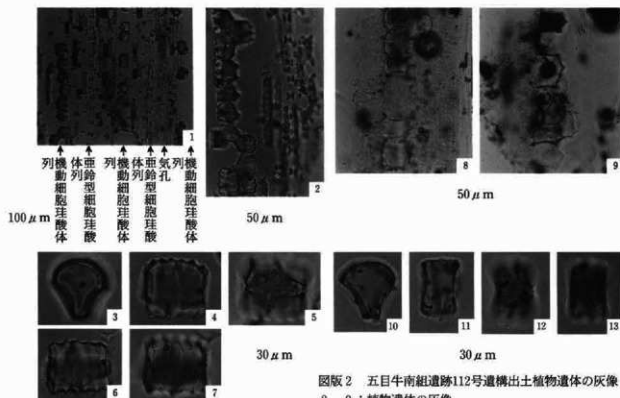
#### (2). 結果および考察

(中略)

木炭窯第1炭化物層中の炭化材は、その9割強がコナラ属クヌギ節の樹木で、他はアカマツとカキノキ属の炭化材であることが判明した。大多数がクヌギ節の炭化材であることは、遺跡周辺に極普通に生育していた可能性を示すものと考えられる。古墳時代においては、低湿地性の堆積物中の花粉化石の検討から、コナラ節やクヌギ節を含むコナラ亜属が樹木花粉中30%以上検出されていることから(例えば 辻ほか1986など)、周辺の台地上ではコナラ亜属の樹木が多く生育していたことはほぼ間違いない。こうしたことから、窯の燃料材として周辺に生育する樹木、特にクヌギ節の樹木を積極的に、しかもある程度選択的に利用したものと考えられる。なお、この第1炭化物層の炭化材を用いて行った<sup>14</sup>C年代測定の結果は、1490±80y.B.P.(A.D.460±80年 Gak-15720)である。

(後略)



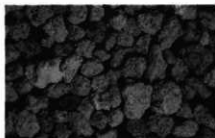


図版2 五目牛南組遺跡112号遺構出土植物遺体の灰像  
 8, 9: 植物遺体の灰像  
 10~13: 機動細胞珪酸体 (10: 断面, 11: 側面,  
 12: 表面, 13: 裏面)

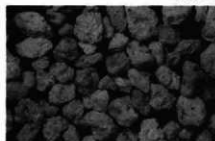
図版1 五目牛南組遺跡261号遺構出土植物遺体の灰像

1, 2: 植物遺体の灰像  
 3~7: 機動細胞珪酸体 (3: 断面, 4: 側面 (やや不十分),  
 5: 表面, 6・7: 裏面)

図版3 土坑および木炭窯中のテフラの実体顕微鏡写真



①350号遺構フク土中のテフラ (As-B)  
 scale bar: 1mm



②256号遺構中のテフラ (As-A)  
 scale bar: 1mm



③162号遺構中のテフラ (As-C)  
 scale bar: 1mm



## IV 資料



## 1 表

これまで詳細に触れられなかった事項について、以下の表でまとめた。

### (1) 遺構一覧表

遺構番号順に、旧名称・種類・時代・位置・本文頁・写真頁・規模を記した。なお時代については厳密に認定しがたいものは、近世に含めた。

### (2) 遺物一覧表

A陶磁器土器(1000台)・B金属器(2000台)・C木器(3000台)・Dその他(4000台)として番号順に、主遺構・副遺構・種類・軸/焼成(Aのみ)・形状(B・C)・材質・形状(D)・器形(A～C)・特徴・品名(D)・法量(単位mm 口径・高さ・底径の順で記す)・掲載頁・写真頁・備考を記した。遺構欄で末尾にGのつくものは、遺構外出土でグリッド番号を現している。

なお備考欄の記載については、陶磁器は大橋康二氏(佐賀県立九州陶磁文化館)と仲野泰裕氏(愛知県陶磁資料館)の鑑定によるところが大きい。キセルの時期区分は、古泉 弘「江戸の街の出土遺物」『季刊考古学』13,1985を参考にした。また石材鑑定は、飯島静男氏(群馬地質研究会)による。

### (3) 遺構出土遺物量一覧表(破片数)

本文中に図示したものも含めて、調査時点で遺物として取上げた全ての破片数を遺構番号順に記した。なお同一個体になったものも、取上げ時点での数量を示した。

### (4) 種類、器形による遺物索引(陶磁器土器)

用途を想定して大きく器形で分け、同一器形の場合は磁器・陶器・土器の順で示した。各遺物の詳細な情報は、番号より(2)表で検索されたい。

## 2 写 真

### (1) 原 色

全ての陶磁器を中心に、出土遺構のままとまりを基準に掲載した。

### (2) 単 色

原色で掲載したものを除く遺物はほぼ全点と主要な遺構について、本文掲載に準拠するように掲載した。

## 1 遺構一覽表

No	旧名称	種類	時代	位置	本文	写真	規模(m)	No	旧名称	種類	時代	位置	本文	写真	規模(m)
001	1-2竪立	竪立建物	近世	T-U-11	p.21	pl.22	3.2×5.8	060	6溝	道路側溝	近世	S-W-12	p.13	pl.19	-×49
002	3竪立	竪立建物	近世	T-9-10	p.16		5.8×6.0	061	7溝	道路側溝	近世	R-V-12	p.13	pl.19	1.3×4.5
003	4竪立	竪立建物	近世	U-9-10	p.17	pl.21	3.9×7.1	062	8溝	道路側溝	近世	R-V-12	p.13	pl.19	0.9×3.9
004	5竪立	竪立建物	近世	S-9-10	p.22	pl.22	2.8×5.0	063	9溝	建物側溝	近代	W-9-10	p.35	pl.27	0.9×6.4
005	6-7竪立	竪立建物	近世	S-10-11	p.22	pl.22	3.6×3.8	064	11溝	不明溝	近世	V-10	p.14	pl.20	2.0×1.0
006	8竪立	竪立建物	近世	R-S-11	p.23	pl.22	4.2×6.0	065	12溝	小道側溝	近世	V-10	p.14	pl.20	0.6×6.3
007	9竪立	竪立建物	近世	V-10	p.24	pl.22	2.8×4.6	066	13溝	小道側溝	近世	V-11-W-10	p.14	pl.20	0.7×1.5
008	10竪立	竪立建物	近世	V-11	p.24	pl.22	2.8×3.8	067	14溝	区画溝	近世	R-8-9-10	p.14	pl.19	0.9×3.7
009	11竪立	竪立建物	近世	U-9-10	p.17	pl.21	3.9×8.3	068	15溝	道路側溝	近世	P-8-9-10	p.45	pl.33	0.9×3.1
010	12竪立	竪立建物	近世	T-9-10	p.18		4.6×7.7	069	16溝	道路側溝	近代	P-8-9-10	p.45	pl.33	0.8×2.3
011	13竪立	竪立建物	近世	T-9-10	p.18	pl.21	4.2×6.7	070	17溝	区画溝	近代	S-6-0-7	p.41	pl.31	1.0×2.6
012	14竪立	竪立建物	近世	T-9-10	p.19	pl.21	5.6×9.2	071	18溝	不明溝	近代	O-6-7	p.41	pl.32	4.4×1.6
013	15竪立	竪立建物	近世	T-U-9-10	p.20		5.0×9.8	072	19溝	区画溝	近代	N-6	p.41		0.7×-
014	16竪立	竪立建物	近世	U-10	p.20	pl.21	2.5×3.8	073	20溝	生垣	近世	M-9	p.39		1.0×7.0
015	1建物	礎石建物	近代	N-O-7-8	p.48	pl.34	-×18	074	21溝	区画溝	近世	M-8-9	p.39	pl.31	1.7×1.7
016	2建物	礎石建物	近代	N-O-9-10	p.49	pl.35	-×-	075	22溝	区画溝	近代	L-8-9	p.39	pl.30	1.0×3.2
017	3建物	礎石建物	近代	L-8	p.49	pl.36	-×-	076	23溝	区画溝	近世	P-7-R-8	p.65	pl.45	1.4×2.3
018	17建物	礎石建物	近代	E-5-6	p.72	pl.48	4.5×9.2	077	24溝	小道側溝	近世	L-9	p.39	pl.31	0.6×2.6
019	18建物	礎石建物	近代	F-5-6	p.75	pl.49	4.7×6.5	078	25溝	小道側溝	近世	K-9	p.39	pl.31	0.6×1.7
020	19建物	礎石建物	近世	F-5-6	p.73	pl.48	5.1×2.0	079	27溝	区画溝	近世	B-C-2	p.88	pl.54	1.6×1.5
021	20建物	礎石建物	近世	F-6	p.75	pl.49	4.3×8.4	080	28溝	不明溝	近世	B-C-2	p.88		1.0×-
022	21建物	礎石建物	近世	F-G-4	p.76	pl.49	17×-	081	29溝	区画溝	近代	E-6	p.69	pl.47	0.6×1.2
023	22建物	礎石建物	近世	F-4-5	p.76	pl.49	5.6×5.9	082	30-32溝	区画溝	近世	E-6	p.69		0.8×3.0
024	23建物	礎石建物	近代	G-H-4	p.74	pl.49	-×-	083	31溝	建物地業	近代	E-5-6	p.69	pl.47	1.2×8.0
025	ビント	竪立建物?	近世	P-Q-9-11	p.65	pl.45	-×-	084	32溝	建物地業	近代	E-4	p.69		0.4×4.2
026	埋設部	竪立建物?	近世	Q-7-8	p.48	pl.35	6.0×6.8	085	33溝	区画溝	近代	F-4	p.69	pl.47	1.0×7.1
027	1集石	礎石土塊	近代	O-10	p.49	pl.35	1.1×-	086	34溝	区画溝	近世	E-4	p.69	pl.47	1.0×9.5
028	2集石	礎石土塊	近代	K-L-8	p.49	pl.36	1.2×1.2	087	35溝	区画溝	近代	F-4	p.69	pl.47	1.0×1.1
029	1島	島	近代	U-12	p.33		3.6×3.8	088	36溝	区画溝	近代	E-5-6	p.69	pl.47	1.1×1.6
030	2島	島	近代	T-11	p.33		4.6×7.4	089	37溝	区画溝	近代	E-5-6	p.69	pl.47	0.5×9.3
031	3島	島	近代	S-T-10	p.33	pl.21	4.4×1.6	090	38溝	建物地業	近代	F-4	p.69		1.0×1.1
032	4島	島	近代	P-8	p.65	pl.45	4.4×6.9	091	39溝	区画溝	近世	H-4	p.69	pl.46	1.3×2.8
033	1不明	植埋設坑	近代	O-9	p.54	pl.38	1.4×1.5	092	40溝	区画溝	近代	I-5	p.69		1.1×4.9
034	1榎列	生垣	近世	V-11-12	p.13		0.5×8.3	093	41溝	区画溝	近世	H-1-6	p.84		1.0×6.5
035	2榎列	竪立建物?	近世	T-10	p.15	pl.21		094	42溝	区画溝	近世	G-6-7	p.84		0.7×9.2
036	3榎列	竪立建物?	近世	T-U-10	p.16	pl.21	14.0	095	1坑	地下坑	近代	S-9	p.28	pl.24	1.3×1.4
037	4榎列	欠番						096	2坑	短冊形土坑	近世	S-8	p.29	pl.24	0.8×-
038	5榎列	欠番						097	3坑	箱形土坑	近世	T-9	p.28		1.1×1.4
039	6榎列	欠番						098	4坑	不明土坑	近世	S-T-9	p.28		-×2.3
040	7榎列	竪立建物?	近世	U-9	p.19	pl.21	7.6	099	5坑	短冊形土坑	近世	T-9	p.29		0.6×2.2
041	8榎列	竪立建物?	近世	T-9	p.18		7.0	100	6坑	短冊形土坑	近世	T-9	p.29	pl.24	0.7×-
042	9榎列	生垣	近世	P-Q-8	p.65	pl.45	12.0	101	7坑	短冊形土坑	近世	S-9	p.28		0.6×4.4
043	1埋設	コエだめ	近代	H-4	p.83	pl.51	0.8×0.8	102	8坑	短冊形土坑	近世	S-9	p.28	pl.24	0.6×4.1
044	2埋設	コエだめ	近代	H-4	p.83		0.6×0.6	103	9坑	短冊形土坑	近世	T-8	p.29		0.7×1.4
045	3埋設	コエだめ	近代	H-5	p.83	pl.51	0.7×0.7	104	10坑	短冊形土坑	近世	T-8-9	p.29	pl.24	0.5×3.9
046	4埋設	コエだめ	近代	H-5	p.83	pl.51	0.8×0.8	105	11坑	短冊形土坑	近世	S-T-9	p.29	pl.24	0.8×-
047	1井戸	井	近世	U-8	p.25	pl.23	1.4×1.5	106	12坑	欠番					
048	2井戸	井	中世	T-9	p.25	pl.23	1.4×1.6	107	13坑	短冊形土坑	近世	S-9-10	p.28	pl.24	0.7×4.9
049	3井戸	井	近世	V-11	p.25	pl.23	0.9×1.0	108	14坑	短冊形土坑	近世	S-9-10	p.28	pl.24	-×4.8
050	4井戸	井	中世	S-12	p.27	pl.23	1.0×1.1	109	15坑	短冊形土坑	近世	S-9-10	p.28	pl.24	-×5.1
051	5井戸	井	近世	M-7	p.41	pl.32	1.3×1.3	110	16坑	短冊形土坑	近世	S-9	p.28		0.6×2.6
052	6井戸	井	近代	M-6	p.52	pl.37	2.4×2.6	111	17坑	不明土坑	近世	S-9	p.29		0.8×0.9
053	7井戸	井	近代	F-4	p.77	pl.49	0.8×-	112	18坑	イネ埋納坑	近世	W-X-11	p.37	pl.29	0.8×1.6
054	8井戸	井	近代	F-4	p.77	pl.49	0.6×0.7	113	19坑	箱形土坑	近世	X-12	p.37		0.8×2.4
055	9井戸	井	近代	F-4	p.77	pl.49	1.6×-	114	20坑	箱形土坑	近代	W-X-12	p.37		1.2×2.2
056	1溝	道路側溝	近代	X-10-13	p.34	pl.27	2.9×30	115	21坑	短冊形土坑	近世	S-9	p.28	pl.24	1.4×6.8
057	2溝	区画溝	近世	S-8-R-11	p.12	pl.19	2.6×38	116	22坑	短冊形土坑	近世	S-9	p.28		-×-
058	3溝	不明土坑	近世	S-9	p.28		-×4.4	117	23坑	短冊形土坑	近世	S-9	p.28		0.7×-
059	5溝	建物地業	近代	W-11	p.35	pl.27	0.6×9.6	118	24坑	短冊形土坑	近世	S-9	p.29		0.6×2.5

1 遺構一覽表

No	旧名称	種類	時代	位置	本文	写真	規模(m)	No	旧名称	種類	時代	位置	本文	写真	規模(m)
119	25坑	箱形土坑	近世	W-12	p.37	pl.29	1.2×2.7	180	88坑	短冊形土坑	近世	W・X-10	p.36		0.6×-
120	26坑	ㄱ字形土坑	近世	W-12	p.37		1.0×1.7	181	89坑	短冊形土坑	近世	W・X-10	p.36		0.5×1.8
121	27坑	短冊形土坑	近世	W-12	p.37	pl.29	0.5×2.2	182	90坑	短冊形土坑	近世	W・X-10	p.36		0.5×2.7
122	28坑	ㄱ字形土坑	近世	W-12	p.37		1.0×1.2	183	91坑	箱形土坑	近世	X-10	p.36		1.0×1.9
123	29坑	不明土坑	近世	W-11	p.37		0.6×0.8	184	92坑	不明土坑	近世	X-12	p.37		1.1×1.2
124	30坑	不明土坑	近世	W-11	p.37		0.5×0.7	185	93坑	短冊形土坑	近世	U・V-9	p.32		-×2.4
125	31坑	不明土坑	近世	W-11	p.37		-×1.1	186	94坑	不明土坑	近世	U-10	p.30		-×-
126	32坑	不明土坑	近世	W-11	p.37		0.6×1.0	187	95坑	短冊形土坑	近世	U-11	p.30		0.6×3.0
127	33坑	不明土坑	近世	W-11	p.36	pl.29	0.5×0.9	188	96坑	短冊形土坑	近世	T・U-11	p.30		0.6×2.6
128	34坑	箱形土坑	近世	W-11	p.36		0.8×1.2	189	97坑	短冊形土坑	近世	S・T-11	p.30	pl.25	1.0×4.8
129	35坑	ㄱ字形土坑	近世	W-11	p.36		0.8×1.5	190	98坑	箱形土坑	近世	S-12	p.27		0.9×1.4
130	36坑	箱形土坑	近世	W-11	p.36		0.8×-	191	99坑	短冊形土坑	近世	T-11	p.30		0.6×3.4
131	37坑	箱形土坑	近世	W-11	p.36		0.8×1.3	192	100坑	短冊形土坑	近世	T-11	p.30	pl.25	1.2×4.0
132	38坑	ㄱ字形土坑	近世	W-11	p.36		1.0×1.4	193	101坑	短冊形土坑	近世	T-10・11	p.30	pl.25	0.7×3.0
133	39坑	不明土坑	近世	W-11	p.36	pl.28	1.2×-	194	102坑	短冊形土坑	近世	T-10	p.30	pl.25	0.6×2.5
134	40坑	不明土坑	近世	W-10・11	p.36		1.6×2.0	195	103坑	短冊形土坑	近世	T-11	p.30	pl.25	0.6×3.2
135	41坑	箱形土坑	近世	W-11	p.36	pl.28	0.8×-	196	104坑	短冊形土坑	近世	S・T-11	p.30	pl.25	0.8×3.4
136	42坑	ㄱ字形土坑	近世	W-11	p.36	pl.28	0.8×1.3	197	105坑	短冊形土坑	近世	S・T-11	p.30	pl.25	0.6×-
137	43坑	不明土坑	近世	W-10・11	p.36	pl.28	-×1.1	198	106坑	短冊形土坑	近世	S-11	p.30	pl.25	0.6×1.1
138	44坑	不明土坑	近世	W-11	p.36	pl.28	0.6×-	199	107坑	短冊形土坑	近世	T-11	p.30	pl.25	0.9×4.5
139	45坑	短冊形土坑	近世	T-10	p.28		-×2.7	200	108坑	箱形土坑	近世	R-8	p.66		0.8×1.3
140	46坑	短冊形土坑	近世	T-10	p.28		-×-	201	109坑	箱形土坑	近世	R-8	p.66	pl.45	0.7×1.2
141	47坑	箱形土坑	近世	X-12	p.37		1.2×-	202	110坑	短冊形土坑	近世	R-8	p.66		1.0×4.0
142	49坑	短冊形土坑	近世	U・V-11	p.31	pl.26	0.8×0.3	203	111坑	短冊形土坑	近世	Q・R-8	p.66		0.8×2.6
143	50坑	短冊形土坑	近世	V-11	p.31	pl.26	0.9×3.7	204	112坑	ㄱ字形土坑	近世	Q・R-8	p.66		-×1.1
144	51坑	不明土坑	近世	V-11	p.31		1.1×1.7	205	113坑	箱形土坑	近世	R-8	p.66		0.7×1.1
145	52坑	短冊形土坑	近世	V-11	p.31		1.0×4.2	206	114坑	ㄱ字形土坑	近世	Q・R-8	p.66	pl.45	0.6×0.7
146	53坑	短冊形土坑	近世	V-11	p.31		0.9×-	207	115坑	ㄱ字形土坑	近世	Q-8	p.66		0.8×1.0
147	54坑	穴	遺					208	116坑	短冊形土坑	近世	R-8	p.66		0.6×1.4
148	55坑	短冊形土坑	近世	V-11	p.31		0.6×3.3	209	117坑	箱形土坑	近世	R-8	p.66		0.5×0.9
149	56坑	短冊形土坑	近世	V-11	p.31		-×4.8	210	118坑	ㄱ字形土坑	近世	Q-8	p.66		1.0×1.0
150	57坑	不明土坑	近世	W-11	p.36		-×2.0	211	119坑	ㄱ字形土坑	近世	Q-9	p.66		1.1×-
151	58坑	不明土坑	近世	W-10・11	p.38	pl.28	1.0×1.6	212	120坑	短冊形土坑	近世	Q-8	p.66		0.6×1.1
152	59坑	短冊形土坑	近世	U・V-10	p.31	pl.26	0.5×3.2	213	121坑	ㄱ字形土坑	近世	Q-8	p.66		0.9×2.6
153	60坑	短冊形土坑	近世	U・V-10	p.31	pl.26	-×3.7	214	122坑	穴	遺				
154	61坑	短冊形土坑	近世	U・V-10	p.31	pl.26	0.6×-	215	123坑	穴	遺				
155	62坑	短冊形土坑	近世	U・V-10	p.31	pl.26	-×-	216	124坑	ㄱ字形土坑	近世	Q-8	p.66		0.8×1.6
156	63坑	短冊形土坑	近世	U・V-10	p.31	pl.26	0.8×3.6	217	125坑	箱形土坑	近世	P-8	p.67		0.8×0.9
157	64坑	短冊形土坑	近世	U・V-10	p.31	pl.26	-×-	218	126坑	箱形土坑	近世	P-8	p.67		0.8×1.8
158	65坑	短冊形土坑	近世	U・V-10	p.31	pl.26	0.5×2.0	219	127坑	ㄱ字形土坑	近世	P-8・9	p.67	pl.45	1.0×8.6
159	66坑	短冊形土坑	近世	U・V-10	p.31	pl.26	0.8×-	220	128坑	桶形土坑	近代	O-8	p.54	pl.29	1.4×1.7
160	67坑	短冊形土坑	近世	U・V-10	p.31	pl.26	1.0×-	221	129坑	桶形土坑	近代	O-8	p.54	pl.29	1.4×1.6
161	68坑	短冊形土坑	近世	U-10	p.31	pl.26	0.7×4.1	222	130坑	箱形土坑	近代	N-9	p.64	pl.41	1.3×1.9
162	69坑	箱形土坑	近世	V-9	p.32	pl.28	1.8×3.4	223	131坑	不明土坑	近代	N-9・10	p.64		0.7×2.8
163	70坑	不明土坑	近世	V・W-9	p.32		-×2.4	224	132坑	短冊形土坑	近世	N-9	p.64		0.7×1.8
164	72坑	箱形土坑	近世	U-9	p.32		1.0×1.1	225	133坑	不明土坑	近世	N-9	p.64		0.7×1.0
165	73坑	短冊形土坑	近世	U-9・10	p.32		1.1×2.4	226	134坑	家畜	近代		p.64		1.4×2.1
166	74坑	短冊形土坑	近世	U-10	p.32	pl.26	1.1×3.3	227	135坑	短冊形土坑	近世	M-9	p.64		1.0×3.0
167	75坑	不明土坑	近世	U-10	p.32	pl.26	-×-	228	136坑	短冊形土坑	近世	P-8	p.67		0.8×2.5
168	76坑	地下坑	近世	W-10	p.36	pl.28	1.0×1.1	229	137坑	不明土坑	近世	N-10	p.69		1.2×4.0
169	77坑	ㄱ字形土坑	近世	W-10	p.36		0.7×1.4	230	138坑	箱形土坑	近世	M-8	p.59		1.3×1.7
170	78坑	箱形土坑	近世	W-10	p.36	pl.28	-×-	231	139坑	箱形土坑	近世	M-8	p.59	pl.41	1.4×2.2
171	79坑	箱形土坑	近世	W-10	p.36	pl.28	0.7×1.4	232	141坑	箱形土坑	近世	L-9	p.58		1.1×1.9
172	80坑	短冊形土坑	近世	V・W-10	p.32	pl.26	1.0×2.0	233	142坑	箱形土坑	現代	L-8	p.58		0.8×1.8
173	81坑	短冊形土坑	近世	V・W-10	p.32	pl.26	0.4×1.4	234	143坑	箱形土坑	近代	L-8	p.58		1.0×-
174	82坑	短冊形土坑	近世	V・W-10	p.32	pl.26	0.7×-	235	144坑	短冊形土坑	近代	P-7	p.62	pl.43	0.8×2.2
175	83・85坑	短冊形土坑	近世	V・W-9・10	p.32	pl.26	1.5×-	236	145坑	短冊形土坑	近代	N・O-8	p.62		0.6×2.4
176	84坑	箱形土坑	近世	V・W-10	p.32	pl.26	1.1×1.3	237	146坑	箱形土坑	近代	N-6	p.61	pl.42	-×2.2
177	未命名	短冊形土坑	近世	W-10	p.36	pl.26	0.7×3.7	238	147坑	箱形土坑	近世	N-6	p.61	pl.42	1.2×2.3
178	86坑	短冊形土坑	近世	W-9	p.36		0.6×2.8	239	148坑	短冊形土坑	近世	N-6	p.61	pl.42	1.5×-
179	87坑	短冊形土坑	近世	W-9	p.36		0.5×1.2	240	149坑	短冊形土坑	近代	N-6	p.61	pl.42	-×4.4

## IV 資料

No.	旧名称	種類	時代	位置	本文	写真	規模(m)	No.	旧名称	種類	時代	位置	本文	写真	規模(m)
241	1506坑	箱形土坑	近世	N-6	p.61		0.8×1.4	302	237坑	短冊形土坑	近世	E-5	p.85	pl.53	1.1×3.4
242	151坑	短冊形土坑	近世	N-6	p.61		1.1×-	303	238坑	短冊形土坑	近世	E-5	p.85	pl.53	0.8×4.1
243	152坑	箱形土坑	近世	N-6	p.61		1.2×1.6	304	239坑	短冊形土坑	近世	E・F-6	p.87	pl.53	0.8×2.2
244	153坑	不明土坑	近世	O-7	p.62		1.2×-	305	240坑	欠番					
245	154坑	不明土坑	近世	O-7	p.62		1.2×1.6	306	241坑	短冊形土坑	近世	F-4	p.85		0.6×4.6
246	156坑	箱形土坑	近代	M-8	p.59	pl.42	1.2×2.0	307	242坑	短冊形土坑	近世	F-4	p.77		0.9×2.3
247	158坑	箱形土坑	近世	M-8	p.59	pl.41	1.2×1.8	308	243坑	欠番					
248	157坑	不明土坑	近世	M-8	p.59		0.6×0.8	309	244坑	箱形土坑	近世	E-5・6	p.80		-X-
249	158坑	短冊形土坑	近世	M-7・8	p.59		0.9×2.7	310	245坑	井	近世	E-6	p.80	pl.51	0.7×0.9
250	159坑	短冊形土坑	近世	O-7	p.62		0.8×-	311	246坑	箱形土坑	近代	E・F-5	p.80		1.4×2.7
251	160坑	箱形土坑	近世	N-7	p.59	pl.43	0.8×1.2	312	247坑	箱形土坑	近世	E-6	p.80		1.2×2.2
252	161坑	不明土坑	近代	N-7	p.61	pl.43	0.7×0.8	313	248坑	箱形土坑	近代	E-5	p.80	pl.50	0.9×1.5
253	162坑	箱形土坑	近世	M・N-7	p.59		0.7×1.3	314	249坑	箱形土坑	近世	E-5	p.80	pl.50	1.6×-
254	163坑	ε±埋納坑	近世	O・P-8	p.62	pl.43	1.0×1.4	315	250坑	不明土坑	近世	E-6	p.87		-X-
255	164坑	箱形土坑	近代	O-8	p.62	pl.43	1.1×1.7	316	251坑	欠番					
256	165坑	桶埋設坑	近世	O-7	p.54	pl.38	1.0×1.2	317	252坑	欠番					
257	166坑	桶埋設坑	近世	O-7	p.54	pl.38	0.9×1.0	318	253坑	短冊形土坑	近世	E-5	p.85	pl.53	0.7×-
258	167坑	不明土坑	近世	N-8	p.62	pl.43	1.5×-	319	254坑	短冊形土坑	近世	E-4	p.77	pl.50	1.2×3.0
259	168坑	不明土坑	近代	N-7	p.61		0.6×0.6	320	255坑	短冊形土坑	近世	F-4	p.77		0.8×3.7
260	169坑	短冊形土坑	近世	M-6	p.52	pl.37	0.9×-	321	256坑	短冊形土坑	近世	F・4-5	p.85		0.5×2.6
261	170坑	ε±埋納坑	近世	M-6	p.52	pl.37	1.3×1.4	322	257坑	短冊形土坑	近世	F-6	p.87		0.6×-
262	171坑	短冊形土坑	近代	M-6	p.52	pl.37	1.2×5.1	323	258坑	短冊形土坑	近世	F-6	p.87	pl.53	0.7×4.4
263	172坑	農薬物坑	近代	O-9	p.45	pl.34	0.2×0.6	324	259坑	短冊形土坑	近世	E-6	p.87		0.5×3.5
264	173坑	短冊形土坑	近代	M-6	p.52		1.1×-	325	260坑	短冊形土坑	近世	F-6	p.87		0.6×-
265	174坑	不明土坑	近世	M-6	p.52		0.6×0.8	326	261坑	短冊形土坑	近世	F-6	p.87		0.8×-
266	175坑	短冊形土坑	近世	M-6	p.52	pl.37	-X-	327	262坑	欠番					
267	176坑	不明土坑	近世	U-9	p.23		0.9×-	328	263坑	短冊形土坑	近世	F-6	p.87		0.7×3.6
268	177坑	短冊形土坑	近世	N・O-7	p.62		0.5×2.2	329	264坑	短冊形土坑	近世	F-5	p.87		0.6×2.5
269	178坑	短冊形土坑	近代	N-7	p.62	pl.44	0.7×1.6	330	265坑	短冊形土坑	近世	F・G-4	p.77	pl.59	1.2×4.2
270	179坑	箱形土坑	近代	N-7	p.62	pl.44	1.1×1.8	331	266坑	桶埋設坑	近世	H-5	p.83	pl.52	1.1×1.1
271	180坑	短冊形土坑	近世	M-7	p.59		0.7×4.2	332	267坑	桶埋設坑	近世	H-5・6	p.83		1.0×1.1
272	181坑	不明土坑	近世	M-7	p.61		0.8×-	333	268坑	不明土坑	近代	I-5	p.83		1.0×1.0
273	182坑	短冊形土坑	近世	M-7	p.61		0.9×5.0	334	269坑	桶埋設坑	近代	I-7	p.84	pl.52	1.3×1.4
274	183坑	不明土坑	近代	M-6	p.61		1.1×1.2	335	270坑	瓦葺窯坑	近代	H-5	p.83		0.6×0.7
275	184坑	不明土坑	近代	M-6	p.61		0.8×1.0	336	271坑	短冊形土坑	近世	G-5・6	p.87		0.6×4.5
276	185坑	短冊形土坑	近世	M-6	p.61		0.6×3.1	337	272坑	短冊形土坑	近世	H-6・7	p.84		0.8×4.4
277	186坑	不明土坑	近世	M-6	p.52		1.5×1.5	338	274坑	短冊形土坑	近世	F-6	p.87		-2.6
278	187坑	短冊形土坑	近世	L-6	p.52	pl.37	0.6×3.2	339	275坑	箱形土坑	近世	E-5・6	p.80		1.5×-
279	188坑	短冊形土坑	近代	L-6	p.52	pl.37	1.4×6.7	340	276坑	箱形土坑	近世	E-5	p.80	pl.50	1.2×-
280	189坑	短冊形土坑	近代	L-6	p.52	pl.37	1.1×3.0	341	277坑	不明土坑	近世	F-5	p.80		1.0×-
281	190坑	短冊形土坑	近代	L-6	p.52	pl.37	-×2.8	342	278坑	不明土坑	近世	H-5	p.83		0.5×-
282	191坑	短冊形土坑	近世	L-6	p.32		0.8×2.4	343	279坑	不明土坑	近世	H-5	p.83		1.1×1.1
283	192坑	短冊形土坑	近世	K-6	p.58		0.8×3.0	344	280坑	排水坑	近代	H-5	p.83		1.9×2.0
284	193坑	不明土坑	近世	L-7	p.58		0.5×1.3	345	281坑	不明土坑	近世	H・I-5	p.83		1.5×1.6
285	194坑	不明土坑	近世	M-7	p.61		0.9×1.4	346	282坑	不明土坑	近世	H・I-5	p.83		1.2×1.2
286	196坑	不明土坑	近代	K-7	p.58	pl.41	0.6×1.2	347	283坑	桶埋設坑	近代	I-7	p.84		1.2×1.2
287	197坑	短冊形土坑	近世	K-7	p.58	pl.41	0.7×-	348	未命名	礎石建物	近代	W-10・11	p.35	pl.27	-X-
288	198坑	短冊形土坑	近世	K-7	p.58	pl.41	0.9×2.5	349	未命名	農薬物坑	近代	T-12	p.37	pl.23	0.4×0.9
289	199坑	桶埋設坑	近代	O-8	p.54	pl.40	1.4×1.4	350	木炭窯	木炭窯	古代	R-11	p.128	pl.14	2.0×-
290	200坑	桶埋設坑	近代	O-8	p.54	pl.40	1.6×1.8	351	1墳	古墳	古墳	V-X-19~12	p.129	pl.14	24×25
291	201坑	不明土坑	近世	O-8	p.54		0.9×-	352	2墳	古墳	古墳	V・W-13	p.133	pl.59	-X-
292	204坑	不明土坑	近代	L-8	p.59		0.3×1.0	353	3墳	古墳	古墳	T・U-12	p.134	pl.69	-X-
293	206坑	不明土坑	近世	W-13	p.37	pl.29	0.8×1.2	354	4墳	古墳	古墳	S~V-8・9	p.136	pl.61	-X-
294	207坑	不明土坑	近世	W-13	p.37		1.1×1.3	355	5墳	古墳	古墳	R-9・10	p.137	pl.62	-X-
295	208坑	不明土坑	近世	W-13	p.37		1.1×2.0	356	石棚	古墳	古墳	W-13	p.133	pl.69	1.8×2.6
296	209坑	瓦葺窯坑	近代	N-9	p.59		0.9×0.9	357	71坑	方形土坑	古墳	U-9	p.136		1.6×-
297	210坑	瓦葺窯坑	近代	O-9	p.54		1.4×2.3	358	205坑	不定形坑	古墳	R-9	p.136		0.7×0.9
298	222坑	短冊形土坑	近代	K-8	p.58		0.6×2.5	359	礎石土	西葺墓	数生	C-4	p.138	pl.62	0.4×0.4
299	223坑	箱形土坑	近世	O-6	p.61		-×1.8								
300	225坑	農薬物坑	近代	E-5	p.85	pl.53	2.1×2.8								
301	236坑	農薬物坑	近代	E-5	p.85	pl.53	2.3×-								



## 2 遺物一覧表

### A 陶磁器土器

No.	主産例	産地	種類	軸/施成	器形	法量	頁	写真	備考
1001	033		磁器	白磁	蓋	76 28 28	55	6	瀬戸・美濃
1002	033		磁器	色絵	蓋	84 22	—	55	6 單色絵[証]銘 瀬戸・美濃系
1003	017		陶器	色絵	鉢	62 40 27	50	13	合成コバルト 藤文 押印「萬古」 関西系 明治
1004	033		磁器	染付	湯呑み	52 60 33	55	6	合成コバルト 手描 花文 高台内不明染付銘 産地不明
1005	018		磁器	質無	軸	—	—	72	13 中空 重文 内部に布目 産地不明
1006	033		陶器	掛分け	俵形	32	—	55	6 鉄軸「カネト」屋号か 体部状態 産地不明 1066と同一
1007	027		磁器	染付	蓋	66 46 30	50	6	手描 山水文 瀬戸・美濃 明治
1008	028		磁器	青磁	蓋	80 37 36	51	6	クロム 外面菊花状型打ち 瀬戸・美濃 明治
1009	028		磁器	染付	蓋	80 42 44	51	6	銅板転写 桜松山水文 瀬戸・美濃系
1010	027		磁器	染付	碗	102 52 36	50	6	「〇九六」朱書焼線記号 合成コ 手描花文 瀬戸美濃 明治初
1011	028		磁器	染付	碗	118 50 40	51	6	摺絵 小紋 軟質 会津系か
1012	027		磁器	染付	碗蓋	96 29 40	50	6	「大化半制」不明銘 瀬戸・美濃 1820～幕末
1013	028		磁器	染付	碗蓋	104 29 46	51	6	摺絵 小紋 瀬戸・美濃
1014	027		磁器	染付	型打皿	134	—	50	6 手描 山水文 焼線 肥前系 18C末～19C中
1015	028		磁器	口縁染付	型打皿	150 44 82	51	6	山水文 蛇の目凹型高台 肥前志田 19C～幕末
1016	027		磁器	染付	蕎麦箸口	—	—	60	50 草花文 肥前 1690～18C前
1017	028		磁器	染付	蓋物蓋	128	—	51	6 手描 桜花文 焼線 肥前系 18C末～19C中
1018	028		磁器	染付	ちり蓮華	—	17 35	51	6 合成コバルト 蕃苺蒔 二次焼成 肥前 明治～大正
1019	027		陶器	柿絵	漆鉢	—	—	150	50 6 軟質 瀬戸・美濃
1020	028		陶器	柿絵	軸	500	—	51	6 硬質 常滑 19C
1021	028	075	陶器	灰軸	花瓶	—	—	96	51 6 「伊香保焼元祖東洲」銘 染焼 19C末
1022	027		土器	土師	質	360 62	—	50	36 内面に四方封じ 黒書 未使用
1023	028		土器	土師	質	190 83	51	37	36 底部に鉄付着 底径170mm
1024	072		磁器	染付	角鉢	69 28 22	42	5	5 手描 合成コバルト 花虫文 「〇阮」銘 瀬戸・美濃系
1025	067		磁器	磁磁染付	圓型碗	80 60 38	14	4	4 四方だすき文 肥前 18C後
1026	067		磁器	磁磁染付	圓型碗	71 56 40	14	4	4 四方だすき文 見込五弁花 肥前 18C後半
1027	069		磁器	染付	付蓋	68 47 34	45	5	5 銅板転写 宝づくし文 瀬戸美濃 1031と同一 黄色やや不良
1028	069		磁器	染付	付蓋	77 45 40	45	5	5 銅板転写 アヤメ文 蛇の目凹型高台 瀬戸美濃系 1110と同一
1029	069		磁器	色絵	角湯呑み	58 62 37	45	5	5 焼文 質入 産地不明 1116、1118と同一
1030	070		磁器	染付	付蓋	70 45 38	41	5	5 銅板転写 六角梅花文 瀬戸・美濃系
1031	070		磁器	染付	付蓋	68 42 32	41	5	5 銅板転写 宝づくし文 明治 瀬戸美濃 1027と同一 黄色良
1032	081		磁器	染付	圓型碗	65 52 38	70	10	10 菊花散らし文 手描 五弁花 肥前 1780～1810
1033	070		磁器	色絵	絵皿	96 40 31	41	5	5 山水文? 見込「川」銘 瀬戸・美濃系 明治以降
1034	070		磁器	染付	付丸碗	108 50 39	41	5	5 摺絵 小紋 竹 瀬戸・美濃系
1035	070		磁器	染付	付碗	120 48 42	41	5	5 摺絵 小紋 瀬戸・美濃系
1036	070		磁器	色絵	絵碗	120 52 44	41	5	5 「陶保製製」銘 摺絵白土盛り上げ 刺文 瀬戸美濃 明治以降
1037	070		磁器	染付	付碗	115 46 36	41	5	5 摺絵 桜文 「晴雲園製」銘 光沢 1043と組 瀬戸・美濃
1038	087		磁器	染付	襷反碗	103	—	70	10 細線排羽毛文 内面雷文 肥前 1820～幕末
1039	091		磁器	染付	付丸碗	88 46 33	71	10	10 くらわんか 二重線目文 型付に砂 肥前波佐見系 18C前～中
1040	091		磁器	染付	付丸碗	102 53 44	71	10	10 くらわんか雷輪梅文 刷「大明年製」銘 肥前波佐見系 18C中～末
1041	091		磁器	染付	付丸碗	98 51 41	71	10	10 コンニャク印版刺文 肥前波佐見系 18C前～中葉
1042	091		磁器	染付	付丸碗	100 56 40	71	10	10 コンニャク印版刺文 底部渦巻 肥前波佐見系 18C前～中
1043	070		磁器	染付	付碗蓋	100 27 31	41	5	5 摺絵 桜文 「晴雲」銘 光沢 1037と組 瀬戸美濃 明治以降
1044	070		磁器	染付	襷反碗蓋	100 24 36	41	5	5 竜文 見込松竹梅文 肥前 19C中
1045	349		磁器	染付	型打皿	—	—	41	27 4 合成コバルト 手描 蛇の目凹型高台 瀬戸・美濃
1046	070		磁器	染付	付中皿	206 35 86	41	5	5 摺絵 小紋 合成コバルト 蛇の目凹型高台 瀬戸・美濃系
1047	070		磁器	染付	付鉢蓋	—	—	41	5 「福寿」文 内面細線排十字花文 肥前系 1820～幕末
1048	070		磁器	染付	型打小皿	83 23 41	41	5	5 見込排羽 雷文 瀬戸・美濃 明治
1049A	310		磁器	染付	吹墨皿	—	—	71	10 紅葉文 肥前 1690代～18C前
1049B	091		磁器	染付	吹墨皿	—	—	81	10 肥前 1690代～18C前
1050	070		磁器	染付	蕎麦箸口	60 56 44	39	5	5 草文 肥前 18C後
1051	075		磁器	染付	付角鉢	118 65 77	41	5	5 銅板転写 丸意文 二重高台 会津系?
1052	087		磁器	染付	付鉢	—	—	66	70 10 扶寿手 肥前系 19C初～幕末
1053	070		磁器	染付	蓋物蓋	126	—	41	5 水鏡文 肥前 19C初～幕末
1054	069		磁器	染付	小合子蓋	52 9 49	45	5	5 銅板転写と手描 山水文 瀬戸・美濃 明治
1055	070		磁器	染付	付火入れ	104 88	—	42	5 竹雀文 口縁に使用痕 肥前系 19C初～幕末 底径103mm
1056	070		磁器	色絵	給ミニチュア	21 13 10	42	5	5 型型 小円子 金赤彩 瀬戸・美濃 明治
1057	056		陶器	陶磁染付	碗	108 67 48	34	4	4 雷輪梅文 型付に砂付着 肥前波佐見系

## IV 資 料

No.	主産地	産種	種類	軸/焼成	器 形	法 量	頁 厚	備 考
1058	091	陶	器胎染付	碗	—	—	49	71 10 山水文 蟹付に砂着 肥前波佐見系
1059	091	陶	器胎染付	碗	120	68	47	71 10 雪輪梅文か 四方だすき文 蟹付に砂着 肥前波佐見系
1060	057	陶	器天目	日目碗	—	—	12	4 瀬戸・美濃 17C
1061	056	陶	器掛分け	碗	98	—	34	4 瀬戸・美濃
1062	057	陶	器掛分け	碗	99	56	40	12 4 瀬戸・美濃
1063	091	陶	器掛分け	碗	103	50	38	71 10 物輪・灰輪彫り付 瀬戸・美濃
1064	091	陶	器掛分け	碗	93	—	71	10 瀬戸・美濃
1065	091	陶	器鉄輪	碗	105	—	71	10 瀬戸・美濃 天明以降
1066	070	陶	器掛分け	徳利	—	—	42	5 鉄輪下]屋号銘「不明」銘 産地不明 1006と同一
1067	057	陶	器志野鉄絵	皿	—	—	12	4 草文 美濃 17C
1068	051	陶	器灰 抽	茶皿	—	—	68	13 4 見込に日旗 トチン痕 外面無軸 美濃 17C
1069	063	陶	器胎 抽	茶皿	—	—	35	4 美濃 17C
1070	088	陶	器鉄輪須絵	小皿	124	30	66	70 10 葉文 相馬大塚 19C
1071	056	陶	器胎 抽	灯明皿	115	—	34	4 油痕 内面スス付着 美濃 18C
1072	067	陶	器鉄輪	灯明皿	96	20	40	4 灰かぶり 瀬戸・美濃 18C
1073	070	陶	器灰 抽	灯明皿	106	20	43	4 5 外面無軸 相馬大塚か 19C後
1074	091	陶	器黄瀬戸抽	灯明皿	110	26	53	71 10 蕃笥底 外面スス付着 瀬戸・美濃 18C前
1075	081	陶	器鉄 抽	タンコロ	62	—	70	10 体部砂付着 底部二次加工 再利用か 瀬戸・美濃
1076	087	陶	器長 鉄	急須蓋	75	30	70	10 砂粒を多く含む胎土 産地不明 明治以後
1077	070	陶	器精 抽	片平湯	130	—	42	5 外面中高部のみ厚く施軸 外面スス付着 産地不明
1078	056	陶	器胎 抽	片口	—	—	34	4 瀬戸・美濃 18C中
1079	069	陶	器精 抽	徳利	24	—	138	46 5 底部鉄輪 産地不明
1080	087	陶	器灰 抽	徳利	45	—	70	10 瀬戸・美濃 19C
1081	069	陶	器精 抽	仏花瓶	—	—	98	45 5 瀬戸・美濃 18C
1082	070	陶	器掛分け	片平湯蓋	220	48	42	5 外面無軸 内面灰輪 外面スス付着 産地不明
1084	349	陶	器精 抽	撰鉢	—	—	73	27 4 蛇の目高台 産地不明(在地か)
1085	067	陶	器繪化焼締	撰鉢	—	—	14	4 胎土に小礫含む 泉州系か
1086	085	陶	器蓮元焼締	急須	64	59	48	70 10 蕃笥底 万古焼 明治以降
1087	056	土	器瓦 質	燈塔	—	—	82	34 27
1088	056	土	器瓦 質	燈塔	—	—	56	34 27
1089	349	土	器土 質	燈塔	—	—	27	23 耳穴は小さい スス付着
1090	091	土	器瓦 質	燈塔	398	50	71	46 内外面スス付着 底部350mm
1091	091	土	器瓦 質	鉢形端	390	108	71	46 外面スス付着 200mm
1092	069	土	器瓦 質	燈塔	380	300	46	34 口縁外面研磨 底径220mm
1093	069	土	器瓦 質	茶輪	—	—	13	220 46 34 下面は水平 内径120mm
1094	070	土	器瓦 質	火鉢	—	—	42	31 獅子頭状吊手口
1095	075	土	器土 質	茶輪	—	—	42	39 31 内面スス付着
1096	088	土	器土 質	燈塔	—	—	260	70 47 胎土砂粒多い
1097	089	土	器瓦 質	燈塔	—	—	14	156 70 47 下面スス付着
1098	091	土	器瓦 質	脚付火鉢	170	70	71	46 外面スス付着 底径117mm
1099	075	土	器瓦 質	角鉢?	—	—	39	31
1100	091	土	器瓦 質	瓦灯	—	—	220	71 46 外面研磨 内面スス付着
1101	063	土	製品土 師	瓦人形	16	24	8	35 27 型押し成形
1102	069	土	器瓦 質	燈	360	—	360	45 34 砂粒多い胎土 内面スス及び鉄付着
1103	334	磁	器色 絵	蓋	65	26	28	84 13 金彩「歩五郎探検 菊地」銘 瀬戸・美濃
1104	252	磁	器染 付	蓋	66	45	34	61 8 銅版転写 継美文 瀬戸・美濃
1105	263	磁	器染 付	蓋	80	43	41	47 5 銅版転写 松竹梅文 瀬戸・美濃 1106と同一
1106	270	磁	器青磁色絵	蓋	88	46	30	63 7 クロム 銅鉄絵白彩「雀一口」銘 不明銘 瀬戸・美濃
1107	289	磁	器青磁染付	蓋	94	45	41	56 7 クロム 合成コバルト 手描 回字文 口磨 瀬戸・美濃
1108	289	磁	器染 付	蓋	80	42	40	56 7 銅版転写 松竹梅文 瀬戸・美濃 1105と同一
1109	289	磁	器染 付	蓋	76	42	40	56 7 銅版転写 首字文 蛇の目凹型高台 瀬戸・美濃
1110	290	磁	器染付色絵	蓋	78	44	40	57 7 銅版転写アヤメ文 押印 蛇の目凹型高台 瀬戸美濃1028と同一
1111	300	磁	器染 付	蓋	66	42	31	86 12 合成コバルト 外面手描龍縁 瀬戸・美濃
1112	301	磁	器白 磁	蓋	81	43	43	86 12 蛇の目凹型高台 金津系か
1113	301	磁	器白 磁	付小碗	88	42	32	86 12 ゴム印 意絵 山水文 瀬戸・美濃 大正・昭和
1114	313	磁	器染 付	蓋	66	44	33	81 12 銅版転写 親子図 外面下位部取り 瀬戸・美濃
1115	223	磁	器青磁色絵	湯呑み	54	63	34	64 8 クロム 鉄絵 白彩 梅文 瀬戸・美濃
1116	263	磁	器色 絵	角湯呑み	58	63	36	47 5 型絵 耀耀文 買入 1029, 1118と同一
1117	270	磁	器染 付	湯呑み	54	60	30	63 7 合成コバルト 手描 雨降文 金津系か
1118	290	磁	器色 絵	角湯呑み	57	61	37	57 61 7 型絵 耀耀文 買入 1029, 1116と同一
1119	330	磁	器青磁染付	筒型碗	76	60	41	79 13 四方だすき文 コンヤク判五弁花 蟹付に砂 波佐見18C後

## 2 遺物一覧表

No	主産地	品類	種類	胎/焼成	器形	法量	頁	写真	備考		
1120	240	磁	器染	付	竹筒	111 60 39	61	8	ゴム印 鶴丸 統制記号「破102」美濃		
1121	258	磁	器染	付	筒	100 48 36	63	8	くらわんか 雪輪梅文 崩大明年製 登付砂 肥前被佐見18C後		
1122	270	磁	器染	付	筒	105 50 40	63	7	楕圓 小紋 見込松竹梅文 瀬戸・美濃		
1123	300	磁	器染	付	筒	116 44 40	86	12	合成コバルト 手摺 草花文 瀬戸・美濃		
1124	300	301	磁	器染	付	環反碗	110 58 42	86	12	手摺山水絵 景色不良 直摺重ねて焼く 肥前 1820代～幕末	
1125	300	磁	器染	付	筒	50 43 一	86	12	くらわんか 雪輪文 肥前被佐見系		
1126	300	301	磁	器染	付	小丸碗	97 50 36	86	12	合成コバルト 手摺 ヒマワリ 幾箇大 銘 瀬戸・美濃	
1127	300	301	磁	器染	付	筒	114 50 42	86	12	合成コバルト 手摺 菊花文 会津系か	
1128	301	磁	器染	付	筒	115 56 43	86	12	合成コバルト 手摺 菊花文 瀬戸・美濃		
1129	301	磁	器染	付	筒	116 46 44	86	12	合成コバルト 手摺 草文 瀬戸・美濃		
1130	301	磁	器染	付	環反碗	108 60 40	86	12	草文 肥前 1820代～幕末		
1131	301	磁	器染	付	小丸碗	99 51 38	86	12	手摺 見込雲文 瀬戸・美濃		
1132	301	磁	器染	付	筒	111 57 40	86	12	ゴム印 花葉文 瀬戸・美濃か 昭和		
1133	310	磁	器染	付	筒	102 47 46	81	11	くらわんか 雪輪梅文「崩大明年製」銘 肥前被佐見		
1134	310	陶	器	陶胎染付	筒	—	32	81	11	ぶどう文 登付に砂付着 肥前被佐見系 18C前～中期	
1135	310	陶	器	陶胎染付	筒	—	—	81	11	山水文 肥前	
1136	223	磁	器染	付	碗蓋	100 28 47	64	8	楕圓 扇小紋 見込松竹梅文 瀬戸・美濃		
1137	223	磁	器染	付	碗蓋	42 一	64	8	楕圓 小紋「山口道」銘 瀬戸・美濃		
1138	235	磁	器染	付	碗蓋	32 26 102	62	8	合成コバルト 手摺 不明銘 肥前		
1139	310	磁	器染	付	筒	80 一	81	11	雪付雲文 肥前 1680～1710		
1140	300	301	磁	器染	付	環反碗	38 27 94	86	12	扶容手風「大化年製」銘 瀬戸・美濃 1820～幕末	
1141	219	磁	器	付	皿	172 32 72	67	8	草花文 見込蛇の目輪はぎ 被佐見系 18C後		
1142	223	磁	器	口縁染付	輪花皿	150 43 90	64	8	手摺 山水文 蛇の目四型高台 肥前志田 幕末		
1143	263	磁	器	付	型打鉢	160 63 84	47	5	内面山水文 蛇の目四型高台 肥前 1820～幕末		
1144	263	289	磁	器	色絵	鉢	158 22 97	47	5	御殿彩写 登造い絵 外面編輪 蛇の目四型高台 瀬戸・美濃	
1145	290	磁	器	付	皿	130 28 78	57	7	御殿彩写 葉文 口縁 瀬戸・美濃系か		
1146	300	磁	器	付	洋皿	185 20	86	12	合成コ 團縁 外面に縁線 六角押印銘 瀬戸美濃 底径100mm		
1147	310	陶	器	陶胎染付	皿	—	130	81	11	「富貴長寿」銘 肥前 18C前～中期	
1148	315	磁	器	付	皿	—	—	87	12	草花文 肥前	
1149	319	磁	器	付	皿	—	—	79	13	草文 軸割れ 肥前 18C後半	
1150	330	陶	器	付	皿	—	—	90	79	13	柏文 蛇の目四型高台 軟質 瀬戸・美濃
1151	246	磁	器	付	盃洗	108 115	60	8	亀甲花文 帯目文 波文 肥前 1820～幕末 底径102mm		
1152	263	磁	器	付	蓋物蓋	112 28 一	47	5	御殿彩写 三鶴文 瀬戸・美濃		
1153	095	磁	器	付	急須蓋	67 一	28	3	合成コバルト 手摺 草花文 会津本郷		
1154	300	磁	器	付	急須	78 100 70	86	12	合成コ 手摺菊花文 莖菊底 底面無軸 会津本郷か 明治		
1155	246	磁	器	白磁	襷徳利	27 一	60	8	瀬戸・美濃		
1156	246	磁	器	白磁	襷徳利	—	60	8	瀬戸・美濃		
1157	017	磁	器	染	付	小鉢?	—	74	50	13	箸伏蓮弁文 莖菊底 肥前系 19C初～幕末
1158	234	289	磁	器	染	付	桶木鉢	—	58	8	合成コバルト 手摺 花文 砂目痕 瀬戸・美濃 明治以降
1159	270	磁	器	染	付	蓋物	—	63	7	角窓 タコ唐草 幾箇旗内面に厚く残存 瀬戸・美濃	
1160	270	磁	器	染	付	角合子	—	16	63	7	斜格字文 瀬戸・美濃
1161	270	磁	器	染	付	徳利?	—	63	7	合成コバルト 手摺 草文 瀬戸・美濃	
1162	240	磁	器	色絵	鉢	32 18 14	61	8	蓋 緑彩 瀬戸・美濃		
1163	290	磁	器	青磁	三足香炉	92 44 36	57	7	内面無軸 肥前 18C末～幕末		
1164	301	磁	器	白磁	鉢	41 8 27	86	12	洋皿 瀬戸・美濃か		
1165	310	081	磁	器	染	付	火入れ	97 66 60	81	11	桐文 内面無軸 肥前 18C後半 1378、1389と組
1166	310	磁	器	染	付	双耳瓶	34 一	81	11	草花文 肥前 18C前～中期	
1167	313	314	磁	器	染	付	鉢	153 76 89	81	11	緞織書譜 三葉文 南草文 蛇の目四型高台 肥前 1820～幕末
1168	223	陶	器	鉄絵	鉢	62 46 36	64	8	馬文 口縁歪む 相馬大塚 19C後		
1169	258	陶	器	掛分け	碗	—	63	8	御殿 瀬戸・美濃		
1170	319	陶	器	掛分け	碗	86 52 40	79	13	御殿 瀬戸・美濃		
1171	095	061	陶	器	志野鉄絵	皿	—	182	29	3	漆織ぎ 底部ス付着 美濃 17C
1172	270	陶	器	天目	軸	小皿	104 23 44	63	7	莖菊底 産地不明	
1173	300	陶	器	灰軸	灯明皿	84 20 40	86	12	外面無軸 ハリ跡 二次焼成 相馬大塚 19C後		
1174	300	陶	器	灰軸	灯明皿	104 18 42	86	12	外面無軸 ス付着 相馬大塚 19C後		
1175	310	陶	器	彩	軸	灯明皿	73 52 56	81	11	莖菊底 瀬戸・美濃 18C中後	
1176	270	陶	器	三彩	小皿土瓶蓋	62 23 一	63	7	山水文 御殿後二次焼成 1233と同型 益子・相馬系幕末以降		
1177	300	301	陶	器	漆	軸	行平皿	124 67 68	86	12	底部にス付着 産地不明
1178	267	陶	器	灰軸	双耳壺	—	36	3	瀬戸・美濃 18C中		
1179	300	301	陶	器	掛分け	徳利	38 194 70	86	12	底部漆軸 胴部伏軸 底部黒底 幾箇 産地不明	
1180	319	陶	器	灰軸	鳥個入れ	48 26 48	79	13	瀬戸・美濃 19C前		

## IV 資 料

No	主産地	品類	種類	軸/焼成	器形	法量	頁	写真	備	考	
1181	246	263	陶器	灰釉	鉢	336	56	202	60	5	見込にトナン痕 蛇の目凹型高台 産地不明 底径202mm
1182	114		陶器	黒釉	オロシ皿	—	—	—	37	3	砂粒少ない胎土 産地不明 幕末頃か
1183	290		陶器	柿釉	オロシ皿	—	—	—	57	7	砂粒多い胎土 益子 幕末以後
1184	246		陶器	柿釉	燗鉢	340	—	—	60	8	砂粒多い胎土 産地不明
1185	310		陶器	鉄釉	燗鉢	336	—	—	82	11	瀬戸・美濃赤津 18C中
1186	310		陶器	酸化焼締	燗鉢	308	—	—	81	11	瀬戸後二次焼成 泉州堺
1187	310	301	陶器	酸化焼締	燗鉢	—	—	144	81	11	泉州堺か
1188	310	319	陶器	酸化焼締	燗鉢	—	—	170	81	11	泉州堺
1189	246		陶器	還元焼締	急須	70	57	50	60	8	高台刻印「杜楳」 万古焼
1190	300		陶器	酸化焼締	急須	62	52	42	86	12	善富高 万古焼
1191	301		陶器	黒釉	土瓶	116	22	90	86	12	上面サメ肌状 産地不明
1192	311		陶器	鉄釉	箱形鉢	—	—	—	81	12	魚文ヘラ形 備前 19C
1193	301		陶器	黒釉	箱形鉢	—	—	—	86	12	魚文ヘラ形 備前 19C
1194	165		陶器	灰釉	戸車	74	14	—	32	3	孔径15 瀬戸・美濃
1195	088		土器	土師貫	小鉢	—	—	76	70	47	内面スス付着 蛇の目凹型高台 外面下位研研
1196	161		土器	土師貫	灯明皿	96	26	64	31	26	内面スス付着
1197	270		土器	瓦貫	飯輪?	—	—	—	63	44	断面スス付着
1198	289		土器	土師貫	燗鉢	338	34	—	56	40	内外面スス付着 底径350mm 1199、1200と同型
1199	289		土器	土師貫	燗鉢	330	35	—	56	40	内外面スス付着 底径335mm 1198、1200と同型
1200	289		土器	土師貫	燗鉢	332	35	—	56	40	内外面スス付着 底径344mm 1198、1199と同型
1201	307		土器	瓦貫	燗鉢	382	53	—	79	50	内外面スス付着 内面底部「極上」刻印 底径352mm
1202	319		土器	瓦貫	燗鉢	—	—	—	79	50	底部焼成後穿孔
1203	310		土器	瓦貫	燗鉢	270	40	—	81	51	内面スス付着 底径220mm
1204	310		土器	瓦貫	燗鉢	—	—	—	81	51	外面横スス付着 体部焼成後穿孔
1205	310		土器	土師貫	燗鉢	—	—	—	81	—	内外スス 底部刻印「上州小泉別〇實〇」
1206	310		土器	瓦貫	燗鉢	160	37	—	82	51	土型成型 外面研研 内面スス付着 底径146mm
1207	289		土器	瓦貫	鉢	406	122	—	57	40	底部刻印「小泉」 底径190mm
1208	289	290	土器	土師貫	鉢	380	—	—	57	40	
1209	095		土器	瓦貫	楕木鉢	—	—	144	28	24	内面二次焼成
1210	301		土器	瓦貫	塀	352	—	—	86	53	外面に肥手痕 口縁幅広い蓋受け
1211	066		土器	瓦貫	塀	190	—	—	70	47	外面研研 水壺か
1212	246		土器	土師貫	燗鉢	248	267	238	60	42	底部刻印「三河陶器同業組合杉浦善代太郎」 1213と同型
1213	246		土器	土師貫	燗鉢	248	216	—	60	42	三河高浜 1212と同型
1214	300	301	土器	瓦貫	肉鉢	—	—	79	86	53	内外面スス付着
1215	319		土器	瓦貫	燗鉢	—	—	—	79	50	
1216	310		磁器	染付	付	72	35	30	81	11	くらわんか 笹文 高台に砂付着 波佐見系 18C代
1217	051		陶器	陶胎染付	碗	114	81	50	42	7	山水文 肥前 18C前～中期
1218	051		磁器	染付	碗	95	49	38	42	7	くらわんか 雪輪梅文 刷「大明年制」銘 肥前
1219	051		磁器	染付	付	100	48	40	42	7	くらわんか 雪輪梅文 高台砂 肥前
1220	310		磁器	染付	碗	110	52	42	81	11	くらわんか 雪輪梅文 高台砂 肥前 18C後半
1221	310		磁器	染付	碗	96	51	34	81	11	くらわんか 雪輪梅文 高台砂 肥前
1222	310		磁器	染付	碗	92	48	34	81	11	くらわんか 雪輪梅文 高台砂 肥前
1223	047		陶器	陶胎染付	皿	140	33	86	26	3	船文 蛇の目凹型高台 管沢か 19C前半
1224	047		陶器	陶胎染付	皿	144	33	90	26	3	船文 蛇の目凹型高台 管沢か 19C前半
1225	052		磁器	染付	小碗	—	—	33	53	7	見込松竹梅文 肥前 19C初～幕末
1226	054		磁器	青磁	碗	—	—	47	78	10	高台無軸 見込蛇の目軸はぎ 波佐見系 18C
1227	051		陶器	掛分け	碗	90	46	—	43	7	脚掛 瀬戸・美濃
1228	054		陶器	掛分け	碗	124	65	—	78	10	尾呂茶碗 瀬戸・美濃
1229	054		陶器	掛分け	碗	—	—	58	78	10	尾呂茶碗 高台掛軸 瀬戸・美濃 17C
1230	048		陶器	灰釉	燗鉢	—	—	60	26	3	底部輪トナン痕 美濃大塚 16C
1231	049		陶器	志野	燗鉢	120	24	74	26	7	善富高 美濃大塚 16C
1232	056		陶器	灰釉	燗鉢	140	38	80	78	10	見込百匁 高台無軸 瀬戸・美濃 17C
1233	052		陶器	三彩	小型土瓶蓋	70	90	—	53	7	山水図 1176と同型 相馬・益子系 幕末以降
1234	051		陶器	染付	楕木鉢	—	—	102	42	7	二次焼成 合成コバルト 手摺笹文 脚付 瀬戸美濃 明治以降
1235	051		陶器	鉄釉	脚付灯明皿	87	75	84	42	7	胎土レンガ状 在地か
1236	310	319	陶器	天目釉	燗碗	—	—	55	81	11	高台無軸 油部と受部別個に作り境界に軸入る 在地か
1237	050		陶器	鉄釉	燗鉢	330	115	—	27	3	軟質 胎土に黒色砂粒・美濃大塚初期 15C 底径110mm
1238	047		土器	土師貫	燗鉢	380	—	360	26	23	外面スス 丸底
1239	054		土器	瓦貫	燗鉢	370	53	—	78	49	内外面スス 車輪状刻印 平底 底径350mm
1240	054		土器	瓦貫	脚付火鉢	200	74	—	78	49	内面スス 底径162mm
1241	053		土器	瓦貫	鉢型塀	316	123	—	78	49	外面横全面スス 軸横み痕 非実用の耳一對 底径170mm

No.	主遺構	遺種	種類	軸/使成	器形	法量	頁	写真	備	考			
1242	310	土	器	土師	質	火鉢	296 135	—	82	51	内面スス 外面菊花状刻印 底径242mm		
1243	310	土	器	瓦	質	質伊?	—	—	—	82	51		
1244	310	土	器	瓦	質	質	—	—	184	82	51	内外面スス 刻印がはげしい 平底	
1245	044	磁	器	白磁	ミニチュア		42	8	28	83	11	押目 瀬戸・美濃	
1246	044	磁	器	白磁	ミニチュア		30	43	26	83	11	ボット 瀬戸・美濃	
1247	044	磁	器	白磁	ミニチュア		28	37	24	83	11	ボット 瀬戸・美濃	
1248	044	陶	器	三彩	土風		129	145	110	83	11	山水図基底部下位スス 1176・1233と同様 粗目益子墓末以降	
1249	F-4G	磁	器	染付	金彩	蓋	59	30	25	89	9	「高杉政第二遺跡 応召記念」銘瀬戸・美濃	
1250	西屋下	磁	器	染付	金彩	蓋	56	32	24	88	10	「近衛電信第一遺跡 給木」銘瀬戸・美濃	
1251	F-H4G	磁	器	色絵	漆	蓋	36	32	28	91	9	「一副小作供米品群台」銘	
1252	F-5G	磁	器	染付	漆	蓋	70	56	36	89	9	鳥文 肥前系 1820～墓末	
1253	F-5G	磁	器	染付	漆	蓋	113	66	44	89	9	梅花文 瀬戸・美濃 1820～墓末	
1254	G-4G	磁	器	染付	漆	蓋	120	55	46	89	9	銅版転写 菊花散らし文 瀬戸・美濃 昭和	
1255	G-4G	磁	器	染付	漆	蓋	100	47	44	89	9	くらわんか 雪輪梅文 肥前 18C後半	
1256	W-10G	磁	器	染付	漆	蓋	86	42	34	11	3	くらわんか 雪輪梅文 肥前 18C後半～19C初	
1257	F-5G	磁	器	染付	漆	蓋	100	30	30	89	9	広東型 外面梅花文 内面岩と波文 肥前 1780～19C前	
1258	F-5G	磁	器	染付	漆	蓋	—	—	56	89	9	山水文 肥前 19C初～墓末	
1259	F-5G	磁	器	染付	漆	蓋	—	—	80	89	9	鳥文 焼継「川力六十」蛇の目凹型高台 肥前19C初～墓末	
1260	F-5G	磁	器	染付	漆	蓋	—	—	—	89	9	唐草 肥前系	
1261	G-7G	磁	器	染付	漆	蓋	355	48	—	89	9	摺絵 窓絵 草花文 高台砂 肥前 底径207mm	
1262	H-7G	磁	器	染付	漆	蓋	151	44	73	90	9	摺絵 唐草小紋 底部不明銘 会津系 明治～大正	
1263	R-7G	磁	器	染付	漆	蓋	150	43	82	67	3	菊花文 肥前 18C中～末	
1264	西屋下	磁	器	染付	漆	蓋	—	—	110	88	10	摺絵 蛇の目凹型高台 見込に御付ハマ痕	
1265	F-H4G	磁	器	染付	漆	蓋	—	—	—	91	9	牡丹唐草 肥前 17C末～18C前	
1266	G-4G	磁	器	染付	漆	蓋	61	20	—	89	9	合成コバルト 手摺 菊花文 会津系か	
1267	H-4G	磁	器	青磁	火入れ		108	71	70	90	9	見込砂付唐 肥前 18C	
1268	H-7G	磁	器	青磁	磁	蓋	140	—	—	90	9	クロム 瀬戸・美濃	
1269	B-1G	磁	器	青白磁	磁	蓋	—	—	—	88	9	クロム 瀬戸・美濃	
1270	O-8G	磁	器	白磁	磁	蓋	25	8	20	38	3	方形「花」印 産地不明 明治以降	
1271	F-6G	陶	器	色絵	人形		—	—	50	—	89	9	兵士像 中空 底部有孔 瀬戸・美濃
1272	F-H4G	磁	器	天目	磁	蓋	90	—	—	91	9	瀬戸・美濃 18C	
1273	B-2G	陶	器	胎	磁	蓋	89	41	40	88	9	漆継か 瀬戸・美濃 17C後半	
1274	F-H3G	磁	器	染付	漆	蓋	—	—	34	91	9	竹の子文 上野吉沢 胎土分析	
1275	B-2G	陶	器	胎	磁	蓋	—	—	50	88	9	雪輪梅文 肥前 18C中～前	
1276	B-2G	陶	器	胎	磁	蓋	—	—	70	88	9	見込蛇の目輪はぎ 鉄蒔 高台施物目板 肥前	
1277	西屋下	陶	器	鉄	磁	蓋	—	—	30	52	88	10	京焼風 山水絵 肥前 18C前～中
1278	F-4G	陶	器	志野	磁	蓋	—	—	80	89	9	底部目板 美濃大窯 16C	
1279	H-4G	陶	器	灰	磁	蓋	—	—	—	90	9	見込輪はぎ 瀬戸・美濃 18C	
1280	I-7G	陶	器	胎	磁	蓋	230	—	—	90	9	瀬戸・美濃 18C中	
1281	I-4G	焼締陶器	自然	胎	磁	蓋	496	—	—	90	9	常焼 18C前	
1282	西屋下	陶	器	無胎	小型	磁	88	15	40	88	10	墓室底 見込山梨印付 内外面二次焼成 産地不明 1293似る	
1283	F-H4G	磁	器	無胎	無型	小型	70	100	68	91	9	軟質 内面卵形体付着 産地不明	
1284	F-H4G	磁	器	白磁	瀬戸	車	36	7	—	91	9	肥前系 江戸後期	
1285	F-5G	磁	器	白磁	瀬戸	車	67	19	—	89	9	肥前系 江戸後期	
1286	G-3G	土	器	土師	質	有孔突起円盤	34	15	—	89	54	下面無調整	
1287	G-5G	土	器	瓦	質	脚付火鉢	160	61	—	89	54	内外面スス付着 底径114mm	
1288	F-H4G	土	器	瓦	質	蓋輪	372	85	—	91	55	粘土砂粒多い 底径380mm	
1289	西屋下	土	器	瓦	質	植木鉢?	156	105	—	88	54	底径112mm	
1290	不明	磁	器	染付	漆	蓋	72	40	30	91	10	山水文 高台砂付着無胎 肥前系 18C後半～19C初	
1291	334	磁	器	染付	漆	蓋	71	46	35	84	13	銅版転写 六角梅花文 瀬戸・美濃	
1292	不明	陶	器	志野	鉄	磁	120	26	70	91	10	美濃 17C	
1293	不明	陶	器	無胎	小皿		130	18	60	91	10	内外面二次焼成 産地不明 19C 1282に似る	
1294	不明	土	器	散化	埴輪?		—	—	—	127	57	粘土砂粒多い 型いへら調整	
1295	033	磁	器	青花	高脚入れ		78	54	57	55	2	團扇型牡丹唐草文ハリ成銅線残存「宣徳年製」銘景徳園19C	
1296	033	磁	器	青花	高脚入れ		80	54	59	55	2	團扇型牡丹唐草文ハリ成銅線残存「宣徳年製」銘景徳園19C	
1297	008	陶	器	胎	磁	蓋	—	—	52	24	13	高台納輪 瀬戸・美濃 17C	
1298	351	土	器	土師	器	模倣	138	46	—	130	58	須恵器蓋杯身模倣	
1299	351	土	器	土師	器	粗製	124	44	—	130	58	内面スス付着	
1300	351	土	器	土師	器	粗製	122	51	—	130	58	内面黒色	
1301	351	土	器	土師	器	粗製	120	53	—	130	58	内面黒色	
1302	351	土	器	土師	器	粗製	110	54	—	130	58	口縁直立	

## IV 資 料

No	主遺物	図録	種類	軸/焼成	器形	法量	頁	写真	備考	
1303	351		土	器土師器	粗製環	110 51 66	130	58	口縁直立	
1304	351		土	器土師器	粗製環	114 49 -	130	58	短口縁 丸底気味 内面スス付着	
1305	351		土	器土師器	粗製環	124 51 72	130	58	口縁外傾 平底	
1306	351		土	器土師器	粗製環	122 49 -	130	58	短口縁 丸底気味	
1307	351		土	器土師器	粗製環	122 56 68	130	58	口縁直立 平底	
1308	351		土	器土師器	粗製環	121 49 70	130	58	短口縁	
1309	351		土	器土師器	粗製環	125 47 -	130	58	口縁直立 丸底	
1310	351		土	器土師器	粗製環	127 53 -	130	58	口縁直立 丸底気味	
1311	351		土	器土師器	粗製環	121 46 -	130	58	口縁直立 平底気味	
1312	351		土	器土師器	粗製環	113 53 72	130	58	口縁直立 平底	
1313	351		土	器土師器	粗製環	107 50 -	130	58	短口縁 平底気味	
1314	351		土	器土師器	粗製環	115 49 -	130	58	短口縁 平底気味	
1315	351		土	器土師器	粗製環	112 47 70	130	58	釜み大きい 平底	
1316	351		土	器土師器	粗製環	115 49 -	130	58	丸底気味	
1317	351		土	器土師器	粗製環	118 50 -	130	58	釜み大きい 平底気味	
1318	351		土	器土師器	粗製環	109 50 -	130	58	口縁直立 丸底気味	
1319	351		土	器土師器	粗製環	115 43 -	130	58	釜み大きい 内面黒色 平底気味	
1320	351		土	器土師器	粗製環	118 48 -	130	58	内面スス付着 平底気味	
1321	351		土	器土師器	粗製環	112 50 -	130	58	短口縁 丸底気味	
1322	351		土	器土師器	粗製環	110 45 -	130	58	短口縁 内面黒色 平底気味	
1323	351		土	器土師器	粗製環	115 48 58	130	58	内面黒色気味 平底	
1324	351		土	器土師器	粗製環	113 47 -	130	58	丸底気味	
1325	351		土	器土師器	粗製環	119 49 -	130	58	内外面黒色 丸底	
1326	351		土	器土師器	粗製環	105 44 -	130	58	口縁やや内傾 丸底	
1327	351		土	器土師器	粗製環	98 47 51	130	58	小平底 内面黒色 外面二次焼成	
1328	351		土	器土師器	粗製環	112 51 54	130	58	小平底 内外面黒色	
1329	351		土	器土師器	粗製環	109 51 51	130	58	短口縁 平底 内外面黒色	
1330	351		土	器土師器	粗製環	111 52 -	130	58	平底気味 内面黒色	
1331	351		土	器土師器	粗製環	101 48 60	130	58	口縁外傾 平底 焼成不良	
1332	351		土	器土師器	粗製環	104 47 66	130	58	口縁内傾 平底 焼成不良	
1333	351		土	器土師器	粗製環	102 50 53	130	58	短口縁 小平底 内面黒色	
1334	351		土	器須恵器	蓋平盃	127 44 -	132	59	底部平行線状凹凸 胎土砂粒多い	
1335	351		土	器須恵器	蓋平盃	148 47 -	132	59	頂部平行線状凹凸 胎土砂粒多い	
1336	353		土	器須恵器	埴埴	-	134	60	胎土砂粒多い	
1337	354		土	器須恵器	埴	-	136	61	外面格子状彫目 胎土砂粒やや少ない	
1338	351		埴	輪円筒	象人物	-	130	58	上位格子彫朱彩	
1339	351		埴	輪円筒	凸帯2段	208 335 -	130	58	タテハケ ×印記号 凸帯断面台形 底径146mm	
1340	351		埴	輪円筒	脚部	-	70	130	58	タテハケ 凸帯断面三角形
1341	351		埴	輪円筒	脚部	-	70	130	58	タテハケ 凸帯断面三角形
1342	351		埴	輪円筒	脚部	-	130	58	タテハケ ×印記号 凸帯断面台形	
1343	351		埴	輪円筒	脚部	-	130	58	タテハケ 凸帯断面三角形	
1344	351		埴	輪円筒	脚部	-	130	58	タテハケ 凸帯断面台形	
1345	353		埴	輪円筒	凸帯2段	196 354 -	135	60	タテハケ 弓印記号 凸帯断面台形 底径121mm	
1346	353		埴	輪円筒	脚部	186 -	135	61	タテハケ 凸帯断面台形	
1347	353		埴	輪円筒	脚部	-	135	61	タテハケ 凸帯断面三角形	
1348	353		埴	輪円筒	脚部	-	111	135	61	タテハケ 凸帯断面台形
1349	353		埴	輪円筒	脚部	-	150	135	61	タテハケ
1350	353		埴	輪円筒	脚部	-	120	135	61	タテハケ
1351	353		埴	輪円筒	脚部	-	135	61	タテハケ 凸帯断面台形	
1352	353		埴	輪円筒	脚部	-	135	61	タテハケ 弓印記号 凸帯断面台形	
1353	353		埴	輪円筒	脚部	-	135	61	タテハケ 凸帯断面台形	
1354	352		土	器土師器	甕	192 309 -	133	60	胎土砂粒多い 削り調整 底径82mm	
1355	353		土	器土師器	甕	198 316 -	134	61	胎土砂粒多い 削りコバメ調整 内面斑状有機物痕 底径96mm	
1356	359		土	器弥生	壺	182 308 -	138	62	粗波状文様状文 研磨調整 内外面スス付着 底径77mm	
1357	359		土	器弥生	小型壺	114 -	138	62	無紋 口縁部に磨目 粗研磨調整 内外面スス付着	
1358	310		土	器土師器	火鉢?	-	82	51	軟質 二次焼成成不明	
1359	296		磁	器染付	碗盤	-	60	8	鳳凰文 肥前 18C 後~19C 前	
1360	087		磁	器染付	碗	-	44	70	10	草木文 酒福純 肥前 18C 前~中
1361	087		磁	器染付	碗	114 -	70	10	9	花草文 肥前系 18C 後~19C 初
1362	081	311	磁	器染付	段重	-	70	10	9	花草文 肥前 19C 初~基本
1363	300		土	器土師器	灯明皿	136 43 -	86	53	10	クロク成形 胎土砂粒含む

No	主遺物	副遺物	種類	軸/焼成	器形	法量	頁	写真	備考
1364	027		磁器	染付	碗	—	—	50	矢羽飯文 肥前 18C末～1810
1365	027		磁器	青磁	磁打皿	—	—	50	桃繪 肥前 18C後～19C初
1366	018		磁器	染付	調	98	48	40	72 高台砂 肥前 18C後～19C初
1367	219		磁器	染付	蓋物	—	—	67	8 樹草文 肥前 19C初～幕末
1368	263		磁器	染付	鉢	—	—	47	5 障焼柳様 肥前系 19C～幕末
1369	270		磁器	染付	湯呑み	—	—	63	7 合成コバルト 手描 樹草文 雷文 肥前 幕末
1370	270		磁器	染付	湯呑み	60	52	36	63 7 細線繪「乾」銘 肥前 1820～幕末
1371	270		磁器	染付	湯呑み	—	—	36	63 7 山水文「乾」銘 肥前 1820～幕末
1372	270		磁器	染付	燗反碗	106	—	—	63 7 山水文 口將無軸 肥前系 1820代～幕末
1373	301		磁器	白磁	小皿	100	24	58	86 12 見込箱下に十字形彫目 産地不明 明治以降
1374	311		磁器	青絵金彩	盃	62	26	28	81 12 合成コバルト 手描「キザキ 関口」 瀬戸・美濃 天保～幕末
1375	311		磁器	染付	盃	—	—	30	81 12 高台砂 肥前吉田 18C
1376	066		磁器	染付	皿	—	—	86	14 4 山水文 蛇の目凹型高台 肥前 19C初～幕末
1377	069		磁器	染付	皿	—	—	96	45 5 松竹梅文 蛇の目凹型高台 徳政 肥前 19C前半
1378	081		磁器	染付	火入れ	88	—	—	70 10 桐文 肥前 18C後半 1165、1389と組
1379	081		磁器	青絵	蓋	57	—	—	70 10 蓮文 肥前 幕末～明治
1380	087	311	陶器	染付	筒型碗	—	—	36	70 10 菊花散らし 見込五弁花 瀬戸・美濃 18C
1381	091		陶器	色絵	碗	—	—	—	70 10 京焼系
1382	054		磁器	染付	？(産部)	—	—	68	78 10 内面無軸 肥前 17C中葉
1383	310		磁器	染付	調	—	—	42	81 11 雪輪梅文 崩「大明年製」銘 肥前 18C中～末
1384	310		磁器	染付	調	108	52	44	81 11 笹文 見込蛇の目輪はぎ 肥前 18C中～末
1385	310		磁器	染付	調	100	48	35	81 11 二重綱目文 肥前 18C中
1386	F-H4G		磁器	染付	調	—	—	44	91 9 格子文 肥前 1820～幕末
1387	310		磁器	染付	油壺	—	—	—	81 11 笹文 肥前 18C
1388	310		磁器	染付	小碗	76	—	—	81 11 雨降り文 肥前 18C前半
1389	310	081	磁器	染付	火入れ	66	—	—	81 11 桐文 肥前 18C後半 1165、1378と組
1390	310		磁器	染付	善哉猪口	78	—	—	81 11 斜格子文 肥前 18C中～末
1391	C-5G		磁器	染付	調	—	—	—	88 9 草花文 肥前 18C
1392	F-H4G		磁器	染付	筒型碗	76	—	—	91 9 菊花散らし 肥前系 1780～1810
1393	F-H4G		磁器	白磁	磁打小皿	81	21	37	91 9 見込梅花文 産地不明
1394	F-H4G		磁器	染付	仏飯器	—	—	—	91 9 肥前 18C
1395	F-5G		磁器	硝瑠璃	神酒瓶	—	—	—	89 9 肥前 19C前～末
1396	F-5G		磁器	染付	輪花文	104	22	52	89 9 草花文 肥前 19C初～幕末
1397	F-5G		磁器	染付	神酒瓶	—	—	—	89 9 タコ唐草 肥前 19C初
1398	F-5G		磁器	染付	湯呑み	66	—	—	89 9 草木文 肥前 1820～幕末
1399	027		磁器	染付	広東碗蓋	—	—	—	50 6 草木文 肥前 19C前
1400	018		磁器	染付	皿	—	—	80	72 13 肥前志田 19C初～幕末
1401	255		磁器	染付	火入れ	101	—	—	62 8 山水文 肥前 19C初～幕末
1402	289		磁器	白磁	磁打紅皿	—	—	—	56 7 タコ唐草 肥前 江戸後期
1403	302		磁器	染付	調	102	50	40	85 12 くらわんか 雪輪梅文 崩大明年製 肥前波佐見系 18C後半
1404	070		磁器	白磁	磁蓋	—	—	25	41 5 肥前系 19C中～後半
1405	E-5G		陶器	染付	磁打皿	—	—	—	89 9 合成コバルト 草花文 ヨーロッパ 19C
1406	P-8G		磁器	染付	碗蓋	—	—	—	67 3 外面梅花文 内面松竹梅文 肥前 19C初～幕末
1407	V-12G		陶器	青緑釉	皿	—	—	62	11 3 蛇の目輪はぎ 肥前
1408	不明		磁器	染付	善哉猪口	—	—	—	91 10 斜格子文 肥前 18C後半
1409	不明		磁器	軸下鉄形	筒型碗	—	—	—	91 10 綱目文 肥前系 18C後半
1410	319		陶器	鉛釉	輪	—	—	46	79 13 尾呂茶碗 瀬戸・美濃 18C中
1411	F-H4G		陶器	灰釉鉄形	水壺	—	—	—	91 9 外面に深い菊文 瀬戸 19C
1412	042		陶器	青緑釉	皿	—	—	44	65 5 見込蛇の目輪はぎ 肥前
1413	047		陶器	錆釉	調鉢	—	—	—	26 3 瀬戸 18C後～19C初
1414	093		陶器	長石釉	香炉	—	—	—	84 10 内面スス付着 瀬戸・美濃 17C
1415	269		陶器	兵須絵	皿	—	—	97	63 7 梅文か 蛇の目高台 上野自性寺か 明治か
1416	O-6G		陶器	鉄絵	皿	—	—	—	38 3 馬ノ目皿 瀬戸 幕末
1417	071		陶器	刷絵	鉢	—	—	66	42 5 灰釉 花文 美濃
1418	F-5G		磁器	染付	燗反碗	110	—	—	89 9 花文 産地不明
1419	349		陶器	ルス釉	火鉢	—	—	—	27 4 内面錆釉 瀬戸 18C
1420	027		陶器	青緑釉	瓶	—	—	—	50 6 盛り上げ 相馬大瓶 幕末以降
1421	G-6G		陶器	灰釉	調	—	—	—	40 89 9 小杉茶碗 瀬戸・美濃
1422	070		磁器	染付	飯	—	—	—	42 5 合成コバルト 意絵花文 京焼系か 明治
1423	310		陶器	灰釉	碗皿	—	—	82	81 11 瀬戸・美濃
1424	223		陶器	鉄釉	楕木鉢	—	—	—	64 8 瀬戸・美濃

## IV 資 料

No	主建構	副建	種 類	軸/地成	形 状	法 量	頁	写真	備 考
1425	349		陶 器	志野鉄絵	小皿	— — —	27	4	瀬戸・美濃
1426	074		陶 器	胎 釉	香炉	116 — —	39	5	瀬戸・美濃 18C末
1427	U-11G		陶 器	特 種	小形こね鉢	— — —	11	3	内面無軸 塩硝硝り 瀬戸・美濃
1428	270		陶 器	天 釉	茶碗	— — 56	63	7	岡台 瀬戸・美濃
1429	F-5G		陶 器	柿 釉	徳利	31 — —	89	9	備前写し 瀬戸・美濃
1430	071		陶 器	鉄 絵	火入れ	— — —	42	5	山水絵 京焼風 肥前
1431	330		陶 器	色 絵	碗	— — —	79	13	緑彩 瀬戸・美濃 18C後～19C
1432	301		陶 器	掛 分 け	湯呑み	— — —	86	12	黒灰軸 鉄軸 柏馬大瓶 幕末以降
1433	060		陶 器	鉄 絵	繪 碗	— — 50	13	4	京焼風山水絵 肥前
1434	F-H4G		磁 器	染 付	碗	112 55 34	91	9	合成コバルト「波34」鉢 肥前波佐見 昭和統制期
1435	310		磁 器	染 付	碗	— — 42	81	11	コンニャク判并指文 瀬福 18C前～中
1436	290		磁 器	染 付	湯呑み	— — —	67	7	合成コバルト 手摺 山水文 書文 肥前系 幕末～明治
1437	027		磁 器	染 付	陶反碗	— — —	50	6	草花文 肥前系 19C初～幕末
1438	311		磁 器	染 付	仏飯器	— — —	81	12	タコ唐草 肥前系 18C末～19C
1439	290		磁 器	染 付	段重	— — 96	57	7	藤原松写 書文 会津系か 明治・大正
1440	311		磁 器	染 付	油壺	— — —	81	12	雪輪梅文 肥前系 18C
1441	027		磁 器	染 付	皿	— — —	50	6	羅文か 肥前系 18C後半
1442	F-H4G		磁 器	青 磁	火入れ	— — 74	91	9	蛇の目型蓋高台 肥前 18C

## B 金属製品

No	主建構	副建	種 類	形 状	形 状	法 量	頁	写真	備 考
2001	047		銅	有 孔 鉄	寛永通宝	24 7	26	23	新寛永 1.7g
2002	W-1G		銅	有 孔 鉄	寛永通宝	24 6	11	18	古寛永 2.4g
2003	Q-11G		銅	有 孔 鉄	寛永通宝	24 7	67	45	新寛永 2.1g
2004	主康		銅	有 孔 鉄	寛永通宝	23 7	20	20	新寛永 2.5g
2005	270		銅	有 孔 鉄	文久永宝	27 6	63	44	西渡 真字宝 3.0g 1863年
2006	252		銅	有 孔 鉄	寛永通宝	25 6	61	43	古寛永 3.3g
2007	N-7G		銅	有 孔 鉄	寛永通宝	26 6	38	30	新寛永 3.7g
2008	318		銅	有 孔 鉄	寛永通宝	23 7	85	53	新寛永 1.9g
2009	087		銅	有 孔 鉄	寛永通宝	25 6	70	46	古寛永 3.8g
2010	H-6G		銅	有 孔 鉄	寛永通宝	23 7	90	55	新寛永 2.3g
2011	H-5G		銅	有 孔 鉄	寛永通宝	24 7	90	54	新寛永 2.3g
2012	319		銅	有 孔 鉄	寛永通宝	25 6	79	50	新寛永「文」字 3.1g
2013	F-6G		鉄	有 孔 鉄	寛永通宝	29 7	89	54	新寛永 西渡 3.8g
2014	F-5G		銅	有 孔 鉄	寛永通宝	24 7	89	54	新寛永 2.0g
2015	G-4G		銅	有 孔 鉄	寛永通宝	24 6	89	54	新寛永 2.2g
2016	054		銅	有 孔 鉄	寛永通宝	23 7	78	49	新寛永 1.8g
2017	F-1		銅	有 孔 鉄	元豊通宝?	25 7	91	55	行体 3.0g 1078年初辨
2018	2往		銅	有 孔 鉄	寛永通宝	24 7	88	54	新寛永 3/5
2019	H-6G		銅	有 孔 鉄	寛永通宝	— —	90	55	古寛永 1/2
2020	300		銅	有 孔 鉄	文久永宝	27 7	85	53	西渡 真字宝 2.8g 1863
2021	1-4G		銅	有 孔 鉄	柳葉光元	24 7	90	55	2.5g 1068年初辨
2022	1-4G		銅	有 孔 鉄	政和通宝	24 7	90	55	2.9g 1111年初辨
2023	1-4G		銅	有 孔 鉄	元豊通宝	23 7	90	55	素体 2.8g 1078年初辨
2024	榎下		銅	有 孔 鉄	寛永通宝	23 7	88	54	新寛永 2.1g
2025	351		銅	無 孔 鉄	一銭	28 —	11	18	明治17年 6.9g 1884年
2026	133		銅	無 孔 鉄	一銭	23 —	36	28	昭和〇年 3.5g
2027	U-9G		銅	無 孔 鉄	一銭	22 —	11	18	年不明 2.1g
2028	不明		銅	無 孔 鉄	二銭	32 —	91	55	明治14年 13.5g 1881年
2029	351		銅	無 孔 鉄	一銭	23 —	11	18	大正13年 3.3g 1924年
2030	255		銅	無 孔 鉄	一銭	23 —	62	43	大正〇年 3.5g
2031	296		銅	有 孔 鉄	文久永宝	27 6	60	42	西渡 真字宝 3.0g 1863年
2032	F-5G		銅	無 孔 鉄	一銭	23 —	89	54	大正9年 3.2g 1920年
2033	280		銅	有 孔 鉄	五銭	19 4	52	37	大正12年 2.5g 1923年
2034	280		アルミ	円 孔 鉄	十銭	19 5	52	37	昭和19年 2.4g 1944年
2035	不明		アルミ	無 孔 鉄	一銭	18 —	91	55	昭和14年 0.9g 1939年
2036	049		鉄	有 孔 鉄	寛永通宝?	25 7	26	23	錆多い 3.6g
2037	049		鉄	有 孔 鉄	寛永通宝?	— —	26	23	錆多い 1/4
2038	319		銅	キセル	雁首銅有	38 12 19	79	50	類似し短 2039と同一 ラウ残 V～VI期
2039	319		銅	キセル	狭口銅有	60 11 5	79	50	2038と同一 ラウ残 V～VI期



No	主遺構	副遺構	種類	形状	器形	法量	写真	備考
2040	313	314	銅	キセル	脛首肩有	28 11 17	81	50 指返し無 肩差形文 ラウ残 V1期
2041	313	314	銅	キセル	吸口肩有	54 - 6	81	50 肩つぶれ 時期不明
2042	070		銅	キセル	吸口肩無	104 10 5	42	31 ラウ残 V1期
2043	043		銅	キセル	脛首肩無	73 10 25	83	51 指返し長 2044と同一 ラウ残 IV~V期
2044	043		銅	キセル	吸口肩無	100 10 4	83	51 2043と同一 ラウ残 IV~V期
2045	033		銅	キセル	吸口肩無	92 9 6	55	2 指止め円環 ラウ残 V~VI期
2046	064		銅	キセル	吸口肩無	56 10 4	14	20 直線 V1期?
2047	064		銅	キセル	吸口肩不明	43 - 4	14	20 IV期?
2048	E-4G		銅	キセル	吸口肩有	51 11 4	89	54 2枚つなぎ 田期
2049	I-7G		銅	キセル	吸口肩不明	42 9 -	90	55 V~VI期?
2050	H-5G		銅	キセル	吸口肩不明	3 9 -	90	54 V~VI期?
2051	304		銅	キセル	吸口肩有	70 11 6	87	53 ラウ残 田期
2052	F-6G		銅	キセル	吸口肩無	68 10 8	89	54 V期
2053	H-5G		銅	キセル	吸口肩有	- 10 -	90	54 V~VI期
2054	081		銅	キセル	脛首肩有	- 10 -	70	45 指返し短 肩長 V期?
2055	301		銅	キセル	脛首肩無	50 10 17	86	53 指返し短 V期
2056	H-4G		銅	キセル	脛首肩有	45 10 14	90	54 指返し無 肩段無し V1期
2057	300		銅	キセル	脛首肩有	49 11 -	86	53 指返し短 2枚つなぎ V期?
2058	046		銅 金 銀	キセル	吸口肩有	74 10 7	83	2 肩十字花文 2枚つなぎ 田期
2059	270		銅 金 象 鉄	鞘 口		39 25 11	63	2 器口つなぎ地に金線象嵌「林」銘 上側面合わせ
2060	280		銅	鋸止め		39 26 -	57	40 周縁部鋸歯状
2061	270		銅	ヘアピン		79 - -	63	44 断面半円形
2062	301		銅	不 明	ヘラ状	160 - -	86	53 薄板 片能押孔
2063	091		銅	不 明	ヘラ状	106 - -	71	46 短冊形
2064	不明		銅	ランプ		- - -	91	55 上部「大」字型裝飾 幕末以降
2065	F-H4G		銅	オロシ金		- - -	91	55
2066	270		銅	燭 台	台架碗型	60 34 -	63	44 近世
2067	289		銅	ランプ		50 40 62	56	40 上部木製型裝飾 幕末以降
2068	033		銅	ランプ?	台座碗か	84 17 -	55	39 肩部端歯状裝飾
2069	070		銅	角 釘	小型	44 3 -	42	31 頂部方形
2070	M-8G		銅	角 釘	大型	88 4 -	38	30 頂部らっきょう型
2071	075		銅	不 明	円筒状	32 - -	39	31 中空 片割のみ開口
2072	289		鉄	不 明	明状	130 - -	57	41 内傾し片割に突起
2073	033		鉄	小 鎌		65 44 -	55	39
2074	354		鉄	刀 鐔	単孔	78 65 4	136	61
2075	N-6G		鉄	馬 蹄	後右脚用	121 16 8	38	30 U字形
2076	H-5G		鉄	馬 蹄	前左脚用	120 20 8	90	54 楕円形
2077	221		鉄	火 打 金		75 - -	56	39 19C
2078	245		鉄	小 刀		312 - -	63	43 薄く残存状態不良
2079	052		鉄	包 丁	刃部 柄部	- - -	53	38 薄く残存状態不良 木柄部に押印
2080	319		鉄	鉈	刃部	118 45 -	79	50 着柄部細型
2081	054		鉄	鉈	刃部	140 39 -	78	49 着柄部太型
2082	F-II4G		鉄	鎌		147 58 -	91	55 着柄部に孔 薄手
2083	H-4G		鉄	鎌		122 30 -	90	55 厚手
2084	270		鉄	鎌		38 91 -	63	44 着柄部端歯状 厚手 刃部上向き
2085	290		鉄	小 鎌		65 37 -	56	41
2086	235		鉄	鎌	刃部	- - -	62	43 厚手
2087	255		鉄	鎌	刃部	- - -	62	43 厚手 2088と同一か
2088	255		鉄	鎌	着柄部	- 71 -	62	43 尖頭形 2087と同一か
2089	070		鉄	鎌	着柄部	- - -	42	31 先端外反
2090	219		鉄	鎌	着柄部	- - -	67	45 薄手
2091	071		鉄	鎌	着柄部	- - -	42	31 厚手
2092	047		鉄	鎌 ?	刃部	- - -	26	23 小片
2093	F-5G		鉄	小 鎌	着柄部	- - -	89	54 刃部側変形
2094	270		鉄	ヤスリ?		- - -	63	44 両刃
2095	070		鉄	鎌	刃部	- - -	42	31 残存状態不良
2096	223		鉄	鎌	刃部	- - -	64	44 細身
2097	318		鉄	鎌	刃部	- - -	85	53 小片
2098	334		鉄	楊柳具?	帯状	- - -	84	52 2片 薄手
2099	269		鉄	火 箸	上部環状	238 - -	63	44 断面方形 2100と組
2100	269		鉄	火 箸	上部環状	232 - -	63	44 断面方形 2099と組

## IV 資 料

No.	主産物	産地	種類	形状	器形	法	量	頁	写真	備	考
2101	270		鉄	火	箸	上部球形	254	—	63	44	断面方形 2102と組
2102	270		鉄	火	箸	上部球形	275	—	63	44	断面方形 2101と組
2103	1/2層		鉄	火	箸	上部球形	226	—	91	55	断面方形
2104	1/2層		鉄	火	箸	上部階状	230	—	91	55	断面方形
2105	270		鉄	十	能	上部球形	317	60	63	44	
2106	1-4G		鉄	不	明	棒釘状	256	—	90	55	下部板状で尖頭形
2107	251		鉄	太	釘		147	—	61	43	断面方形
2108	290		鉄	不	明	棒状	150	—	57	41	断面V字形
2109	H-4G		鉄	不	明	長棒状	145	—	90	54	断面方形
2110	263		鉄	金	具	T字型	103	—	46	34	鋳造
2111	070		鉄	金	具	T字型	70	—	42	31	鋳造 有孔
2112	166		鉄	金	具	口字型	50	30	32	26	薄手
2113	087		鉄	金	具	口字型	59	26	70	46	厚手
2114	H-5G		鉄	盤	輪?	環状	—	—	90	55	内側剛直立
2115	033		鉄	不	明	L字形状	—	—	55	39	鼻具か
2116	033		鉄	不	明	棒状	210	—	55	39	途中で折り曲げ 有孔
2117	033		鉄	不	明	薄板状	—	—	55	39	残存状態不良
2118	H-4G		鉄	嗽	着柄部角状		343	130	90	54	「テング」
2119	290		鉄	嗽	着柄部角状		250	126	57	41	「テング」
2120	289		鉄	嗽			—	125	57	41	「テング」
2121	西屋下		鉄	鑄	着柄部階状		—	121	88	54	着柄部折り曲げ
2122	028		鉄	嗽	5本歯		165	265	51	37	3本歯は新止め 薄手
2123	F-6G		鉄	小	嗽	3本歯	140	117	89	54	着柄部有孔 厚手
2124	351		刀	鐵			130	—	132	59	着柄部有孔 酸化腐蝕残存分析
2125	351		鉄	刀	・基部		86	—	132	59	刃部三角形
2126	351		鉄	不	明	線状	50	—	132	59	
2127	351		鉄	嗽	刀・基部		73	—	132	59	刃部五角形
2128	351		鉄	嗽	基部		93	—	132	59	
2129	351		鉄	嗽	刀・基部		61	—	132	59	刃部五角形
2130	351		鉄	嗽	基部		96	—	132	59	
2131	351		鉄	嗽	刀・基部		86	—	132	59	刃部五角形
2132	351		鉄	嗽	刃部		46	—	132	59	刃部五角形
2133	351		鉄	嗽	刃部		47	—	132	59	刃部五角形
2134	351		鉄	嗽	刃部		25	—	132	59	刃部魚型
2135	351		鉄	嗽	基部		119	—	132	59	
2136	351		鉄	嗽	刀・基部		95	—	132	59	刃部五角形
2137	351		鉄	嗽	基部		61	—	132	59	
2138	351		鉄	嗽	基部		52	—	132	59	
2139	351		鉄	嗽	基部		97	—	132	59	
2140	351		鉄	嗽	刀・基部		—	—	132	59	2本磨着 刃部五角形
2141	351		鉄	嗽	基部		71	—	132	59	
2142	351		鉄	嗽	刃部		25	—	132	59	刃部魚型
2143	351		鉄	不	明	着柄部?	—	—	132	16	希残存 分析
2144	356		鉄	刀	子?	基部	—	—	133	60	残存状態不良
2145	350		鉄	鉄	滓	褐灰色	—	—	128	57	0.90kg
2146	350		鉄	鉄	滓	褐灰色	—	—	128	57	0.65kg
2147	350		鉄	鉄	滓	褐灰色	—	—	128	57	2.45kg
2148	350		鉄	鉄	滓	褐灰色	—	—	128	57	分析 1.30kg
2149	350		鉄	鉄	滓	褐灰色	—	—	128	57	分析 1.65kg
2150	350		鉄	鉄	滓	褐灰色	—	—	128	57	1.10kg
2151	350		鉄	鉄	滓	黒灰色	—	—	128	57	0.50kg
2152	350		鉄	鉄	滓	黒灰色	—	—	128	57	0.60kg
2153	350		鉄	鉄	滓	黒灰色	—	—	128	57	1.25kg
2154	350		鉄	鉄	滓	褐灰色	—	—	128	57	分析 2.10kg
2155	R-8G		銅	不	明	環状	50	6	67	45	断面方形
2156	不明		銅	ツマミ?			22	—	91	91	中空 断面六角形
2157	D-2G		銅	金	具	環状	74	46	88	54	断面円形 両端鑿着形状
2158	H-7G		銅	釘	閉し		—	—	90	56	小釘痕に有孔
2159	H-4G		銅	管	つなぎ		20	28	90	54	下端有孔
2160	H-4G		銅	釘	あて	長方形	27	19	90	54	大小3穴
2161	M-6G		鉛	銃	弾	半球形	14	14	11	38	磨着痕 発射跡 13.4g

## C 木器

No	主遺物	副遺物	種類	形状	器形	法量	頁	写真	備	考	
3001	048		スギ	水汲桶	把手	258 64 8	26	23	有孔 サンプルNo1		
3002	048		スギ	水汲桶	底板	169 101 -	26	23	厚10mm サンプルNo2		
3003	048		スギ	水汲桶	底板	192 156 -	26	23	木釘残 2cm幅のアタリ 厚13mm サンプルNo4		
3004	048		スギ	水汲桶	側板	168 43 6	26	23	木釘で把手取り付け サンプルNo5		
3005	048		スギ	水汲桶	側板	125 42 6	26	23	サンプルNo6		
3006	049		アカマツ	ツリ具?	2枚組	103 51 8	26	23	木釘残 サンプルNo23		
3009	050		アカマツ	角材?		128 65 48	26	23	削り加工 サンプルNo29		
3010	050		竹	自然木		217 -	-	27	23	サンプルNo30	
3011	051		スギ	水汲桶	把手	318 77 13	43	32	有孔 サンプルNo38		
3012	051		スギ	水汲桶	把手	315 84 15	43	32	有孔 サンプルNo39		
3013	051		スギ	箱		265 114 8	43	33	木釘残 サンプルNo40		
3014	051		スギ	板		209 99 23	44	33	削り直 サンプルNo42		
3015	051		スギ	桶	底板	426 150 -	44	33	木釘残 厚34mm 3016と組 サンプルNo43		
3016	051		スギ	桶	底板	450 138 -	44	33	木釘残 厚27mm 3015と組 サンプルNo44		
3017	051		アカマツ	箱		228 210 -	43	33	釘穴残 厚10mm サンプルNo46		
3018	051		スギ	箱		280 170 8	43	33	釘穴残 サンプルNo48		
3019	051		スギ	水汲桶	底板2枚組	210 110 -	43	32	木釘残 厚16mm サンプルNo49・50		
3020	051		アカマツ	構築部材		270 38 19	43	32	両端に段 サンプルNo51		
3021	051		アカマツ	角材		245 18 14	43	32	釘穴残 サンプルNo52		
3022	051		スギ	角材		243 16 15	43	32	サンプルNo53		
3023	051		スギ	水汲桶	側板	- 51 10	43	32	サンプルNo56		
3024	051		スギ	水汲桶	側板	- 55 10	43	32	サンプルNo57		
3025	051		コナラ節	枕		510 25 -	43	32	サンプルNo60		
3026	051		スギ	水汲桶	側板	205 69 15	43	32	サンプルNo67		
3027	051		スギ	水汲桶	側板	212 75 13	43	32	サンプルNo68		
3028	051		スギ	水汲桶	側板	209 62 9	43	32	サンプルNo69		
3029	051		スギ	水汲桶	側板	207 64 10	43	32	サンプルNo70		
3030	051		スギ	角材	未製品	240 67 32	44	33	サンプルNo75		
3031	051		スギ	水汲桶	側板	210 60 11	43	32	サンプルNo76		
3032	051		スギ	水汲桶	側板	208 35 10	43	32	サンプルNo77		
3033	051		スギ	水汲桶	側板	- 10 43	32	32	サンプルNo78		
3034	051		スギ	板	棒状	221 15 13	43	33	釘穴残 サンプルNo129		
3035	051		竹	自然木		484 26 -	44	33	サンプルNo81		
3036	052		タリ	栓	木槌型	210 -	-	53	37	サンプルNo134	
3037	052		タリ	構築部材?	小片	91 58 40	53	38	サンプルNo137		
3038	052		タリ	構築部材?	小片	95 42 22	53	38	サンプルNo138		
3039	052		タリ	構築部材?	小片	97 58 43	53	38	サンプルNo139		
3040	052		アカマツ	角材		1310 53 -	53	37	皮残存 断面台形 厚34mm サンプルNo154・156		
3042	052		スギ	水汲桶	底板2枚組	204 199 -	53	37	木釘残 厚11mm サンプルNo155		
3043	052		スギ	水汲桶	底板	483 178 53	38	38	木釘残 厚23mm サンプルNo160		
3044	054		キムノキ	枕		646 78 -	78	50	折れ サンプルNo170・171		
3045	310		スギ	曲物	底板2枚組	490 116 -	82	51	厚14mm サンプルNo179・180		
3046	310		スギ	水汲桶	底板3枚組	197 200 -	82	51	木釘残 厚12mm サンプルNo181・182・183		
3047	310		スギ	板		449 150 8	82	51	磨痕 サンプルNo184		
3048	310		アカマツ	皮付丸太		215 43 -	82	51	一部加工 サンプルNo185		
3049	310		アカマツ	構築部材		572 63 65	82	51	両端に段 サンプルNo186・197		
3050	310		スギ	厚板		172 91 6	82	51	磨痕 サンプルNo189		
3051	310		タリ	角材		155 24 16	82	51	サンプルNo194		
3052	033		スギ	桶	底板小片	132 91 28	55	39	サンプルNo203		
3053	033		スギ	桶	底板	505 89 16	55	39	サンプルNo206		
3054	051		スギ	箱		265 141 8	43	33	木釘残 サンプルNo41		
3055	051		スギ	水汲桶	側板	- 30 10	43	32	サンプルNo79		
3056	051		スギ	水汲桶	側板	210 68 15	43	32	サンプルNo80		
3057	051		スギ	不明	棒状	222 14 12	43	33	サンプルNo130		
3058	051		スギ	板	棒状	184 15 10	43	33	釘穴残 サンプルNo131		
3059	310		アカマツ	構築部材		362 43 42	82	51	サンプルNo196		
3060	310		モミ属	不明	棒状	548 34 40	82	51	サンプルNo199		
3061	051		タリ	構築部材	未製品	1580 10 9	44	33	サンプルNo31		
3062	334		ツガ属	桶	底板	456 176 -	84	51	厚15mm サンプルNo201		

## IV 資 料

## D その他

No	主産地	産地	種 類	材質・形状	特徴・品名	法 量	頁	写真	備 考	
4001	351		石	緑色珪質岩	碧玉	26	9	132	15 碧玉 長 4.08g	
4002	351		石	緑色珪質岩	碧玉	29	11	132	15 碧玉 長 6.35g	
4003	351		石	緑色珪質岩	碧玉	28	10	132	15 碧玉 長 5.00g	
4004	351		石	緑色珪質岩	碧玉	29	8	132	15 碧玉 長 4.19g	
4005	351		石	緑色珪質岩	碧玉	27	8	132	15 碧玉 長 3.79g	
4006	351		石	緑色珪質岩	碧玉	21	8	132	15 碧玉 短 2.83g	
4007	351		石	緑色珪質岩	碧玉	21	10	132	15 碧玉 短 3.70g	
4008	351		石	緑色珪質岩	碧玉	21	9	132	15 碧玉 短 2.77g	
4009	351		石	緑色珪質岩	碧玉	23	9	132	15 碧玉 短 3.96g	
4010	351		石	珪質頁岩	碧玉	17	5	132	15 碧玉 小 0.96g	
4011	351		石	石	英切子玉	11	11	132	15 小 1.75g	
4012	351		石	石	英切子玉	14	12	132	15 大 2.61g	
4013	351		石	石	英白玉	13	13	9	132	15 1.97g
4014	351	ガラス	鉛	丸玉	丸玉	8	9	8	132	15 酸化 1.98g
4015	351	ガラス	鉛	丸玉	丸玉	11	9	10	132	15 酸化 2.16g
4016A	351	ガラス	白	小玉	小玉	132	15	01(1個)	白	
4016B	351	ガラス	黄	小玉	小玉	132	15	02-08(7個)	黄はだ色(Nb803)	
4016C	351	ガラス	青	小玉	小玉	132	15	09-12(4個)	シアン・ブルー(Nb882)	
4016D	351	ガラス	青	緑	小玉	132	15	13-44(32個)	ターコイズ・グリーン(Nb862)	
4016E	351	ガラス	紺	小玉	小玉	132	15	45-62(18個)	コバルト・ブルー(Nb890)	
4017	351		土	丸玉	丸玉	11	10	10	132	15 1.01g
4018	351		土	丸玉	丸玉	10	11	9	132	15 0.97g
4019	351		土	丸玉	丸玉	10	9	6	132	15 0.63g
4020	351		土	丸玉	丸玉	11	11	8	132	15 石(片岩系)含む
4021	351		土	丸玉	丸玉	—	—	—	132	15 小片2片
4022	D-3G	石	蛇紋岩	玉?	玉?	18	23	23	127	57 不整形立方体状 穴大きい 未成品か 13.95g
4023	G-5G	ガラス	紺	数珠玉	数珠玉	13	13	10	89	54 中央に磨接痕 不透明 近世以降 2.88g
4024	351	赤色顔料				132	15			132 15 顔料のみ 分析
4025	351	赤色顔料				132	15			132 15 顔料土層に 分析
4026	351	赤色顔料				132	—			132 15 顔料散布層 分析
4027	220	瓦	連珠三巴唐草文	軒瓦	軒瓦	70	44	267	56	39 八珠
4028	220	瓦	唐草文	軒瓦	軒瓦	—	45	—	56	39 砂粒多く焼成軟質
4029	220	瓦	平行櫛目文	平瓦	平瓦	—	16	—	56	40 砂粒多く焼成軟質
4030	220	瓦	波状櫛目文	平瓦	平瓦	—	17	—	56	40 砂粒多く焼成軟質
4031	221	瓦	平行櫛目文	平瓦	平瓦	—	16	—	56	40
4032	221	瓦	目板唐草文	契斗瓦	契斗瓦	100	—	18	56	40 波状櫛目
4033	221	瓦	連珠三巴唐草文	軒瓦	軒瓦	77	—	—	56	39 八珠
4034	221	瓦	波状櫛目文	平瓦	平瓦	—	18	—	56	40 砂粒多く焼成軟質
4035	075	瓦		平瓦?	平瓦?	—	20	40	31	西印「三改」砂粒少ない
4036	075	瓦	唐草文	軒瓦	軒瓦	—	40	—	40	30
4037	075	瓦	唐草文	軒瓦	軒瓦	—	47	—	40	30
4038	075	瓦	唐草文	軒瓦	軒瓦	—	43	—	40	30 砂粒多く焼成軟質
4039	075	瓦	唐草文	軒瓦	軒瓦	—	43	—	40	30 焼成軟質
4040	075	瓦	連珠三巴文	軒瓦	軒瓦	80	—	—	40	31 八珠
4041	075	瓦	連珠三巴文	軒瓦	軒瓦	—	—	—	40	31 八珠
4042	075	瓦		棟瓦	棟瓦	—	15	—	40	31 凹部
4043	075	瓦		棟瓦	棟瓦	—	17	—	40	30 凹部 砂粒多く焼成軟質
4044	075	瓦		棟瓦	棟瓦	—	21	—	40	30 凸部 砂粒多く焼成軟質
4045	075	瓦		棟瓦	棟瓦	—	18	—	40	31 凹部
4046	075	瓦	平行櫛目文	平瓦	平瓦	—	16	—	40	31 砂粒多く焼成軟質
4047	075	瓦	弧状櫛目文	平瓦	平瓦	—	16	—	40	30 砂粒多く焼成軟質
4048	075	瓦	波状櫛目文	平瓦	平瓦	—	16	—	40	30 砂粒多く焼成軟質
4049	296	瓦	切り落とし平瓦	平瓦	平瓦	262	270	—	60	42 釘穴3 鉄釘残存 厚18mm
4050	222	瓦	連珠三巴唐草文	軒瓦	軒瓦	76	43	290	64	44 八珠 焼成良好
4051	292	瓦	連珠三巴唐草文	軒瓦	軒瓦	70	47	—	60	41 八珠 焼成軟質
4052	246	瓦	連珠三巴文	棟巴瓦	棟巴瓦	—	20	—	60	42 十六珠
4053	290	瓦	連珠三巴文	棟巴瓦	棟巴瓦	—	20	—	56	40 十二珠 焼成良好
4054	263	瓦	連珠三巴文	軒瓦	軒瓦	73	—	—	47	34 八珠 焼成軟質
4055	262	瓦	連珠三巴文	軒瓦	軒瓦	77	—	—	52	37 八珠
4056	231	瓦	連珠三巴文	軒瓦	軒瓦	70	—	—	60	41 八珠 焼成軟質

No.	主遺物	副遺物	種類	材質・形状	特徴・品名	法	量	頁	写真	備	考	
4057	310		瓦	唐草文	軒瓦	—	50	—	82	51	中心飾り3弁 焼成良好	
4058	300		瓦		角棧椽瓦	—	—	19	86	53	釘穴 焼成軟質	
4059	046		瓦		角棧椽瓦	—	—	21	83	52	砂粒多い 焼成良好	
4060	289		瓦	弧状櫛目文	平瓦	—	—	18	56	40		
4061	363		瓦	波状櫛目文	平瓦	—	—	17	47	34	端部水平	
4062	290		瓦	平行櫛目文	平瓦	—	—	10	56	40	薄手 焼成良好	
4063	015		瓦	連珠三巴文	軒瓦	—	—	—	48	35	八珠 小片	
4064	018		瓦	弧状櫛目文	平瓦	—	—	16	50	36	砂粒多い 焼成良好	
4065	017		瓦	唐草文	軒瓦	—	—	40	—	50	36	
4066	028		瓦	巴付	隅瓦	—	—	—	50	37	砂粒多く 焼成軟質	
4067	028		瓦	布	目丸瓦	—	—	20	50	37	砂粒多く 焼成軟質 二次焼成	
4068	028		瓦	唐草文	軒瓦	—	—	40	—	50	37	刻印「三改」 焼成軟質
4069	028		瓦	唐草文	軒瓦	—	—	40	—	50	37	胎土に黒色鉱物 焼成軟質
4070	028		瓦	唐草文	軒瓦	—	—	42	—	50	37	彫り深い 焼成軟質
4071	028		瓦	唐草文	軒瓦	—	—	45	—	50	37	砂粒多い
4072	028		瓦	連珠三巴文	軒瓦	—	—	—	50	37	八珠 焼成軟質	
4073	069		瓦	連珠三巴唐草文	軒瓦	—	—	48	—	46	34	十珠 裏面鉄片付着
4074	069		瓦	連珠三巴文	軒瓦	75	—	—	46	34	八珠 軟質	
4075	070		瓦	連珠三巴文	軒瓦	—	—	—	42	31	八珠か 焼成軟質	
4076	071		瓦	連珠三巴文か	椽巴瓦	—	—	21	—	42	31	砂粒少ない
4077	069		瓦	唐草文	軒瓦	—	—	45	—	46	34	砂粒少ない
4078	069		瓦	唐草文	軒瓦	—	—	42	—	46	34	砂粒少ない 焼成良好
4079	069		瓦	波	骨丸瓦	—	—	18	45	34	凸部 焼成良好	
4080	349		瓦	平行櫛目文	平瓦	—	—	16	27	23	焼成還元不良	
4081	349		瓦	交差櫛目文	平瓦?	—	—	13	27	23	薄い 焼成還元不良	
4082	L-7G		瓦	交差櫛目文	平瓦	—	—	13	38	30	砂粒多い 酸化	
4083	T-4-G		瓦	平行櫛目文	平瓦	—	—	17	11	18	焼成良好 硬質	
4084	246		石	砥沢	石 砥石	130	46	33	60	42	直方体 3面使用 357.2g	
4085	051		石	砥沢	石 砥石	142	37	22	42	33	短筒型 3面使用 187.3g	
4086	070		石	砥沢	石 砥石	55	57	45	42	31	直方体 4面使用 189.4g	
4087	079		石	砥沢	石 砥石	88	39	30	17	20	舟型 3面使用 158.7g	
4088	057		石	実質ダイヤ	砥石	62	41	15	12	19	直方体 3面使用 102.8g	
4089	301		石	実質ダイヤ	砥石	71	35	28	85	53	直方体 3面使用 片面タガネ加工度 114.5g	
4090	T-4-G		石	砥沢	石 砥石	90	38	23	11	18	直方体 4面使用 一部細ノリ加工度残れ 158.2g	
4091	056		石	砥沢	石 砥石	47	30	15	34	27	直方体 2面使用 磨蝕タガネ加工度 40.1g	
4092	013		石	砥沢	石 砥石	114	27	22	20	20	直方体 1面使用 磨蝕タガネ加工度 103.6g	
4093	013		石	砥沢	石 砥石	86	39	31	20	20	舟型 1面使用 平タガネ加工度 142.3g	
4094	259		石	砥沢	石 砥石	63	35	31	61	43	舟型 4面使用 129.7g	
4095	351		石	砥沢	石 砥石	86	50	49	11	18	直方体 2面使用 表面粗い 383.0g	
4096	070		石	砥沢	石 砥石	108	38	23	42	31	舟型 全面使用 187.1g	
4097	319		石	砥沢	石 砥石	92	38	27	79	50	直方体 2面使用 磨蝕タガネ加工度 140.5g	
4098	S-10G		石	砥沢	石 砥石	64	31	17	11	18	直方体 4面使用 60.9g	
4099	300		石	砥沢	石 砥石	174	45	13	86	53	短筒型 3面使用 平タガネ加工度 210.1g	
4100	G-4G		石	石英砂	砥石	95	38	19	89	54	短筒型 4面使用 62.1g	
4101	V-10G		石	砥沢	石 砥石	105	31	20	11	—	—	山型 3面使用 平タガネ加工度 93.0g
4102	不明		石	砥沢	石 砥石	96	37	29	91	55	山型 2面使用 平タガネ加工度 124.3g	
4103	051		石	砥沢	石 砥石	112	38	24	42	33	山型 3面使用 表面粗い 139.3g	
4104	070		石	砥沢	石 砥石	116	26	23	42	31	直方体 4面使用 126.8g	
4105	T-10G		石	砥沢	石 砥石	112	31	31	11	18	山型 3面使用 平タガネ加工度 124.2g	
4106	349		石	砥沢	石 砥石	117	32	26	27	21	山型 2面使用 平タガネ加工度 139.6g	
4107	057		石	砥沢	石 砥石	81	28	25	12	19	山型 1面使用 磨蝕タガネ加工度 59.4g	
4108	H-4G		石	砥沢	石 砥石	97	19	17	90	55	舟型 全面使用 42.9g	
4109	I-7G		石	実質ダイヤ	砥石	98	31	16	90	58	山型 4面使用 62.3g	
4110	H-4G		石	砥沢	石 砥石	80	40	14	90	55	短筒型 4面使用 74.9g	
4111	349		石	砥沢	石 砥石	109	40	30	27	29	山型 3面使用 磨蝕タガネ加工度 131.6g	
4112	259		石	砥沢	石 砥石	62	33	26	61	43	直方体 4面使用 磨蝕加工度 96.8g	
4113	F-4G		石	腕紋	岩 砥石	33	40	26	89	54	直方体 3面使用 磨蝕加工度か 62.6g	
4114	052		石	頁	岩 砥石	89	49	36	53	38	谷型 3面使用 平タガネ加工度 墨書 215.4g	
4115	F-H-4G		石	白色 腕紋	岩 砥石	80	40	14	91	55	磨蝕型 1面使用 磨蝕加工度 55.3g	
4116	296		石	腕紋	岩 砥石	78	27	21	60	42	舟型 全面使用 59.3g	
4117	296		石	砥沢	石 砥石	80	29	17	60	42	山型 2面使用 磨蝕タガネ加工度 55.9g	

## IV 資 料

No.	主道標	道路	種 類	材質・形状	特徴・品名	法 量	頁	写真	備 考
4118	051		石	砥 沢 石	砥石	72 27 13	42	33	短冊型 5面使用 櫛歯タガネ加工痕 42.1g
4119	310		石	砥 沢 石	砥石	76 30 14	81	51	舟型 全面使用 50.6g
4120	070		石	砥 沢 石	砥石	60 18 11	42	31	舟型 全面使用 18.3g
4121	087		石	炭質デイスイト	砥石	70 26 27	70	46	直方体 4面使用 70.3g
4122	069		石	炭質デイスイト	砥石	61 35 30	45	34	直方体 3面使用 平タガネ加工痕 110.7g
4123	307		石	粗粒安山岩	砥石	78 50 20	79	50	短冊型 2面使用 他は自然面 102.9g
4124	070		石	砂 岩	砥石	54 36 14	42	31	短冊型 全面使用 53.0g
4125	F-5G		石	砂 岩	砥石	39 38 29	89	54	山型 3面使用 平タガネ加工痕 64.8g
4126	349		石	砂 岩	砥石	58 25 19	27	23	舟型 全面使用 43.5g
4127	219		石	流 紋 岩	砥石	66 33 24	67	45	山型か 4面使用 78.2g
4128	293		石	砂 岩	砥石	46 29 17	37	29	山型 1面使用 細ノミ加工痕 30.2g
4129	024		石	砥 沢 石	砥石	55 27 22	74	—	舟型 4面使用 45.5g
4130	223		石	砥 沢 石	砥石	55 45 30	64	44	直方体 3面使用 櫛歯タガネ加工痕 152.1g
4131	301		石	砥 沢 石	砥石	27 47 18	86	53	直方体 4面使用 丸鋸加工痕か 37.1g
4132	070		石	砥 沢 石	砥石	55 22 29	42	31	山型 全面使用 44.3g
4133	I-7G		瓦	不 明	方形板状	70 66 13	90	55	研磨して二次加工 刻線「和?」
4134	020		石	流 紋 岩	砥石	23 26 30	73	—	直方体 小片 2面使用 15.6g
4135	028他		石	流紋岩新羅灰岩	鈣型	— — —	128	57	4.9K、他3片 深310m
4136	053		石	粗粒安山岩	白玉	352 — 148	78	49	磨面型で摩耗 10.2g
4137	054		石	粗粒安山岩	白玉	170 — 119	78	49	磨面型で摩耗 1.9g
4138	055		石	粗粒安山岩	不明	215 166 —	78	50	鉢型 底部径5cmの穴 見込摩耗 底径200mm10.5kg
4139	055		石	ニツ岳輝石	五輪塔地輪	220 210 —	78	50	葉葉後二次焼成 厚155mm 6.3kg
4140	055		石	粗粒安山岩	不明	175 101 —	78	50	砲弾型 厚87mm 1.6kg
4141	055		石	粗粒安山岩	砕?	90 — 83	78	50	磨面に加工痕 0.6kg
4142	055		石	粗粒安山岩	層石	81 76 54	78	50	断面型 0.5kg
4143	F-5G		石	粗粒安山岩	有孔磨	170 180 —	73	48	直方体状 5孔 厚128mm 5.2kg
4144	020		石	粗粒安山岩	有孔磨	157 108 —	73	48	片面に丁字型孔 厚65mm 1.3kg
4145	020		石	粗粒安山岩	有孔磨	164 126 —	73	48	両面に蓋状孔 厚75mm 1.4kg
4146	020		石	粗粒安山岩	有孔磨	120 90 40	73	48	片面に蓋状孔 0.5kg
4147	027		石	粗粒安山岩	五輪塔空風輪	95 — 95	50	36	1/3残存 1.3kg
4148	318		石	粗粒安山岩	有孔磨	105 71 58	85	53	片面に蓋状孔 0.3kg
4149	310		石	粗粒安山岩	白?	— — 82	82	51	上面平坦 孔部摩耗 0.8kg
4150	310		石	粗粒安山岩	白玉	— — 50	82	51	小片 0.3kg
4151	069		石	蛇 紋 石 片	扁石	58 38 12	45	34	有孔 割線多い 32.5g
4152	088		石	頁 岩	小型硯	49 33 3	70	47	携帯用か 磨に磨痕 13.6g
4153	044		石	頁 岩	石板	— 155 3	83	51	上面研磨 紋線は方形枠 133.7g
4154	044		石	頁 岩	石板	— 153 3	83	52	両面に無数の磨痕 不研磨 125.8g
4155	290		ガラス	透 明	瓶蓋	45 31 —	57	13	花卉状裝飾
4156	290		ガラス	白 色	おはじき	— — —	57	13	青2個 透明2個 薄縁1個 上面押印 下面平坦
4157	301		ガラス	白 色	小型瓶	18 34 30	86	13	コルク栓残存 側面に磨痕
4158	301		ガラス	透 明	瓶	7 73 45	86	13	側面に磨痕 版「シケン」銘
4159	301		ガラス	透 明	瓶	12 91 18	86	13	瓶型 側面に磨痕
4160	301		ガラス	透 明	牛乳瓶	23 157 40	86	13	側面に磨痕と蓋穴「高温度耐全孔」他銘
4161	044		ガラス	群 色	瓶蓋	14 102 40	87	13	断面八角形 側面に磨痕
4162	E-6G		ガラス	群 色	目薬瓶	13 55 20	89	13	「応用目薬」銘
4163	033		セルロイド	ベッ 甲柄	兼用磨	71 30 —	55	6	山高曲小さい輪幅狭い 新機型変わり磨 明治後期
4164	033		セルロイド	ベッ 甲柄	ヘアピン	73 — —	55	6	二本脚 短太 大正頃
4165	033		セルロイド	ベッ 甲柄	ヘアピン	84 — —	55	6	二本脚 長太 大正頃
4166	289		セルロイド	ベッ 甲柄	ヘアピン	72 — —	56	6	二本脚 短細 大正頃
4167	290		骨	歯	歯ブラシ	150 — —	57	41	柄部裏面に湾曲し片端に7.5cmの刻み
4168	H-4G		セルロイド	硝 子	洋燭磨	— 48 —	90	6	山型 断面両面 大正
4169	033		石	滑 石	石筆	34 — —	55	—	両端尖頭状
4170	290		石	滑 石	石筆	— — —	57	—	断面多角形 他3点
4171	F-6G		骨	骨	爪磨	25 — —	89	54	端に6mmの溝 端以外研磨光沢
4173	不明		石	流 紋 岩	砥石	92 25 26	91	55	山型 4面使用 櫛歯タガネ加工痕 73.2g
4174	237		石	頁 岩	砥石	146 37 15	61	42	三角直方体 2面使用 丸鋸加工痕 103.9g

### 3 遺構出土遺物量一覽表 (破片数)

No.	磁器	陶器	土器	金属	木器	瓦	石	古墳	銅文	No.	磁器	陶器	土器	金属	木器	瓦	石	古墳	銅文
003			1					1		090	1		1						1
008		2							2	091	19	40	160	1		1		1	5
009		3								093		1							
012			1							094			1						
015	1	1	1	1		7				095	9	4	3			3			
016			2							097									1
017	14					121	6			098				1					1
018	15	7	11	6		92	11			099		1							
027	56	47	231			3	9			100		1							3
028	28	8	18	2		21	7	10	111	102									1
032	2		1			131	2		6	103			2						1
033	14	4	8	9					1	104									1
034						61	11		6	107		1	1						2
036									2	108									1
039			2	1			4			110									1
040	1	1					3			112	2	1	3	1		8			5
041			1							113	1	4	1						3
042		1	1			1			4	114	1	1							3
043			32	2						115			2						1
044	123	57	45	5			45			117			1						1
045		2	269	3		40			1	119	2	1	1						2
046	4	2	295	1		79			1	121									2
047		7	42	1	18			4		122	1		1						
048		2	3			1	11	2		123	2								
049		4	4	2	8			5	2	125		1							
050			9		18	1	2		12	126	2		1						
051	9	22	16		102	34	3	1	7	127									1
052	3	4	3	7	40	89	1		3	128			1			1			1
053			14				1		2	130	1								1
054	2	8	38	6	8		1	1	13	131			1						4
055		1	1		18		2		4	132	1	1		1					6
056	13	42	58	2		2	1	19	7	133		3	1						
057	8	17	34			1	4	10	19	134									2
058	1					1		4		135	1	2	2						4
059								14	1	137	1								1
060	1	1	3					3	6	139		1	2						1
061	15	32	61			31	3	60	22	141		2				1			1
062			2					15	3	144		1							5
063	1	2	2			3	1	1	1	145		1	1						
064		3	7	2				10		148		1							
065								3		152	1	2							1
066	1	1						22	6	156		1	1						1
067	8	5	7			3			2	159									1
068	1	3	8			1			2	161									5
069	30	24	89			90	5		3	162	1	2							
070	101	68	76	12		124	65		6	163		1							
071	4	10	18	1		54			8	165		1	9						3
072	1									166			4	1					
073		1	1	1						167		1							1
074	1	6	6			3		1	1	173		2							1
075	6	14	11	1		85	2		5	175									1
076			1							176									2
078						1				180									1
081	22	15	12	1			2			181									1
082		1	4			1	1			183			1						
085		1	39						5	184									
087	21	22	33	3		2	2	1	1	186									3
088	5	2	12			1	2			188		1	1						1
089			1							199									1

## IV 資 料

No	磁器	陶器	土器	金属	木器	瓦	石	古墳	縄文
203			1					1	
208									
218			1						
219	3	3	2	1		4	1	1	1
220			1			81		2	2
221		3	2	1		49		4	2
222	1		3			15			3
223	5	12	2	1		27	5		1
224									1
225			1			17			
226		1							2
227			1			1		1	
230						5			
231		7	1			24			
232									2
233	2			1		7			
234	3					15			
235	11	5	8	2		18	3		
237	1						1		1
240	12	1	2			3	1		1
242						3			
244			2			1			1
245			1	3		2			
246	80	8	211		1	141	8		10
247	1	1				14			3
248						1			
250	1	1	1						
251	2	1	3	1		5			1
252	2			1		34			
253			1			2			
254						4			
255	10	1	8	6		33	2		
256		3	2						2
257								1	
258	2	7	6				6		
259	1	1	1						
261						2			
262			3			11			
263	17	3	2	1		35			1
265	2								
267	1	2	3						
268			2						5
269	2	2	2	5		3			3
270	41	5	3	44		19	5		1
272						1			
273		1				36		1	1
276		1	1			4			
277						3			1
278						1			
279		1	1			1			3
280	1			2		9			1
282						2			
284			2			5			
285						1			
287		1	1			13			
288	2	1				27			
289	41	14	214	19		212	18		
290	67	8	46	7		260	23	5	
291						24			
292						3			
296	2			1		56	2		

No	磁器	陶器	土器	金属	木器	瓦	石	古墳	縄文
297	3					5		1	
298						1			
299	1								
300	16	40	30	2		70	2	1	3
301	30	27	32	3		16	13		2
302	2	1							
303		1	1						
304	4	3	2	1					
306	2	2	7						
307			33						2
308		3	5	1			1		5
309	1	1					1	1	
310	51	44	120	1	23	8	4	3	3
311	29	22	65			1	1		
312		2	5						
313	36	24	65	9		8	5		
315	8	2	2	3					
316		2	2						1
317		1	6						1
318	1	2	9	2			1		
319	7	14	23	5			1		2
320									2
321			1						
323	3	1	3			2		1	
326			1						
329			2			1			
330		6	7						1
331		1	26	3					
333			1						1
334	5	2	14	12		2			
335			1			9			
347	1					1			
350	6	10	34	26		2	14	10	21
351	7	10	64	49		12	84	786	121
352		1	4					145	53
353		1	6					248	56
354								1	3
355	1							2	7
356				2					2
357								2	
359								124	



#### 4 種類・器形による遺物索引(陶磁器・土器)

No.	種類	軸/焼成	器形	No.	種類	軸/焼成	器形	No.	種類	軸/焼成	器形
1011	磁器	染付	碗	1392	磁器	染付	筒型碗	1259	磁器	染付	皿
1035	磁器	染付	付	1409	磁器	軸下敷形	筒型碗	1260	磁器	染付	付
1037	磁器	染付	付	1010	磁器	染付	碗蓋	1262	磁器	染付	付
1120	磁器	染付	付	1012	磁器	染付	碗蓋	1376	磁器	染付	付
1121	磁器	染付	付	1013	磁器	染付	碗蓋	1377	磁器	染付	付
1122	磁器	染付	付	1043	磁器	染付	碗蓋	1400	磁器	染付	付
1123	磁器	染付	付	1136	磁器	染付	碗蓋	1441	磁器	染付	付
1125	磁器	染付	付	1137	磁器	染付	碗蓋	1049A	磁器	染付吹墨	皿
1127	磁器	染付	付	1138	磁器	染付	碗蓋	1049B	磁器	染付吹墨	皿
1128	磁器	染付	付	1257	磁器	染付	碗蓋	1144	磁器	色絵	鉢
1129	磁器	染付	付	1359	磁器	染付	碗蓋	1226	磁器	青磁	皿
1132	磁器	染付	付	1406	磁器	染付	碗蓋	1373	磁器	白磁	小皿
1133	磁器	染付	付	1399	磁器	染付	広東碗蓋	1046	磁器	染付	中皿
1218	磁器	染付	付	1044	磁器	染付	端反碗蓋	1261	磁器	染付	大皿
1219	磁器	染付	付	1140	磁器	染付	端反碗蓋	1264	磁器	染付	大皿
1220	磁器	染付	付	1057	陶器	陶胎染付	碗	1014	磁器	染付	型打小皿
1221	磁器	染付	付	1058	陶器	陶胎染付	碗	1045	磁器	染付	型打小皿
1222	磁器	染付	付	1059	陶器	陶胎染付	碗	1265	磁器	染付	型打小皿
1254	磁器	染付	付	1134	陶器	陶胎染付	碗	1015	磁器	口罇染付	皿
1255	磁器	染付	付	1135	陶器	陶胎染付	碗	1365	磁器	青磁	型打小皿
1256	磁器	染付	付	1217	陶器	陶胎染付	碗	1048	磁器	染付	型打小皿
1274	磁器	染付	付	1381	陶器	色絵	碗	1393	磁器	白磁	小皿
1360	磁器	染付	付	1431	陶器	色絵	鉢	1258	磁器	染付	角鉢
1361	磁器	染付	付	1433	陶器	鉄絵	碗	1263	磁器	染付	輪花小皿
1364	磁器	染付	付	1061	陶器	掛分け	碗	1396	磁器	染付	輪花小皿
1366	磁器	染付	付	1062	陶器	掛分け	碗	1142	磁器	口罇染付	皿
1383	磁器	染付	付	1083	陶器	掛分け	碗	1268	磁器	青磁	菊小皿
1384	磁器	染付	付	1064	陶器	掛分け	碗	1369	磁器	青白磁	菊小皿
1385	磁器	染付	付	1169	陶器	掛分け	碗	1146	陶器	染付	洋皿
1386	磁器	染付	付	1170	陶器	掛分け	碗	1150	陶器	染付	皿
1391	磁器	染付	付	1227	陶器	掛分け	碗	1223	陶器	陶胎染付	皿
1403	磁器	染付	付	1228	陶器	掛分け	碗	1147	陶器	陶胎染付	皿
1434	磁器	染付	付	1229	陶器	掛分け	碗	1224	陶器	陶胎染付	皿
1435	磁器	染付	付	1421	陶器	灰釉	碗	1277	陶器	鉄絵	鉢
1107	磁器	青磁染付	碗	1065	陶器	鉄釉	碗	1416	陶器	鉄絵	鉢
1036	磁器	色絵	鉢	1297	陶器	胎釉	碗	1415	陶器	員頭絵	鉢
1113	磁器	染付	付	1410	陶器	胎釉	碗	1417	陶器	研絵	鉢
1225	磁器	染付	付	1273	陶器	胎釉	小皿	1230	陶器	灰釉	鉢
1388	磁器	染付	付	1272	陶器	天目	小皿	1232	陶器	灰釉	鉢
1126	磁器	染付	付	1060	陶器	天目	目碗	1279	陶器	灰釉	鉢
1131	磁器	染付	付	1380	陶器	染付	筒型み	1407	陶器	青緑釉	鉢
1034	磁器	染付	付	1004	磁器	染付	湯呑み	1412	陶器	青緑釉	鉢
1039	磁器	染付	付	1117	磁器	染付	湯呑み	1278	陶器	志野	皿
1040	磁器	染付	付	1252	磁器	染付	湯呑み	1231	陶器	志野	皿
1041	磁器	染付	付	1291	磁器	染付	湯呑み	1067	陶器	志野鉄絵	皿
1042	磁器	染付	付	1369	磁器	染付	湯呑み	1171	陶器	志野鉄絵	皿
1033	磁器	色絵	鉢	1370	磁器	染付	湯呑み	1292	陶器	志野鉄絵	皿
1038	磁器	染付	付	1371	磁器	染付	湯呑み	1070	陶器	鉄員頭絵	小皿
1124	磁器	染付	付	1388	磁器	染付	湯呑み	1282	陶器	無釉	小皿
1130	磁器	染付	付	1436	磁器	染付	湯呑み	1293	陶器	無釉	小皿
1253	磁器	染付	付	1115	磁器	青磁色絵	湯呑み	1172	陶器	天目物	小皿
1372	磁器	染付	付	1029	磁器	色絵	角湯呑み	1425	陶器	志野鉄絵	小皿
1418	磁器	染付	付	1116	磁器	色絵	角湯呑み	1405	陶器	染付	型打小皿
1437	磁器	染付	付	1118	磁器	色絵	角湯呑み	1068	陶器	灰釉	菊小皿
1032	磁器	染付	付	1432	陶器	掛分け	湯呑み	1423	陶器	灰釉	菊小皿
1139	磁器	染付	付	1141	磁器	染付	皿	1069	陶器	胎釉	菊小皿
1025	磁器	青磁染付	筒型碗	1145	磁器	染付	皿	1051	磁器	染付	鉢
1026	磁器	青磁染付	筒型碗	1148	磁器	染付	皿	1052	磁器	染付	鉢
1119	磁器	青磁染付	筒型碗	1149	磁器	染付	皿	1167	磁器	染付	鉢

## IV 資 料

No.	種類	軸/焼成	器形	No.	種類	軸/焼成	器形	No.	種類	軸/焼成	器形
1368	磁器	染付付	鉢	1154	磁器	染付付	急須	1239	土器	瓦質	焙釜
1157	磁器	染付付	鉢	1153	磁器	染付付	急須	1093	土器	瓦質	釜
1143	磁器	染付付	小型鉢	1266	磁器	染付付	急須	1095	土器	瓦質	蓋
1047	磁器	染付付	打鉢	1086	磁器	還元焼締	急須	1288	土器	瓦質	蓋
1276	陶器	刷毛目	鉢	1189	陶器	還元焼締	急須	1197	土器	瓦質	蓋
1181	陶器	灰釉	鉢	1150	陶器	酸化焼締	急須	1096	土器	土師	蓋
1016	磁器	染付付	蕎麦箸口	1076	磁器	長石釉	急須	1212	土器	土師	蓋
1050	磁器	染付付	蕎麦箸口	1420	陶器	青緑釉	瓶	1213	土器	土師	蓋
1380	磁器	染付付	蕎麦箸口	1191	陶器	黒釉	土瓶	1206	土器	瓦質	蓋
1408	磁器	染付付	蕎麦箸口	1248	陶器	三彩	土瓶	1092	土器	瓦質	蓋
1160	磁器	染付付	角合子	1176	陶器	三彩	小型土瓶蓋	1097	土器	瓦質	蓋
1054	磁器	染付付	小合子	1223	陶器	三彩	小型土瓶蓋	1215	土器	瓦質	蓋
1439	磁器	染付付	段重	1159	磁器	染付付	袋物	1243	土器	瓦質	蓋
1362	磁器	染付付	段重	1382	磁器	染付付	瓶(底部)	1394	磁器	染付付	弘飯器
1367	磁器	染付付	蓋	1422	磁器	染付付	瓶	1438	磁器	染付付	弘飯器
1017	磁器	染付付	蓋	1166	磁器	染付付	双耳瓶	1397	磁器	染付付	神酒瓶
1152	磁器	染付付	蓋	1018	磁器	染付付	ちり蓮華	1395	磁器	青磁	神酒瓶
1053	磁器	染付付	蓋	1078	陶器	胎釉	片口	1163	磁器	青磁	三足香炉
1161	磁器	染付付	德利	1280	陶器	胎釉	片口	1055	磁器	染付付	火入れ
1155	磁器	白磁	德利	1077	陶器	胎釉	行平埴	1165	磁器	染付付	火入れ
1156	磁器	白磁	德利	1177	陶器	胎釉	行平埴	1378	磁器	染付付	火入れ
1006	陶器	掛分け	德利	1082	陶器	掛分け	行平埴蓋	1389	磁器	染付付	火入れ
1066	陶器	掛分け	德利	1182	陶器	黒釉	オロシ皿	1401	磁器	染付付	火入れ
1179	陶器	掛分け	德利	1183	陶器	柿釉	オロシ皿	1267	磁器	青磁	火入れ
1079	陶器	柿釉	德利	1084	陶器	柿釉	酒罌	1442	磁器	青磁	火入れ
1429	陶器	柿釉	德利	1085	陶器	酸化焼締	酒罌	1414	磁器	長石釉	香炉
1080	陶器	灰釉	德利	1186	陶器	酸化焼締	酒罌	1426	陶器	胎釉	香炉
1192	陶器	錆釉	德利	1187	陶器	酸化焼締	酒罌	1275	陶器	陶胎染付	火入れ
1193	陶器	黒釉	德利	1188	陶器	酸化焼締	酒罌	1430	陶器	鉄胎	火入れ
1007	磁器	染付付	蓋	1019	陶器	柿釉	酒罌	1081	陶器	鉄胎	火入れ
1009	磁器	染付付	蓋	1184	陶器	柿釉	酒罌	1387	磁器	染付付	油壺
1024	磁器	染付付	蓋	1185	陶器	錆釉	酒罌	1440	磁器	染付付	油壺
1027	磁器	染付付	蓋	1237	陶器	錆釉	酒罌	1402	磁器	白磁	室印
1028	磁器	染付付	蓋	1413	陶器	錆釉	酒罌	1073	陶器	灰釉	灯明皿
1030	磁器	染付付	蓋	1427	陶器	柿釉	酒罌	1173	陶器	灰釉	灯明皿
1031	磁器	染付付	蓋	1195	土器	土師	小鉢	1174	陶器	灰釉	灯明皿
1104	磁器	染付付	蓋	1208	土器	土師	鉢	1071	陶器	胎釉	灯明皿
1105	磁器	染付付	蓋	1207	土器	土師	鉢	1175	陶器	胎釉	灯明皿
1108	磁器	染付付	蓋	1281	陶器	還元焼締	大甕	1072	陶器	錆釉	灯明皿
1109	磁器	染付付	蓋	1020	陶器	柿釉	大甕	1074	陶器	黄瀬戸	灯明皿
1111	磁器	染付付	蓋	1411	陶器	灰釉鉄彩	大甕	1235	陶器	錆釉	御付灯明皿
1114	磁器	染付付	蓋	1102	土器	瓦質	壺	1236	陶器	天目	御付灯明皿
1216	磁器	染付付	蓋	1211	土器	瓦質	壺	1428	陶器	灰釉	御付灯明皿
1290	磁器	染付付	蓋	1244	土器	瓦質	壺	1075	陶器	鉄胎	タンクロ
1375	磁器	染付付	蓋	1210	土器	瓦質	壺	1196	土器	土師	御付灯明皿
1110	磁器	染付金彩	蓋	1091	土器	瓦質	鉢	1100	土器	瓦質	瓦灯明皿
1249	磁器	染付金彩	蓋	1241	土器	瓦質	鉢	1363	土器	土師	御付灯明皿
1250	磁器	染付金彩	蓋	1022	土器	土師	壺	1419	陶器	ルス	御付火鉢
1374	磁器	青磁金彩	蓋	1089	土器	土師	壺	1242	土器	土師	御付火鉢
1379	磁器	青磁	蓋	1198	土器	土師	壺	1358	土器	土師	御付火鉢
1002	磁器	色繪	蓋	1199	土器	土師	壺	1094	土器	瓦質	御付火鉢
1103	磁器	色繪	蓋	1200	土器	土師	壺	1098	土器	瓦質	御付火鉢
1251	磁器	色繪	蓋	1205	土器	土師	壺	1240	土器	瓦質	御付火鉢
1106	磁器	青磁色繪	蓋	1238	土器	土師	壺	1287	土器	瓦質	御付火鉢
1008	磁器	青磁	蓋	1087	土器	瓦質	壺	1158	磁器	染付	御付火鉢
1001	磁器	白磁	蓋	1088	土器	瓦質	壺	1209	土器	瓦質	御付火鉢
1112	磁器	白磁	蓋	1090	土器	瓦質	壺	1289	土器	瓦質	御付火鉢
1404	磁器	白磁	蓋	1201	土器	瓦質	壺	1234	陶器	鉄胎	御付火鉢
1151	磁器	色繪	蓋	1202	土器	瓦質	壺	1424	陶器	鉄胎	御付火鉢
1003	陶器	色繪	蓋	1203	土器	瓦質	壺	1021	陶器	灰釉	花角土
1168	陶器	鉄	蓋	1204	土器	瓦質	壺	1023	土器	土師	花角土

## 4 種類・器形による遺物索引

N <sub>i</sub>	種類	軸/焼成	器形
1214	土器	瓦質	角鉢
1099	土器	瓦質	角鉢?
1178	陶器	灰釉	双耳壺
1283	陶器	無釉	無彫小型壺
1295	磁器	青花	鳥飼入れ
1296	磁器	青花	鳥飼入れ
1180	陶器	灰釉	鳥飼入れ
1005	磁器	無釉	人形
1271	磁器	色絵	人形
1056	磁器	色絵	ミニチュア
1162	磁器	色絵	ミニチュア
1164	磁器	白磁	ミニチュア
1245	磁器	白磁	ミニチュア
1246	磁器	白磁	ミニチュア
1247	磁器	白磁	ミニチュア
1270	陶器	白釉	ミニチュア
1161	土製品	土質	泥人形
1284	磁器	白磁	戸車
1285	磁器	白磁	戸車
1194	陶器	灰釉	戸車
1286	土器	土質	有孔突起円盤
1298	土器	土質	模倣坏
1299	土器	土質	粗製坏
1300	土器	土質	粗製坏
1301	土器	土質	粗製坏
1302	土器	土質	粗製坏
1303	土器	土質	粗製坏
1304	土器	土質	粗製坏
1305	土器	土質	粗製坏
1306	土器	土質	粗製坏
1307	土器	土質	粗製坏
1308	土器	土質	粗製坏
1309	土器	土質	粗製坏
1310	土器	土質	粗製坏
1311	土器	土質	粗製坏
1312	土器	土質	粗製坏
1313	土器	土質	粗製坏
1314	土器	土質	粗製坏
1315	土器	土質	粗製坏
1316	土器	土質	粗製坏
1317	土器	土質	粗製坏
1318	土器	土質	粗製坏
1319	土器	土質	粗製坏
1320	土器	土質	粗製坏
1321	土器	土質	粗製坏
1322	土器	土質	粗製坏
1323	土器	土質	粗製坏
1324	土器	土質	粗製坏
1325	土器	土質	粗製坏
1326	土器	土質	粗製坏
1327	土器	土質	粗製坏
1328	土器	土質	粗製坏
1329	土器	土質	粗製坏
1330	土器	土質	粗製坏
1331	土器	土質	粗製坏
1332	土器	土質	粗製坏
1333	土器	土質	粗製坏
1334	土器	須恵系	蓋杯身
1335	土器	須恵系	蓋杯蓋
1336	土器	須恵系	提
1354	土器	土質	壺

N <sub>i</sub>	種類	軸/焼成	器形
1355	土器	土質	壺
1337	土器	須恵系	壺
1338	埴輪	形	象人物
1339	埴輪	円筒	凸帯2段
1345	埴輪	円筒	凸帯2段
1346	埴輪	円筒	頭部
1347	埴輪	円筒	頭部
1342	埴輪	円筒	胴部
1343	埴輪	円筒	胴部
1344	埴輪	円筒	胴部
1351	埴輪	円筒	胴部
1352	埴輪	円筒	胴部
1353	埴輪	円筒	胴部
1340	埴輪	円筒	脚部
1341	埴輪	円筒	脚部
1348	埴輪	円筒	脚部
1349	埴輪	円筒	脚部?
1350	埴輪	円筒	化生?
1294	土器	弥生	小壺
1357	土器	弥生	小壺
1356	土器	弥生	小壺





1 (f) 菊池とく旧宅(現前橋市西大室町 観昌寺庫裏)

2 (f) 菊池とく(菊池 範氏蔵)



3 (f) 明治3年の村絵図に見られる調査地





4 井戸内一括投棄陶磁器  
(3号屋敷跡 310号遺構)

5 清青花鳥何入(2号屋敷跡 033号遺構)



6 異形キセル(上2号屋敷跡 033号遺構)  
鍍銀キセル(下3号屋敷跡 046号遺構)



7 金象嵌箱口(2号屋敷跡 270号遺構)





8(ロ) 1・2号屋敷跡全景(西から)



9 (右上) 土蔵地業(2号屋敷跡 027遺構)

10(白) 1・2号屋敷跡 遺構外出土

1263	1256
1427	1270 1407
	1416 1406



11(佐) 1号屋敷跡 土坑出土

1171	
1153	1194
1182	1178

12(白) 1号屋敷跡 井戸出土

1223	1237
1230	1224 1413





13(戊) 1号屋敷跡 溝出土

1078 1057

1071

1061 1069

14(フ) 1号屋敷跡 溝出土

1067 1062

1060



15 (份) 1号屋敷跡 溝出土

1026 1376

1085

1025 1072

16(イ) 1号屋敷跡 溝・土坑出土

1419 1084

1425 1068

1433 1045





## 17(右) 2号屋敷跡 溝出土

1081 1079  
1029 1055  
1028 1377  
1027 1054



## 19(下) 2号屋敷跡 溝出土

1024 1050 1426  
1430  
1412 1417

## 18(上) 2号屋敷跡 溝出土

1096 1051 1082  
1035 1036 1037 1031 1030 1048  
1043 1046 1044 1404  
1033 1034 1047 1077 1056  
1053 1422  
1073  
(1073は2片)

20(左) 2号屋敷跡 土坑出土  
(263号遺構一括)

1144 1181  
1116  
1105 1368  
1143 1152

21组 2号屋敷跡 土蔵地業出土  
(027号遺構一括)

1007 1019  
1010 1364 1014  
1016 1420 1441  
1012  
1437 1365 1399  
(1014は2片)



22组 2号屋敷跡 桶埋設土坑出土  
(033号遺構一括)

1004  
1295 1296 1006  
1001 1002



23组 2号屋敷跡 集石遺構出土  
(028号遺構一括)

1021 1020  
1013 1011 1018  
1009 1008  
1017 1015



24组 2号屋敷跡 桶埋設土坑出土

4168 4163  
4166 4164 4165



25(白) 2号屋敷跡 井戸出土

1217		1234
	1235	
1218		1227
	1225 1231	
1219		1233

26(白) 2号屋敷跡 土坑出土

(270号遺構一括)

1372	1122	1177
1428	1159	1106
1369	1176	1172
1371	1160	1370 1161



27(白) 2号屋敷跡 桶埋設土坑出土

(289号遺構一括)

1108	1107	1109
1415	1402	



28(白) 2号屋敷跡 桶埋設土坑出土

(290号遺構一括)

1110	1118
	1163
1183	1145
	1436
	1439





29(白) 2号屋敷跡 土坑出土

1138 1120  
1162  
1367  
1141 1158  
(1158は2片)

30(白) 2号屋敷跡 土坑出土  
(223号遺構一括)

1168 1115  
1142  
1424  
1136 1137



31(白) 2号屋敷跡 土坑出土

1151 1155 1156  
1189 1184  
1359

32(白) 2号屋敷跡 土坑出土

1104 1121  
1169 1401





## 34(下) 3号屋敷跡 遺構外出土

1261 1266 1281  
1249 1254  
1396 1398 1271 1262  
1268 1269 1391  
1405 1395 1285  
1397

(1405は3片 1397は2片)

## 33(上) 3号屋敷跡 全景 (南から)



## 35(約) 3号屋敷跡 遺構外出土

1267 1253 1280  
1252 1276  
1255 1258 1273  
1418 1275 1259 1257  
1421 1429  
1279 1278 1260

## 36(約) 3号屋敷跡 遺構外出土

1386 1272 1434 1283  
1442 1265 1251  
1274 1394  
1392 1411  
1393 1284

(1411は3片)





37(イ) 3号屋敷跡 遺構外出土、他

1290 1250 1277  
1408 1264 1409  
1282 1292 1293

39(イ) 3号屋敷跡 溝出土

1063 1059 1041  
1040 1064 1039  
1065 1058 1074  
1049-B 1042 1381  
1049-A

(1381は2片)



38(イ) 3号屋敷跡 溝出土

1080 1086 1032  
1038 1075 1380 1378  
1360 1076 1414 1379  
1052 1070  
1382 1381

(1362は3片)



40(イ) 3号屋敷跡 井戸出土

1229 1228  
1382  
1226 1232





41(イ) 3号屋敷跡 井戸出土  
(310号遺構一括)

1220	1166	1186
	1175	1185
1221	1133	
1216	1139	1134 1135
1147	1222	1435 1423



42(イ) 同上

1236	
1165	1187
1390	1384
	1188
1383	1385 1389
1385	1388 1387

(1385は2片)

43(イ) 3号屋敷跡 埋裏出土

1248
1247 1246 1245





44(台) 3号屋敷跡 土坑出土  
(300号遺構一括)

1154	1190	
	1174	1173
1146	1125	
	1111	1123

45(台) 同上  
(300号遺構一括)

1124	1179	1177
1140	1126	1127



46(台) 同上  
(301号遺構一括)

	1132	1130
1113	1129	
1191	1112	1128
1432	1131	1373
	1193	1164

(1432と1193は2片)



47(台) 3号屋敷跡 土坑出土

	1403	1167
1374	1114	
	1375	1192
1438	1440	1148







48(ロ) 3号屋敷跡 土坑出土  
(319号遺構一括)

1170 1410  
1180 1149



49(ロ) 3号屋敷跡 土坑出土

1119 1291  
1103  
1431 1150



50(ロ) 各屋敷建物出土

1003 1297  
1157  
1400 1366  
1005

51(ロ) 各屋敷出土ガラス

4158 4160 4161  
4157 4162  
4156 4155 4159





52(左) 木炭窯 (350号遺構) 全景

53(下) 同上土層断面



54(左) 古墳 (351号遺構) 全景

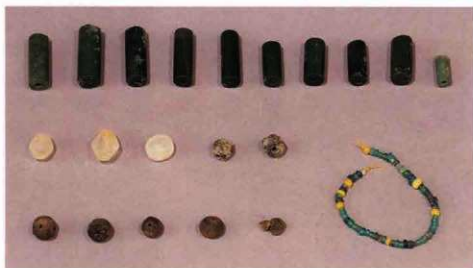
55(下) 同上石室





56(左) 351号遺構石室玉類出土状況

57(右) 同上玉類



58(左) 同上石室玄門付近

60 (下) 同左

59 (下) 同上出土赤色顔料



351号遺構出土鉄製品付着繊維



61(t) No.2143表面

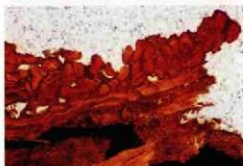


62(t) 同拡大

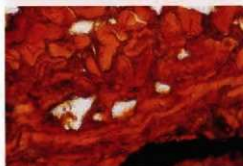
63~65 同上断面顕微鏡写真



63 (40倍)



64 (200倍)



65 (400倍)



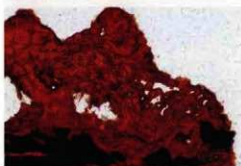
66(t) No.2124表面

67~69 同上断面顕微鏡写真

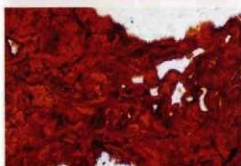
67 (40倍)



68 (100倍)



69 (200倍)





西からの調査地（縄文遺構調査中）



佐東から望む  
手前は五日牛清水田遺跡  
遠景は榛名山

（下北上空からの東側台地  
（2号屋敷跡調査中）





堂山  
本遺跡の北々東300m  
手前の水田は五目牛清水田遺跡



1号屋敷跡  
東から

1号屋敷跡  
西から



遺構外出土遺物

A



4090



4098



4105



4083



2027



2029

B



4095



2002



2025



060~062 西から



057 南から



062 東側 南から



057 北側 南西から

## 057号出土遺物



4088



4107



067 南から



065・066 南から



064 南から

064号出土遺物



2046



2047

013号出土遺物



2004



4093



4092

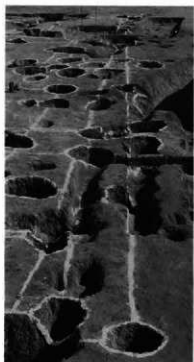


主屋掘立群南西から



主屋掘立群 南西から





036 西から



031, 011, 012 南から

003号出土遺物



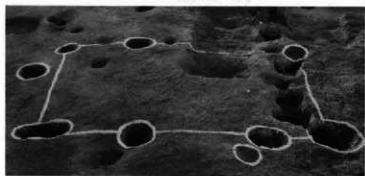
4087



003, 009 南から



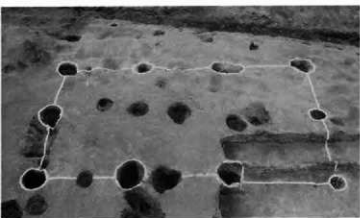
040 東から



014 東から



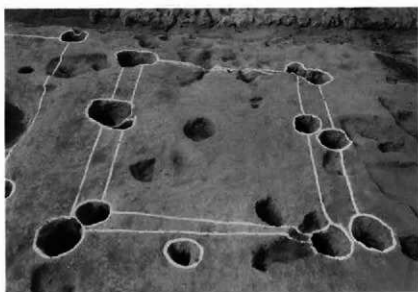
009柱穴



004 東から



001 西から



005 東から



006 東から



007・008 北から



047 南から

047号出土遺物



2092



1238



2001



3001

3005

3003

3002

3004



048 西から

049号出土遺物



3008



2036

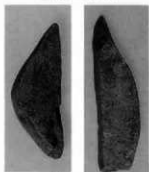


2037



049 西から

349号出土遺物



4111



1089



4106

4081



4126



4080

050号出土遺物

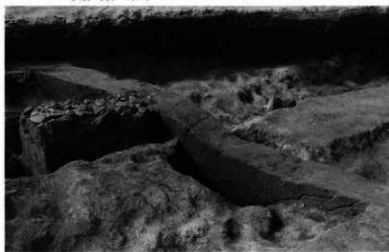


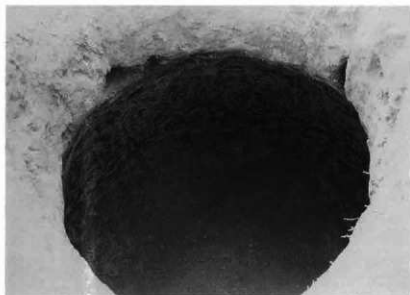
3010



3009

349, 050 北東から





095

095号出土遺物



1209



096 北東から



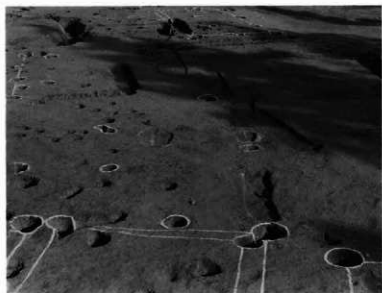
102, 107~109 南から



115 南西から



104, 105, 100 南西から



192~198 西から



189 東から



189



199 東から



199 鉄製容器出土状態



142, 143 南から



152~161 西から

166号出土遺物



2112

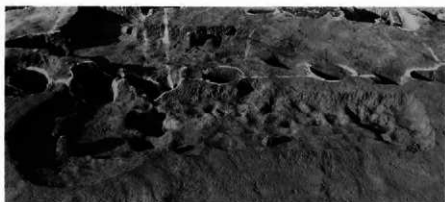
161号出土遺物



1196



172~177 北から



167, 166 南から



117 南西から



056 南から



056 北から

## 056号出土遺物



1087



1088



4091

## 063号出土遺物



1101



348



059 南から →



←063 北から

(F)168 南東から



(F)133 南から



(F)135~138, 151 北から



(F)168 北西から

133号出土遺物



2026

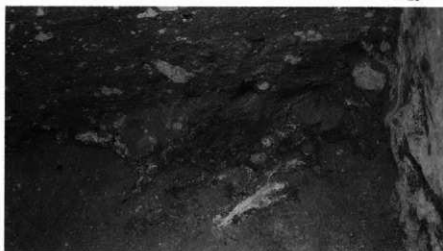
(F)170, 171 北から







112 東から



112 埋没状態



121 北から



127 南から



119 東から

## 293号出土遺物



4128



293 西から



2号屋敷跡南西から



2号屋敷跡北西から

2号屋敷遺構外出土遺物



2075



2070



4082



2007



2161



075 南から



075 南から

075号出土遺物



4037



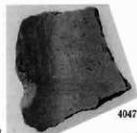
4038



4039



4036



4047



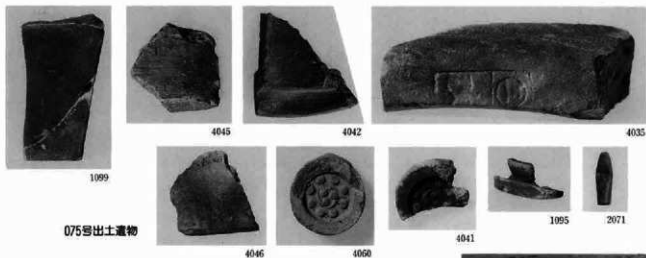
4048



4046



4044

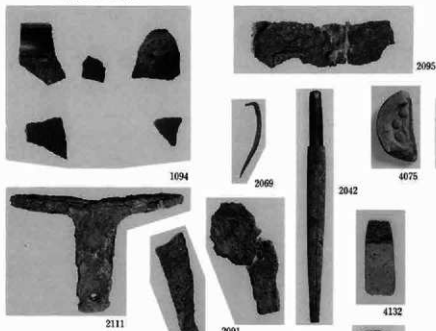


075号出土遺物



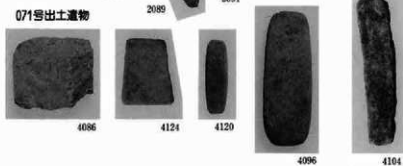
077, 078 北から

070号出土遺物



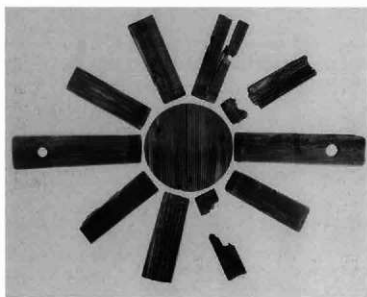
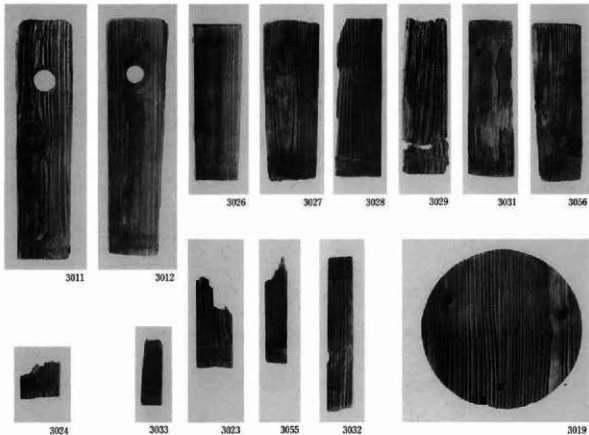
074 南から

070 南から



071号出土遺物





051号出土遺物

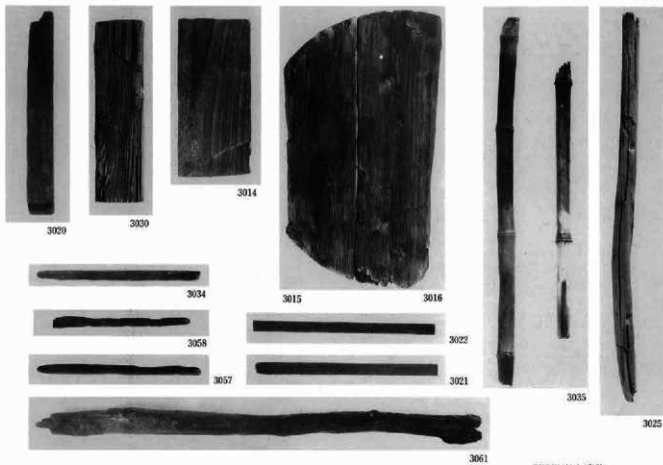
←水汲桶組合わせ

↓070, 071 西から

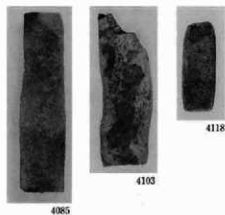
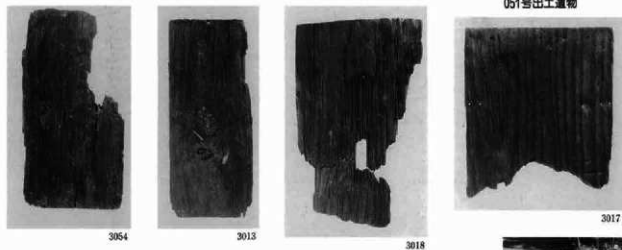


051 南から

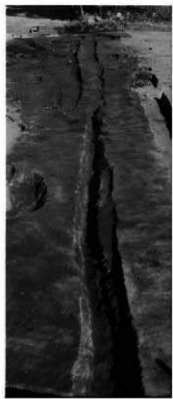
051



051号出土遺物



068, 069 南から→



069 南から→



1102



4151



1093



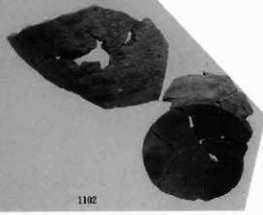
4078



4077



4079



1102



4073



4122

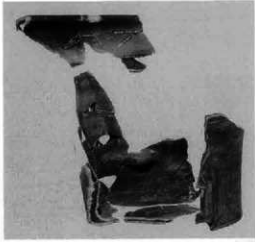
069号出土遺物



4074

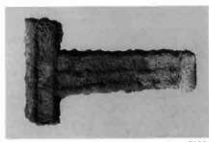


069, 263 南から→



1092

263号出土遺物



2110



4061



4064



015 南より



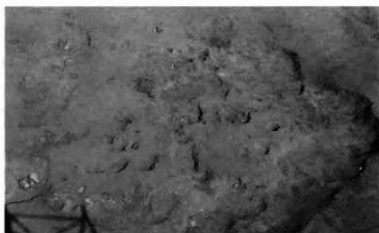
015 A



015 東から



4063



026 南から



015 D



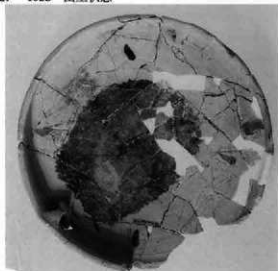
027 東から



016, 027 北西から



027 1022 出土状態



016 A ↓

1022



←017

017号出土遺物



4065

027号出土遺物



4147



016号出土遺物

016 南東から



4064

028 東から







4066

## 028号出土遺物



1023



2122



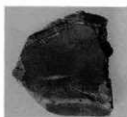
4068



4070



4071



4067

## 261号出土遺物



4072



4069



2833



2034

## 280号出土遺物



4055



278~281 西から

## 052号出土遺物



3040

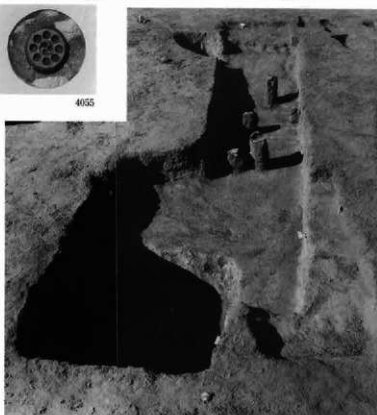


3036



3042

052 北から



260~262, 266 東から





3043



2079



4114

052号出土遺物



3038



3039



3037



256, 257 東から



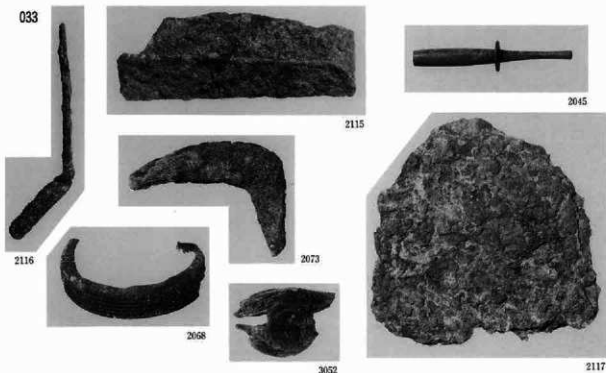
033 桶下の粘土

033 南から



033 桶底残存状況





033号出土遺物

3053



←瓦放棄状態

220, 221 西から

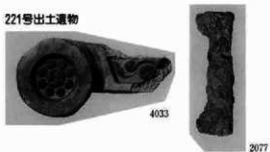
220号出土遺物



↓粘土除去後



221号出土遺物

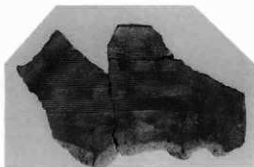


220, 221 西から



221号出土遺物

4032



4031



4034

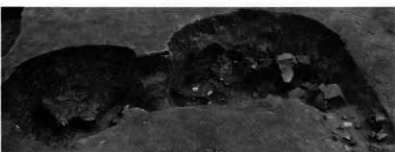
220号出土遺物



4030



4029



289, 290 西から 遺物投棄状態



4062



2060



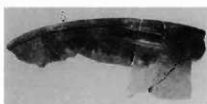
290号出土遺物  
4053



289, 290 西から 粘土貼付状態



4060



1208

289号出土遺物



1198



1199



2067



1207



1200



2072

289号出土遺物



2120



2085



4167



2108



2119

290号出土遺物



286, 287 北から



288 東から

231号出土遺物



4056

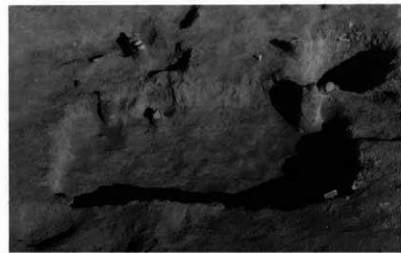


292号出土遺物

4051



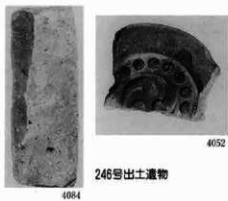
1 231 西から



←247 西から



246 東から



246号出土遺物

4084

4052

296号出土遺物



4116

4117

246号出土遺物



1212



1213



2031



237, 238 西から



4049

237号出土遺物



4174



(左) 239, 240 西から



252 南から



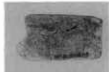
251 東から

252号出土遺物



2006

259号出土遺物



4112



4094



235 南から



251号出土遺物

2107



2086



255号出土遺物

2087



2030



2088

235号出土遺物



2078

245号出土遺物

258 西から

254, 255  
東から



269, 270 東から



2005



2066

270号出土遺物

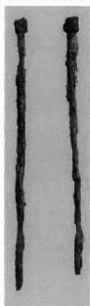


2084



270 東から

270号出土遺物



2102

2101

269号出土遺物



2100

2099



2105



2094



2061



1197

270号出土遺物



222号出土遺物

4050

222 埋土状況



4130

223号出土遺物



2096





076 西から



025 南から



032, 042 西から

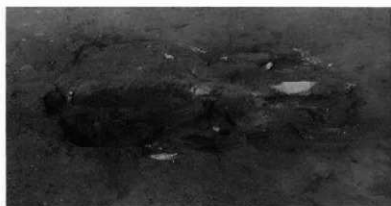
## 219号出土遺物



2090



4127



206 南から

←219 南から



## 遺構外出土遺物 B



2003



2155



201 南から



(a) 3号屋敷跡西より

(f) 3号屋敷跡東より

091号出土遺物



2063



1090

(f) 091 西から



(f) 091



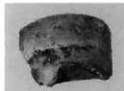
091号出土遺物



1091



1100



1098

081号出土遺物



2054



2113



2009



4121

087号出土遺物



087 北から



088 北から



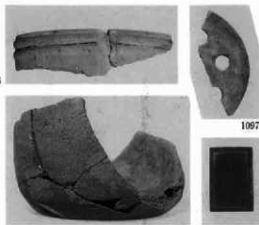
083, 089 南から



086号出土遺物

1211

085, 086 東から



1096

1097

1196

4152

088号出土遺物

081 南から





081 北西から

081 C



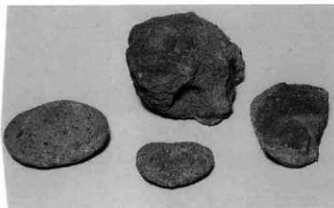
018 南西から



020号出土遺物



020 灰磙集中部 東から



4145

4143

4144

4146

←020 北から

020 C





024 東から



←019, 021 北西から

053号出土遺物



1241



4136



↓022, 023 東から

054号出土遺物



1240



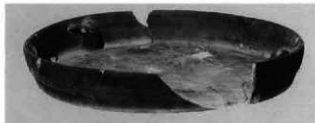
2016



4137

054

054~056 北から



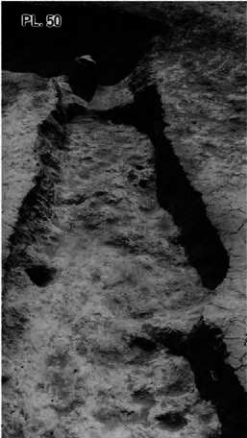
1239



2081



054~056 北から



319 東から

055号出土遺物



4139

4140

4142

4138

4141



307

1201



4123

054号出土遺物



3044

319号出土遺物



1202



2080



4097



2038



2039



2012



313, 314, 340 北から



330 東から



313号出土遺物



2040



2041



1215

310号出土遺物



1358



1244



1242



1206



4119



4057



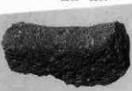
1203



1204



1243



4150



4149



3045



3046



3050



3051



3047



3048

043, 045, 046 南東から



3060



3059



3049

043号出土遺物



2043



2044

044号出土遺物

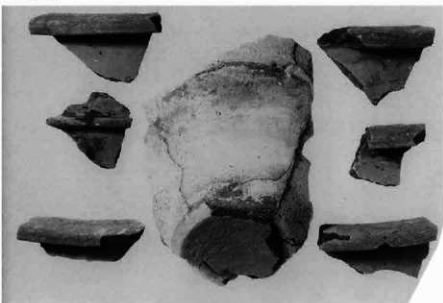


4153



310 北から





045 容器壘 (一部)

044号出土遺物



4154

046号出土遺物



4059



046 容器壘 (一部)

334号出土遺物



2098



3062



331 南東から



334 底板出土状態





300~303 東から

## 300号出土遺物



1363



2020



2020



2057



1214



4099



4058



2062

## 301号出土遺物



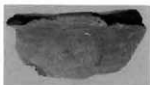
4131



2055



4089



1210

## 304号出土遺物



2051



302, 318 北から

## 318号出土遺物



2008



2097



4148



←323 東から ↑304 東から

3号屋敷跡  
遺構外出土遺物

西崖下



2121

(L) 079 南西より  
B~D

E



2048



2018



2157



2024



1289

F4

F5



2052



2073



4113



2014



2032



4125

G



2015

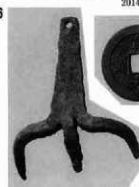


1286



4023

F6



2123



2013



H4, 5



4171



1287



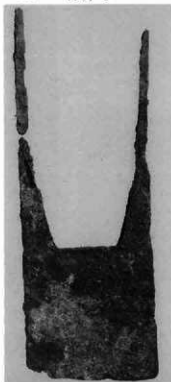
4100

H4, 5

H4, 5



2109



2118



2076



2011



2159



2160



2056



205



2050

H4, 5



1-4

2083

4108

4110

2114



2021

2022

2023



2106

H, 1-6, 7



4109



4133



2049



2158

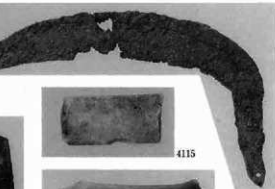


2019



2100

F~H4~7



4115



2082

2065

1288

出土地不明



4102



4173



2104

2103

全磁石



2156



2035



2064



2017



2028



菊池家墓地㊸ 始祖石宮



菊池家墓地㊹



菊池家墓地㊺



菊池家墓地㊻ とく墓



菊池家墓地㊼ 石塔



← 神沢家墓地



1294



4022

遺構外出土遺物

古墳時代・古代全景  
←東側台地調査終了時



350 木炭



赤堀村33号墳 北東から

350号出土遺物



2145~2154

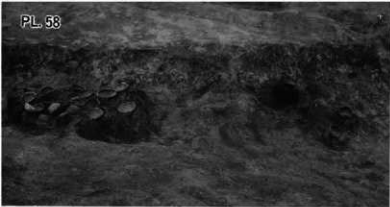
↓ 350 浅間B軽石堆横状態



鉄滓



4135



351

←土師器粗製坏出土状態

351号掘出土遺物



1298~1333



1339



1340



1343



1342



1341



1338



1344



351 石室内



351 石室 西から

351号石室出土遺物



1334



1335



2125



2126



2127



2128



2129



2130



2131



2132



2133



2137



2138



2135



2136



2139



2140



2141



2142



2134

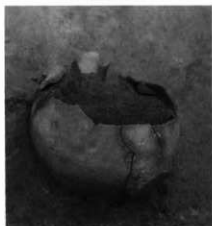


2124



351 石室調査状況

356号出土遺物



1354

352, 356  
遺物出土状態→北から





356 南から



2144

356号出土遺物



1354



356 東から

353 楕遺物出土状態



1355

353 北西から



353 墳丘遺物出土状態



353号出土遺物

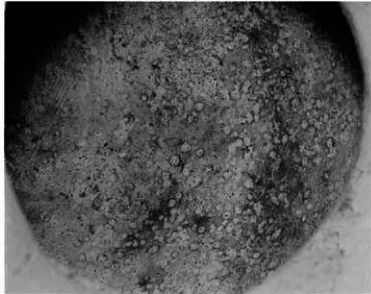


1345



1336





1355 内面使用痕



1355



1348



1346



1352



1351



1353

363号出土遺物



1350



1349



1347

(7) 354 南から



354号出土遺物



1337



2074

354 西から

墳丘西側削平状況





355 南から→



359号出土遺物



1357

1356-1  
1356-2

↓359 検出状態



群馬県埋蔵文化財調査事業団

調査・報告書 129 冊

**五目牛南組遺跡**  
(歴史時代編)

一般国道17号(上武道路)改築工事に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成4年11月20日 印刷

平成4年11月30日 発行

編集・発行／(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
勢多郡北嬭村大字下箱田784番地の2  
電話 (0279) 52-2511 (代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社